

サクラ大戦～散らなき
鉄の花～

斎藤一馬

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

コンビニでアルバイトをしているアニオタフリーター
が神様転生してサクラ大戦の世界を生きていく物語

目次

原作開始前

プロローグ1 | 1

プロローグ2 | 6

自己紹介（ネタバレ有） | 11

プロローグ3 | 23

プロローグ4 | 31

八神家惨殺焼失事件調査報告書

39

第一話 蒼い鉄火 | 45

第二話 前準備 | 56

第三話 お姫様と王子様 | 69

第四話 藤枝レポート | 78

サクラ大戦く鉄火絢爛編く

第五話 出向はつらいよあるいは、

彼と彼女ら乱痴気騒ぎ【前編】く

88

第六話 出向はつらいよあるいは、

彼と彼女ら乱痴気騒ぎ【中編】く

100

第七話 出向はつらいよあるいは、

彼と彼女ら乱痴気騒ぎ【後編】く

113

第八話 鷹の目前編 | 126

第九話 鷹の目後編 | 138

第十話 隊長に必要な三つの条件①

③	第16話	深淵から生まれた銀糸の姫	228
②	第15話	深淵から生まれた銀糸の姫	215
①	第14話	深淵から生まれた銀糸の姫	204
	第13話	隊長に必要な三つの条件④	190
	第12話	隊長に必要な三つの条件③	179
	第11話	隊長に必要な三つの条件②	165
			154

	第17話	深淵から生まれた銀糸の姫	
	④		240
	第18話	似た者同士の深川探索①	257
	第19話	似た者同士の深川探索②	276
	第20話	似た者同士の深川探索③	296
①	第21話	優しい機械と壊す機械(暁)	315
②	第22話	優しい機械と壊す機械(暁)	325
②	第23話	優しい機械と壊す機械(暁)	

						③
						第24話
						優しい機械と壊す機械(暁)
						341
						④
						第25話
						崩壊の始まり①
						356
						第26話
						崩壊の始まり②
						363
						第27話
						崩壊の始まり③
						372
						第28話
						血戦・命の限り①
						384
						第29話
						血戦・命の限り②
						401
						第30話
						血戦・命の限り③
						413
						第31話
						血戦・命の限り④
						427
						閑話
						悪霊の家(太正版)
						439
						閑話
						解った事と解らない事
						503
						自己紹介2(学園版)
						518
						第32話
						新たな年、新たな敵①
						623
						第33話
						新たな年、新たな敵②
						559
						第34話
						新たな年、新たな敵③
						577
						第35話
						新たな年、新たな敵④
						613
						第36話
						く散らなき鉄の花①
						623
						第37話
						く散らなき鉄の花②
						535
						閑話
						聖夜の舞踏会
						529
						学校説明

744	第43話	〜散らなき鉄の花〜⑧
719	第42話	〜散らなき鉄の花〜⑦
698	第41話	〜散らなき鉄の花〜⑥
673	第40話	〜散らなき鉄の花〜⑤
662	第39話	〜散らなき鉄の花〜④
646	第38話	〜散らなき鉄の花〜③

幕間②	幕間②	837	幕間①	幕間	822	807	782	767	634
暁の夢の夜 後編	暁の夢の夜 前編		紐育の怒れる刺客EX		第最終話	第46話	第45話	第44話	第43話
〜	〜				〜後日談そして②〜	〜後日談そして①〜	〜散らなき鉄の花〜⑩	〜散らなき鉄の花〜⑨	〜散らなき鉄の花〜⑧
882	869								

原作開始前

プロローグ 1

プロローグ 1

「……………いてえ……………」

体中が痛い……………なんでだ？ 後くつそさみい

「!!」

だれか……………が叫んでる……………だれだ？

いますげエ眠い。後なんで目の前に……………血まみれのドクペがみえるんだ？

……………ゆさゆさ……………

誰かに揺すられる感覚? . . . 起こすんじゃないやねえおれはまだ寝みい . . .
あと五時間位かせろ!!

. ゆさゆさゆさゆさ

オイ! だから揺らすんじゃないやねえって

. ゆさゆさゆさゆさゆさゆさゆさゆさ

だから

. ゆさゆさゆさゆさゆさゆさゆさゆさゆさゆさゆさゆさゆさゆさゆさゆさゆさゆさ
「いいかg 「いい加減起きぬかゴラアアアアアアアアアア!」

「ぐぼああああ!!」

余りにもしつこく揺らすので観念して起き上がろうとしたら金髪ロリ巨が俺の顔面に南斗獄屠拳をかましてきやがった・・・すげえ痛え

「儂が一生懸命起こしとるちゆうにグースカ寝おつていい度胸じゃな!!」

「うっせちみっこ!!いきなり南斗獄屠拳なんて微妙な攻撃しやがって」

「お主がおきんからじやろ!!」

くく謎ロリと喧嘩中くく

「ハアハアで・・・ここどこ?」

「ハアハアやつとその質問か・・・ここは現世と冥界の境界じやよ」

「厨二乙!」

「南斗人間砲弾!!!」

グシャア!!

「ウゴゴゴゴ……であんた誰よ？」

「あたしや神様じゃよ!……少年よお主は死んでしまったのじゃ……」

さつきとは打って変わって(・ω・)顔で言ってきたこの自称神

つて俺……死んだの?イマイチ理解できずに呆然としてると、

自称神は土下座をしていた。詳しく聞くと、どうやら今流行りの

神様転生フラグがたったようだった……

関東大震災で死ぬ予定だった同じ深夜バイトの同僚と間違うとか……

いや実際にあるんかいこうゆう事。二次元、とりわけ二次小説だけかと、

思っていたがまさがりアルで来るとは……

そんな事を思案てると、涙目のロリ巨神さんが顔をあげている

あーあそんな涙と鼻水でグツシャグシャニ……

それをみたら怒るに怒れないじゃないか

「あー可愛い顔がスツゲーことになってるぞ取り敢えずこれで拭けよ」へハンカチ渡し
「(っ) ; *」スマヌ・・・もう大丈夫じゃさて大事な話

「大事な話？」

「そうじゃ！」

といつてこのロリ巨神様はTRPGで良くみかける10面ダイスを出してきた

プロローグ2

まだ日が昇らない時間に大きな道場に二つの影ある。

ひとつは成人した男性もう一人は

「ぐぼあ!!」

成人男性が放った斬り上げをモロに食らってぶっ飛ぶ五歳児だった……

やあみんな久しぶり転生したフリーター事

【八神暁（ヤガミサトシ）】だ……

さて何故日も登りきってないこんな早朝に成人男性こと、我が親父殿にぶっ飛ばされてるかというと

（海藻死因）

【現世と冥界の狭間】

「それって10面ダイス……だなTRPGでよく使う」

「そうじゃ……で……このダイスでお主を送る世界を決めるのじゃ」

「軽!!てか雑!!!」

「まあまあ普通に決めたら面白くないじゃろ?」

「いやいや・・・新しい人生生きてく世界決めに面白さなんて求めてない!」

「キニスルナ!!ではコロリンちょ♪」

コロコロ・・・9

「9だね・・・ふーむ万能表の結果じゃと」

「おい!その表の裏に冒●企画局天界支部ってかいてあんど!!」

「キニスルナ!!・・・で結果は・・・サクラ大戦じゃ!!」

「・・・サクラ?あの古いゲームの?」

「そもそもあれはホントに良い作品じゃ」

「まあ・・・それは認めるけど・・・」

サクラ大戦かーセガサ●ーンで結構やったなー

「ササ・・・次に特典決めじゃな」

「あ・・・やっぱ特典くれんだ・・・」

「罪滅ぼしになるかわ知れぬが通常は一つなのじゃが3つ授けよう!」

「三つかー意外に多くて困る」

「多いか？以前来た奴は少ないと、ダダこねおつたからイロイロ天罰かましましたがのー」

「ふーんアフォだなそいつ・・・でも3つか・・・サクラ大戦と云つたら靈力は欲しいかな、もしくは魔力」

「魔力か・・・大きさはどうするんじや？」

「うーんアイリス位でいいかな・・・たしかアイリスって結構高かったよね」

「ふむふむアイリス並みと」

ロリ巨神様は何かの用紙に書き込みながら呟く・

「他は・・・やっぱ光武にのることになったら操縦技術はほしい・・・あ・・・最近、見た鉄血の阿頼耶識が欲しい」

その言葉にロリ巨神が渋い顔をする。

「阿頼耶識か・・・構わぬが生まれたばかり幼児が付けててよいものでもないのー」
「ダメか？」

「いんや転生後どつかのタイミングで手術する機会を設けるとするか？」

また書類に書き込み始める

「最後の特典はなんじや？」

「う~~~~~ん」

回想終わり

以上が、今まで起きたk

「セイヤアアア!!」

ガスン!!!

「おつわあああ!! あつぶねだろ!! 親父! 殺す気か!!」

「ポーと寝ている貴様が悪い・・・そんなことで、八神家次期当主とは片腹痛いなさあ構えろ・・・」

このクレイジー親父殿【八神宗蓮】はイロイロ可笑しい・・・ああ真宮寺さん家の一馬おじさんとはおおちg

「八神流下段闇祓い!!」

「うおああつちーーーーー!!」

拜啓

前世のオカン、オトンと姉貴・・・

転生しても青い炎で焼かれても、わたしは元気です・・・

敬具

自己紹介（ネタバレ有）

【八神暁】（ヤガミサトシ）

5歳（プロローグ時点）

現在13歳（1時点）

本編の主人公

容姿は鉄血の三日月を表情豊かにした感じ

2歳違いの妹が好きな若干シスコン

仲が良かったり好きな人にはそれなりにフレンドリーだけど

嫌いな奴相手だと容赦なし（ミカアするほどではまだない）

霊力（魔力）が高く血筋のせいで魔力が青い炎に変質する

八神流古流剣術正統継承者（予定）で八神次期当主（予定）

天海討伐時に夢のなかで死んだ宗蓮と再開、継承の儀を受け

右手に蒼い月輪の紋と真名『颯』も受け継ぐ

童貞では無いらしい（笑）

サタン率いる魔の大侵攻終結後

仏蘭西、亜米利加一年ほどの出張が決定する

左目の失明、左腕の重度の麻痺、左足の触覚（痛覚）の喪失

【八神宗蓮】（ヤガミソウレン）36歳

八神家現当主にして八神流古流剣術師範、五歳の主人公でも容赦なく

燃やすキチガイ、容姿は言峰に近い容姿、宗蓮なのにコトミーなんだまあ許せ

CV中田譲治

奥さんと愛娘にデレツデレ、真宮寺一馬とは犬猿の仲

天海討伐時に暁の夢に出てきた継承の儀を行う

嫁のためなら名家でも滅ぼすマン

【八神紫】（ヤガミユカリ）??歳

容姿は、八雲紫似

永遠の18歳でまじで通る謎のオカン純粋な戦闘力は実は宗蓮より上

な永遠の少女なキチガイ

巫術、呪術が得意、旧姓【神楽紫】

CV沢城みゆき

【八神マキ】 3歳

可愛い説明不要

容姿はボイロの民安とゲフンゲフン弦巻マキの髪を黒くした感じ
八神家の癒しキチガイな両親で痛めた胃に安らぎをもたらす天使
でも霊力が異常で妖力と霊力の相反するちからを宿っている
もしかしたらキチガイ予備軍

CV 民安ともえ

ロリ巨神様（年齢???)

容姿は鉄血EDのロリクーデリアを巨乳にし

ロリババア成分ぶち込んだ感じ

暁を殺した張本人TRPG狂いすきなTRPGはサ●スペ

CV 田村ゆかり

【セレリーナ・リリイ・トラス】（年齢12歳）

暁を助け出した女性まあ正体は暁をてんせいさせた女神イギリスにあるヨーロッパでも1・2を争う軍需産業企業

トーラス社の社長令嬢であり帝国陸軍の軍人階級は准将

帝国陸軍所属だが天皇直属の秘密部隊の長もしている

正式名称部隊名「大日本帝国機動情報統合統制隊」

セレーナは長いとのことで別名「フェイス」

ノーフェイス（顔無し）隠密系にはちようどいいんじやね？

とのこと賢人機関に所属【令嬢】と呼ばれる

愛機FA『ステイレット XF-3』

魔の大侵攻終結後、帝都にて陸軍の内偵を継続

賢人機関にてその発言力を高めるために国内外を走り回っている

【オルガ・五花】（14歳）

フェイスの第一旅団の団長

他に旅団はあるも他地方に点在するため帝都には第一旅団が

情報の収集、収集した情報を統合し統合された情報が漏洩

しないように統制する仕事をしている

浅草十二階下を縄張りとしている薔薇餓鬼集団の頭を演じている

白愛の店の常連その1

魔の大侵攻終結後、帝都にて陸軍の内偵を継続と

帝劇へのパイプをつなぐために事務関係に奔走中

真宮寺 一馬（しんぐうじ かずま）

声 | 野沢那智 1880年6月2日生まれ（38）、

身長178cm、体重66kg、宮城県仙台市出身。帝国陸軍大佐。

真宮寺さくらの実の父親で剣の師匠でもあった。北辰一刀流の使い手。

真宮寺家は代々「破邪の血統」を持つ家系である

士官学校時代「死に難い男」とか呼ばれていた。

12月24日に結構不幸に巻き込まれるとかなんとか

山崎 真之介（やまざき しんのすけ）

声 — 家中宏帝国陸軍少佐。異常なまでの秀才ぶりで、光武など花組の主戦力となる兵器を設計した。

ロリコンの疑いがあつたりなかったり

魔の大侵攻の黒幕『悪魔王サタン』だったが華撃団の

活躍により滅されるもミカエルの説得でロリ神の元に召される。

残った肉体には、別人格の『藤枝あやめ』が残り同じく

山崎の残った肉体に別人格の『山崎真之介』が残り

新たに余生を過すごす

花組や米田の事は記憶から消失している、

同姓同名のそっくりな別人である

米田 一基（よねだ いっき）

年齢 62歳

血液型 O型

出身地 日本・東京

C V 池田勝

大帝国劇場の元支配人。帝国華撃団創設者であり、司令長官

帝国陸軍中將でもあり、日露戦争で活躍した英雄。

一馬と宗蓮の喧嘩の火消し役

魔の大侵攻後フェイスの手綱をより引き締める為

積極的な情報交換と技術交流を密にしている

藤枝 あやめ（ふじえだ あやめ）

出身地 日本・東京

CV 折笠愛

米田の秘書にして、華撃団副司令を務めていた女性。

大帝国劇場の副支配人や花やしき支部の支部長も兼務していた。

帝国陸軍中尉。かつては16歳にして「陸軍対降魔部隊」の一員だった

（当時は特務少尉）。愛刀は二剣二刀の一つ「神剣白羽鳥（しんけんしらはどり）」。

合気道を得意とし、生け花は免許皆伝の腕前。語学に堪能。

最近、腐った文化にも興味が・・・

魔の大侵攻の折り妖魔化し暁の調律により魂が解放されミカエルとして

復活、その後役目を終えロリ神の元へと去る、

残った肉体には、別人格の『藤枝あやめ』が残り同じく

山崎の残った肉体に別人格の『山崎真之介』が残り

新たに余生を過ごす

花組や米田の事は記憶から消失している、

同姓同名のそっくりな別人である

【白の白愛】（しろのはくあ）

元は、黒之巢会がとある計画のために作った妖魔だったが、作成時に使用した、『寄り代』の影響で離反、現在は、浅草十二階下に異空間を作り、ひっそりと

銘酒家『刻影楼』を営んでいる、勿論アレな営業もしている。生まれてすぐの頃は、迷い込んだ男どもを物理的に食っていたが、暁に撃破された以降。

手当たり次第に食うことはなくなった。迷い込んだ客には、しっかりと

接客し、使い魔の『黒い塊』に女性体に変化させ精気を頂く程度にしている。

アレ系のサービス意外にもしっかりと酒を提供するなどしている。

今で言うキャバクラ（ただし女の子はみんな人外）のようなお店で
浅草十二階下では、穴場的扱いである。

因みにこの店で悪さをする『悪い客』は決まって行方不明になるとの噂もあり
店に来る人たちは、いい人が多い。

最近、白愛の趣味は暁をストーカーすること。

魔の大侵攻後、銘酒家『刻影楼』は解体され現在では、

銀座の一等地で有名な喫茶店『ホワイトテイル』のマスター件オーナー

をしている、夜は高級バーとしての顔を持っている、

偶に常連相手には『サービス』をしていたりしてなかったりw

CV 沢城みゆき

【黒い塊】

白愛の使い魔だが基本はペットのような扱い、

黒く小ささまざま大きな物が存在スライムのように地面を這うように移動し

個体ごとに、性格もさまざまあり女性体に変化した場合、その性格の美少女、幼女

になる、球に『テケリ・リ』と鳴く、雑食性でなんでも食べるが、これも個体によつ

て

好き嫌いがあがる。夏場はひんやりプルンプルンしているのて白愛の夏の必須品になつてゐる。たまに業な客がいて変身前のがいいとかいう客もいる。

ある意味『刻影楼』のマスコットの存在

（なお十二階下ではこの子事は、特に恐れられたりして

おらず余り気にしていない様子）

だが初見では、やっぱりS A Nチエックが入る。

銘酒家『刻影楼』は解体後の喫茶店『ホワイトテイル』では

看板娘として給仕や調理にいそしんでいるが何を言つてゐるかは

お客に解らないがお客は外国語だとスルーしてゐる。

只今日本語の勉強中である。

CV：不明（個体数が違うと声も違うので）

【ドクター小島】（イメージオタコン）

25歳

太平洋海域の海底のボーリング調査の歳未知の金属粒子を発見した

マッドな科学者 A C f A と同じ効果を發揮するも毒性のい無効化に成功した天才、阿頼耶識システム開発者の

ウイル・アスピナ・アクアビットとはマッド仲間にして恋仲

本名 春・エメリツヒ・小島

あやめに腹部を銃撃されるもなんとか生き残る

【ウイル・アスピナ・アクアビット】

(本名、了子・ウイル・アクアビット)

(イメージシンフォギアの桜井了子)

年齢永遠の18歳(笑)

人体工学のスペシャリスト

過去にドイツで行われていたヴァックストウーム計画に

強制的に参加させられる元々は高名な医師だったが

計画がキツカケで医師の道を断念瀕死の重傷をおった暁を

助けるために開発中の阿頼耶識システムを使用

ナノマシンにより一命を取り留める

若干マツドな人小島とは恋仲

2の誰かさんとは面識あり

あやめに腹部を撃たれたオタコンをその場で麻酔無しで手術しようとした
ほどテンパるオタコンラブ勢

プロローグ 3

時と季節は流れこの世界に生まれ落ちて8回目の冬が訪れた帝都東京

今俺は……慰霊碑の前にいる……

あのキチガイ親父が……殺しても死なないようなキチガイオヤジ
あんなに犬猿の仲だった真宮寺一馬さんと共に逝った

降魔戦争

帝都東京に突如現れた、降魔という魔物との戦争

軍は帝国陸軍対降魔部隊を投入

隊長の米田のオヤジさん

昔からたまにうちには来て色々と良くしてくれた人でよく

親父と一馬さんの喧嘩の仲裁をしていたっけ

同じく、藤枝あやめ姉さんは16歳でありながら特務少尉という

かなり優秀な人だ、よく勉強を見てもらったりしたな、

たまに薄い冊子を見てニヤニヤしてたけど・・・なんだろうか一体

そして行方不明になってしまった山崎 真之介さん・・・

この人とはあまり絡んだことはないが妹のマキに、たいして微妙な視線を送つてので

チヨキでシバしたおれはきつと悪くないはず・・・

そして・・・俺の横には真宮寺若菜さん一馬さんの奥さんだ・・・

真宮寺にはさくらという女の子がいるが彼女の姿はない・・・そりゃあそうだ

9歳程の女の子が自分の父の死を受け止められるものじゃない・・・
じやあ8歳のおれはというと・・・生前合わせて40近い精神年齢のおかげか
表面上には出ていないがやっぱり精神が何処か肉体に引つ張られてるのか

はじめて体験する【肉親との死別】は堪えるようだが・・・

八神宗蓮亡きいま当主は自分なのだ・・・八神流は免許皆伝はもらえてないが地道に習得するしかない

八神は【封ずる者】真宮寺は、「破邪」その表裏一体と言われる家系のトップが一度になくなった

仙台ではいま八神宗家、分家と真宮寺宗家、分家ちよつとした内乱に近い状態になっている

そこは我が家のキチガイ二号の母上・・・

八神紫が満面な笑顔で「こっちは大丈夫よんvだから新当主は・・・宗蓮ちゃんを迎えに行つてあげて」

といつもの笑顔とは違う悲しそうな笑顔で俺を送り出していった・・・

「……………曉さん……………そろそろ米田さんのもとへ」

「わかりました……………」

(こんな所で……………くたばってんじゃねーよ……………父さん……………)

曇り空を見上げるとポツリと雫が頬を伝う……………

陸軍の本部に到着するとあやめ姉さんが出迎えてくれるその姿はところどころ包帯を巻いている姿

簡単な挨拶をし・・・米田さんの所へ向かう・・・

その道中、冷や汗をたらし敬礼するあやめ姉さん、自分は軍属ではないので会釈をする向こうも会釈で返してくれた

その人物は、金髪で自分より少し身長が高く・・・見覚えのあるも・・・軍服を着た幼女だった。

その事があり放けてしまい、階級はちらつと見えたただだから断言はできないが准将の階級章に見えた

「あやめさん随分若い人もいるんですね・・・」

「彼女は。【セレリーナ・リレイ・トールラス】准将よ・・・若干5歳で士官入りし類まれた才気で10歳で准将になった方よ

別名盤上の妖精・・・若すぎる年齢のせいで前線には出たことがないけどその指揮能力を米田隊長を凌ぐほどの逸材よ」

あの米田さんよりも・・・か恐ろしい幼女も居たもんだ・・・

ちなみにリレイ准将はイギリスで1，2を争う軍需産業を手にかける【トールラス社の

社長令嬢でもあるそうだ……」

トーラスって……あの変態企業か??この時代にいるの??

そんなことを考えていると対降魔部隊の隊長室に着いた

3度ノックをすると短く「入れ」と聞き覚えのある声が廊下に響いた。

「米田隊長……御二人をお連れしました」

「ウム……若菜さんそれに暁、遠くから本当に済ません……本来なら俺が直々に侘びに行かなければいけないのに

戦後処理と軍内部のイザコザでここを動くことが出来ませんでした……本当に……」

あの米田さんが弱々しく見える当たり前だ部下が3人が居なくなっているのだ……

「米田さん頭を上げてください……軍人の妻となった時から覚悟は、できていまし

た……」

「コチラもそうです米田さん……最後の最後までウチのキチガイが迷惑を……」
「二人共……つく」

米田さんがまた頭下げる……その時……ポタ……ポタ……涙が落ちた
ふうに見えた

親父と一馬さんの最後は……特攻に近かった

物量で負けていた陸軍は八神と真宮寺で保管していた【魔神器】をもつて殲滅しよう
とした

しかし余りにも大きい反動で発動すれば命は、無いと……

それを聞いた親父は……無断で【魔神器】を持ち出し一人でカタを付けるつもり
だったようだが

一馬さんも同じ考えで結局……戦場につくまで、「俺がやる」だの「私がやる」だの

言い争いを、していたそうだ……

結局真宮寺さんが【剣】と【珠】親父が【鏡】を使うことに結果とし……降魔は消滅

それと引き換えに一馬さんが逝きオヤジもその後【魔神器】の光によつて塵となつて消えたそうだ……

そう……一馬さんと違い……親父の遺体この世の何処にもないあるのは、

オヤジの愛刀【大太刀「鉄華無名」】

しかしあの立派な大太刀は、真ん中からへし折れていた

まるで主人と共に旅立ったかのように……

くそつたれが!!!

プロローグ 4

お家騒動という名のキチガイ二号による肅清が終わったのは、俺が仙台に帰ったと同
時頃で

突然に、家長を亡くした事を心配した真宮寺のお祖母さんがゴン爺に様子を見てくる
ようよう言い付け

いざ、ゴン爺が八神家の門を潜ったところに……

全身返り血姿で、謀反をおこした分家の者をニコニコ笑顔でその細腕一本でアイアン
クロー状態で

持ち上げていた……その綺麗な顔にも例外なく返り血を浴びて

「あら？ 岩田様どうなさいました？」

「え……あ……いや」

「あらあら……私としたことが少々はしやぎ過ぎまし」へ(。・ω・)σ (*ポイ☆
シ

ゴグシャ!!!

「今少々ゴミが散らかってますがお茶をお持ちしますねフッフフ」

「(か・・・帰りてええええええええ)」

ゴン爺・・・すまんこれがウチのキチガイ2号なのだ・・・

黙っていれば10人中100人は美人と言うだろう、さくらもウチのキチガイに憧れているらしい

だが美しいものには、なんとやら棘どころか・・・大型炸裂弾なみなのだ・・・
「うっわぁ・・・」

物言わぬ肉塊になった哀れな分家だったものとガタガタ震えるゴン爺、お家騒動から避難ということで真宮寺に預けられたマキ

そしてその可愛い妹を抱っこしている暁自分がみた光景だった。

しっかしこの惨状でも笑顔の我が妹もそろそろやばいかも・・・

「にいにい・・・おかえり〜♪へぎゅー♡」

あー癒しだ………本当に癒しだよ………

キチガイ二号

居間にはいち早く撤退したゴン爺を除いて自分の向かいに座る母上、
自分の膝にチョコンと座っている妹

ゴミ

後、畳に頭から突き刺さってピクリとも動かない多数の分家

そんな若干ではあるが我が家の日常の中、母上に帝都でのこと話、折れた大太刀を渡す

そこでやつと母上は………折れた大太刀を抱きしめながら大泣きした………

掠れた声で「宗ちゃん………お帰りなさい………」と聞こえた

この時は、妹も涙目でおれに抱きついていた………

それからは光陰矢の如しに八神家を立て直し、何故か八神流を使える母上が俺に稽古をつけ、

他流試合という名目でこちらの様子を見に来るさくらと相手をし、

マキは、剣術には興味がなく琴や三味線といった楽器に興味があるようで若菜さんや

宗家で楽器の使える人に教えてもらっている、テンションが上がりすぎて、たまに炎と雷を

発生させて周りから怒られていた・・・そういう場合は決まってこちらにきて抱きついてくる

可愛いから許す!!

「ハアハア・・・また・・・負けた・・・」

「そう簡単負けつかよ・・・仮にも師範代なんだから」

今日もさくらと試合をし結果は、当然俺の圧勝、だが・・・

「しっかし・・・さくらお前の居合抜きえっぐいな・・・それだけは俺も本気ならんと避けられないし」

「ハアハア・・・それだ・・・けって・・・ひどくない?」

真宮寺さくら現在10歳、おれは8歳とやっぱ桜は、何処か年下に負けるのが納得できないようだった

しかし桜よ・・・我が家のキチガイsに鍛えられた俺が普通の女の子にはけるはずがn

「暁ちゃん・・・あの位の居合抜き余裕で躰さなきやダメよ♪はい罰として」へズシン

「ぐ……お……巫術で重力加算しないでくれますかね？」

「だ・め♥」

「あの……くら……い」（ω・ω・ω）

「さくらちゃん気にしないでいいわよ♪その歳で、それだけでできれば十分すごいわよ」

「そう……ですか？」

「勿論、お姉さんが保証してあげるわ……さてもういい時間だしお昼の準備しましよ
さくらちゃん手伝ってね」

「あ……はい！」

「暁ちゃんはマキちゃん呼んできてハイハイ走りなさいv」

「ウゴゴゴゴ……」

母上とさくらはかいた汗を流しに浴場に、おれはマキを迎えに真宮寺へ重くなつた体を引かずって行く

しかし母上よ……重力10倍はシンドいぞ……

「あーにいにい!!」 シュタタタタタ……ダン!!!

ドゴン!!

あ・・・ありのまま起こった事を話すぜ・・・

可愛い我が天使が俺を発見して走ってきて

ダイビンググロケット頭突きを仕掛けてきた・・・

鳩尾がどうにかなりそうだった

ワンパクやお茶目とかじゃ断じてねえ

もつと恐ろしい片鱗を味わったぜ・・・

「マ・・・マキ？ 飛びつくのはあ・・・危ないから今度からやめような？」

「・・・ダメ？」（へ（；ω；）

アアー・・・モオオオオオオ可愛いな！ちくしよおおおお!!!

しつかし今日に限っていつもより俺にくつついてくるマキに疑問を感じる

いや・・・何時も親鳥についてくるひよこの如くぴよこついてくるんだが

家は、腐っても名家であるいくら、兄の部屋でも勝手に入ることは固く禁じてあるの

だが

今日に限って俺の布団に忍び込んできていた。

あ・・・手なんか出してないぞオレロリコンジャナイノデ・・・

そして、何時も楽器の稽古は喜々として向かうのに、今日は行きたがらなかつた……

「なくマキ？今日は一段と甘えん坊だな……何かあつた？」

遂にはマキに聞くことにしたそうしたらマキは、悲しい顔してポツリポツリと話だす
「あの……ね……きょういやなゆめみたの……」

にいにいがいなくなるゆめ……だから……」

「そっか……」

マキの夢はよく当たる、家系なのか霊力所以なのかは、分からないが
まきが見る、そういうった良くない夢は当たる。

大体の被害が俺に来るので間違いない……こゆうときは決まつて
「大丈夫だつて夢は夢だつて……それにお兄ちゃんはまだまだ

可愛いマキの前から居なくなつたりしないつて……大丈夫だよ」

「ほんと？」

「もちろんさ！だから元気出して早く帰ろうお兄ちゃん腹ペコなんじゃー」

「アハハ！マキもおなかペコペコ……」

こゆうやつて元気付けるのがいつものことだ

だが

俺は勘違いしていた……

その日の深夜

慣れしたしんだ我が家が……轟々と炎に包まれたのだ……

腹に大穴をあけた自分は、首の無い母上を抱き抱えながら、天を仰ぐ

「マ……キ……」

いなくなるのは、俺じゃなかった……マキ自身だったのだと居なくなつた妹の名前を呟いたのを最後にそこで俺は意識を失つた

八神家惨殺焼失事件調査報告書

八神家惨殺焼失事件調査報告書

×月×日 深夜3時頃

魔神器〔鏡※1〕保有、管理していた一族八神家が、何者かの軍勢の襲撃を受け壊滅
死者数宗家総勢200人強※2

行方不明者1

生存者1※3

その中に八神家元当主〔八神宗蓮〕の妻〔八神紫〕（旧姓：神楽紫）も含む

死因は、頭部を切り落された事による、失血性ショックと断定、その他には目立った
外傷なし

凶器は鋭利な刃物の様なものと推察、

彼女の手には元当主の愛刀である折れた大太刀が握られおりそれで応戦したと思わ
れる、

屋敷は、全焼、人間の骨や異形のもの・・・燃え残りから降魔と酷似した骨なども多
数発見

襲撃者は、降魔、もしくはそれに近いものを使役していたと思われる、深夜だった為目撃者情報はなく、しかし生存者が見ている可能性がある。宮城近辺の担当である3番隊【七星隊】が情報の偽装と消火活動を行い。森への延焼は、なし

真宮寺家には、不審者の放火と説明※4

生存者の名前は【八神暁】

年齢は8歳

腹部貫通、主要な臓器が破損するも、

察 奇跡的に存命、腹部の空孔から西洋槍（ランス）近いもので串刺しになったものと推

事 治療に新技術※5を用いることが決定・・・隊長命令で【絶対に死なせるな】との

ウイル・アスピナ・アクアビット女史が、速やかに施術を開始

現在機能不全となった臓器の修復が極小機械※6により行われている

今も尚意識不明で予断を許さない状態にある

行方不明者

【八神マキ】年齢6歳

八神家の末娘であり焼失した屋敷から遺体や骨は発見されず、

子供部屋は不自然なほど綺麗になっていたこの部屋のみ何かで守られたような痕跡あり

そのため直前までできていた寝巻きが乱暴に脱がされた跡が確認できた

私見を記述するがロリコン死ね

真宮寺家によればマキ嬢は、霊力の特異体質で本来、魔のものしか持たない【妖力】を備え

彼女には霊力と妖力が混在する事が真宮寺桂氏から判明※7

隊長曰く相反する力を一緒にもつ力を【神力】というらしい。古い記録によれば、

洩矢の現人神※8もまた【霊力】と【妖力】を合わせた【神力】の持ち主だったと記載がある

敵の目的は、神力が目当てか自分たちに都合のいい【神】創造ではないかとのことだが

情報が少なく判断が保留とされる。

以上

八神家惨殺焼失事件調査報告書 記入者オルガ・五花

- ※1 降魔戦争の折、その威力を問題視した陸軍が保管封印
 - ※2 欠損死体が多く正確な総数がわからない為
 - ※3 昏睡状態のため予断を許さないため
 - ※4 真宮寺の娘、真宮寺さくらへの配慮、真宮寺家には生存者無しと情報を流す
 - ※5 ウイル・アスピナ・アクアビット女史のナノマシンを用いた人機接続機装置
- 【阿頼耶識】の事
- ※6 ナノマシンの意
 - ※7 八神紫氏が桂氏に相談し情報が流れたとのこと
 - ※8 諏訪に存在崇神【ミシヤクジ】と【軍神】を祀る神社の風祝のこと現在では守谷と名称される

「彼には．．．．．幸せに暮らして欲しかったのじゃがな．．．．．」

「この事件は、貴女の責任では、ありません．．．．．」

「いや．．．．．責任じゃよ．．．．．儂が彼をこの世界に「挟み込んだ」のが原因」

「世界の干渉力．．．．．ですか．．．．．しかしその力はあなたですらどうゆう

結果を引き寄せるかわわからないもの言うなれば転生者のみに起こる天災．．．大地
震と変わりありません」

「．．．．．」

「はあ．．．．．今は、起きたことを嘆くよりいまからどうするかですよ」

「そうじゃな．．．．．そうだった！落ち込んでばかりはいられん!!」

「そのいきです！」

「まずは……彼のために、復讐するしないにしても戦う力は必要じゃな……」

そこには金属の骨格と所々筋肉に見えるよう繋がったチューブでできた。

「4 m程の巨人」と「真ん中から折れた大太刀」が水槽に浮かべられていた

「ここは冷えます上に戻りましょう眠り姫……じゃなくて眠り王子が待つてますよ

セレリーナ・リリイ・トールス准将」

第一話 蒼い鉄火

（1925年2月某日 午前4時30分 帝国陸軍習志野演習場）

「……………」

「ZZZZZZZZZZ」

春が目の前にきてもやはり2月、しかも殺風景な演習所ともなれば寒さも身にしみる。現在ここでは帝都……いや大日本帝国防衛の機密の機動実験が行われてようとしている。

先の帝国陸軍富士演習場で行われた都市防衛構想【華撃団計画】で使用される。

靈子併用人型蒸気【光武】のお披露目では、まずまずといった成果を発揮していた。

しかし賢人機関の一員の【令嬢】が宮内庁と結託、宮内庁直属の【国家情報防衛構想】を立案、可決され

ここに帝国陸軍習志野演習場にて新技術搭載靈子併用人型蒸気の機動実験が行われようとしていた。

その会場には帝国華撃団の指令、米田一期中将与賢人機関【伯爵】の花小路 頼恒
それから先程から爆睡している、【国家情報防衛構想】立案者にして賢人機関【令嬢】
の……

【セレリーナ・リリィ・トールス】准将そしてそのお付の表情のが一向に読めないメイド
がいる

他にも軍のお偉いや賢人機関のメンバーがいるがここでは割愛する

「新技術搭載霊子併用人型蒸気……ねえ……別に新しく作らなくたって神崎重工の
光武でも

問題ないんじゃないのかい？」

微妙な表示をした米田が爆睡しているセレリーナに声をかける

しかし答えたのは、彼女ではなく彼女のメイドだった

「宮内庁の肝いりの防衛構想で使用する機体のため極力情報の漏洩を避けるための処置です以上」

「そう．．．かい」

表情を読めない無愛想なメイドに辟易する米田、そこで花小路伯爵も口を挟む。

「だからといって賢人機関にも然したる情報が来ないのはいかなるものか．．．」

「あら？賢人機関とて一枚岩ではありませんわ．．．入らぬ邪魔が入っては、大変ですもの」

「最近、冬にも関わらず【羽虫】が多くて嫌だわ．．．ねえ米田のオジサマ」
「つち．．．」

寝ぼけ眼に彼女は、米田に視線を送る

確かに米田は、何度かセレリーナが組織した部隊に隠密諜報専門の部隊【月組】を派遣するも・・・あえなく失敗

月組隊長以下数名が全裸の上簀巻きで帝劇支配人室に吊るされていた。

「指令そろそろ・・・」

「そうね始めましょう・・・指示を出してちょうだい武蔵」

武蔵と呼ばれたメイドは指揮車に向かって合図を出す

た
トランスポーター（輸送車）から4機の【巨人】が立ち上がるその姿は、正に人だっ

く
光武の様な出で立ちとは全く違い長い手足が特徴的だった遠くから見れば間違いな

人と捉えることが出来るシルエットだった。

タダ【立った】だけで二人を除いての人々は唾然とする

「皆様この寒い早朝にお集まり有難うございます此方が我がトールラス社が開発した【コジマ動力試作霊子甲冑】その名も【雷電】でございます!!」

トランスポーター（輸送車）から雷電と呼ばれた機体が彼女後ろへと【歩いて】きた【歩く】言葉にすれば簡単だがいざ機械に歩かせると行ったことをすれば物凄く大変なのである。最新と思われていた。光武でさその歩行はヨタヨタとした物だしかし【雷電】と呼ばれた機体の動きは滑らかで中に人が入っていると云われても納得するレベルである。

武蔵は、会場にいる人々に簡略化されたスペックデータを配布していく

コジマ動力試作霊子甲冑【雷電】

全長：4.4 m

本体重量：2.5 t

全備重量：4.5 t

最大速度：65 km/h

固定武装：スモークディスチャージャー、アルムブラスト、リフティンググウインチ
携行武装：25 mm機関砲、75 mm低圧砲、50 mmグレネードランチャー

スペックデータをみた神崎重工のスタッフ、軍関係者がざわついた

「こ……こいつあ……」

「この性能表は事実なのかね？」

「はい事実です……まあ紙上の内容では判断に困ると思いましたが……ではよろしくお願います♪」

「うっす……」

白髪の浅黒い肌の青年に声をかけるとどこかに無線を飛ばすとほどなくして現れたのは、

帝国陸軍正式採用されている最新鋭の戦闘用人型蒸気が15機演習場に現れる

「ではみなさんメインイベントの……【実弾演習】をはじめますわ」

「な！実弾だと!!!」

新型とわいえ4対15無謀であるそう誰もが思った現に米田は、のほほんとしてい
る、

セレリーナに中止するように怒鳴るが聞く気ゼロだった

そしてついに演習は始まったのだった

結果から言えば・・・雷電の完勝だった・・・

被弾ゼロ

死傷者ゼロ

敵撃破数13、ホールドアップ2

連携もさる事ながらやはり特質するは、その機動性

特に「01」と表記された雷電の動きは、生き物のそれだった機械的な動きがまるでないのである

しかしこの中でただひとりその動きに見覚えがあった・・・その刀さばきに・・・

「あ・・・あの動きは・・・八神流!!しかもあの癖・・・まさか暁!!」

に
幼少から知っている米田一期だけはだ。米田は、自分の心を落ち着かせ、セレリーナ

質問を投げかける。

「すごい動きだな．．．精鋭が子供扱いかよ．．．特に01機の操縦者．．．誰なんだい？」

軍としてはほおっておけねえな．．．」

「それは、禁則事項ですわ叔父様．．．さあ皆様室内に移動しましょう細かい説明はそこで」

演習を見ていた面々に声をかけていくセレリーナだが米田だけに聞こえる声で

「きつとあなたが予想している人物ですわ」

米田は、急いで振り向くがそこには満面の笑顔を浮かべた

セレリーナ（少女）がいる

「お疲れ暁……いつも道理だったな」

「ああ……オルガあの位は簡単だよシノや昭宏達、相手にするよりはマシ」

「違いねえ……同じ【阿頼耶識使い】だもんな」

「オルガも阿頼耶識ついてるけど戦闘じゃ使わないよね」

「俺やユージンは、輸送や指揮がメインだしな……」

「そうだね……」

「どうした？暁？」

「いや……懐かしい人がいてちよつと嬉しくて」

「そっか……まだ会えないんだっけ？」

「リリイがまだダメだつて」

「お嬢は……何考えてんだか……」

「きつと何もかんがえてないよ……」

ヘッドマウントディスプレイを外すとそこには、

以前より表情が落ち着いている八神暁だったこととして15歳

背中には機体に繋がるようにケーブルが接続されていた。

この日から彼の話が本格的に動き出す

第二話 前準備

「起きなさい……………」

誰かがよんでる……………すぐく聴き慣れた声で

「起きなさい……………早く起きるのです……………」

ああ……………この声は俺の……………

「早く……………暁……………早く起きるのです!」

間違いない!!この声は!!!

「マ!!!!」

「キギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

「あく引かないでてか逃げないで!!」

「お・・・お前だれ・・・よ?」

わが可愛いマキには全く似てない筋肉お化けに声をかけるいや

声はマキそのものなんだが・・・絵面がヒデエ!!

「私は、貴女の守護霊的なナニかのムキ巻ムキだ!」

ムキムキですねって・・・おい!!

「で・・・そのムキムキさんがなんか用?てかココドコ?」

「ここは貴方の夢の中ですよ」

こんなヒラコーワールドな世界御免こうむる!!

「今日は、今まで頑張ってきた貴方にお伝えしたいことがあって参上しました」

「伝えたいこと?」

「はい・・・今現在あなたはゴイスーなデンジャーが迫っています」

「ゴイスーって?」

「すごいって事です・・・」

「デンジャーって」

「危険ってことです・・・」

あんなのがこの日本にあるのかよ!! とうか技術チートすぎじゃないですか？

「ウグググ……そう思ってた武蔵本体は完全には作っておらんぬ

一部のみ再現しておる……イタタタ【久しぶり】にあつてこれとは

お主ひどくないかの？」

あ……やっぱりこいつ俺をここに送ったロリ巨神様か……つか

「なんでいるの？ 暇なの？」

「暇って……お主の特典を渡しに来たんじゃよあとバカンスがてら」

バカンスって……いいのかよ神様

「イエスとブツタが立川でバカンスしてるくらいじゃ問題ない」

いやあの人たちと一緒にすんなし……てか

「ココドコ？」

「ここか？ ここは豊島区目白にあるフミタン・アドモスインターナショナルスクール」

「フミタンって……あの？」

「メガネメイド美味しいです」

「バカやめろ……」

「とま……それは表向きで本当は……」

そこで一人の青年が入ってくる

「ようこそ大日本帝国情報統合統制機甲隊通称フェイスへ」

オルガ・イツカのそっくりさんが現れた・・・やべ少し感動ってか

「フェイスって？意味のイニシヤルすら掠りもしてないけど」

「あーそれは・・・」

「農の気分じゃ・・・いや読んで字のごとく隠密を生業としとる

部隊じゃからノーフェイス（顔無し）・・・ってぴたりじゃね？つと」

「あゝゝゝすまん」

「大丈夫・・・えつと」

「おつと、済まねえ俺は、オルガ・五花・・・一番隊の団長をやらしてもらってる」

「ちなみに暁も一番隊所属ね♪」

「あ・・・はあ・・・」

「ところで背中の調子はどうだ？」

「背中？」

オルガにそう言われふと気が付く

背中にいままでに無い違和感が・・・

ロリ巨神様が鏡で移してくれるそこには

機械の端子が【4つ】付けられているって

「あ……阿頼耶識？」

「ん？阿頼耶識をしってるのか？」

ヤツベドジツた!!!

普通の子供が阿頼耶識システムを知ってるとかおかしすぎだ!!

どうやって乗り切るか考えているとロリ巨神様が

「あゝこの子はワシと【同類】じゃ気にせんでも良いぞ団長」

「あゝそういうことですか……了解です」

同類？どうゆうこと？

「儂は、皆に神だということとは黙っておるが未来予知、やそれに近い

特殊能力者ということにしておる……まあお主も八神の血縁

青い炎を使い……その身に【オロチの血】を宿しておるしの」

オロチって……あのオロチ？KOF97〜98ででたあのオロチ？

って八神……青い炎……って八神庵の【八神】かよ!!!

「なんじゃ？今頃気がついたのか？儂はてつきり……」

「八神って苗字の漫画を多いかしかったないでしょうが!!」

ニューゲームとかリリカルとかデスノとか!!

「まあくどんまい？」

「ところで……家ってどうなった？」

「いきなりシリアスカ……まあ良い話す前に一つ尋ねる」

「お主の腹に大穴開けた奴と八神紫を斬った物はみたか？」

ドクン

鼓動が大きく動く

俺は……

「見た……大穴開けたのはサクラ3で出てくるザコ敵のポーン

そして母上の首をはねたの……もポーンに似ていた少々形が違ったが後……」

「後……なんじゃ？」

「山崎慎之介が裸のマキを抱えてどこかに消えやがっ!!」

ゴホ!!ガハ!!!・・・ビシヤ

「今は・・・無理せんでいい・・・ゆつくり・・・ゆつくり休むが良い」へでこチユー
「失礼します司令お話が・・・」へデコちゅー目撃

「は!!いy」

「そうゆうこと、にしておきましょう・・・」

「ま・・・待つのだじゃ!!翼!別にやましい事ではなくてだな!!」

「イエイエ、お気になさらず10歳と言えば多感な年頃、そういったことに興味があるのは自然です

ですが、苦言を言わせて貰うなら寝ている、青少年にそのようなことは余りにもはしたないと」

「だ・・・だからちがうのじゃあああああ!!!」

「・・・すう・・・すう」へ爆睡

こんな感じで八神暁のフェイスでの生活が始まった

自分を偽るのは忍びないが、真宮寺家や色々と迷惑をかけるわけに行かず

【暁・オーガス】と公共では名乗ることにした。

まずは、ロリ巨神こと、リリイのコネで陸軍士官学校に入學し、その傍ら

フェイスでの訓練、風鳴翼さんとの剣術の稽古、一番隊（別名：鉄華団）

のみんなでバカ騒ぎし武蔵やフミタンにシバかれ風鳴幻十郎さんと活動写真を見た
り

陸軍海軍士官学校合同演習で大神さんっぽい人と加山さんっぽい人を簀巻きにして

友情を深め(?)

フェイス実地試験という名目でドイツ、フランス、イギリス、ヨーロッパ各国に飛ば

され

アイリスっぽい女の子を拉致つてた奴らをミカアし

(そのせいでアイリス暴走凱旋門が凱旋門だった物に変わり)

懐かしい顔(あやめ姉さん)と鉢合わせになりかけ、

紐育に社員旅行中なんかピンチぽかったマリアさん風の人を

悪漢の左腕を試作の個人携帯用コジマライフルぶち抜いたり

そこでまた懐かしい顔(あやめ姉さん)と鉢合わせし・・・

なにか言われる前に逃走！

後日リリイ、翼、フミタンにしこたま絞られる

イヤー十傑集走りしながら追ってくるあやめ姉さんばねえ……
そんな慌ただしい7年間を過ごし

1925年 2月某日 習志野演習所

阿頼耶識搭載コジマ動力試作霊子甲冑公開機動実験

「おいお前ら……昨日は良く眠れたか？」

「大丈夫だよ……オルガ」

「こつちも問題ない」

「おうこつちも大丈夫だいつでも行けるぜ」

「は……はい！大丈夫なのです!!」

俺に昭宏、シノ、そして五十土・イカリちゃん……

シノや昭宏はみなさん予想出来ると思うが

五十土・イカリちゃんをはじめてみたトキは腰を抜かした何せ
艦これの雷ちゃんに似すぎなんだから・・・ねえ

「じゃあ！お前らいつちよ派手にやろうぜ」

「「おう!!」」

「はわわわ〜」


~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

少女は歌う・・・シャンゼリーゼ通りが一望できる建物の屋上に巨大な鎧武者に酷似したナニカの手ひらに座り

鎧武者の足元には異形な物を侍らせて

「オニーチャン早く来てね・・・ヤクソクマモツテネ・・・」

少女は歌う・・・街に呪いあれ・・・人に死あれと・・・

### 第三話 お姫様と王子様

た  
むかしむかしあるところに大きなお屋敷の地下奥に幽閉されていたお姫様がいま

お姫様のお友達にクマのジャンポールだけでした……

でもお姫様は寂しくありませんでした……けどお姫様は、小さい頃見た

【外の世界】に憧れていました……いつか私も外に……と

しかしお姫様のお父様は決して許してはくれませんでした。

「お前のその大きな力はとても危険なものだ」

そうお姫様には不思議な力を持っていました……

でもお姫様は、そんな力欲しくありませんでした

この力のせいで私は……

そんなある日、私のお部屋に三人の男たちが現れました

その人たちは、私をお外に連れ出してくれるというのです  
その時の私は、この人たちを怪しむ事より外への憧れが強く

私は、その男たちの甘い言葉に乗ってしまったのだった

その男たちが、私のお父様を殺そうとする悪い人達とも知らずに  
男たちの車でお屋敷から離れるにつれて段々と態度が変わり

言葉の端々に「ロベール伯」……「殺すせる」……「人質」  
と聞こえ、お姫様は、怖くなり「お家に返して!!」と叫びました。

しかし男たちは、俺を聞いてニタニタと気持ち悪い笑みを浮かべていた  
そして「売る」とか……「外国」と聞こえてきました。

この時私は、……どこかに売られてしまうのだと思ひ……  
心の底から「いや!!」と思いましたがその時……

私の中から黄金色の光が溢れとても眩しくて目をかけていられませんでした  
一瞬の浮遊感そして何か柔くいて硬いものの上になりました

よく見たら、私と同じ年位の男の子の上にはいました。

周りの人はその男の子の知り合いらしく

「おい！ 暁！！ 大丈夫か！！」や「暁！ 傷は深いぞ！ ガツカリしろ！！」や「団長！ 空から女の子が！！」と聞こえていました……

みんなが落ち着いてから改めて聞いてみるとこの人達は【鉄華団】という人たちで今日は、私が踏んじやった男の子……

【暁・オーガス】君の初仕事が終わったところだったらしいのです

あとよくよく聞くと、暁くんは、私より7つも年上だったのです……頭一つ分くらいしか合わないのに不思議……

暁くんは、「身長の話は言うなと落ち込んでいました」

なんか可愛い……

そんなことをしていると、見覚えのある車が猛スピードでこちらに向かってきましたあの悪い人たちの車で……

私は、とても恐ろしくなって近くにいた暁くんの腕に思わず抱きついてしまいました。

今思うと、とても恥ずかしかった……

団長さんが機転をきかせて私と暁くんは、人ごみに紛れながら逃げ、

逸れないよう暁くんが私の手を痛くなくそれでいてしつかりと握って手を引いてくれました・・・その横顔がさっきまでの可愛い顔ではなくキリツとかつこよく見え・・・私は、走ってるせいなのか

彼に見惚れていたせいなのかは、わかりませんがすごくドキドキしてしまいました。後ろから「パン！」「パンパン!!」と何かが爆ぜる音と悲鳴が響き、

私は、また怖くなり悲鳴をあげてしまうと・・・周りが一瞬にして瓦礫の山に変わってしまいました

勿論その光景を暁くんにも・・・見られてしまいました

嫌われた・・・

お父様みたいに・・・嫌われた

そう思い力が抑えられなくなってしまう・・・  
本で見たオーステルリッツ駅、シャネル、ヴェルサイユ宮殿が瓦礫とかわりました

「嫌だよこんな力．．．アイリスいららないよ．．．．．」

お姫様は全てに絶望しましたけど．．．．

ぎゅ．．．．．

誰かが私を抱きしめてくれました

私は、瞑っていた目を開けると頭から少し血を流しそれでも

微笑んでいた暁くんがいました．．．．．

「大丈夫．．．君の力は、怖いものじゃない．．．ただちよつと使い方がわからないだけ」

一人でよく頑張ったね．．．偉いよ」

そう言いながら私の頭を優しく撫でてくれました。そこで私は気がつきました。

私たちは、凱旋門の上．．．お空にいました。ソコから見える夕日はとても綺麗でそれを背景に暁くんの右肩からユラユラと青い炎が流響、まるで天使の羽根のようでした

暁くんに横抱きにされながら凱旋門に降り立った時でした

「パン!!」となると．．．暁くんが崩れ膝をつきました．．．

そこにはあの悪い人……私は、悲しみよりも……この男に対しての

イカリデドウニカナリソウダッタ

そこで私の記憶は途切れてしまい、気が付くといつものお屋敷のベットに寝ていました……

もしかしたら今までのことが夢だったのではと思いましたが……  
暁くんとのお会いも……そう思うととても悲しくなり泣いていると

一人の女の人が現れました……また悪い人かと思いましたが

どうやら違うようでその女の人がお父様を説得し私はお外に出れるようにしてくれたのです

この女の人は「フジエダアヤメ」さんというらしい……

アヤメお姉ちゃんの話では、【日本】という国には私の様な人達がいてこの力をいいことに使う

ための訓練をしているという……私は、記憶の中で暁くんたちも日本に住んでいると行っていたのを思い出し



「アイリスも日本に行く！」

とアヤメおねいちゃんにいうと、アヤメお姉ちゃんは笑顔で私の頭を撫でてくれました。

後で、アヤメお姉ちゃんにきいたら誘拐にあったのは夢では、ないとの事

それなら暁くんとのことも夢じゃない・・・それだけで私は幸せでした。

アヤメお姉ちゃんに暁くんのことを話したら、アヤメお姉ちゃんはすごく驚いていました。

「もつと知ってるこない？」と迫るので少し怖かったけど・・・アヤメお姉ちゃん・・・

暁くんのこと知ってるのかなと思いと聞くと、昔・・・似たような子がいて、でもその

子は

もうこの世にはいないのとすごく寂しそうにしていましたその子のお名前は、

「八神暁」暁とかいてサトシと読むらしい・・・暁くんと同じ字なのに読みが違っていて

漢字は難しいよ・・・こうしてお姫様は王子様を探すために日本に旅だちました

めでたし・・・めでたし・・・

暗い夜道に、ボロボロな姿の三人の男女がトボトボと歩いている  
ロベール伯暗殺は、乱入者により失敗・・・彼らはお尋ね者に  
急いでこの国からでなくては、と考えていると、  
向こうから一人の子供が歩いてくる

こんな夜更けに・・・と思うがその姿をみた瞬間、

凱旋門でひどい目にあつた男が怒鳴ろうとした瞬間

ダン！・・・ダン！！・・・ダン！！

三発の銃声になると男は静かに崩れ落ちる・・・頭、心臓、股間から血を流して  
残りの二人は悲鳴を上げるもやはり

ダン！・・・ダン！！・・・ダン！！

ダン！・・・ダン！！・・・ダン！！

三発つつ銃声が断続的に響き・・・そしてそこで動くのは銃をうった少年だけだった  
少年は動かなくなった物に興味がないのかその場から立ち去った

## 第四話 藤枝レポート

俺は、夜の見回りをしていたときとある部屋から光が漏れていることに気がつき念の為に中を確認することにした

【深夜、帝国劇場副支配人室兼藤枝あやめ私室】

無断で入室するのは気が咎めるが、何かあつては大変だと自分に言い聞かせ部屋の様子を伺う

特に人の気配はないようだった私は、ふと机に視線が行き見てみると分厚いレポート用紙があつた

「何かの調査書か？」

自分は何気なく手に取って読んでしまった

暁・オーガス並びに鉄華団調査レポート

【鉄華団】とは、〔大日本帝国情報統合統制機甲隊〕内にある第一実働部隊の総称で  
 団員総数は100人前後と推察・・・メンバーの詳しい内容は、今の月組の能力で  
 は

把握は不可能と判断、【鉄華団】は、関東圏内が活動範囲と思われる、  
 関東、関西、東北、北海道、九州、沖縄と細かく細分化されそれぞれに実働部隊があ  
 るとのこと

この情報は、〔大日本帝国情報統合統制機甲隊〕総司令の女ぎと・・・  
 セレリーナ・リレイ・トーラス准将が賢人機関へとほうこくした情報である

本題に入るとしよう・・・

【暁・オーガス帝国陸軍中尉】、

年齢は資料によれば15歳、身長154センチ、O型

好きな食べ物、トルティーヤと蕎麦、嫌いなものは無し

士官学校時代、海軍陸軍合同演習にて帝国華撃団隊長、大神一郎、

月組隊長、加山雄一を手玉にとるほどの腕を持つ、拳銃の扱いが得意でその小さなからだを生かした、奇襲、強襲が得意とされている

しかし彼は、公式の場では「刀」使うことがない・・・

剣術は使えるのは確認済み、意図的に隠していると思われる

我が愛しの弟「八神暁」と瓜二つ・・・

彼は、死亡扱いとなつているが・・・その情報はあの女狐から来ている

信用デキナイ・・・彼は、フランス、そして紐育で、目撃されており

花組隊員イリス・シャトープリアン愛称アイリスが彼と接触、会話をしたことがある  
と聴き

彼女に話を聞く限りではやはり・・・私の弟のようだ・・・

紐育では、スーホイ一家の用心棒であつたマリア・タチバナが、

バレンチーノフ少佐の裏切りによりピンチに立たされた時に、バレンチーノフを

謎の翠の光で狙撃・・・彼女の援護をしている私は、マリアの腕を信じて

彼を追跡・・・この時は、弟に会えると思ひ心も体も軽かつた・・・モウナニモコワ

クナイ

結果としては、逃げられてしまつたが・・・あの焦つた表情はトテモイイモノダツ

タ

しかしどうしたら彼をコチラに向かい入れることができるか・・・

戦力としては、多少不安が残るも黒之巢会との初戦闘を乗り切るに至る

そろそろ、カンナや紅蘭達も戻ってくる・・・

米田指令をおどs・・・掛け合ってみようか検討中

だが司令とあの女狐は仲があまり宜しくない・・・傍から見ていると

狐と狸の化かし合いで微笑ましいのだけれど・・・

そういえば陸軍貴腐人会から4冊ほど新刊がきていた・・・それで弟分を補給シヨウ

あああああ暁い・・・私の可愛い暁いお姉ちゃんがいつか迎えにイツテアゲルカラ

ネ・・・

自分は絶句した・・・最初の方は、報告書の体をしてしたが後半につれて・・・狂  
気じみている

「あ・・・あのあやめさんが・・・まさか・・・イヤ・・・デモ」

悪寒が消えない・・・まるで自分の尻に氷柱を突つ込まれたかの如く

ヒラ・・・・・・・・

天井から何かが落ちてくるこれは・・・

「写真？なんでこんなもの・・・・・・・・が・・・・・・・・」

自分は天井を見上げ

絶句するしかなかった

なぜなら

そこには・・・・・・・・

たった一人の男の子を移した写真が天井中に貼られているのだから・・・・・・・・  
そしてそれが普通の写真ではなく明らかに・・・・・・・・

「大神くん綺麗にうつってるでしょ？」



部屋に女性の声が響く．．．．自分には振り向けない

「見つからないように撮るのが本当に大変だね．．．学園内の敷地には入れないから  
たまたま街に出た時しか撮影できないのよ．．．．とこころで？」

逃げなきゃ．．．．早く．．．．

恥も外聞もかなぐり捨ててこの場から離れなければ．．．．

「なんで無断でワタシノヘヤニイルノカシラ？」

部屋の空気が重くなる．．．．

コツコツコツ．．．

後ろから聞こえた女性の足音が．．．まるで

「ダメッテタラワカラナイワヨ？．．．．」

コツ．．．コツ．．．コツ．．．

まるで．．．．

「ソモソモ独身女性の部屋に入るなんてワタシノオトウトはシナイノニトシウエノアナ  
タガ．．．ネエ」

コツ・・・コツ・・・コツ・・・

絞死刑台に階段を登る音に聞こえた

「取り敢えずOHANA死しましよ・・・オオガミクン」

彼女・・・藤枝あやめ副司令が光をともしない瞳で俺の眼をみて話す

「うわあああああああああああ．．．．．あ？」

チュンチュン

自分は今、自室にいた．．．．．いつ戻ってきた？いや．．．そもそもさっきのは悪い夢？

「モギリの服のまま寝てしまったのか？」

俺は、安堵する．．．．．あれは夢だったんだ．．．．．なんとという恐ろしい夢だ、

あの、あやめさんが．．．．．あんなこと．．．．．あんなこと？

あんな事ってなんだ？．．．．．え．．．．．いや．．．．．え？

体が震える．．．．．なぜ？総疑問におもい自室の扉に眼を向けるそこには

半開きになった扉の隙間から……アヤメさんがジツとこちらを見ていたそして声に出さないように唇だけ動かしした

「しゃ・べ・った・ら・お・し・お・き」

喋ったらお仕置き……オシオキ……おしおk……

そこで俺は気を失った

数時間後、心配になって来てくれたさくら君が俺を発見し医務室に運んでくれたそう  
だ……

なぜ？俺は意識をウシナッテイタンダ？

「……!!!」へブル!!

「どうした暁、震えて……」

「イ……イヤ……オルガなんか寒気が」

「なんだ風邪か？気をつけろよ……ああそうだ司令が大事な話だつてよ？」

「大事な話？なんだろう」

「なんでも出向関係の話らしい」

「出向？どこに」

「たしか……【帝国華撃団】だとよ」

サクラ大戦く鉄火絢爛編く

第五話 出向はつらいよ～あるいは、彼と彼女ら乱痴気騒ぎ【前編】く

「出向……ですか？」

今私は、大変、怒である

激怒プンプン丸？いいや違う・げきオコスティックファイナリアリテイぶんぷんど  
ルーム？

いや違う

この怒りの熱量もはや……このばでAAを100発かまし

ここにいる老人どもまとめて帝都を沈没させる位オコである

「しかし何故？我が第一部隊の特に「遊撃隊長」の暁・オーガスを名指しで？」

私は平静を装いつつもいっつもより冷淡な口調でこの会議のまとめ役に話しかける？

「貴公の肝いり部隊の大日本帝国情報統合統制機甲隊、第一番隊通称、鉄華団

その働きぶりは宮内庁は勿論内閣でも高く評価されているのは知っていますよう」

「ええ勿論ですわ……天皇陛下や神奈子様の覚えが良いのは、実際私自身きおよんでますので」

「うむ……では問題ないであろう？一年の帝国華撃団への出向など貴公の【優秀】な部下を派遣しても」

「問題ない……ですって？それこそ……帝撃はそこまでの人員不足だと？ご冗談を……資料を拝見したところ、実戦の少なさは否めませんが資質、人間性、霊力量、技術力は基準値を大きく超えていると思います」

「なのに何故……我が、隊から人員を一年もの長期間出向させなければならないと？」

会議場の空気が一段下がる

「その……実戦経験の少なさが問題なのだ……」

「そう言う」と議長は、手元の端末を操作すると帝撃の戦闘記録が画面へと映し出される

「これは……また……米田司令？連携という言葉はご存知ですか？」

「っ……」

彼女の言葉によりまた一段階空気が下がる

「まるで連携が生きていないではないですか……新任とはいえ隊長を勤めているのは

たしか大神一郎海軍少尉でしたね

士官学校を主席で卒業・・・海軍の士官学校はそれ程質が悪いのですか？」

会場が騒然とする・・・も彼女の幼い出で立ちとは不釣り合いな怒気が流れ誰も何も  
言えない

「確かに帝国華撃団の性質上ガチガチの軍人では、不適合なのは認めますが日常のコ  
ミュニケーションが

良い方向に行っていないのは明白・・・まあ新任ですので余程高いコミュ力がなければ無理ですか・・・」

一番隊で言うところコミュ力高いのは、お調子者のシノや五十土、ライドといった幼年組  
くらいか

あとこれでも自分もコミュ力は高いと自負している

「はあ・・・実際ここで私がいくら意義を申し立てても決定事項のようですしこれくら  
いにしましょう」

そこで一段空気が回復する

が



「【雷電】の整備、修理、調整はこちらの技術者を向かわせますそれ以外の人間・・・特に【李紅蘭】女史には、手付き無用が条件です

そのくらいは許してもらえますね？」

「・・・構わん、ソレでいいかね米田中将？」

「私は構いません」

「では、【暁・オーガス】、【ハル・E・コジマカミナンドス】、【了子・アスピナ・アクアビツト】を出向いたします」

「以上をもって会議を閉幕する」

と行ったのが今朝がたの話であった現在フミタン・アドモスインターナショナルスクール学園長室では

「フエーン!!!。(ノ口、)。。」へガチ泣き

ガチ泣きしながら暁に抱きつくリリイと

「アハハハハ……。」

乾いた笑いを浮かべるドクター小島

「……………」へ富竹フライシュ!!

ロリとシヨタが抱きついてる場面を無言でしかも鼻から【愛】垂れながしながら激写している了子女史

そして……

「あゝよしよし……………」へなでこなでこ

朝から悪寒が微妙に止まらない八神暁と

我関せずの武蔵、オルガのメンツである

「うう……………」たった一年だけど暁には帝劇で働いてもらうから表向きは、大道具とかの裏方がメインで

有事の際は、後方からの援護射撃とフォロワーそして臨機応変した戦闘行動ね」

「了解……………」おれはあくまでサポートまあ裏方なら米田さんやアヤマ姉さんくらいに知られればいいか」

「うーんそれも言えないのよねー」  
「？」

彼に見えないよう資料を見つつそこには、アイリスの写真とさくらの写真そして盗撮をしているあやめを盗撮した写真が挟まっている、間違いなくこの三人にあえば大揉めになるのは必須

だが面白くはないが面白いので黙っておく。

「では、八神暁改、暁・オーガス中尉本日1300時に帝国華撃団花組へと出向、帝都防衛補佐の任についてももらいます

ドクター小島、了子女史は雷電の整備と阿頼耶識の秘匿……お願いね、緊急以外で秘匿が漏洩することがあれば

申し訳ないけど……【処理】をお願いね」

「中尉本日1300時に帝国華撃団花組へと出向、帝都防衛補佐の任につきます」

「よろしい……さみしくなったらいつでもかえってきていいかなね？後【変な事】されそうになったら撃つていいから」

「準備がありますので失礼します」へガン無視

「では僕らも行こうか了子ちゃん」

「そうねオタコン……じゃあね♥リリイちゃん」

バタン

三人は、学園長室を出たところでオルガが口を開く

「お嬢・・・おれは今でも反対なんですけどねえ？」

「ジャツジ私もこの判断には納得がいかない部分があります以上」

「誰が納得したって？」へゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

「（あ・・・これぶっ血きKILL状態だわ）」

「包帯ぐるぐるの叔父様と疲れきった伯爵みたら・・・茶さじ一杯の同情がね

まあ軍人つてのはお役所仕事上には逆らえないわ・・・」

「しかしだな・・・」

「変態の餌場に子羊を投げ込むのは如何のものかと以上」

「暁の貞操は私のもの・・・もし手を出したら・・・帝劇をコジマの光で消し飛ばすわ」

「（あ・・・こいつも変態だった）」

同時刻帝劇、【アイリス私室】

「◆◇◆\*:.:.。 ◆◇◆\*..。 .\*:.:.。 ◆♪」

アイリスは上機嫌に鼻歌を歌いながら定期的に実家から送られてくるフランスのファッション誌を読んでいる。

今日のアイリスの機嫌は特にいい、今なら少しの子供扱いなら

笑って小指の爪一枚で許せるレベルだからだ。

アイリスの部屋は、可愛らしい人形や洋服がきれいに整頓されている

一部某妹様の洋服に似たものもあつたりするが気のせいだ

そんな部屋に似つかわしくない本が本棚に収められている普段は布がかけられ

見られ無いようににしているがちらつとタイトルが見える

【年上の殿方を落とす方法物理式】

【ロリコンのつくり方】

【ライバルを蹴落とす100の愛憎レシピ】

ちなみに著者名が【了子・アスピナ・アクアビット】出版社【民明書房】なのはキニ  
スルナ

何故、アイリスは上機嫌なのかというところ今日のお昼頃に今まで会いたかった人と会える気がしてならないのである

これはもはや、予言や直感ではなく愛の神様からのお告げのようだった

なので何時も笑顔のアイリスもさらに上機嫌なのだ、

舞台の稽古でもマリアやあの厳しいすみれが褒めるくらい生き生きしていたからである

「はやくこないかな？　ウフフフフ」

【副支配人室】

カリカリカリカリ・・・カリカリカリカリ

藤枝あやめは黙々と帝劇での仕事をこなしている舞台の稽古の進捗、四月分の物販の売上

来賓客への対応、光武の修繕見積もり、その他見積もりといった仕事を黙々と

しかし長年一緒に働いている風組の面々は上機嫌なあやめに気がついてた

「副支配人・・・朝から機嫌がいいのですがどうしたんですか？」

藤井 かすみがニコニコしながら尋ねてみるとあやめは少し照れた表所で

「え？　そんな・・・いつもと何ら変わらないわ？　どうしたのよいきなり」

「いえ・・・ただなんとなくそう思っただけです」

「でもでもあの副支配人の顔まるで恋する乙女みたいで・・・もしかして男関連ですか？」

「ちよ!!・・・ 由里失礼でしょ!!」

「ええくくだつてえくく」

「もう・・・本当に」

嗜好きの由里を咎めるかすみをよそにあやめは彼女らに見えないように口を三日月のように歪め笑う

「男関係?・・・アナガチマガツテイナイワネ・・・」

「副支配人?」

「ん?何かしら??」

「い・・・いえ・・・」

「さて二人共仕事に戻りなさい今日は【忙しく】なるんだから」

「は・・・はい!!」

【帝国華撃団支配人室】

最近、好きな酒と【胃薬】が手放せない米田一基は机にある資料を睨みつけている



「全く……心配かけやがって……全く」

酒を煽りながら窓の外を見るとハラリと桜が待っている

「(暁……頑張れよ……いろいろと)」

かれは感じ取っているこの帝劇から黒々とした桃色の気配を  
そして水なしタイプの胃薬を服用する……

## 第6話 出向はつらいよ～あるいは、彼と彼女ら乱痴気騒ぎ【中編】

「起きるのだ・・・起きるのだ・・・わが操者よ」

「・・・あ？」

「ここはどこだ？いやなんか見覚えのあるヒラコーワールドで形成された謎空間だ・・・またあの筋肉か？」

あたりを見渡すと筋肉は筋肉でも

こんなんだって・・・

「雷電だあああつああ!!」

「如何にも吾輩は、貴公の駆る、靈子甲冑【雷電】の精よ！」

そういうえば帝劇に出向になったので雷電を花やしき支部経由で帝劇に輸送するため弾丸列車【轟雷号】の搬入作業中で出発まで機体内で待機していたんだった

当然有事のために阿頼耶識はつなげた状態で

「あのーもう面倒なんですよ……帰してください」

「無理だな……なにせ貴公は既にライデン空間にとらわれているからだ

これから貴公は、時事ネタ文字ってギリギリな世界観でボクシングしたり

敵が気がついたら仲間になったり宇宙から生身で大気圏突入したり

面白いんだかキチってるんだがよくわからない作品にでて手塚賞をそうなm」

パンパンパン

「危なかったな暁……ソイツは、偽物だ」

「あーこつちのかー」

なんかもドーニデモナーレ

「呆けずによく聞くんださもないと……お前は色々死ぬ……色々」

「え……まじで?」

「ああ……まず余り女性との過度なスキンシップは避ける。

あと自分の寝床の防犯は自分でしっかりする事

プールを使ったトレーニングは夜中に行うこと、

深夜、早朝に女性の誘いにホイホイついていけない事」

「お．．．．．おう」

「さあ目覚めの時だ願わくば君に幸運を」

「暁そろそろ出発するよ準備はいい？」

「オタコン問題ないよ．．．．．」

「了解．．．．．じゃあ出発してください．．．．．はい．．．．．はい」

列車の急加速のGが徐々に掛かってくる、ふとさっきの白昼夢をおもいだす．．．．

「ふん．．．．．」

その頃帝劇の正面玄関前では誰かの蒸気バイクが盛大に爆発していた

現在時刻1245時々々帝国華撃団地下格納庫々

「う．．．．．ぷつ花やしきからここまでぎつと3分か．．．結構きつい」  
「ちよつと．．．．．もう大丈夫？」へサササス

「あーうん．．．．．じゃあ積み下ろししちやおうか．．．．．うう」

「Ok．．．．．暁機体をデッキに待機状態で固定着替えて支配人室に出頭してあー案内は．．．．．と」

「私が案内します．．．．．」

凜とした声が了子のみみにはいり其方に視線を向けると花組隊員のマリア・タチバナがコチラに向かってきた

「あらあら．．．．．帝劇の男役のスター様が登場とは．．．．．でもいいの？今日は、舞台があるんでしょ？」

「案内だけですの、問題ありませんウィル・アスピナ・アクアビット女史．．．．．噂は、予々ききおよんでいます」

「フーフフ♪一体．．．．．どんな噂だか．．．」

「了子準備できた．．．．．」

「つ．．．．．これのパイロットは子供．．．．．」

「あ？ナニ？」

「つぶ．．．．．彼、あれでも15歳よ？」

珍しく動揺するマリアをよそに暁は、睨む

「なんか文句ある？」

「い．．．いえ．．．ゴホン、私は帝国華撃団花組のマリア・タチバナよ」

「失礼、俺は暁・オーガス陸軍中尉だ．．．マリア・タチバナ．．．」

クワツサリーの噂は聞いているよ一年の短い付き合いだがよろしく」

マリアは、少々警戒するこの歳で隊長より高い階級、佇まい．．．

そしてかつて紐育であつた騒動で一度感じた独特な気配に

「そう．．．じゃあついて来て案内する」

「ん．．．」

「．．．．．．．．．．．．．．．．」

無言

「．．．．．．．．．．．．．．．．」

終始無言である．．．これから短い期間だがチームとして動くのにマリアは暁を警戒

し

等の暁は、噂に聞く帝国劇場に興味がいつてマリアをガン無視  
本当に大丈夫か？

そうこうしていると、やっとマリアが口を開く

「ここが支配人室よ少し待ってなさい」

「了解」

コンコンコン

「おうう」

「支配人・・・暁・オーガス陸軍中尉をお連れしました」

「へえりなあゝ」

「失礼します」

暁が入室するとそこには・・・酔いどれオヤジ事【米田一期】がいた

「ごお苦勞だったなあーマリア、もうもどっていいぞお」

「……では失礼しました」

バタン

マリアが退室した瞬間から支配人室の空気が少し変わる

「しつかし久しぶりじゃねーか？ なア……【八神暁】

「あ……やっぱバレテェーラ」

「あたりめーだバカ野郎……つたくどれだけの人間に

心配かけてんだてめえ……」

「こつちにも色々とありますからね……」

「つたく……おめえみてーな子供がいつぱしの殺し屋か……」

「仕事だったし……殺らなきやもつと大勢の人が悲しむから……」

「おりやーな……おめえさんには、血生臭い道には来て欲しくなかつたぜ」

「そりや……無理だよだつて【八神】だよ？ 無理無理」

「つち……まあなんだ今日から一年よろしくたのむわ……」



なんならずつとこつちにいらつても構わねーぜ」

「アハハ……ウチのお嬢様がキれてここを灰にしかねないから断るよ」

「あの……おてんば、どうにかしろつていい加減付き合いきれねーよ」

「あー御免なさいアレはうちでも制御不能なんで……」

「ハハハハハ……はあ……」

「そんじゃ……【暁・オーガス】中尉、一年間よろしくな……」

今日は、ゆつくりしな明日らか色々働いてもらうからな

あ……私室の準備はまだ終わつてないからそれまで

ブラブラ帝劇を散策するなりいまからやる舞台でも見ていきな

……さくらに会うときはきいーつけろよグーの一発は覚悟しておくんだな

「あー了解」

バタン

暁が、部屋を出るのを見送つて米田は、外を眺めながら胃薬を飲む

「ふうーさてどうするか．．．．．」

劇場の方が騒がしいのでもう開演しているのだらうと考え演劇を見たことが、  
なかったたので見に行くことにする。

売店でパンフレットを買い劇場の立ち見席に移動する。

演目は「愛ゆえに」というらしい、しかしきっきの売店の子も

ここの巡業員のようなだが俺の事は知らないようだったまあ

どつかのタイミングで自己紹介をすればいいかと考える

しかし

「あのさくらが．．．．．ねえ．．．．．」

小さい頃から一緒にいたあのドジっ子がいままでは舞台俳優．．．

何があるかわかったものじゃない

素人目からも余り上手くはないが・・・なんこう・・・

「いいなあ・・・」

と感想が漏れる

劇は無事に終了し自分も移動しようと思うが・・・

「そーいやーどこに何があるかわかんねーやどうすつかな？」

おそらく私室の準備はまだだし、了子、オタコンのどこに行っても面白くない  
米田のおやつさんも忙しいだろうし・・・

さてどうするか・・・あどと考えると

ドンつと・・・背中何か当たるそれは柔らかい感触がする

「？」

不思議に思い後ろを振り向くと満面の笑顔のアイリスが後ろから抱きついていた

「会いたかったよ!! 暁イイイ〜〜!!」へギュー

「ちょ……おい苦しいって……アイリス離して!」

「い・や♥……本当に久しぶりだね暁」

感動の再会といった雰囲気を出しつつも抱きつきをやめないアイリスに呆れつつ頭を撫でる

「そうだね……げんきだった?」

「うん! アイリスとつてもげんきだったよ? 暁は?」

「俺? いつも道理かな……」

「そっかるところで暁はどうしてここに? 鉄華団のみんなは?」

いつも一緒にいると思っているのか鉄華団のメンツがいないのが気にあつたらしい

「あー皆は、今日は居ないよ今日から俺ここで働くことになったからよろしく」

そう言うときアイリスは俯いて震えている……なにかまずった?

そしてしばらくして震えが止まったアイリスの表情は、ヘヴン状態だった

いやロリがその顔やめろ……ほんとにこの子アイリスか?

「あ……ごめんつい嬉しくなっちゃって」

「そ……そう……」

「ねえねえ睨いまからアイリスのお部屋で色々お話しよ？ アイリスいっぱい話したいことがあるんだ」

アイリスがニコニコ笑顔で腕に抱きついた瞬間何故か少し寒気がした

アイリスの体温が伝わり暖かく感じるのに背筋が凍るその理由は……

「ナニやっているの？ 暁くん？」

幼馴染の真宮寺さくらがレ●目で現れたからである

あ……これはあかんやつだ

因みにサクラの後ろには、紅蘭、すみれ、そしてマリアがいた

「「あのさくら（はん）……こわ……」」

嵐  
の  
予  
感  
で  
あ  
る

# 第7話 出向はつらいよゝあるいは、彼と彼女ら乱痴氣騒ぎ【後編】

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

「……………」

帰りたい……帰ってオルガたちと酒飲んで、だべって、酒飲んでポーカーして酒飲んで寝たい

現在、人食い熊のスタンドっぽい何かを背にしたアイリスと般若面した女性剣士のスタンドを背にしたさくらが

メンチの斬り合いをしている

俺？俺は二人を見ないようにほかのメンバーに自己紹介をする

「え……と初めまして自分は、暁・オーガス中尉です挨拶が遅れてもうしわけありません」

「あー気にせんでええよ？ウチラも舞台あつたし、ウチは、李紅蘭言いますよろしゅう

な」

「あら？見かけによらず礼儀正しいこと・・・私は、神崎すみれですわ話は、支配人から伺ってましてよ」

「神崎さんに紅蘭さんですね・・・短い間ですがよろしく後、神崎さん俺こととして15な  
んで・・・」(#^ω^)^ピキピキ

「あ・・・あら？それは失礼しましたわてつきり・・・」

「てつきりなんですか？・・・ん？」(^#^ω^)^ピキピキ

「(あー身長や年齢は禁句のようやね)」

「と・・・ところでアレ・・・なんとかしなくてよろしいの？」

すみれは、今にも取っ組み合いになりそうな雰囲気のある二人を指差している

「あ・・・無視の方向で、ところで済みませんが帝劇内を案内していただきたいのですか誰かいいですか？」

「それならわたくし」アイリスが案内するヤクソクだったよねアカツキクン？」(右腕に抱きつき

つち戻ってきたか・・・そしてさりげなく左手握るなポンコツ

「アラアラアイリス暁くんは私があんないするからダイジョウブよ？」

怖・・・つうかイッター！腕折れる！手が潰れる!!仕方がなく取り敢えず真面目そう



なマリアに助けようとしせんを向けるが

「(マリアさんたすてけ(誤字にあらず) って・・・既にイネエエエエ!!)」

マリアは、面倒になると踏んでそうそうと撤退・・・彼女の心には、先ほどの彼に対しての警戒を一段階下げると共に

あとで愚痴か胃薬を持っていてあげようと思っていた。何だかんだと帝劇での頼れる姉ポジションだったりする

拝啓

天国のキチガイ両親&前世でのお袋、おとん、姉貴  
現在、私は・・・ピンチです

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

「暁くここが食堂でねご飯がとっても美味しんだよろ♪」

普通にしていれば可愛いんだが今なんか憑いてるのか目が怖いアイリスと

「フフフフそんなにはしゃいでまるで子供見たいよアイリス」

さらつと毒吐く幼馴染、ヤメローシニタクナーイシニタクナーイ

「(△▽△)アハハハハ！今度余計なこといたら口を縫い合わせるよサクラ？」

天国のキチガイ両親&前世でのお袋、おとん、姉貴

現在、私は・・・マジでピンチです

そこの売り子の子逃げないで!!

「アーカツキトツバキに視線送ってたけど・・・ナンデ？」

「嫌なんでもないっス」

フランスで初めて会ったあの天使なアイリスを返せゴラアアアアアアア

猛熊と鬼ポンコツの案内で粗方施設を周り、夕方近くになった頃モギリのおんちゃん

が声をかけてきた(アイリスたちは稽古で渋々別行動)

「あー君、ここは、関係者立ち入り禁止だよ?・・・親御さんとはぐれたのかな?」

有罪……死刑!!

「誰が！シヨタつ子だゴラアア!!」へ飛燕連脚

「ゲフ!!」

先程までのストレスとか色々をもぎりにぶつけるって……ん？こいつ身をぼえが  
「つて……お前大神じゃん」

「イテテ……え?……あ!オーガス!どうしてここに!!」

「あん?今日からつこつちに出向してきたんだよ1年ほど」

「え?俺は、何も聞いてないぞ?」

「はあ?オイオイマジかよ……大神ハブられてね?」

「まあそういう事……今は、私室の準備待ちで色々散策しようと思ったけど

「トレーニングルームあるみたいだし」

「アハハ……相変わらずのようだなでも無理をするなよ」

「子供扱いなら……ころすぞ?」

「してないしてない純粹な心配だよ」

そういうと、大神は、どこかに行ってしまった、さて筋トレ筋トレつと

一度、格納庫にいくと紅蘭がオタコンに詰め寄っていたなんだ？

「だから何度もお願いしてるやる？・・・なあ雷電みせてくれーなー」

「だからダメだつて・・・これはウチの機密扱いなんだから」

「ねえ・・・なにしてるの？」

まあ予想はできてるけど声をかけると今度は、紅蘭がこつちに詰め寄ってきた

「あ！暁はんちようど良かった！なあー雷電をみせてもー」  
「ダメだよ」  
「ツテハヤー！」

「オタコンもさつき言つてたけどコレは極秘扱いだし上の許可もいる・・・どこでコレの情報が

漏れるかわからないし・・・紅蘭には申し訳ないけど・・・あまりしつこいとわかるよね？」

「つ・・・しようがない」  
(・・・ω・・・)

まあこのまま追い返すのはちょっと心苦しいので飴を与えよう

「オタコン、トランスポーターと指揮車って見せちゃダメなんだっけ？」

「いや・・・その二つに関しては・・・」

「そう・・・なら紅蘭、ウチでつかってるトランスポーターと指揮車ならみてもいいよ？」

「ほんまか!!!」

復活はえーなおい、

「う・・・うん序でにこっちの指揮システムと帝劇の指揮システムをリンクしておいたほうがいいかもいざって時にラグってもこまるし」

「そうだね・・・米田司令にも伝えておこう僕が行ってくるよ、ウィル彼女の事は任せ  
たよ」

「OKオタコン・・・さあ案内するわコーランちゃん」

「ほんまおおきになウィルはん」

「いいの♪いいの♪技術者、科学者はこれくらいじゃないとね後雷電の携帯武装ならみ  
せても構わないとも言われてるし見る?」

「みるみる〜」

どうやらフオローは出来たようだ、さて筋トレ筋トレと

格納庫と、トレーニングルームは近いのは楽でいい・・・

阿頼耶識が見えないようにするためのトレーニングスーツをきて何時もの日課を開始する（鉄血でミカがやっていた筋トレ）

〜少年筋トレ中〜

筋トレを開始して数十分した頃ふと視線を感じ其方に視線を向けると  
水着姿のすみれがこちらを惚けた顔で見ていた

「え・・・と何？」

「ハ！・・・い・・・え真剣にトレーニングをしているのがさの・・・／／／／／／／／／／／／」

「まあ・・・これでも軍人だし・・・すみれは、水練？」

「ええ……女優たるもの訓練と稽古は欠かせませんわオホホホ」

「そう……舞台を終えて疲れてると思うのにすごいね……でも無理はダメだからね」  
 「忠告感謝しますわ……では暁さんも頑張つて……／＼／＼／＼／＼」

終始顔が赤かったが大丈夫か？まあいいや……さあ筋トレ筋トレつと

逆さ吊りの状態で10kgのダンベルをくくりつけた布を啜え腹筋を開始

120……121……122……12……「きやあああああ」つ

今の悲鳴はすみれ？何かあったのか……急いでプールに向かうと溺れているってか  
 なんて対人機雷がういてるの？つていまはどうでもいいや早くしないとすみれが溺  
 れる……

ドボン……すいーすいー

勢いよく飛び込み機雷のしたをよけるように潜水し40メートル  
 付近にいるすみれに近づき

溺れてパニックになっているすみれの首に手刀一閃し気絶させて

おとなしくさせ抱き上げプールの外へ

良い子のみんな！溺れている人に不用意に近づいちやダメだぞパニックつた被害者に掴まれてじぶんも溺れるからね☆彡

つて痛つ！・・・すみれがあばれた時背中と腕を引つ搔いたみたいだ

あーあスーツ切れてら・・・

そんなことよりすみれを起こさなきゃ・・・

「おい・・・すみれ起きろ！おい!!」

ペチペチ・・・反応なし・・・この場合人工呼吸か？

でも完全に溺れる前に気絶させたし平気か

肩を掴み抱き起こし最小限の威力に調節した発勁で気付けすると

直ぐにすみれは目を覚ました

「わたくしは・・・いったい？」

「おはよ・・・すみれ・・・水練中に溺れてた・・・

だから無理は良くないって・・・いま医務室に連れて行くから」

「そうでしたの・・・申し訳ありませんこんなお見苦しいところをひとりでいけm」



「無・理・す・る・な・．．．ん・．．乗っておぶっていくから」  
「へ!!!」

「早くして欲しいんだけど」

「ソ．．．それでは．．．失礼しますわ．．．」

ぎゅ．．．

すみれは混乱していた自分より小さい男性におんぶされている  
この状況にでも．．．悪い気はしない

それどころかすぐ気分はいいその背中へ、見た目とは裏腹に  
しっかりとした肉付きでよく鍛錬されているとわかる

やばいこれは癖になる．．．おっと鼻から愛が．．．ん？

「あの背中になにか硬いものがそれとなにか金属のようなの？」

やっべ．．．阿頼耶識の端子のことすっかり忘れてたどうすつか．．

「え．．．とうちでは、バイタルチェックと位置確認様に極小機械を  
埋め込んでチェックしたりするから多分その機械かなも．．

もちろん体に害はないから安心して」

「そうでしたの．．．暁さんも大変なんですわね」

「まあ．．．ね」

ごまかせたか?・・・とにかくすみれを医務室に放り込むか・・・  
尚医務室には、ウィルが居りニヤニヤしながらどうしたのかと聴いてきて  
事情を説明、すみれをませて自分は退室

「さっむ・・・」

プールにとびこんでそのままだったので直ぐにシャワーを浴るために浴室にGO

「なんか・・・視線が・・・」へシャワー浴び中

「(ハアハア・・・暁の裸ハアハア)」

寝る前にサロンでくつろいでいるとマリアが現れ

そつと胃薬をくれた・・・なぜ?

あとそのままマリアと雑談しながらポーカーをして時間を潰し

そんなことで出向一日目は終了

尚、自分の私室は帝劇三回屋根裏部屋を改装し人が住めるようにして

結構広かったかし

「盗聴器と隠しカメラが．．．大量あした米田のオヤジさんというか．．．」

【すみれ私室】

「．．．．．」

すみれは、今日あったことを思い出す

豹変するサクラ、アイリス、苦勞が増えると予想されるマリア

そして先ほどういまままで感じたことない感情がに戸惑う自分、

「暁さん．．．か」

先ほど溺れたところを助けてくれた男性を思い出す．．．

見た目はまるつきり子供だがそのその小さな体にいつかわしくないほど

鍛えられた肉体とたまに見せる大人な雰囲気

嗚呼きつと私は彼に．．．．．わたしにも存外ちよろいのかもと自分に呆れるでも

「悪くはありませんね．．．．．」

## 第8話 鷹の目前編

チュンチュン……………

「ん……………」

鳥の囀りと朝日を感じ朝だと思い、身体を起こそうとしたのだが違和感がある  
「?……………おも……………後……………変に温い?」

体の上に「ナニカ」が乗ってる……………」

それに気がついて息が詰まる、布団から金髪が見えてる……………まさか……………  
ばさ……………〈布団めくり

「すう……………すう……………すう……………」

「……………」

バサ! 〈布団かけ直し

「(マテマテマテマテ! え? ……なに? ……今アイリスがいたような?)」

ばさ……………〈布団めくり

「すう……………すう……………むにやあ……………あかちゆき……………」

「なんでさ……………」

取り敢えず考えの辞めてアイリスに気がつかれないようにふとんから脱出する  
 「鍵……かかっているよな……。テレポートしてきた？俺に気がつかれないで？」

この数年色々と修羅場は潜っているので気配を読むのは得意な方だが……まさか  
 気づかれずに侵入し布団に潜り込んでくるとは……。しっかし

「あの年でなんつう寝巻ききてんだ……。ピンクのベビードールとか」

アイリスの寝巻きを思い出し恥ずかしくなり頭から寝間着姿のアイリスを追い出す  
 「……………日課しよ」

現在朝の4時30分、暁は、手早くトレーニングウェアに着替え庭で準備運動  
 流石にこの時間に起きてる人は居らず暁一人だった。

準備運動を終えて、帝劇から皇居へでて皇居の外周をランニング、

約6kmのランニングを緩急つけ行い約30分走る

「はあ……。はあ……。はあ……。ふう!!」

手持ち水筒からスポーツドリンクを煽り、鉛入りの木刀を取り出し  
 八神流の型を一つ一つ行い身体の調子を確認する、それが終わると  
 静かに目を閉じ仮想敵を創造し……。剣を振るう

一撃、二撃、三撃と……。次第にその速度は早まるが23撃目で

相手の刀が俺の首を飛ばして終了した。

「……ふうーシャドーでも勝てないな……翼さんは、やっぱり化物だな」  
木刀を仕舞い、タオルで汗を拭きながら地下のトレーニングルームに移動し  
安定の筋トレ、水練、そして雷電を起動させ、シミュレーターを起動する  
午前6時30分シミュレーターを終了させシャワーを浴びるその時、

「アイリス!!!!!!!」

今の声は、さくら……あいつ人の部屋に勝手に入りやがったか

私室のドアが無事なことを祈りつつ食堂に移動する

食堂には、コーヒーを片手に新聞を読んでいるマリアと

和食をモクモクと食べている大神がいた。

「おはよ……二人共」

「ああおはようオーガス昨日はよくねむれたか?」

「おはよう……オーガス朝から大変だったわね」

「昨日はよく寝れたよ大神……大変って……まあ起きたらアイリスが同衾してたけど」

無視して朝練してたから別に」

「朝練？」

「ああ……やっぱ体動かさないと調子でないから……よかつたら大神もするか？」  
「うーんそうだな明日から一緒にするか……マリアはどうする？」

「私は遠慮しておくわ……まあどつかでタイミングがあえばご一緒するわ」

「ん……」

簡単な雑談をしていると、眠そうなすみれと若干ボロボロのアイリスとさくらが降りてきた

「三人ともおはよう……眠そうだねすみれさん……あ！後、アイリス俺の布団にいきなり入って寝入るのは止めてくれ……心臓に悪い」

「ええ……気持ちよく寝ていましたのにどこかの誰かさんの」

大声でたたきおこされましたから」へさくらを睨み

「ええ〜いいでしょそのくらい〜暁もまんざらじゃなくせにー夜アイリスのこと抱き枕にしてたじゃん」

いや知らねーよ!!ってか昨日の夜の俺いったなにをした!!!全然おぼえてないんだけど……

「あーオーガスその……子供相手にそういう事h……」

ザク!!

大神の子供発言の瞬間テーブルにナイフが突き刺さった

「オニーチャンアイリスがナンダツテ?」

「い……いや……」

「もう! アイリスいい加減にしなさい…… 暁君や大神さんが困ってるでしょ!」

それに同衾なんてそんな、はしたない!!」

「ふうんだ……ところでなんでさくらは、サトシって読んでるのアカツキはアカツキでしょ?」

さくらだけサトシと呼ぶ事にアイリスだけではなく大神やすみれも気になっていたようだ

「?だつてサトシ君はサトシ君だし、むしろなんでサトシ君は「暁・オーガス」ってあいつてるの?」

みんなの視線がこちらに集まる……なんかもう面倒だな……

「あー昔色々あつて本名隠してたんだよ……本名は「八神暁」なんだけど

軍内では、「暁・オーガス」って名乗ってるんだ……みんなも好きな方で呼んでいいから



ここにいない人には、あとで大神から話しておいてよ……」

「あくわかつた……おつとみんなそろそろ時間だよ？」

時刻は8時を回ったとこだ、花組の面子は公演の準備をしなきゃいけない時間になっていた

「「え？うそ!!」」

ちなみにさくらとアイリスは話に夢中で朝ごはんを食べていなかった……

「話に夢中のあなた方が悪いのですわ……では暁さん、少尉わたくしはこれで」

「ん……舞台頑張つて」

「すみれくんじゃあまた……俺たちも行くか」

「そだね」

朝食を食べ残した二人を放置し大神は、もぎりの準備、

暁は、舞台裏に移動し大道具の設営を開始

ちなみに大の大人二人掛りで動かす重いものもひとりで楽々運んでいる暁に大道具の親方が大変驚いてたりする

そして……舞台が開演した

「つかれた……でも結構裏方も楽しいな」

舞台裏から花組の劇を見ていると……おや？さくらが何かに蹴躓いて……あ……

ベキベキ!!グアツシャーーン!!

さくらがコケた拍子にセットに引つかかり舞台セットが崩落……って

「さくらのポンコツ……何してんだよおい……」

取り敢えず落下してくるセットを避けながら素早くマリア、さくらを回収しアイリス、紅蘭、すみれ達と合流する

しっかし……これは……大・惨・事

しかもお客の前だというのにさくらとすみれが痴話喧嘩……そしてキれるマリア

ああーももおお!!……ブチ!!

「二人共!いいか?」なにやってんの二人共?」

マリアの声を遮るように喋る殺気を出しつつ……

「つ……」

シ……ンと静まり返るいつの間にかお客も静かになっている

「お客さまの前で痴話喧嘩．．．本当に二人共演劇のプロ？」

みつともないって思わないの？」へゴゴゴゴゴゴ

「マリア．．．急いで事態の收拾をお願い、大神は支配人のところ行ってきて

紅蘭は、舞台アナウンスの準備アイリスは各所の補佐どアホ二人はお客様に謝罪．．．  
できるよね」

「は．．．はい．．．」

ミシミシ．．．

「今の音は．．．」

「まさかまたセットが崩れて?！」

「うっぎ．．．」

再度崩落する瞬間、暁は地面に落ちていたセットの柱を片手で掴むと一閃するその風  
圧で

また落ちてきたがれきを吹き飛ばす、その光景をみたお客様が驚きと歓声をあげ  
る．．．

こうして今日の公演は、最悪の形で終了する。

その夜、舞台では、

「さくらさん!!セツトを壊してイッタイどうゆうおつもりですの!!」

「……すみませんでした」

「スママセンで済みませんことよ!明日も公演するのに今夜中に修理してちょうだい!」

「そんな……」

「おいおいさくら君一人を責めることじゃないだろ?」

「あら……それなら少尉がセツトを直してくださいのかしら?」

「え……」

「どうなんですか?」

「わかったやってやるよ……俺にも責任はあるしね」

「なら……俺もやるよ……元々さくらが転んだ程度で崩壊するセツトを建てた

大道具の責任もあるし……」

「大神さん……暁くん」

「少尉……暁」

「暁くんかつこいいい♡」

「……私も言いすぎましたわ少尉」

それによろしんですの？ 暁さん．．．昨日も助けて頂いたのに本当によろしいんですの？」

「別に．．．さつきも言ったし大道具の責任もあるし」

「みんな舞台で疲れているだろうし俺たちは夜の間にやっておくから」

「では．．．お言葉に甘えて．．．明日になったら私たちもお手伝いしますので」

「照明や電装関係はうちがやるさかい無理せんといてな」

「暁くんがんばってね．．．」

こうして野郎二人でセットの修復を開始する、大神が細かいセットの修理、暁は重いものを動かしたり

高所作業をしていく

「ふう．．．引き受けたたいいけど．．．これは大変な作業だぞ？」

「何？もう弱音？．．．そんなことより早く手を動かす」

「まったく．．．」

カンカンカン!!

トントントントン!!

「ん?」

高所で作業していると下にはさくらがおり、何やら大神と話しているするとはどなくさくらも手伝い始めた

「無理しなくていいのいまったあいつは・・・」

なんか大神とさくらがいい雰囲気になつてるので邪魔をせず高所作業を続けていると

むにゅ・・・

は?・・・なんだ?背中に大きくて柔らかい感触が・・・へ?

「久しぶりね・・・暁くん・・・」

この声は・・・もしや・・・

「えつと・・・あやめ姉さん?」

「ぴんぽーん♪正解よ」へギュー

ギャーラー抱きつく力が強く・・・ってイタタタタタギブギブ!!!

「フフフフお姉ちゃんに黙って何年もいなくなるなんていけない子……これはオシオキかしらね？」

「へ？」

「フフフフフフフフ」

「(ギャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア)」

暁が現在ピンチの中、下ではキャツキャウフフとさくらのお弁当を食べている大神の姿があった……爆発しろ!!

1時間後、一向に降りてこない俺をやつと心配した」大神が半裸状態の俺を発見した  
そうだ……

「い……いったい何が!!」

「大神……」

「どうした暁!!……」

「お前を殺す!!!……ガク」

「え?……は?」

「こうして暁の帝劇の二日目は終了したのだった

## 第9話 鷹の目後編

「は………！」

俺は気がついたら自分の私室で寝ていた……時刻は6時30分

久々に寝坊をしてしまったかため息……しつかし……

あやめ姉さんはいつからあんなキチった人に……思い出すだけでも

震えがガガガガガガ

よし……思い出すのはやめよう

そう思い、どうやら昨日の服のままだったのでそのまま劇場に向かうところで

ウー!!ウー!!ウー!!

けたたましいサイレンが鳴り響く

「つち……起き抜けにかよ………」

暁は、急いで格納庫に移動する途中地下司令部直通の暁専用入口をしようし

素早くジャンプスーツに着替える



【地下司令部】

「芝公園に黒ノ巢会が現れた」

米田が現在の芝公園の状況をモニターにだし説明する

「芝公演？たしかそこには、帝都タワーが最近建造された」と

「こりゃあかん！もしタワーが破壊されたら、軍の暗号回線から

お茶の間のラジヲまで全部パーヤ！」

「しかし光武では芝公演までは遠すぎます」

そこで米田がある機械図面をモニターに写し説明をする。

「なので今回は、翔鯨丸を使用する……しかし暁、お前の雷電は、

まだ機体の積み込みには対応していませんので輸送についての

詳しい説明は小島から聞いてくれ以上だ！」

「よし！帝国華撃団出撃だ!!」

「「はーい!!」」

「暁、じゃあ直ぐに機体に搭乗してくれ説明はそこで」

「了解……」

暁は、みんなより早く格納庫に移動して機体のシステムを立ち上げる、

そして阿頼耶識が自動で接続される

機体が、自分の体のように動くことを可確認する。

「じゃあ暁説明するよまず轟雷号で内幸町駅まで乗車

ソコからうちが秘密裏に建造した。カタパルト施設からカタパルトで射出、

威徳院付近に着地ソコからダイレクトカノンサポートを開始

いいかい・・・あくまで僕らは、サポーターだ。

場合によるけど直接前線には出ないいいね・・・?」

「了解している」

「ならいいんだ・・・じゃあフェイスの初お披露目だ」

「盛大にいこうぜ!!」

こうして花組は、翔鯨丸で暁は轟雷号で出撃した。

【芝公園】

「オンキリキリバ、サラウンバツタ！オンキリキリバ、サラウンバツタ！オンキリキリバ、サラウンバツタ!!」

謎の変人が変な機械にむかって念仏めいたことを唱えると  
変な機械が地中へと潜っていく

「魔都の門見えたリイイイイイー!!!」

わけのわからんことをいつているどこからともなく声が響く……

「そこまでや!!!」

「ぬ……?」

「帝国華撃団、参上!!!」

「うち……帝都タワーは、後回しだ!!」

「やはり敵の狙いは、帝都タワーか!」

「つまり帝都タワーが破壊されてもうちらの負けや!!」

「よし!みんな、帝都タワーを防衛しつつ敵を殲滅する!」

その時、大神の真横から砲撃が飛んでくる。

「な……!しまった!!!」

直撃するかと思ったとき

ドゴン!!!

別の砲撃音とともに大神へと向かったといった砲撃が撃ち落とされる、その時花組の全員に通信が入る

「みんな気をつけろこの公園には、蒸気火筒が何台も設置されている」

「その声は、暁か・・・どこから?」

「威徳院近郊から砲撃支援を開始する・・・」

俺は基本支援戦闘のみ参加でなすまないが頼む、蒸気火筒は、

こちらで遠距離砲撃で破壊する大神たちは、協侍を」

「わかった!みんな蒸気火筒は気にせず攻撃を開始する!!」

「「了解!!」」」

そして皆は、戦闘を開始する・・・

大神、さくらが、前衛を努め敵陣に切り込み

すみれは、その薙刀で大神達の撃ち漏らしや薙刀特有の間合いで敵を屠り、

マリア、紅蘭が遠距離の敵を確実に仕留めていく、

こうスムーズに行動できるのはひとえに、暁の支援攻撃があつてのこと、

マリアは、その支援に息をのむ、ここ芝公園から威徳院まで約直線距離270メートル

から蒸気火筒の急所の蒸気タンクに一発で打ち抜き、固定している砲台ならともかく常に移動している脇士にも砲撃を当、こちらが立ち回りやすいようにしている

「(あの子・・・ばけものか!)」

彼の戦闘能力に恐怖すら抱くがいまは心強く思う・・・大神の不慣れな指示とは違い

「蒸気火筒全機沈黙を確認、弾頭変更鉄鋼榴弾から

対人型蒸気用特殊徹甲弾に換装戦況はこちらが、圧倒的・・・しかし」

未だ、帝都タワー上でこの戦闘を見守っている不可解な存在がいる

「スキャン結果が出たよ・・・あれ相当やばいかも」

オタコンが、苦い顔をしながら通信してくる

「そんなに？」

「今の帝劇のメンバーじゃまず無理だね・・・」

「こつちが動く？」

「・・・酷なことかもしれないけど彼女らが全滅したらそうするしかないね」

「悪いけど全滅するまで待てないから・・・」

「はあ・・・君ってやつは、・・・まあそこが君のいいところだから仕方がないね」

「状況をみて合流する」

「了解」

そして順調にてきを全滅することができたその時、  
帝都タワー上の不可解な存在が声を上げる

今まで、抑えていたその禍々しい妖気を発しながら。

「……………なるほど、こやつらが叉丹を……………」

「貴様！何者だ!!!」

「我は天海！偉大なる黒之巢会の総帥……………」

帝都の最初にしてさgメシヤ!!」

「[[[[……………は?]]]]」

天海がなにか口上を述べていたら彼のど頭に、

銀色の弾丸を命中して吹っ飛ぶもちろんそれをぶっぱなしたのは

「話長い……………三文字で」

暁だった

「「（一様のお約束ぶった切ったああああああ）」」

あの花組メンバーもドン引きだ因みにとうの天海はその痛みに  
もんどりうってゴロゴロ転がっているが無傷のようだ

「つち．．．硬い妖力が防壁なったか．．．」

「暁容赦なさすぎ．．．」

そこでやつと天海が復活する

「お．．．おのでキサマらよくもやりおって．．．」

だがうぬらには我が相手は務まらぬもはや我が目的は、  
果たされた．．．うぬらは、

我が玩具tドゴン!! たわmガキン!!」

えええいいい加減にせごしゃ!!!」



流石の天海もキレるがお構いなしに徹甲弾を見舞う暁、  
まさに外道であるだがいつの間にか天海は、消えこの場には、  
黒い脇侍が一体いるだけだったかし

この脇侍どこかおかしいと気がつき花組のみんなも防御陣形になる。

「黒い脇侍? . . . . . オタコンリーダーに反応は?」

「おかしい . . . . . この脇侍、妖力反応がない . . . . . まさか?」

「だが実体は有るようだ攻撃が花組に届いてる」

遠距離から徹甲弾を黒い脇侍に叩き込みタコ殴りにしながら伝える

「もつと範囲を広げて索敵してみる少し時間をくれ」

「了解 . . . . . みんなソイツは実体をもった幻影だ . . . . .」

少しだけでいいから時間を稼いで今、本体を探してる」

「つく．．．わかったなるべく早く頼む．．．」

こちらも狙撃で援護しているが相手は怯むくらいで

ダメージが通つてゐるふうには見えなかった

「つつ．．．!!」

「キャアア!!」

「オタコン．．．マリア機、スミレ機の耐久がやばいまだか!!」

「もう少し!!．．．つくうまく気配を消してて．．．」

こんなことなら現場に指揮車向かわせて対地ソナーでも打ち込むんだつた．．．」

その時別の通信が入る

「敵の位置を補足したわ．．．今から、翔鯨丸で

砲撃します近くの人は至急退避を!!」

「げ．．．この声は．．．」

やべえ震えが止まらねえ~~~~!!

着弾地点には黒い脇侍と瓜二つの白い脇侍が現れた・・・

「あれが本体か・・・面倒をかけさせる・・・」

すう・・・・・・・・・・はあ・・・・・・・・・・すう・・・

「大神一発大きいの打ち込む巻き込まれるなよ？」

「は？」

大神にそう告げ、雷電に装備されていたスナイパーキャノンを  
パージしトラス社が開発した新型ライフルを装備する

名前はみんな大好き【ARSENIC】

雷電から翠色の光が漏れだし芝公園からもその光が見える

「な．．．なに？」

「綺麗ですわ」．．．．．

「暁．．．．．みんな直ぐに退避だ！」

「「!?了解」」

花組メンバーは大神のことだと同時に離脱しかし

敵集団は未だにその光をみて固まっている

「目標ロック．．．．弾道計算完了．．．．周囲に味方なし．．．

コジマチャージ臨界、超過駆動問題なし【コジマライフル】発射．．．．．

その言葉とともに周囲が翠の光で埋め尽くされるそして

1 閃の翠の光が一直線に白い脇侍に命中し

翠の大爆発が起きる

「・・・・・・・・汚ねー火花だ」

爆心地には、ボロボロ大破した脇侍が転がっており・・・・・・・・  
大神たちは、最早呆然だった

「な・・・・・・・・なんですのいまの・・・・・・・・」

「翠色の光がきたとおもったら・・・・・・・・まさか」

「なんて威力の攻撃なんだ・・・・・・・・」

「今のは、コジマ爆発・・・・・・・・ちゆうことは、今の攻撃はコジマ兵器かいな・・・・・・・・」  
「・・・・・・・・」

「対象の撃破をかつ．．．米田のオヤジさんうるさい．．．

え？．．．あんなもん使うな？．．．わかつたつて有事以外では

コジマ兵器は使わないようにするよじやあ帰投するから」

バチバチと火花を上げるコジマライフルを

パージしコックピットから出ると同じくして

輸送車とフェイスの整備スタッフがパージした武装や薬莖、

機体を回収する途中で花組と合流し翔鯨丸で帰投が．．．

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

大変イイ笑顔のあやめ姉さんがこつちをみている．．．米田のオヤジさんは小声で

「芝公園の後始末の責任と思って素直にうけな」

「フッフ、逃がさないから・・・暁」

さつきまであやめに見惚れていた大神がドン引きしている、  
因みにさくらは、惚けていた大神に嫉妬の視線をむけていた。

「はぁ・・・早く終わらしたただけなのに」

教訓、迅速な殲滅をすると気にも一樣手段と被害は考えよう

【早まるな、街中で使うな、コジマ兵器】

色々字余り

## 第10話 隊長に必要な三つの条件①

春うららの今日この頃、暦は4月、

暁が帝劇にきて一ヶ月が経過した、相変わらずアイリスのアタックが激しく

その都度、弟を心配する様にアイリスにつつかかる、さくら

だんだん自重がなくなってきたるあやめ姉さん。

最近、演劇や活動写真のはなしで盛り上がるようになったすみれ。

雷電の武装のアイデアやオタコン、了子まじえて雑談の多い紅蘭

だが……相変わらず

「……………」

マリアとの距離は微妙に離れている感じである。

たまに試射室で一緒になるが会話らしい会話がなく、

コチラをチラチラと警戒しているのに

その都度「何？」と聞くも反応は相変わらず、

「別に……………」である……だが一週間前に珍しくこんなことを聞かれた



「暁はどうして……戦おうと思ったの？」と

珍しすぎて正直食いかけのパンを落としそうになったのは割愛する  
おれが戦う理由？そんなの

「大切なものを取り戻すため……それと復讐」

そう答えた、鉄華団のメンツでも数人しか知らない俺の戦う理由……

「だからいつも無茶なトレーニングとかしているの？」

「無茶？あれくらい普通でしょ？古巣じゃあのくらい普通だったし」

「……貴方の古巣は化物屋敷？」

「失敬な！」

普通な筈だ、独逸製の最新人型蒸気を崩拳一発でスクラップにする赤髪のおつちやんや機関砲の弾丸を全て切り落とす防人（笑）

とかダンボールがあればどこにでも忍び込むナイスミドルとか

インテリ派なのになんかももういろいろおかし眼鏡女史、

あと若干17歳で准将で大男をまとめてソードメイスで叩き潰す  
ロリ巨乳とかいるけど普通なはずだ

「じゃあこつちからも質問……アンタの戦う理由は？」

「私は……」

「無理には……聞かないよ……じゃ俺はこれで……」

「……」

とまあ……それからなんかマリアの様子がおかしいのだ

「ふむ……」

心ここにあらずといったマリアが目の前を通る。

「五月病にしてはまだ早いんだけど……」

するとほどなくして大神がこちらに近づいてくる。

「暁ちよつといいか？」

「なに？」

「いや……最近マリアの様子がおかしくてなにか心当たりないか？」

「……大神を知ってると思うけど俺、あんまマリアとは親しくないぞ？」

会話らしい会話は、ないし」

「そっか……ところで暁は、マリアのことどうお思ってるんだ？」

「質問の意図がわからんが……どうした？」

「ああホラ！なんかマリアと暁って仲悪くみえるから……」

「おれは嫌ってるわけじゃないけどね……」

「たまに胃薬くれるし……むこうがこつちを警戒しすぎなんじゃ？」

「まあ警戒される理由はたくさんあるけど……」

芝公園コジマ爆発騒動とか特に、

因みに件のコジマ爆発で吹き飛んだ木々や屋台が柵などは後日

暁や暇だった鉄華団のメンツで修復した。

もちろんリリイにも大層いろいろと搾られたけど

「まあ……隊員のケアも隊長の大切な役目なんだし頑張つて」

「暁……ありがとう！じゃあ俺は、別の人に聞いてみるよ」

「隊長……ね……俺には無理だな……」

隊長に必要な三つの条件があるが、俺には無理だと思う……

暁も、特にやることは、あにので帝劇をうろうろしつつ、

風組三人娘達と他愛のない会話そしたり、真面目モードのあやめ姉さんと、

前回の戦闘の反省会兼雑務の手伝いをしたり、

コジマ兵装の封印作業をしているオタコンと紅蘭の手伝い

アイリスに拉致られ脱衣こいこいをしようとしたのでやんわり却下し普通のこいこいに矜持、

そして舞台にいくと倒れかけているセットを紅い顔をしながら支えてる大神がいた……

「何?どうしたの?アイリス危ないよ」へグ……

セットはかなり重く重く大神がしくじると、アイリスの方に倒れかねないので支えるのを手伝う

?確かに重いけど顔を真っ赤にするくらいか?……モヤシめ大神

すると、何故か、さらに軽くなるので後ろを向くと大神より背の高いガタイのよい女性が片手で

セットを支える……やべえちよつとかっこいい。

「まったく……なにを騒いでいるとおもえば……」

「え?」

「だ．．．だれやアントタ？」

「誰？見ない顔だけど．．．」

帝劇に、こんな目立つ人は、いなかったはずだが．．．

するとそこで、アイリス、すみれとマリアが声を上げる

「カンナ〜〜お土産はあ？」

「すまねえなアイリス、荷物が全部流されちまつてなあ〜」

「カンナ!!．．．無事でしたの？」

「いや〜沖繩からの帰りの船が沈没してね泳いできたんだよ」

は？沖繩から？鹿児島まで。でも約600kmあるぞ？

かっこいいと思ったけどこいつアホじゃね？あ．．．いや

うちのメンツでも何人かできそう．．．

「相変わらずだね．．．」

ん？あのマリアが笑ってる．．．よほどこの人に会えて嬉しいのか．．．

ってことは．．．この人が花組の最後のメンバーかどうりで個性的なわけだ

「どうやら新入りがひの．．．ふの．．．み．．．4人か

できつきからギャーギャー喚いてたのがあんたかい？名前は？」

あのくらいで喚くとは、大神め精進が足りん．．．(謎)

「大神一郎だ前は、海軍少尉だったけど今は、帝劇の隊長さ」

まだまだひよこだけだな……

「暁・オーガス……陸軍中尉で今は、帝劇に出向中……親しい人からは本名のサトシとか呼ばれてる」

「へえー少尉さんとこのちっこいのが中尉か!? どうりで二人共いい

ツラ構えしてるわけだっへ……気に入ったよ」

処す? ねえこいつ処す? 今小さいとか言ったよな……後でボコす

「カンナ、新人のさくらと紅蘭よ」

「よっ!」

「真宮寺さくらです……よろしくお願いします」

「うち……李紅蘭や、よろしゅうなって……なあ……アンタ

えらいエエオトコに見えるけど?」

いやいや人のこと小さい呼ばわりしたけど男扱いは実際失礼

「紅蘭……この人男じゃない女だよ」

「ハハハハ!!」

そこでふと米田の声が響くその声質は、娘を心配していた父親の様な感じに聞こえた

「カンナ・・・よく帰ってきてくれた」

「支配人この人は？」

「桐島カンナ・・・琉球空手、桐島流継承者。」

「これで花組は全員集合だ。」

「よ！支配人、久しぶり」

「（琉球空手、桐島流継承者か・・・戦ってみたいなくウズウズ）」

暁は、これでも八神流正統後継者、剣術主体の流派だが無手の技術も存在している暁は久々に心が躍る。

それから皆はサロンに移動しカンナの旅話を聞いていた。

「どうやらカンナとすみれはある意味仲がいいようだ・・・喧嘩するほど仲がいいそんなことを考えていると周りをみるとマリアがいらない・・・」



久々の同期の凱旋なのになんかとは……やっぱおかし  
い、そう思いカンナの話に耳をかたむけるのだった

「なんだ……付き合いわりいな……ところでお二人さん  
ちよつと付き合わないか？」

ガタ!!

アイリス……ステイ!!座ってるそういう意味じゃねえ……  
しっかしなぜすみれまで立ち上がる？

「別にいいけどナニするの？」

「いいともナニをするのかは、知らないけどお付き合いするよ？」

「そうこなくっちゃ!二人共話が早いね」

「あんたら陸軍、海軍士官学校主席だったそうじゃねーか？」

軍隊仕込みの格闘技、見せてもらおうじゃねーか？」

「いい……」

「少尉……お大事に……」

あからさまに嫌な顔をする大神、そして可哀想なものを見る様子を大神を見るすみれ、それに引き換え暁は、

「……別にいいよ……ちょうどおれもやりたかったし

八神流継承者としてね……」へイイ笑顔

「(あ……ヤルキスイッチONしてる)」

大神とは180度違う様子、これにはカンナもにんまりである

## 第11話 隊長に必要な三つの条件②

その日の夜、大神と俺は、カンナに連れられて、地下のトレーニングルームにきていた

「じゃあ手始めに、組手からやってみようか」

「組手？」

「ああ、アタイが隊長に技を仕掛け隊長は、それを受けるのさ」

暁は、ちよつとまっけてくれ」

「わかった・・・その間に準備運動しておく」

「ちよ・・・俺は、空手は知らないし受けきれないよ」

「なあーに最初に順序をおしえとくからその通りに受ければいいからさ」

カンナはそういい大神に技の出し順を教えその対処法をざっくり教えている  
暁は、それを見つつ軽く柔軟をしサンドバックに軽く拳を当て続け

体の調子を見る。ほどなくして、大神とカンナの組手が始まったので中断し、見学することに、軽い組手だがカンナの実力は、十二分にわかる。

「(やっぱ強い……)」

予想どうりの実力に、やる気がメラメラとでてくる、  
そして一際大きい打撃音と共に吹っ飛ぶ大神

「いやあくワルイワルイ隊長が思った以上にやるもんだからつい力入れすぎちゃった」

「イツツツ……いや大丈夫だよカンナ」

「そうかい？ あんま無理すんなよ？ ……」

それじゃあお楽しみと行きますかなあ……暁」

「ん？ そうだねこっちは準備いいよ」

暁は、自然体からゆっくりとお辞儀をする。

試合前のお辞儀は実際大事、古事記にもそう記されている

そして素早く八神流無刀術の構えをとる、カンナも同じ様にお辞儀をし、構える

「・・・・・・・・」

先ほどの大神の組手とは違い異様な緊張感が漂う

ゴクリ・・・・・・・・

大神が息をのむ、二人は、ジリジリと間合いを詰めるそして互の間合いにはいいつつ瞬間

b《「ツシ!!」》／b《》

ユラユラとリズムを取っていた暁の左拳がムチの様にしなり

カンナの右顎にむけて奔る。

「つちでりやあああああああああああ!!」

しかしカンナは、その攻撃を右でいなし、

お返しと言わんばかりの左正拳突きを繰り出す

「よつと・・・」

だが、暁はなんと、跳躍しカンナの正拳突きを交わしたばかりか、その拳を踏み台にしそのまっま踵落としを繰り出す

「なんの!!」

しかしこれもカンナの十字受けて防がれる。・・・

そんな攻防が数十分続いたところで互いの拳が顔面にあたる前に寸止めだと止まり

勝負は引き分けと終わる。

「はあはあはあ．．．．．決着付かずか．．．」

「ふう〜疲れたアーマさかここまでとは、ちっこいのによくやるぜ」

「．．．．今度身長のこといつたらその口縫い合わせるぞ？」へビキ

「わりい．．．わりいーでも楽しかったぜーなあ二人共、

腹へってねえーかい？よかつたらアタイが飯つくつてやるぜ？」

「．．．．．確かに動いたらお腹が．．．」

「おれも．．．．．じゃあお言葉に甘えようかな？」

「おっしじゃあ食堂に移動しようぜ」

大神と暁は、カンナと一緒に食堂に向かう、

しっかし一回汗を流したかったかも．．．

「じゃあ、アタイは飯つくつてくるからちよと待つててな」

「了解……」

「わかったよ」

大神と暁の二人は誰もいない食堂で、腹を空かしながらまっている……

「結構……時間かかるね」

「そうだな……声をかけてみようか？」

「……我慢できないほどでもないからおとなしくしていよう……」

そんなかんじにだべっているとやつとカンナがやってきた

赤黒いモノがかかった丼をもって……

「……マジカー」

「(な……なんんだこれは、ごはんの

上に赤黒い何かが……乗っているそれにこの刺激臭)」

「黒ブタと苦瓜と唐辛子と黒胡椒で炒めたものだよ、これが麦飯によく合うんだよ！」





しかし喉元を過ぎると、口には、ブタの旨みと苦瓜の独特の苦味が相まって美味しく感じる

辛さもいいアクセントになってたしかにこれは・・・

ご飯が進くんだ!!!

大神も取りつかれたように、カンナ特製激辛丼を食う、

ガツガツガツガツガツ

うおー俺は、人間コジマ発電所だあ~~~~

「ふい~~~~~」

大盛りの丼を無心に喰らい、食後のお茶でまさに至福である

「カンナ美味しかった・・・カンナは料理が上手な人なんだね」

「たしかに、最初はびっくりしたけど美味しかったよ」

「へへ・・・そうかい？まあ料理って程でも無いしアタイ、ガサツだからさ

取り柄だつて空手くらいいうのもんだし・・・」

「そういえばなんでカンナは花組にこようつておもつたんだい？」

「う〜んどつから話そうかな？・・・うーん

あたい、さっきもいったけど空手一筋だったから、あたいには、空手しかない。

いや・・・空手しかできっこないつてずーと思つてたんだ。

舞台に立つなんて考えた事もなかった。」

カンナは昔のことを思い出すように語ってくれた。

「けど・・・アタイにも空手以外のことができる、それで人によるこんでもらえる。

それに気づかせてくれたのがあやめさんだったんだ」

さすがあやめ姉さん・・・こうゆうときは、マジ有能だな・・・  
普段は、ストーカーなの・・・

現にこつそりとコチラをみている寝間着姿のあやめ姉さんがいる

早よ、巢に帰れ・・・

「初めて舞台上に立ったときの事は一生わすれないよ・・・へへ・・・男役だったけどな

あたいの前で開く幕、そして見えるのは眩しい光、

ただのスポットライトだけどあたいからしたら

それはすぐく懐かしく感じた、まるでお袋のようでさ・・・

あたいの小さい頃に亡くなっちまって

顔も覚えてねえーけどあたいにとっての舞台はそんなかんじさ・・・

まあ未だにダイコン役者だけどさ」

お袋・・・母さんか・・・

そういえばいままでせわしなく慌ただしく生きていたけどゆつくり母さんの事考え  
たかな……

俺は、【あの時】母さんに守られたんだ……おれがすっかり守らなきや行けなかつたのに

それに……おれがすっかりしていればマキだつて……

やめやめ……今そんなこと考える時じゃない……

そう思い、頭から嫌なことを振り払う

長い時間、話し込んでいたらしくお開きにして各自の私室に戻ることにしたその途中で不審な行動をしているマリアがいた

「たしか……このあたりで……」

「何してるの……こんなところで」

「つ……あ、暁……いえ……何でもないわ」

そう言うのとスタスタとどこかに行ってしまった。

「はあ……何でもないふうにはみえないけどね……」

マリアの行動に呆れつつ自分の部屋に戻ろうとしたとき

カチャン

「ん？なんだこれ？」

なにかを蹴飛ばしてしまったのか廊下の端にコロコロと何かが転がる、  
転がったものを披露とそれはロケットのようだった

「落し物？」

そう思うと背後からマリアが声をかけてくる、

「暁、それは……」

「ん？ここに落ちてた、もしかしてマリアの？」

「ええ……拾ってくれてありがとうちょうど探していて」

「そう……綺麗なロケットだね」

「……あなたには、きれいに見えるの？」

「？……違うの？」

「いえ……何でもないわ」

「そう……大切なものなら無くさないようにしないと」

「……」

はあ……まったくなんなのやら……なにか訳があるようだけど

別に興味があるわけでもな医師……こうゆうことは、大神の出番だしな

「じゃあ……おれは寝るから……おやすみ」

素晴らしい屋根裏部屋に移動する

1917年ロシア

そこでは世に言うロシア革命が起きた年、一人の少女は砲火にさらされながらも勇敢に戦った

ひとはその姿から、火食鳥（クワツサリー）と呼んだ、彼女には、唯一無二の信頼できそして愛した人がいた

自分の所属する隊の隊長だった……幼い彼女を時には厳しく、そして我が子のように可愛がった

しかし彼は、敵の銃弾により幼い少女の目の前でその若い命を散らす、ロシアの吹雪が彼の命を吹き飛ばし

少女の心も凍らせる

ビービービー

「深夜けたたましく警報がなる・・・敵の襲撃だった  
・・・っち」

暁は眠い目をこすりながら急いで支度をした



## 第12話 隊長に必要な三つの条件③

早朝【築地】

「……ねむ」

現在築地にて黒之巢会と花組が戦闘を開始して10分が過ぎた頃、

暁は、何時ものごとく遠方からの援護射撃に徹しているが

地形的に、遠距離砲撃に適さないため粗方撃破した所で

近接装備に切り替える。

「装備換装120mm機関砲と斬馬刀【鉄火無名二式】、ハンドミサイル」

手早くコンテナから装備を出し装着し、敵陣に突貫する

「花組とは別方向から侵攻、挟み撃ちに持ち込む」

「了解……索敵開始、敵機マップに表示するよ」

「機関砲三点バーストに設定2秒間隔で発射……足を止めたやつからぶった斬る」

機関砲で牽制しつつ斬馬刀で殲滅していく

だがその時、子供の悲鳴が機体に響いき状況を確認すると。

子供に襲い掛かる魔装機兵

そして子供をかばうように飛び出す大神機  
そして

ドゴン!!!

敵の攻撃をモロにくらった大神機は吹き飛び建物に激突する

「ふん．．．戦いのなかで余計なことに気をとられるか」  
チュツドーン!!」

魔装機兵から大神を馬鹿にするような声が響いた瞬間、

暁はミサイルを発射し、敵を大神と同じように吹っ飛ばす

「うち殺り損ねた．．．．．大神、無事？」

通信を繋げるも、機体が損傷しているのか繋がらない

「やれやれ」

黒之巢会との戦闘は、こうして幕を閉じた

それから三日後

大神は、うちで使っているナノマシン療法と医療ポットのおかげで無事、自分の部屋に

移された、意外なことにマリアが丸三日、大神の看病をしていた、まあ誰かと重ねているようだが、暁は、そんな二人を気にしつつも、いつもの如く、アイリスと一緒にいる状態で今日は、音楽室にいる意外な事に、ピアノが得意だったアイリスが楽しそうに曲を弾いているしかし

「なあアイリス……おれの膝、固くないか？」

「ぜんっぜくんそんなことないよ♪むしろ座り心地サイコーだよ」

「そ………そっか／＼／＼」

ヤバイ……アイリス超いい匂い、甘い香りだけど嫌な甘さじゃなく妙に頭に残る

それに膝から伝わるアイリスの柔らかさ………

ヤバイ理性が飛ぶうろうう

!!!!!!!

「どうしたの？ア・カ・ツ・キ♥」く（・▽・）ニヤニヤ

「何でもない……よ？アイリスって香水をいつもつけてるの？」

「うーん、いつもじゃないかな？たまに気分をつけてるの」

「そっかーあはははは……はあ……」

アイリスの攻撃？を耐えきりくたくたになりながら歩いていると、

大神の部屋からマリアの険しい声がする。

『あなたは、隊長失格です!!!』

なーに言ってるんだか……今のマリアがいつでも説得力なんてないのに

そんなことを考えていたら、大神の部屋から出て来たマリアと鉢合わせる。

「つ……」

「……大神が、隊長失格？……なんで？」

「なんで？ですって？暁なら分る筈よ？敵の前で余計なことに

気を取られ、敵を逃がすなんて」

「敵を逃がした原因は俺……もう少し火力のあるやつ使えば良かったそれに……」

【子供の命】が余計なこと？本気で言っているの？」

## ゾクリ

空気が何倍も重く感じるそれに寒気すら・・・感じる

それほどの濃密な殺気がマリアに向けられる

「たしかに俺なら気を取られないよ？子供が死ぬ前に【殺せる】から・・・」

俺の事は、この際どうでもいいけどマリアは何のためにここにいるの？帝都防衛のため？  
め？

それとも【敵さえ殺せばいいの？】それならマリアこそ花組失格だよ」

「な!!」

「ただ殺すことがしたいの？目の前の小さな命ほったらかしで・・・たしかに隊長が自分から危険に突っ込むのは、

指揮官としては、ダメダメだけど俺は、一人の人間としては大神を尊敬してる」

「・・・・・・・・」

「大神とナニを重ねてるのか知らないけどあのクワツサリーが地に落ちたものだね

ねえ・・・隊長に必要な条件が三つあるのしってる？」

「三つの・・・条件？」

「考えてみる事だね．．．それと何を悩んでるか知らないけど悩み抱えたまま戦場に出ると死ぬのは、

定番だからとつと誰かに相談するんだね。俺は、構わないけどさくら達が悲しむし．．．じゃ」

暁は、言いたい事を一方的に言い放ちその場を離れ、曲がり角を曲がるとそこには．．．

「立ち聞きなんていい趣味してるねカンナ？」

「いきなりでかい殺気がしてきになってな．．．にしてももう少し言い方つてもんがあつたんじゃねーか？」

「かもね．．．でも子供一人見捨てる奴が帝都を．．．この日本を守れっこないし、あの子供が死んだら

誰かが悲しむそしてその悲しみは．．．恨みの炎になって誰かを焼き尽くす．．．そんなのは、俺一人で十分なんだよ

復讐なんてするもんじゃないけど．．．止まらないんだよ」

「．．．暁は、誰かに復讐したいって思ったことが？」

「あるよ？現に今も仇を探し中．．．あ．．．邪魔しないでね．．．邪魔したらいくらカンナ達でも

「……この話やめよ……いい加減疲れた……マリアのことちゃんと見てあげてね同期なんですよ？」

「……言われなくてもわかってるよ……じゃあおやすみ暁」

「うんおやすみ……」

そう……仇討の邪魔する奴は……誰だつて構わず……灰にする……

空の紅い月をひと睨みし屋根裏部屋に戻る

おまけ①

「ねえねえ!!了子からもらった香水型の秘薬試してみたよ!!!」

「で……どうでしたの?」

「もう……バツチリ!!暈つたらいつになく真つ赤になってモジモジしちゃって……すつごく可愛かったよ」

「ふくんそう……でも一線は超えなかった……と」

「うん……それがちよつと残念く」

「オホホホまあ貴方のその貧相な体型じゃいくら秘薬があつても彼は、墮せませんわ?」

「ねえ屋上行こうか?久々にキレちゃった♥」

「落ち着きなさい……あなたも煽るのは、やめなさい……しかしまさか了子女史が手を貸してくれるとは思はなかったわ……」

女性は、小瓶にないった透明度の高いピンク色の液体を傾ける

「あの方曰く「あの子はもう少し力を抜かなきゃだめね」だそうですよ」

「そう……でもこれが彼女に聞かれたらヤバイわね?」

「どの位ヤバイの?」お姉ちゃん」



「帝劇が消し飛ぶ位」

女性と少女は青い顔をしながら黙り込んでしまう

「彼女たちは何を？」

「オタコンはきにしな—い」

格納庫の端で三人の女子たちがこそこそしているのをオタコンが不思議がる

おまけ②

いびき……いびき……いびき……

夥しい血と臓物が溜まった池がゴポゴポと泡を立てる

ぼちゃん・・・・・・・・

白髪の男は金色の長い髪の女性の頭部を血の池に投げ込む

池には、様々な臓物が浮いている人、獣。そして降魔の血も様々なモノの汚れた血  
美しい女性の頭部は醜く溶け、池に沈む・・・・・・・・

その時池の中心が怪しく光る  
そしてその中心から



銀の長い髪の獣の耳を頭部から生やした美しい女性の声にならない悲鳴・・・・・・・・  
汚れた池から、ゆっくり・・・・・・・・ゆっくり美しい女性がいでてくる。

その瞳は血の池の様な【朱】  
そして彼女は……眩く

「私の暁様……今お迎えします」

白髪の男は狂った笑いを上げその後ろには……一人の老人  
天海と死天王がいた

彼女は、それらにはきを止めず……闇から闇色の服を編み出し纏う  
その姿は、闇色のドレスのようだった

## 第13話 隊長に必要な三つの条件④

ゴソゴソ・・・ピタ!・・・ごそごそ・・・

やあみんな! 暁・オーガス改、八神暁だ

今現在、俺は、ダンボールを被って潜入中なんだ・・・

なんでこんな事をしているのかというと・・・しょーもない訳があるんです

一時間前

「ZZZZZZZ」

『貴様の正体、我が黒之巢会が見破つたり!!』

「へぶう!!」へベットから落下

いきなり、聞き覚えのある声が大音量で響いたのでイライラしながら外をみると空になんか知らんガキが写っておりなにかしゃべっている。

『正義を守る帝都の戦士とは仮の姿……してその真の姿は、冷酷無比の鬼畜よ!!』  
よし……ギルティード……こんな夜に人様の安眠妨害しやがって……つと  
考えながら下をみると大神とマリアがいた、どうやら上で写つてる奴は、マリアの過  
去を

知っているようだまったく面倒な……

どうやらマリアに昔のことを知られたくなければ一人で来いとの事だ……まずい

「……今のアイツだと確実に行くな一人で……やれやれ」

頭を掻きながら、格納庫に向かいいろいろ準備を開始する。

「つまりマリアが一人で出ると……完璧罨だね」

「まあ罨だよなくまあ見過ごせないから後ろからこつそりついてつて敵の根城を見つけ  
てくる」

「?彼女を助けないのかい?」

「自分の失態は自分で拭けつて事、まあ大神達もくる事だし先行してやりやすいように  
するさ」

「そう・・・でも晧も何だかんだと心配なんだよね？」

「は？なんでそう思うん？」

「・・・スーツ逆に着てる」

「／／／／／／／／／／／／／／／忘れるいいなオタクン」

「ハイハイ・・・で潜入になると思うから試作のスニーキングスーツ出しておいたから

銃は、サイレンサー付き、スタンナイフも準備できてるから」

「ありがと・・・あー後ダンボールも忘れるなよ？」

そういうとオタクンはあからさまに嫌な顔をする・・・解せん

「ホントに、ダンボール持っていくの？」

「教官が言っていたからな潜入にはダンボールが必須だと」

「まったくあいつと来たら・・・」

そんなやりとりをしていると、格納庫が異様に騒がしくなっているカメラで確認すると、

紅蘭の静止を振り切ってマリアが出撃したようだ・・・やれやれだよまったく

「紅蘭！おれが後を追うから、大神をたたき起こしてきて!!」

「晧はん・・・なんでこないなどこに！しかも雷電ののつとるんや？」

「今は、そんなこと重要じゃないから……暁、雷電出るよ……」

マリアを追う様に、暁も出撃する、レーダーにはバッチリマリア機を捉え、気がつかれないように、

後方から追跡する、機体機動を隠密機動に設定し足音を消しながら、リフティングウインチで高所から追跡する。

そして追跡する事、20分、マリア機は前に戦闘のあつた築地にきていた。

「敵影は見えず……か……いやいるな」

目視では、確認できなくてもこつちには、高性能のレーダーがある、レーダーにはくつきりと敵の反応が5以上確認できた。

「……おいですつたか!!」

やはり罠だったようで、いとも容易く、マリアが捕まったのを確認し、マリアを船に乗せどこかに連れていく様子が見えた

「たしか、紅蘭が……隊服に発信機仕込んでたな……」

携帯端末を取り出し、発信機の電波を拾いつつ、周囲の敵……取り分け、マリアの光武を破壊しようとしている、脇侍を

静かに、そして小型ブレードで確実に無力化する。銃器類では目立つので、使用はしない。

「二通り、終わったな．．．さて追いかけますか．．．．．」

そうして暁は、マリア機の横に雷電を止め、雷電から小型の潜水ジェットを下ろし船をお追いかけた

以上が今、に至るわけである．．．．

「え．．．とマリア．．マリア．．．つと」

ゴキヤ!!

潜入中、邪魔な脇侍を「生身」で撃破しつつマリアを探していると、明かりが見えた  
「ここかな．．．あ．．．いた．．．」

中にはマリアと天空に移されていたガキがおりなにやらしゃべっているようだった。

「今のうちに上の階から侵入する準備をしますか」

マリアのいる部屋の真上の部屋に移動し床にバレないように穴をあけいつでも逃げ



られる様にする

そんな準備をしていると・・・

「なんでお前も一人で来ちやうかなー」

なんと大神が、一人でここに来てしまったのである、これには暁も呆ける。

だが、大神には悪いがこれはチャンスだったりする。

「この隙に・・・と」

暁は床板を外しマリアの目の前にワイヤーを下ろす、途中、マリアが気がついたので声を出すなんとジェスチャーで指示する。

大神と、ガキの様子は、いい感じに気がそれている。

スススー

「(ロープ切るからじっとしてて、そのまま上から脱出するから)」

こえを出さずに、唇を動かして伝えると、マリアも同じように唇を動かす。

「(けど・・・このままじゃ隊長が)」

「(大丈夫、何とかするから)」

スススーへ上に参ります

マリアを無事に回収し下を確認しようと顔をだしたのだが・・・

「あ・・・」

「……………？」

大神と、ガキと目が合ってしまったの、もちろんガキは大声で叫ぶ

「貴様!!」一体d「大神!!」目閉じて、

耳ふさいで口開ける!!」へ？」

ガキの声を遮り大声で大神に指示をしながら円筒形の缶についているピンを抜きガキの顔面にシュートする

ゴス!!

いい感じに顔面にめり込んだ瞬間

カツ!!

眩い閃光と爆音が狭い室内を蹂躪する

「~~~~~」

モロに閃光と爆音をくらったガキは声にならない悲鳴を上げ倒れている、その時

建物が大きく揺れ、壁が崩れる、そののは、花組メンバーが集合していた。

「みんな！どうしてここが？」

大神がなぜここがわかったのか疑問に思ったようだがすかさず「こんなこともあろうかと!!」

と紅蘭が説明する。

「みんなナイスタイミング・・・さつきとずらからう」

「あ！暁君!!一人でいったらダメじゃない!!しかも雷電にも乗らずに!!」

キレるさくらがまくし立てるが無視し、

「みんな、光武と雷電とつてくるから、時間稼ぎよろしくすぐ・・・合流するから」

「おう!!・・・さあてマリアをいたぶった落とし前、きっちり付けさせてもらおう!!!」

「・・・・・・・・ばかだよあんたたち・・・・・・・・」

「ああ・・・馬鹿かも知れないでも・・・仲間ってそういうものだろ？」

俺たちは、君を絶対に一人にはしない・・・」

「よかつたじゃん・・・こういつてもらえる仲間たちがいて・・・誇れることだよ

さて・・・おれも鬱憤が溜まつてるから前線に合流するよいいよね？大神」

「ああ！勿論だ。行こう二人共!!」

暁は、素早く機体に取り込み雷電を起動させ阿頼耶識を接続、機体と身体が同化する感覚を覚える

久々の前線での戦闘、で気分が高揚する。

「為にしもつてきたこの『玩具』の試し打ちと行くか……」

通常、ハンドミサイルがマウントされている部分に装甲板が取り付けられていた。

今回は珍しく、固定武装のグレネードランチャー以外の射撃武器は装備されていなかった

大神やマリア、暁以外の花組メンバーは、ガキ事、刹那の駆る、蒼鬼の機動性に翻弄されていた。

「全然当たりませんわー！」

「は……早い！」

「ちよこまかと鬱陶しいぜ!!」

「こう早いと、狙いがさだまらへんで」

「ハツハハハ!!遅い!遅い!そんなものか帝国華撃団、まったくだらしがないね」

刹那は、その機動性で花組を翻弄する……しかしここどひとりの女性の叫びが響く

「スネグーラチカ!!」

冷気を纏った弾丸が寸分狂いなく蒼鬼に直撃、脚部を凍結させる。

「これは……」

「みんなお待ちせ！」

「マリア（さん）（はん）!!!」

「大神……合わせて!!」

「応!!」

「八神流古流剣術、外式・轟斧 陰「死神」!!」

「狼虎滅却・快刀乱麻!!」

雷電が踵落としからの炎を纏った鉄火無名二式を打ち降ろし、すかさず、狼の二刀流からの連撃が蒼鬼に直撃し吹き飛び、

マリアが銃撃の追撃、そしてその機動性をいかし蒼鬼のふところに潜り込んだ雷電のうでの装甲板がパージされるとそこには

ゴン太の杭が装備されていた

射突ブレードの代表とも言えるその名は、K I K Uである

A C f aで大変お世話になった人も多いだろうそのパイルバンカー（とつつき）は、

トーラスの魔改造により

杭を射突する際の炸薬にコジマ粒子と有沢手製の炸薬が混ぜられた、コジマ混合有沢炸薬を使用・・・威力は

ブスン!!

大型の人型蒸気同等の大きさの魔装機兵【蒼鬼】がとつつきの衝撃で5mほど浮かび貫通し装甲を粉微塵に粉碎するもちろん

なかにいた刹那もただでは、済まず肉は拉げ、骨がいたるところから飛び出し、機体が影になって皆には見えてないが

まさにミンチに等しい状態だったが・・・刹那はさいごの力を振り絞り

「くろ・・・の・・・す・・・がいにいごう・・・あ・・・れ・・・」

声にならない声をしぼり出し絶命し機体は、爆散する。

「私たちを怒らせたこと・・・地獄で後悔するといいわ・・・」

もう、私は振り向かない・・・わたしには帝国華撃団が・・・私のことを信じてくれる

素晴らしい仲間たちがいるのだから・・・みんな行くわよ！」

『勝利のポーズ!!・・・決め!!』

「なんでおれまで・・・」

「あら？あなただだって私たちの仲間ですもの・・・」

「・・・いい顔するようになったじゃん、マリア」

「／／／／／そうかしら？」

「うん・・・」

「そういえば、隊長に必要な三つの条件って結局なんだったの？」

「うん？わからない？①集団をまとめれるやつ、②他者を思いやれる奴そしてまる③は・・・内緒♪」

「え？・・・狡いわよ暁！」

「全部いったら面白くないじゃんくくまあその条件から大神はピッタリ一致してるよ」

「そう・・・」

マリアは、大神にバレないように微笑んでいた  
これは……大神、フラグたつたな……にやり

【帝都東京某所】

ぴちや……ぴちや……

薄暗い路地から水の滴る音が聞こえ、異臭を放つ

ひとりの女性が若い男性の生首の首筋に牙をたて生き血をすすっていた。

男性の体は、賽の目の様に細切れにされていた。

「おなかへった……」



男の首を無造作に捨てると、彼女の闇色のドレスが生き物の様に蠢き死体を食らう  
その銀髪の女性のはいごから若い男性の声が聞こえる

「貴様……ここぞでなにをしている？我が根城に待機せよと命じたはずだが？」

「……なんだ……あなたか……貴方に命令される筋合いわない……」

「貴様……生み出してやった恩を忘れたか？」

「私は、誰にも従わないし……従うつもりもない……ただ我欲のまま、奪い、啜り、愛  
すだけ

あの人に比べたらあなたたちなんて……有象無象の一つに過ぎないわ……」

「貴様！」

「これ以上……私に近づいたら……」

ツッピ！

若い男の横にあつたガラクタが細切れになる、空中には、彼女の銀髪と同じような銀  
の糸が幾重にも揺らいでいる

「もう……私に構わないで……」

そう言い残し自分の影いゆつくり沈んで消える。

白髪の青年……黒き叉丹と食いかけの賽の目死体を残して。

## 第14話 深淵から生まれた銀糸の姫①

「……………」

五月某日、銀座のカフェテリアで、この小説の主人公の暁とロリ巨神こと、リリイがコーヒーを無言で飲んでいる。

「……………で？いきなり呼び出してどうしたの？皆も連れずに」

「皆は、ちよつとした調査で出払ってるわ……………あなたにも手伝ってもらおうと思って呼び出したの……………今日、なにか用事でもあった？」

「用事というか……………何名かが尾行してきて撒くのが面倒だっただけ」

ゲンナリした表情を受けでお茶請けのクッキーをかじりながらボヤク、

リリイはその表情をみてクスリと微笑した後、真剣な面持ちでテーブルに資料束を広げる。

「暁は、絶対にいかない所、なんだけど浅草十二階下ってわかるかしら？」

「あーうん、詳しくは、知らないけど大体な予備知識は、COCやった時に覚えてる位なら」

「やっぱTRPGは、偉大ねどこでその知識が役に立つか、わからないもの……………」

んど

「布教でもしようかしら？」

「つで……話戻すけどあんな私娼窟と化け物横丁がてんぎいしてる地域がどうしたの？

ガサ入れ？……担当じゃないでしょそうゆうのは」

「うーんガサ入れつというか……行方不明事件が多発しててね」

「リリースが（・ε・）ムーと悩みながら答えるしかし、あそこで行方不明って  
「あんなところじゃ珍しくないよね？」

「一般人ならそれでもいいんだけど……ウチ（鉄華団）から  
出てるのよね行方不明」

……

何やってる鉄華団……話聞く感じ、常連が何人かいたみたいだ。

シノとかシノとかシノとか!!

「あ……別にシノが行方不明じゃないから安心して……折檻したけど」

「お……おう」

シノ安らかに眠れ

「で調査したら．．．．．化け物横丁の路地から．．．．．人間のサイコロステーキが出たのよ」

「は？」

「サイコロステーキよ、綺麗に賽の目カットされた肉片が見つかったわ．．．．．ご丁寧に鉄華団の制服も一緒に」

「制服も．．．細切れ？」

鉄華団の制服というかジャケットは防刃、防弾仕様になっておりかなり丈夫だがそれが細切れとは穏やかじゃない

「他に情報は？」

「鉄華団メンバーと一般人含めての行方不明数が約60人、内10名が鉄華団のメンバーね．．．．．これが行方不明リスト」

暁は、行方不明リストを流し読みする、どうやら最近加入した新人が大半ではあるが全員男性．．．まあ当たり前か

うちの隊には、バイや百合ンクスもいるがこうゆうところは来ないだろう。

「微弱ながら妖力も検知されてるわ．．．．．それに浅草十二階下でこんな噂が最近広まってるみたい」

【銀の髪の妖怪美女がでるとひとが食われる】

「ふーん妖怪・・・ね」

「黒之巢会とも無関係とも、言えないし・・・うちの隊（家族）を美味しく頂いた。

お代（オトシマエ）は付けないといけないのよ、だから・・・」

「調査しろと？・・・しっかし場所が場所だしな・・・花組のメンツにバレたら事だ」  
「無理には、言わないは、あなたは今出向中だし・・・」

露骨に（・・・）するなよ・・・まったく

「夜抜け出して調査するよ・・・米田のオヤジさんには、こつちから伝えとくから」  
「ありがとう・・・そして御免なさい」

「謝らなくていいよ・・・つむ・・・つちバレたか！」

そう呟くと、資料を引つ掴んでテーブルに自分の飲んだコーヒー代を机に置き走り出す。

「?・・・ああ~~~~~」

リリイは、一瞬何事かと思ったけど後ろから猛スピードで走ってくる。さくら、アイリスとすみれ

蒸気バイクに跨って猛スピードをだして追いかけるあやめが通りすぎる。

「まったく……元気な事ね……」

机に一枚の写真が残っていた。ピンボケした写真だがはつきりと

黒い闇色のドレスをきた獣耳を生やした女性の姿が……

その日の夕方

「……で、その調査するから夜間外出するど？」

「うん……出撃かかったらそっち優先するし浅草近辺なら問題ないでしょ？」

「問題ない？ だあ？ ……バカ野郎、そんな訳ねーだろ！ 第一あんな場所、夜に一人で調査だあ？」

危険すぎるにきまってんだろう」

うつわ……久々にガンキレした、米田のオヤジさん見たな……まあでも今回、引けないしな

「それでもウチの身内が既に10人殺られてる……見過ごせない」

「なら、うちの月組が調査にあたる！ だから……おめえがやる必要は！」

「必要は、あるし……部外の間人は使う気ないみたいだよ【彼女】は」

「……あの小娘が……悪いこと言わねえ……今からでも遅くね。こつち（花組）に来い」

このままだと、おめえ……死ぬぜ？」

米田のオヤジさんは子を心配する父親の様な顔をしながら言う……しかし俺は、  
「無理だね……米田のオヤジさん……おれの目的の為にもこつち（花組）来れないよ」

「……復讐か？」

「うん……俺には、それしか出来ないから」

「だが……紫さんは、おめえが……そんなことする事を」

米田のオヤジさんは、俺を説得するように言うが……ダメだよ米田のオヤジさん  
「……母上がどう思ってたなんか解らないよ……それにこれは、ケジメの問題  
きつと親父もそうするよ……罪には罰を……  
やったことのおトシマエはきつちり付けるってね」

「それまで止まるつもりはないから」

暁は、そういい、そのまま支配人室をでる。

「親子揃ってバカ野郎共が……」

米田は、そう呟き、徳利から酒をお猪口に注ぎ、黄昏時の外を見ながら酒を煽る

「…………準備しよ……オタコンに装備を準備してもらわないと…………ん？」

ふと廊下の先の曲がり角に誰かいた気がしたが、気のせいだったようだ。

「………………………」

少女は、一人自分の部屋を目指し走り去っていく

深夜22時、浅草十二階下



補足だが浅草十二階下は、表向きは銘酒家（めいしや）、新聞縦覧所など様々な店を名乗っているが

その実、娼家が十二階の裏手から千束町、最盛期には竜泉寺のあたりまで広がっており。

十二階下と呼ばれる私娼窟は、新道、横町というものが数限りなく存在し、まるで迷路の様な、

複雑な小路地を形成し、昼間でも流しのが出入りし、

あるいは夜、観音境内で売り物をしていた者達も流れ込んでいた。

浅草の近くには吉原もあったが、値段も安く50銭銀貨で事足りる、と言われ、手続きが簡単なこの私娼窟は大繁盛した要因である。

これらの娼婦は年齢も少女と呼べるものから大年増、職業にしている専門の者から、アルバイトのようなものでおり、

中には高等教育を受けたものや、詩や小説を読むものなども居て、インテリ層の客に受けたと言われていた。

中には素見（ぞめき）、ただ女を見て回る、話すだけに徹する客もあり、妙な文化圏を形成していたともいえる。

たまに当局の手が入ることも珍しくは無かったようで、

これらの場所では抜け穴や何かが用意されており、初見の客などには

「押入れに衣服をまとめて入れておいて、いざと言うときはそこから逃げられる」

と言った説明なども行われていたようだ。

また、この十二階下には今でも有名な文学者、画家等々が訪れており

様々な作品にその影響を与えていたとか。

そんな場所に、似つかわしくない子供が一人フラフラ歩いていると、きまって欲望丸出しのおっさんがよってくるのだが

プチん♪

「あ？なんかいったか？・・・ん？」

欲望丸出しで暁に近づいたおっさんの「ナッツ」を潰し見下ろす

そんなことしたら当然取り巻きが黙っていないのだが・・・

## 10分後

「で……銀髪の妖怪美女のことなんかしってる？……ん？」

五人ほどいた取り巻きの「ナッツ」を8つ程割つてのこり一人に質問する

「う……噂なら化け物横丁の奥に最近出来た、刻影楼っていう銘酒家の路地で見たってやつが……」

「そう……じゃあもういいや」

そういう男を開放し男に背を向けた瞬間、男がドスを抜こうとした瞬間、

パン……パン……パン

おとこの足元に、三発鉛玉を放ち、男に銃口を向ける

「抜いたら……わかつてるよね？」

「……」<sup>へ</sup>コクコク

暁は、銃を仕舞いその場を、去る、遠巻きにみていた野次馬の誰かが

「あの紋たしか……鉄華団とかいう質の悪い薔薇餓鬼集団の紋だ……」

「はあ．．．シノ達何やったんだ？」

変に鉄華団がここで有名になっていることのためにため息を突き路地から出ると

「イヤアアアア!! 離してえええ!!」

!!!!!!

聞き覚えのある少女の悲鳴とともに一つの銘酒家が爆散した．．．つて

「なんでこんなところに．．．．はあ~~~~! まったく!!!」

瓦礫と化した店の前にいた少女を素早く回収して人目のつかない路地につれこみ怒鳴る

「アイリス!!! こんなところでなにやってんだ!!!」

そう回収した少女は、アイリスだったのだ．．．

## 第15話 深淵から生まれた銀糸の姫②

「・・・・・・・・・・」

取り敢えず、爆心地から逃げ赤提灯の明かりのみの路地を二人は無言で歩く。無言の主の一人・・・・アイリスは、涙目になり下を向き、

同じく無言の暁の後ろをトボトボとついてきている。

当の暁は、今後のことを考えながら滲み出る怒りを抑えながら路地を歩く。

「まさか・・・・アイリスが付いてくるとか予想外なんだがさてどうするか・・・・彼女を連れて犯人探しは・・・・無理だとしてもここで切り上げたら翌朝には、さくらたちにココにいた事がバレるそうなたら調査どころではないし」

十中八九、今現在帝劇は大騒ぎになっているのは、想像に固くない。

アイリスがいなくなり更に更に俺がいなくなれば、あのポンコツ《さくら》が黙っては  
いまい、明日以降の調査に絶対付いてくる、

帝劇メンバー総出でそうなれば調査どころではなくなる・・・

マリア位なら全然問題ないが。ポンコツ《さくら》やこうゆう所に疎いすみれは、問  
題を起こすし大神は、ホイホイ誘惑されかねない、

紅蘭、カンナは微妙なラインだが・・・特にあやめ姉さんにバレたら・・・

殺される俺が・・・

なのでちゃんと調査ができるのは、今夜のみ・・・か

「ハア~~~~~~~~~~~~（ーアー）ー3~~~~」

「!!」へビク!!

「アイリス・・・色々言いたいけどそれは、後で言うとしてこれ着て」

俺、怒ってますといったふうに語気をすこし強め自分の着てるジャケットを渡す

「え．．．．と．．．．」

「これ着て鉄華団の団章が入っているからチンピラがよって来なくなるから」

「あ．．．あのあか」 「今回のことは帰ったらきつちりお話するからさあ．．．．いくよ」

アイリスの言葉を遮り赤提灯の明かりのみの路地を進む。

「．．．．．」

終始無言の二人、その距離は付かず離れずな微妙な距離を保つ、何処かからか響く嬌声、

怒号、奇声が響く夜の路地暁は、特に気にせず歩くもアイリスは、

その一つ一つに恐怖の色を浮かべるも暁について行く。

大体五分程そんな感じで歩いてみると微かに甘い匂いがしてくるその香りは徐々に強くなっていく、

その甘い匂いは、丸で脳を蕩けさせる感覚に陥るほどの甘い蜜の匂いしかしその中に

妖力独特の臭も混じっている、

暁は、その匂いに訝しむがアイリスは少しトロンとした表情をしていた。

これ以上は、アイリスと一緒に危険だと思い仕方なく引き返そうと思ったとき一軒の大きな銘酒家が目につく、普通の銘酒家と違い外観は洋装で

木製の扉、窓から紅とも紫とも捉えられる光そして店名が『刻影楼』先ほど『ナッツ』を割ってやったおっさんが言っていた店だ。

「さて・・・と」

暁は、どうするか考える、今日はこの店を発見できたとして切り上げるかとしかしその時ギョウツという音とともに一人の女性がでてきた。

外見から見ると17〜19歳位で闇色のナイトドレスを着飾り頭には、何故かキツネ耳そして白銀の長い髪、スタイルも顔付きもこの化物横丁にいるようなモノではないそんな女性がこちらにこえをかけてくる。

「あら？こんな時間にかんな可愛らしい子達が一体どうしたの？」

「っ・・・っ」



「あ……え……つと」

戸惑うアイリスを他所に眺め、驚きの声を上げかける、それも無理はないなぜなら、今は亡き母『八神紫』の声とそっくりだったのだから、

とまどっている二人をみていた女性は、花が咲いたよな笑顔で優しく、

「何か訳ありのようね……外は寒いわなかにいらつしやい」

女性の優しい言葉に促せられ、二人は店の中に入る、店内は、外観と同じく洋装で二階建ての吹き抜け作りで一階は高級感のあるソファーと机が何組か備えられ

少し小さいがバーカウンターもある、二階部分は何室か扉がみえることからあれが部屋なのだと解る。

「さあ……こつちにどうぞ外、寒かったでしょ？ホットミルクとクッキーはいかが？」  
突っ立てるわけにもいかず女性が薦めた、ソファーに座るその時もアイリスとは一定の距離を離す、

三人掛けのソファアの両端に座り真ん中が異様に空いている、そんな態度を見てか女性……

「何？喧嘩でもしちやったの？大方彼女が勝手に付いてきちやっただんではないよ？まあ……怒る気持ちもわかるわよ、」

こんな綺麗な子がこんなところにいたら襲ってくださいいっているようなものでもね」

「……………」

「(・ω・)」

「デ〜モ君だつて悪いんだよ？こんなところに一人で来て彼女とても心配したんでしょに……………」

「二人共可愛んだから笑顔じゃなきゃもつたないわよ？フフフフ」

そんな女性の優しい言葉に毒されたのか少々罪悪感がでてくるたしかにアイリスに對して強く当たりすぎたかもしれない

まったく大人げない俺も…………

「アイリス…………ごめん」

「暁…………うんアイリスも御免なさい」

「ウフフフ」

そんなやり取りを微笑ましいとばかりにニコニコしながら見ている女性しかし……この女性の言葉の端々から感じる雰囲気

母にどうしよもなく似ている、そればかりが頭から離れない今の子を諫める懐かしい母のように感じる。

「さあ……冷めないうちにどうぞ……」

「あ……いただきます」

女性の言葉にアイリスは、暖かいミルクの口にした。

「っ……しまっ！」

惚けていて一瞬判断が遅れる、アイリスはそのミルク特有の甘みと隠し味のキャラメル苦味が心地よく表情がトロンとしているそしてアイリスは、心ここにあらずといった表情で

一枚の紅いクッキーをその小さい口で齧る、

クッキーの甘さ、ベリー系の甘酸っぱさ、仄かに香るバターの匂い、

どれも今まで食べてきたクッキーと違うところに幸福感で一杯になるそして

緊張の糸がほぐれ眠気が……

アイリスはそこで眠りに堕ちる。

ソファアーに体を預け深く眠るアイリスを他所に暁は彼女を抱え銃を彼女に向ける。

「やっぱり何かもってやがったか……アイリスおい!!起きろ!!おい!!」

「心配いらないわあくただ深くねむってもらっているだけあけえ」

女性の雰囲気が変わる、先程までの優しい雰囲気からどこか男を駄目にするような猫撫声と蠱惑雰囲気

先ほど感じていた蜜のように甘い匂いと妖力の臭いが強くなる、それに連れて暁の手に汗が滲む、

普段敵に銃口をむけても何も感じない彼は、どうしても『彼女』に銃を向けるのが躊躇われる、

彼女は、明らかに母とは別人なのにだ……。

「あら？震えてるの？可愛い……」

「っ……」

恐怖とは別のナニカのせいで体が震える、その時細い一筋の銀色の光が拳銃みけて迫っていることに気がつき、じゆうを手放す

その瞬間、金属でできているはずの銃がまるで豆腐か、バターのように細切れになる。

「そんな物騒なモノ必要ないわ・・・ねえ暁・オーガスちゃん？」

「ちゃん付けはやめろ・・・あんた何者？」

「おっと・・・ごめんなさいいい私は、白愛・・・白の白愛っていうのヨロシクネワタシ  
ノノミーシャ（子熊）」

暁、  
悪寒が走る、この白愛という女性は、目を紅く爛々と光らせ口は歪に歪み言葉が乱れる、

彼女の周りには幾重の光の筋が舞っているそれが糸・・・金属のように硬い糸だと暁は確信する。

「そのお嬢さんは特に必要ないの・・・殺しちやってもいいけど私は、優しいからあなたがワタシノにナツテクレルナラ

カノジヨハ無事に帰シテアゲル」

彼女は一步、また一步と近づいてくるその時

「フハハハハハハハハハハハ」

「は？」

ドゴオオオオオオオオン

笑い声を上げながらモヒカン大男が天井ぶち抜いて降ってきた、

これには、暁も白愛も目が点である。

「我は！黒之巢会死天王『白銀の羅刹』!!憎き帝国華撃団の小童めかくごするg!!!」

メキヤ!!

空から降って着たヒヤッハーこと、羅刹は、口上を言い終わる前に白愛の渾身の右ス

トレートを拭けホール置くへとぶっ飛ぶ

しかし体格が二倍近い相手をぶん殴るって……この女のどこにそんな力が……

「貴様……なぜここにいる？ 又丹の差し金か？ いいところを邪魔しておって……」

「ま……前がみえねえ……」

これは……

「チャッソンス!!」ヘスモークグレネードのピン抜き

「あーちよ!!!しまった!」

白愛が羅刹にきを取られている好きにスモークグレネードを起爆、煙幕に乗じて撤退

!!

アイリスを背負い猛ダッシュで駆け出し扉を蹴破り夜の浅草十二階下を掛ける、

その場には、パクパクの口をあけ呆然としている白愛と撤退した俺を見た羅刹は、

「我を見て恐れをなして逃げたと」高笑いするも、ドス黒い怨念を撒き散らす白愛に気が

つくも一步遅く

彼女の銀糸が羅刹の首筋……脊髄と頸椎に刺さり体内に多量の妖力を流し筆舌す

るほどの、激痛が羅刹を襲う

そればかりか体のコントローラを奪い、刻影楼をむちやくちやにしたこの戯け者に修繕させる。

その都度、強烈な激痛が走り、この日の浅草十二階下には野太い奇声が響くのだった。

〜早朝六時過ぎ帝劇近辺〜

スウスウと可愛い寝息をたてているアイリスを背負いゆつくりと帝劇に向かいながら歩く暁は、

昨夜起こったコトを思い返す、母と似た雰囲気と同じ声の女怪『白の白愛』

黒之巢会との繋がりと・・・しかし暁が一番問題視しているのは、引き金を引けなかったこと

母とは別人なのに母と錯覚しあの女を撃てなかった・・・

いままで何回も引いてきた軽い引き金が、あの時はとつともなく重かった・・・

そこでフト・・・昔のことを思い出す父がいて母がいてそして愛しの妹がいるとても幸せな日々を

今ある、仲間たちとの騒がしく馬鹿馬鹿しい毎日も嫌いじゃないが・・・やはり肉親



が恋しくなる

誰ひとり居ない肉親・・・すでに踏ん切りをつけていたと思ったが  
やはり心のどこかにこびりついている思い、

「(、—ム—) —3」

よそう・・・今考えても仕方がない・・・今考えるべきは

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

俺らを心配して鬼と化している帝劇メンバーへの言い訳を考える事なのだから・・・

## 第16話 深淵から生まれた銀糸の姫③

浅草十二階下から無事？ 帰還しそのまま花組メンバー+αに連行

医務室で身体検査、それが終わると、支配人室に連行され、大神、マリア、米田、

あやめ姉さんから特大の大目玉を喰らい今日一日支配人室近くの廊下で正座の刑になる

しかし……なぜ頭に水入りバケツしかも、首から

『私は、深夜危ない地域に一人で出かける悪い子です』

と達筆な文字でかかれた、プラカードが下げられている、微妙に子供扱いされていてムカツクが

今回は、我慢……

と  
因みにアイリスは、すみれ、カンナ、紅蘭、サクラからお叱りをうけ自室謹慎とのこ

「あくくくくくだる……」へ大あくび

「やあ眠そうだね暁」

「ん？オタコンかどうしたの？」

「いやね……昨日の報告が聞きたくてね、リリイにはコツチから報告しておくよ」

「あーありがと……そっちは何か言われた？」

恐らく、今回の事を米田のおっさんかあやめ姉さんになにか言われたり聴かれたりしているだろうと思いい問いかけるしかしオタコンは苦笑しながら答える。

「あーうん聞かれたけど、こちらの部隊の機密事項にあたるから教えられないって、詳しい内容は、部隊長に問い合わせをって」

あーつまりリリイにブン投げしたんだね、今頃米田のおっさんとリリイは大喧嘩か……

『帝国華撃団司令室』

「一体なにを考えてやがんだおめええええ!!」

「通信を繋げてきての第一声がそれですか?おじ様・・・」

通信画面には、珍しく陸軍軍服に身にまとったリリイが写っていた。

「事のあらましは、彼から報告してあるはずですが?なにか問題でも?」

「問題でも?だあテーマ本気で言ってるのかアイツはまだ子供だ!そんな奴に・・・」  
そこで、リリイはふいふため息を就きこう答える。

「貴方がたは、彼を子供と言いますが彼を子供と言うのは、止めていただけにかしら?」  
彼は、自分の意思で私達と行動を共にしています、彼の目的のために、  
私は彼に力を与え手段を与えた、望めば、平穏な暮らしも出来るのに・・・  
奪われた物取り返す、奪ったものへの報復を諦めないなら私が・・・

「私たちが彼を支えようとね……」

「だからこの組織（大日本帝国情報統制機甲隊）を作った」

「な……なんだと！」

彼女のその言葉にはおかしい点があつた、彼が襲撃される前んいはすでに大日本帝国情報統制機甲隊は、小さいながらすでに稼働していた時系列が合わないと

「私には、ある特殊な力がありますそのことを知っているのは、うちでも団長クラスの人と彼だけ……特別に教えてあげます」

「特殊な……力？」

「ええ……私は、時折予知夢を見ますそれも確定された未来がみえるほどの精度で……」

「最近は、見なくなりましたがたまにみるんですよ」

「ならあの惨劇を予知していたらなぜ!!」

「何故その前に助けなかつたと？勿論助けようとはしました……部隊も動ける者を総出にでしがやはり確定された事柄は覆らなかつた」

「私たちにできるのは、消えそうになっている小さな火を消さない事だけ」

「俺は、あの襲撃に関して詳しい状況を賢人機関に問合させただが返答は、」

「一切不明としかこなかつた!花小路伯爵にもきいたが彼も同じような説明しかつた」

れなかったと」

「それについては、私は何も・・・コチラが作成した報告書は恙無く提出しましたが当時の議長は「国家機密として廃棄抹消せよ」としか必要な資料はおおくりしますよ？」

「・・・頼む」

「話を戻しますが今回の事に関しては、元々こちらの不手際が要因なのは認めますが・・・調査に関しては彼の意味です、今後同じような事があれば彼には必ず報告させます」

「やらせないって事は・・・」

「コチラからは何も・・・全て彼の意味に委ねます」

ウーウーウー

『浅草浅草寺に妖力反応!!黒之巢会と考えられます帝国華撃団出撃準備!!』

「どうやらお仕事の様ですねおじ様・・・それではまた」

「待て!・・・最後に・・・お前さん暁の事このままじゃ」

「死にませんよ・・・私たちが殺させませんよ」

素晴らしいリリイは通信を切る

警報がなる10分前 暁side

「白の白愛と白銀の羅刹ねー」

「ああ、でもあの白愛ってやつなんか黒之巢会とは、敵対というより眼中にないみたいだった」

「眼中に？話からすると彼女は、黒之巢会のコトをしっていたんだよね？」

「うんでも仲間って感じじゃないかな？」

「(・・ε・・)ムムム仲違いしているのかな・・・」

「もしくは、第三勢力かね」

「どうだろ？君と会話していた時は普通だったんだよね・・・」

「普通っていうかアイリスの前では、かな・・・アイリスが眠らされた後はもう・・・」

目がやばいあれは、リリイが色々突破している時の眼付同じだった」

それを聞いたオタクンは（ーロ）ー3ー呆れている。

「君はあれかい？ 敵味方全対応メスホイホイかなにかかい？」

「失敬な!!」

「しかも大体が地雷」

「ひつでい言い様だなおい……」

「まあまあ……で重要なのが君のお母さんと同じ声と雰囲気……ね」

「……気持ち悪いほどにね」

「……撃てそう？」

「正直……自身がない……かな、雷電と繋がっていけば行けるかもだけど生身だと」

「そっか……確かご遺体つて頭部が発見されてないんだよね……まさか……」

「母さんの頭部をつかつと？」

「解らないけど可能性としてわね……」

ミシ

廊下の床が軋む



誰かが踏んだわけじゃない

彼の体から溢れる魔力が床を

空間を軋ます

「暁……落ち着いて漏れてる漏れてる」

「あ……ごめん」

「あくまで可能性だよ」

「解ってるでも……もし可能性が本当なら母さんを辱めた奴らは絶対に皆殺しだ」  
暁の瞳から光が消えまだ見ぬ目標を射殺す眼光を指す、その時帝劇内にけたたましい

サイレンが鳴り響く

「出撃みたいだけどうするの？」

「謹慎処分中だし今回は待機じゃね？」

「一樣期待だけは、準備しておくね……なにがあるかわからないし」

「了解」

## 浅草雷門

「はっはっはっ燃えろ燃えろ!!・・・オンキリキリバッ サラウンバツタ! オンキリキリバッ サラウンバツタ! オンキリキリバッ サラウンバツタ! オンキリキリバッ サラウンバツタ!!」

昨夜、暁たちの前に現れた、羅刹が怪しげな呪文を唱えると、地面に空間の穴があき、ソコに楔のような蒸気機械が沈む。

蒸気機械が空間の穴に消えたところで、白愛が空間の裂け目から現れる、黒いレースの日傘をさし昨夜と同じ闇色のナイトドレスに身を包み。

「・・・・ここに居れば彼が来てくれるというのは本当かしらあ?」

「ああ! 間違いない、奴らは我らの邪魔をするのが好きと見える!!」

「・・・・嘘だったらその無駄な筋肉ごと細切れにしてワタシのペットのえさにしてあげるわあ」

白愛から黒い殺気が流れ出る、その時、声が響き渡る。

『帝国華撃団参上!!!』

「ぬ！来たか集まらなければ、何も出来ぬ虫ケラめ」

大神たちが現れたことに気がつき不敵な笑みを浮かべながら羅刹は、侮蔑の視線をむける、だが白愛は、彼がいない事にため息を付いている。

「貴様らに倒された兄者の無念……この羅刹が晴らしてくれるわ!!」

黒之巢会の恐怖とくと味わうがよい!!」

この時羅刹は、気が付いていなかった、自分の後で汚物を見るかのような視線、ユラユラ空間に漂う銀系の糸に、

「……ところで大神よ……冥土に送る前に一つ聞きたいことがある……」

今貴様にとって大事な隊員は誰だ？」

『は……?』

今この場にいる者、居ないものも多分は?であろう……こいつこんな時に何いんだと……つうか誰も答えんだろうって

毘丸出しであることなんて火を見るよりも明らかである。

その時ビチャっという何かの音が響くそれ以降羅刹から何も返信がない……大神たちは、不審に思うも

浅草寺に向かうため敵が閉ざした雷門の開錠をするため行動を開始、制御装置を守る  
脇侍を撃破する、

しかし何かおかしい……脇侍たちの動きが反撃すらせずただ棒立ちなのだ。

一切の抵抗がない……言いようのない気持ち悪さが花組たちを包むも順調に撃破し  
雷門を開ける

だが

彼らが開けたの

浅草寺の門ではなかった。

地獄の門であった。

羅刹と名乗った巨躯の男が無残にも散乱し、得体の知れない闇の塊が  
その散乱したモノを喰らう光景だった。

そしてその光景に似つかわしくない、白銀の長髪を靡かせその頭にはキツネ耳、頬に付いた返り血が何処か頬紅のようで、蠱惑的な美女が立っていた。

大神たちはこの凄惨な惨状に吐き気を催す、その時女性のかたわらから

一体の黒の人型蒸気が現れる。

それは帝劇の光武とも、黒之巢会の魔装機兵とも似つかわしくなく近いといえ、暁の雷電のような、シルエットであった。

「無駄足だったわね……でも彼らと遊んでたら来てくれるかしら……ねえ暁い」

女性はニヤアと口を歪める

## 第17話 深淵から生まれた銀糸の姫④

「はあ．．．はあ．．．はあ」

右腕．．．かろうじて動く。

左腕．．．さっきの攻撃で千切れとんだ．．．

右脚部．．．かろうじて繋がってるけど動かない。

左脚部．．．足首から先、持ってかれてる

武器．．．鉄火無名二式．．．未だ健在

でも

「あ．．．」

血の流し過ぎで金色の幻覚・・・あれは天使？

時間を遡り

大神達、帝国華撃団全員が動く事ができなくなっていた。

今もなお、肉を飲み込む黒い闇と表現でいる、不定形なモノ。

クスクスと嗤いながらこちらをみている十二カ・・・

そしてその十二カの背後に鎮座するソレ・・・

どれをとつても理解が出来なかった。

でもただ一つ解るのは、アレ等を野放しにしてはいけないという事だった。

「貴様……一体？」

ここで、辛うじて大神が言葉を発した瞬間、キラつとなにかが光る、その瞬間大神の横に転がっていた

脇侍の残骸が両断される。

「……………まず人に名を尋ねるのなら自分からなのりなさいなあ……」

「っ……………!!」

「なあに? ……聞いておいて黙り? まあ貴方達に興味はないからいいけど、

そうね一つわたしの質問に答えたら名前教えてあげるわあ」

「し……………質問ですって?」

ここでマリアも言葉を出すことができ、それを皮切りに他のメンバーも場に慣れ始めた。



「そうなの・・・ねえ・・・貴方たちアカツキツテコシラナイカシラア？」

女は口を歪ませ嗤う、その表情にサクラ以外の全員が恐怖する

そう・・・サクラ以外

「何故貴方がサトシ君を知っているの!!こたえなs」

グシヤ!!

サクラが喋っている途中で、サクラの機体が吹き飛ばされ壁に激突し装甲が拉げると響く。

「「「サクラ（さん）（君）!!!」」」

「貴方如きが・・・彼の名前をくちにするな!!!貴様が!!」

「無事かサクラ君!!サクラ君!!」

大神が必死にサクラに通信を繋げるが反応が無い、そこで帝劇から通信が入る。

「大神君!聴こえる?」

「あやめさん?!」

「どうやらサクラは気を失っているだけのようね・・・バイタルに異常をないわ

・・・それより」

アヤメがサクラの状態を大神に伝え其のあとに・・・

「アヤメさん?」

「・・・サクラがやられた所をみた暁が其方に向かったわ」

「な・・・なんですすつて!!」

暁が飛び出したと聞いた大神が驚くしかしその時、

「アアアアアアアアアアアアアアア!!貴様が!キサマガノウノウト



マリアの銃弾を

紅蘭の砲撃を

まるで踊るかの様に受け流し、流れるように攻撃に転じる。

彼女は、狂ったように啞う、ひと思いの壊（殺）さないように翔る。

その猛攻に一人、また一人と傷つくそしてサクラを守りつつ

猛攻を凌いでいた大神が吹き飛ばされる。

「つくー！…しまった!!サクラ君!!」

刃物の様な斬れ味の糸が幾重にも迫る光武ゴトサクラを細切れにしようと迫る。

この場でサクラを守る人間はいない

そう…この場では

「やらせない!!」

黒い一閃が銀の糸を切り払う

鏢の無い無骨な斬馬刀を構えた人型蒸気、各関節部から覗く人工筋肉が軋む。

「暁……!!」

「皆大丈夫……じゃないよねみんなボロボロだ」

大神達の光武は、ボロボロで辛うじて動けるようだった。

「さて……落とし前付けさせてもらおうよ……アンタ」

暁が白愛に視線をみけるそこには、フルフルとふるえながらブツブツなにかを呟いているその音量は徐々に大きくなる。



奔る剣戟、舞う銀糸・・・攻守の逆転が何度も行われる。

暁の八神流の剣戟と体術、銃器による攻撃

白愛の舞の様な糸の猛攻、糸で匠に操る二振の細身の水晶刀の斬撃。

互の攻撃が均衡していたが徐々に暁が押され始める。

「はあ・・・はあ・・・つくはあ!!」

機関砲は糸の攻撃で左腕ごと切断され、右足の膝部分に深々と水晶刀が突き刺さる。地を這う様に迫る糸の斬撃を交わしきれず左足首部分を切断。

鉄火無名二式を右手のみでふるった代償で右腕の挙動が安定しなくなってきた、本体部分にも大小様々な斬撃痕が目立つ・・・

大神たちは援護に動きたいが、いまの機体の状況ではそれも叶わずにいる。

「アアアアアアイイ・・・スゴクイイワア・・・ネエアカツキ・・・アナタノマツカナ

オハナサカセテネ……

ソシテいつシよニ……カエリましょ？」

糸が幾重にも折り重なり編みこまれて一本の白銀の槍を形成する。

「逃げろ！ 暁!!!」

「サトシくん!!!」

大神とサクラの声が響く

でも

「やば……動けねえ……」

目が霞む……相手は投擲体勢をすでにとっている。



ああ……何も成し遂げずに……また死ぬのか……

リリイ、マキ、母さん……アイリス……

「ゴメン……」

暁に向けられた白銀の槍は、猛スピードで向かう誰もが暁の機体に深々と貫くとおもった。

しかし一つの黄金色の光が暁の目の前に現れる。

金色に近い黄色の光武が現れた。

「アカツキ!!!!!!」

少女の声が浅草寺に響く。

ドゴン!!!

槍は目標に着弾する・・・暁の機体、雷電のさつきまでいた場所に

「?」

白愛は混乱し回り見渡した瞬間

グサリ・・・

「あ・・・」

白愛が後ろを見ると、黄色の光武に支えながら辛うじて体勢を保つ雷電  
そして自分を後ろから貫く斬馬刀・・・

「いい・・・わぁ」

白愛の狂気地味た甘い声を発した瞬間、白愛の機体からドス黒い液体が漏れ出す  
腐臭と血生臭い臭いが辺りに充満する。

「アイ・・・リス助かったよでも・・・その機体」

「アカツキの身に良くないことが起きる気がしていてもたってもいられなくて」

「その機体、今日花やしき支部から届いたもんやないか!？」

調整もまだやのに・・・無茶するわ」

「でもアイリスがいなかったら・・・暁は」

呆れるも何処かホツとした表情の紅蘭にマリアも表情を緩める。

「アカツキじつとしてて!!」

「アイリス俺は平気だつて」

「ダアアアアアアアアアア!!!」

どこで覚えたのかアイリスは、意外にもテキパキと暁の怪我の治療をしている。

花組のメンバーもそんなやりとりを見て今まで張り詰めていた気を緩める。

それはけして悪いことではない・・・さつきまで得体の知れないモノと戦ったのだから

黒之巢会とは別のナニカ・・・女怪『白の白愛』と

しかし戦闘のあつた場所、白愛の機体があつた場所には、彼女の人型蒸気の『残骸』しか残っていないかつた。

機体から溢れ出た悍ましい液体が綺麗さっぱり消えていたのだった。

浅草十二階下には、それはそれは美しい女いるという

闇色のナイトドレス、銀系の長い髪、狐のような耳をした女が

彼女と出会った欲塗れの男に

いつもこう尋ねるのだという

「ねえ？アカツキってシラナイ？」

今宵もまた欲に塗れた男が姿を消した。

「暁……今度はニガサナイカラ……クスクス」

## 第18話 似た者同士の深川探索①

都内某所

「刹那に続いて……羅刹までも……敗れおった……」

黒之巢会首魁、魔人『天海』がワナワナと体を怒りに震えさせながら言葉を絞り出す。  
「死天王も……残り2人……不甲斐なきことよ……それにあのヒトガタめ」

天海は、ヒトガタ……白愛への怒りが滲み出ていた。

「も、申し訳ございません……まさかあのヒトガタが暴走するとわ」

「言い訳はよい!!」

「……………」

ミロクと天海のやり取りを無言できいている叉丹は何処となく不敵な笑みをこぼしている。

「だが、我、目的は、ただ一つ! 『六破星降魔陣』の成就!!」

犠牲など恐れてはならぬ!!」

「はい……」

「天よ裂けよ!、地よ砕けよ!幾万の涙の大河、幾億の血の海が我が

力となるであろう!!……行けミロク、叉丹」

「は!!」

「……………」

二十四時間後 帝都某所

そこには数多くの脇侍、不可解な蒸気機械が一機鎮座している、その傍らにミロクの姿もある。

ガキン

その異様な空間に何かに弾かれる音が響く

「くう……やはり打ち込むことができぬか……たかが廃屋と思うたが



この霊力・・・あなどれぬやむおえぬな・・・まずはこの地を、あの廃屋を封じることが先決じゃ・・・」

三十六時間後 帝国劇場

五月某日の白の白愛との戦闘からはや3ヶ月・・・  
大破した雷電・光武の修理・改修が終わり紅蘭とオタクン達が調整作業をしている。

あれ以降、黒之巢会は、目立った活動も見られず、花組メンバーは、芝居に力を入れ、  
 暁もやっと癒えた体をフルに動かし、大道具として舞台設営に駆り出されている。

最近、変な視線が増えた気もするがきつと気のせいである・・・。

(街をウロウロしていると、白銀の髪がチラチラと視界に入るのももきつと気のせいである。)

「・・・暑・・・」

暁は、現在大道具部屋で今現在公演している『西遊記』のセットの予備を修理していた。

この帝劇では、セットが壊れることは結構あるため予備を数セットようしてある。

夏の暑さと、あまり風通しのよくない作業部屋なので更に蒸し暑く、現在の格好は、タ  
 ンクトップに

ツナギといった格好をしている。

「おーいボウズ!ここはもういいから休憩行ってこい!」

「うーす・・・」

大道具の親方が休憩に行けと言われ、暁は手ぬぐいを持って作業場を後にする。

作業場は舞台の地下に位置しており時折舞台のセリフが聞こえてくるので

ある意味役得といった感じである。

「~~~~~」

「~~~~~!!!」

「?すみれ、カンナ?」

薄暗い従業員通路をとおり舞台袖に移動していると二人の声が聴こえる。

「はあ・・・またやってるのか」

上着を羽織り阿頼耶識が見えないようにしつつ移動してくるとあからさまにセリフとは違う口喧嘩が

「あーうんまたか・・・」

あのふたりはとにかく仲が悪い、はたからみたらお互い似た者同士だと思うのだがとにかく悪いか

犬猿の仲とは、まさにこのふたりにあるんじゃないかと思うほどだった。

しかし二人の喧嘩はなんだかんだ言っつてすぐ熱くなりすぐ冷めるのだが

今日は、どうやら違うようだった。

「やっつてもうた!」

「ヤバ・・・」

「みんな．．．どうしたの？．．．あ．．．」

舞台袖にいた紅蘭とアイリスが青い顔をしていたので声を掛けつつ舞台を見ると

カンナすみれの衣装踏む⇒すみれつんのめる⇒すみれ顔面着地↑いまここ

「うわ．．．」

この光景をみて、これから起きるであろうことも予測出来る。

それからは、舞台上で大喧嘩、唯一救いなのがこのすみれとカンナの大喧嘩は、帝劇名物といったようで、

常連のお客さんは、これを見るために来ている人すらいる歌劇団としてそれはまずい気もするが

結局舞台はめちやくちやのまま終了してしまった。

楽屋

「……やれやれ舞台はめちやくちやになってしまったね」

「……」

「あ、あのー大神さん、あの二人……ステージが終わってからずっとあの調子なんです  
が……」

大神さんなんとかしてください……」

カンナとすみれはまさに一触即発状態でサクラはオロオロと大神に助けを求める。

因みに暁は、いい加減汗を流したいのでこの場にはいない、暁的には、あまり汗くらは  
いは気にしないのだが

アイリスの目が色々やばいのでマリアに流してくるように言われいたりする。

暁のことはさておき、大神が色々と落ち着かせようとすることも二人は、聞く耳持たぬ状  
況で

ヤレ筋肉女とスマレが罵り、イヤミ女とカンナが返しいつしか、また喧嘩に発展しそ  
うになり

これを見ていた大神はため息一つつきこう切り出す。

「よおし……二人共！この際、思いつきりやれ!!」

大神匙をぶん投げる。

「ちよ！大神さんなに言い出すんですか!!」

サクラは大神の思いもよらぬ発言に反論するが大神は、

「いや・・・この機会にお互い、言いたい事を言わせたほうがいいだろう」

大神は二人の貯めているものをすべて出し切っておさめようとしての発言だったようだ。

「ウチも大神はんの意見に賛成や、機械かて時にはガス抜きが必要やろ」

紅蘭は大神の意図に反論は内容で見守るほうを選択したようだった。それでもやはり

サクラは、オロオロとカンナとすみれを見ている。

「すみれはんもカンナはんもたまにはガンガンやったらええねん」

「アイリスもこの前、街でガス抜きしてきたよ・・・あいた!」

「あれはガス抜きじゃない破壊工作だ・・・たのむからもうするなよ」ハリセン持ち

このタイミングで暁は楽屋に戻りなかの惨状にため息がでるその時、暁と一緒に戻ってきたマリアが一喝する。

「みんな、やめなさい!!こんなところで大騒ぎしてどうするつもり!?!」

「あ……マリアさん」

「すみれもカンナもいい加減にしなさい!!いつまで喧嘩している気?!

……隊長もなにか行ってやってください」

「え……とみんな。けんかはやめよ・スッパーーーン!!「もつとまともな事いえよ」  
いってえ!!」

大神があたりすでも言えそうなことをいいかけたので透かさずハリセンを一閃

「アイリス……喧嘩きらいだよ!」

「大神……頑張れよ……まじで」

「みんなも、何度言わせるの……もうやめさい」

（なんか最近マリアが……帝劇でのオカンポジションになりつつあるのは俺だけだろう  
か……）

「マリア……」

「そう言えばマリアさん、私たちに何か用事があったんじゃないんですか?」

「ああそうそう……みんな、米田指令が呼びよ」

「米田指令が?」

「なんやろ?突然」

「俺も詳しくはきいてないけど・・・大事な話っぽい」

「舞台が終わった後だから皆色々やることがあるでしょうから・・・すこしたら作戦司令室に

来て頂戴・・・いいわね？」

「はい！」

「・・・あたいは、部屋で着替えてからいくよ」

「私もですわ・・・ですが貴方には、そのポロ服がお似合いなんじゃなくって？」

「なんだとおくくく？」

「・・・お前らしい加減にしたら？・・・じゃないと物理的に黙らすぞ？」

「つつ」

スマイレの煽りでまた喧嘩になりそうだったので少し殺気をまげて黙らせる、

その時小さくマリアがサムズアップしているのは見逃さない。

それから各々解散し、暁は格納庫にやってくる。

格納庫には、装甲板を幾つか外された状態の雷電が鎮座されており

その横で端末をそうさしているオタコンを見つける。



「オタコン……どう？機体の調子は」

「やあ暁……うん問題ないよ少しリミッターが外れかけたけど問題なし」

「そっか……」

「でも暁……よくあの時リミッター外さなかったね」

あの時……それは勿論、白愛との戦闘の事で……

確かに『リミッター』を外せば機体をボロボロにすることなく

勝てたかもだけど……それは……

「それやったらマジで米田のオツサン……キレてリリーのトコに殴り込みに行くよ」

「でもあの時はアイリスちゃんのおかげで助かったけど下手したら……」

「うん……まあ……こんどは躊躇わずに使うよ」

「本当は使つて欲しくないんだけどね？」

「了子……つてなにその格好？」

「だあ〜つてここ暑くて暑くて……それにオタコンは嫌がつてないし」

「オタコンえ〜〜」

今現在の了子の格好は黒ビキニで白衣を羽織っているスタイルで、一樣ここには他の作業員はいるのだが

そんなことはお構いなしといった様相だ・おいその作業員A鼻血出てんぞ!!

「阿頼耶識のリミッター外したらどうなるか解らないんだから緊急以外では解除しちゃダメよ」

「まあそれは僕も賛成だね・・蒸気機関エミュレーターモードを切り替えるのもオススメしないよ」

「あーうんそれは俺の体っていうより賢人機関がうるさいからね」

「うん・・あくまで霊子甲冑『雷電』は蒸気機関で動いてるっていう体にしてるからね」  
一部装甲のない雷電を見上げながらオタコンは言葉をこぼす。

「さておれはそろそろ行くよ・・オッサンに呼ばれてるし」

「わかったよ行ってらっしゃい暁」

「バイバイ〜アカツキ〜」

オタコンと了子と別れ、作戦司令室に向かった。

作戦司令室

すでに何人か来ており後は、大神だけといったようだ、しかし少し見ない間に

若干だがすみれとカンナの機嫌は良くなっているようだった。

さすが大神なにか上手くやったようだな・・・

そんなことをおもっている大神がやってくる。

「大神、ただいま参りました！」

「大神少尉・・・ご苦労様、米田中将からお話があります・・・しつかりね大神くん」

「深川に旧華族の屋敷があり現在は住民は居らず廃屋となっているが・・・

その廃屋にどうやら黒之巢会が関係しているらしい。」

「深川の廃屋、ですか？なぜそのようなところに黒之巢会がかんけいしているのでしょうか？」

「？」

「・・・わからん・・・ただ俺は黒之巢会の行動目的にある仮説を立てた。」

「・・・それは魔術だ。」

米田は大神達にそう話す、大神は魔術に対して訝しげにしている所にアヤマが補足をつける。

「大神くん、魔術は時代遅れの考え方ではないのよ？科学を超えた超自然理論・・・

それが魔術よ・・・歴史裏側に存在する太古の力」

そこで暁も大神に言う。

「霊力だっで見方によっては科学を超えた超自然理論だ・・・魔術があってもおかしくな

いよ

しかし・・・あいつらまさか帝都に大規模魔術を使う気じゃ?」

「大規模魔術?」

「うん・・・深川って今じや工業地帯だけど結構昔は神社仏閣が多く点在する霊地だったって  
リリイが言ってた気がする」

「帝都に・・・」

「この広い帝都に影響を及ぼすかもしれない魔術に一抹の不安が大神によぎり米田に  
質問する。」

「奴らの行動目的とはいったい?」

「それは俺にも真の目的は正直わからん・・・」

しかし奴らは幕藩体制を復活もくろみ帝都破壊を目論む組織だ・・・

こうして帝都の特定の地域に攻撃をするのにもなにか深い意味があるのかもしれない・・・

現状こちらには情報が不足している。これは敵の動きを探る絶好の機会なのだ。

「なるほど・・・」

「本来偵察は、花組の任務ではないのだが・・・」

「?なら俺が行こうか?」

「暁・お前を一人で出すことは絶対はない．．．アレのこともある」  
「．．．．．」

「私たちが攻勢に転じるためにもて敵の目的をつかんでおく必要がある。」

「なるほど、それで深川の廃屋を調査する必要があるんですね」

「光武は今回使用できない、紅蘭が暁機以外全て整備、調整を行なうためだ。」

「雷電もオタコンたちが調整してるから同じく出撃できないから」

「あくまで調査・偵察だけだ無茶はするなよ．．．特に暁！」

「ハーン」

そこで、マリアが誰が出勤するのか質問をする．．．それに米田は．．．

「うむ．．．今回の偵察メンバーは大神、すみれ、カンナ、

後．．．暁、以上4名だ」

ふあ？

おっさん．．．なに考えてやがる大神は、まあわかる．．．おれも本当は出したくない

みたいだけど色々調査向きなのは解るけど・・・なぜそのチョイス!!!

ほら!あの二人も驚いて声上げてんだろ!!!せめて調査慣れしてるマリアを!!!って  
コラおっさん目をそらすな!!

大神がテンパリすぎて変なこと言ってるがあえて無視じゃい!!

「・・・では4人は、明日の朝、廃屋の調査に出発してくれ・・・」

「ハッ!」

「・・・了解」

「気が乗りませんが承知いたしましたわ」

「・・・」

「カンナ!!」

「・・・わかったよ命令じゃしようがねえ・・・一緒にいつてやるよ」

「あら?イヤイヤ行くなら断つてもよろしいのよ?」

「うるせえ!お前は黙ってる!」

「・・・二人共もう・・・黙れ」

「(しかし・・・このメンバーで大丈夫なのか?)」

作戦司令室でのミーティングが終了し各々解散するなか暁は、明日の準備のため装備

を保管している

格納庫に行く途中アイリスが不安そうに声をかけてきた。

「アカツキ・・・あしたのお仕事・・・気をつけてね」

「・・・うん今回は大神もいるし大丈夫・・・」

「でもあの・・・またあの人がでたら・・・」

「心配しなくて大丈夫だよ・・・」なでなで

「／／／うん！」

アイリスの頭を撫でてあげると先までの不安そうな表情から幸せそうな表情になったのを

確認しアイリスと別れる。

まあ・・・うん・・・あいつ・・・くるよなー・・・

最近、あの出来事以来キャラ変わりすぎなかんじにストーキングしてくるし

傍から見たら、母親瓜二つのアヤメ二号である・・・

一回まじでびびったのは、早朝ランニングで市内走ってる時に後ろから追われた時

だった。

大神が泡吹いてたれてたつけ……(なおこの時の大神は何も覚えていないようだった)  
「とりあえず……」

麻酔弾を多めに持つていくことを心に決めて格納庫に向かうのだった。

一方すみれ自室にて

(~~~~~!!!!!!)

今日一日の、色々を後悔しているようだった。

いくら頭に血が上っているとわいえ、暁の前であんな醜態を……

しかも何回か彼に叱責されているというのに……

「はあ……明日なんてお詫びすればよいか……」

とりあえず今の段階ではカンナエの怒りより明日暁への謝罪で頭がいっぱいらしい

「新・刻影楼』支配人室

「~~~~~♪」

「\$&#\$\$& ( ) , &%\$.?。」



白愛が最近銀座で購入した白いサマードレスを出し姿鏡の前で上機嫌にしていると、黒い塊が人語とはまったく異なる悍ましい言語で彼女にかたりかける、それはどうにも疑問を投げかけているようだった。

「え？明日は彼と深川でデートなのしかも人気のない廃屋これはもうやるしかないわあ！」

”&,( ) , \* + L !! \$ . . . .”

「違うわよお〜これはデート・・・」

ストーキングなんてはしたくないことじゃないわあー」

”!! # \$ % % % \$ P、 ~ ~ ~”

「それは個人的見解の相違ってやつよ・・・スラちゃんお店の事お願いね」

「.....」

黒い塊・・・スラちゃんと呼ばれた物体はその体を震わせてから扉を器用に開けへやから出て行く。

「さーて！あしたを楽しみだわ〜」

## 第19話 似た者同士の深川探索②

午前10時帝劇玄関前

そこにはすでに、大神、カンナ、すみれが集合していた。

「おはよう皆……なに？ふたりともまだ機嫌悪いの？」

「い……いえ暁さんそのようなことはオホホホホ」

「はあ……」

大神のため息を察するに、おれが来る前にひと悶着あつたようだ……

「暁とところでそのリュックは？」

大神がおれの背負つてるリュックを指差しなが尋ねてくる、

現在、俺はいつもの鉄華団のジャケットに、インナーの代わりに

スニーカーングスーツを着、ミリタリズボンといった格好で、

夏場にしては少し目立つ格好となっている、上下長袖だし

「暁さん暑くありませんの？」

「平気……中のスーツが体温調節してるから」

「しっかしえらく重装備じゃねーか調査しに行くだけだぜ？」

カンナはそう尋ねるところこちらが言う前にすみれが口を出す。

「まったく・・・カンナさんは・・・遠足かなにかと勘違いしているのではわなくて？」

「なんだと!!お前はいつつも一言余計なんだよ」

「おいおい・・・二人共大概にしてくれよ・・・」

「あ・・・二人共・・・」

「なんでしょか曉さん？」

「どうした？」

「・・・・・・・・・・調査中に無駄な喧嘩したらコレ（麻醉弾）ぶち込んで放置するから」

「・・・・・・・・・・はい」

「やれやれ・・・・・・・・」

かくして俺たち4人は、深川の廃屋にむけて出発するのだった・・・・・・・・  
なんか後ろから黒い日傘さしてる白い服の女が歩いてきてるが無視だ・・・

深川 廃屋

調査地点に到着し周囲を警戒するも黒之巢会らしき影はなく、

木が伸び放題にあつていう廃屋が見える。

「……ここが深川廃屋か……すっかり荒れ果ててるな」

「確かに……怪しな大爆発ですわ」

「米田長官からの資料だとこの屋敷、文明開化の時にとある華族が建てたみたいなんだけど」

事故が続発して一家離散、以降住む者も居らず放つたらかしのまもらしい……」

「……」

「あー……うん」

「?どうしたんだい暁、それにすみれ君」

「このお屋敷から強い靈力を感じますわ」

「光武起動に必要なものとは少し感じはちがうけど靈力には、違わないねでもこれって……」

「暁?どうかしたか?」

「いや何でもないよカンナ」

(この感じ……人の思念に近い?純粋な人の思いが靈力化したものかな……)

暁は、今までに経験した中で似たような事例を思い出していると大神が声をかける。

「とにかく、眺めてるだけじゃ調査にならない中に入ろう」

「わかった・・・何が出るかわからないから十分に気をつけよう」

そういう懐からハンドガンとナイフを取り出し屋敷に入る。

### 廃屋内玄関ホール

「う・・・カビくさいですわ・・・」

すみれが顔をしかめるも仕方がない、なかは外からみた通り

荒れ果てており階段も崩れ落ちているほどだった。

「結構広い屋敷だったみたいだけど荒れ放題だ・・・」

「あ、ああなんか不気味だな・・・」

「なんだい？怖いのかい隊長？」

「あ・・・ああ実は、こういう雰囲気は苦手ですね」

「へえ、隊長にも苦手なものってあったのかい・・・意外だぜ」

「それは俺も初耳・・・」

「暁は、怖いものってあるのかい？」

「あ〜うんあるよ．．．最近増えたきもする」

「．．．．．そ．．．そう」

きっと三人がおもっているのであつてます．．．さつきかチラチラと

白銀の髪が見え隠れしてるし．．．まじでこいつどこにでも出るな!!

「と、ところでそちらのお嬢ちゃんは大丈夫かい?」

「失礼な事おつしやらないで!!この私が恐れるものなどこの世には、存在しませんわ!!!

アナタこそ、大丈夫ですか?逃げんなら今のうちですわよ?」

「バカヤロー、あたいだって怖いもんなんかねえ!余計な心配すんな。」

ジャコ!!

Σ ( . ω . ; ; < r b > | — Σ ( . ω . ; ; | —

< r p > 《 < / r p > < r t > / x b i g < / r t > < r p > 《 < / r p >

「．．．．．今のは見逃す．．．OK?」

「．．．．．コクンコクン」

「おいおい二人共大きな声を出すな、敵に見つかつてしまうぞ．．．」

「なーに幽霊がでてあたいの空手でぶつとばしてy 《 x b i g 》バキン!!

うわあああ!!」

「カンナさん!!」

「おい!カンナ大丈夫か!!?」

「カンナ!」

「当ててて・・・悪い床踏み抜いちまったぜ・・・」

「はあ・・・驚かせるなよ」

「まったく・・・しかしすみれ、流石に今は、カンナのこと心配だったんだね」

「ふえ?・・・あー・・・今は・・・オホホホホ嫌ですわ、暁さん誤解でしてよ!

わたくし、カンナさんが踏み抜きたい床が気の毒で・・・」

あーうんあからさまな照れ隠しありがとうがとうございましてかすみれ・・・煽るなよ

「なんだとお!つくそく頭にきたぞ!!もうおめえの顔も見たくねえ!!

おめえと一緒に居るくらいなら幽霊と一緒にいたほうがましだ!!」

「それはこちらのセリフですわ!!あなたのようなお騒がせ女

ここちらから願ひ下げですわ!!」

ゞ(・▽・;) オイオイ

「あたいはこの左の扉に行くぜ絶対ついてくんよ!!」

「まら……私は、右ですわ！これでせいせいしますわ!!」

「ちよ……二人共!!」

「まつ……たく!!大神はカンナの方に……俺はすみれを追いかけるから」

「わかった!」

「後これ……通信機と簡単な救急セット」

「助かる……じゃあまた後で!」

「ん……さて……行きますか……」

まったたく案の定面倒なことに……とにかく一刻も早くすみれと合流すべく  
移動開始する（一人でいると貞操の危機がががが）

「キイイイイ!!あのガサツ女!!今度こそ頭にきましたわ!!」

暁さんもそう思いま……すわよ……ね?」

「あん?なんだって?」

「そ……そのく起こってらっしやいます?」

「え?怒ってるよ?……いまは潜入調査中だっていうのに喧嘩してる二人に」

「(・ω・)」

「まあ……カンナの大雑把な部分もあつてあれだけど、すみれも少し言い方があつたん



じゃないの？

お互い頭に血が上りすぎて正常に判断できてないから」

「……………」

「……とりあえず探索開始しよう」

「そうですわね黒之巢会の連中が何を企んでいるか突き止めませんと」

「うん……とりあえず奥にいこう」

くく少年・女性探索中くく

「瓦礫ばかりで……何もありませんわね……こんな廃屋になにかあるのかしら？」

「強い霊力も感知できたし、黒之巢会の動きも気になる、無駄になるかもだけどしっかり調べないと」

「そうですわね……まあ私や暁さんに掛ければ黒之巢会なの恐るるに足りませんわ」

「そうだね……兎に角もうすこし奥にいこう」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

とりあえず後ろから邪悪な念をおくるなストーカー（白愛）

暁とすみれは部屋を探索しながら移動し、とある部屋に入るとそこは、子供部屋のような作りであった。

「子供部屋か……気が引けるけど」

「そうですね」

二人は部屋を隈なくさがすとひとつの写真立てを見つける。

「これは？……家族写真？この家の住人のかな……」

「見せてくださいまし」

すみれに写真をみせながら自分もまじまじと写真を見る

「この女の子……とても幸せそうですね……」

「そうだね……家族って……うん」

「暁さんのご家族は……」

「？桜から聞いてない？今は誰もいないよ肉親は……」

「ごめんあさい私……」

「気にしてないよ．．．すみれのご両親は？」

「わ、私のところは健在ですわ．．．お父様もお母様もそしてお祖父様も」

「お祖父さんいるんだ．．．俺．．．祖父にはあつたことないからちよつと懂れる」

「そうどうか．．．」

「．．．ごめん俺のほうこそ聞いたのまずかつた？」

「へ？．．．えつと大丈夫ですわ」

「ならいいけど．．．」

ゴウウ

その時微かに物音が聞こえてきた。

「今の物音！」

「リビングの方ですわ、行ってみましょう！」

「すみれ気をつけて！」

（移動中）

二人が移動した先には人間大の紅い脇侍が大量にいた。

「こいつら・・・やっぱり黒之巢会か」

「(曉さんどうします・・・多勢に無勢ですわ)」

「(ここは退くよ・・・こんな場所じゃ俺はともかくすみれの得物じゃ不利だ)」

「(了解ですわ・・・ここは一刻も少尉と合流w)」

その時、すみれが運悪くガラスをふんで音を立ててしまう

「しまった!」

「ギギギギ」

こちらに気がついた脇侍だもが押し寄せようとした瞬間

「これでも喰らえ!」

暁は、室内に対魔操機兵用のチャフグレネードを投げ込み、

その瞬間、室内に靈力を込めた金属片が空中にまい相手の動きを阻害する。

「今のは?」

「オタコンが作ったチャフだよ・・・急造だから効果はお察しただけでないよりまし

先行って殿は俺がする!」

「分かりましたわ!」

すみれを先に行かせ、暁は殿とし脇侍を一体づつ確実に処理していく、

別の方角からも戦闘音がするので恐らく、大神たちも接敵したようだ。

「数が・・・多い・・・でも!!」

ソードオフショットガンの弾丸をリロードしながらチャフを投げ込む。

「ギ・・・ギ・・・ギギ」

「くたばれ!!」

リロード分の散弾を脇侍に打ち込み第一陣を退ける。

「すみれ! その部屋に一時退避するよ」

「わかりましたわ・・・」

二人が飛び込んだ部屋は先ほど探索した子供部屋だったしかしそこには半透明なおかつぱの少女がゆらゆらと浮遊していた・・・

「ま・・・まさか幽霊?」

「だね・・・この子写真の子だね・・・霊力の発生源は彼女か」

「なにか言いたげな様子ですわね・・・」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・!」

「・・・わかったよ向こうの二人をお願い」

「暁さん?」

「ん?・・・あああの子ここでお父さんが帰ってくるのを待っているんだって」

「・・・そう、誰も帰ってこないこの廃屋でひとり・・・寂しいですわね・・・」

「それだけ好きだったんだろうね、ここは大切な場所だから・・・」

あいつら追い出してだって、こっちは平気そうだけど向こうが心配

だからできたら助けてあげてお願いしたんだよ」

「カンナさんは、兎に角少尉が心配ですわね」

「少しここで休憩しよう・・・」

「そうですw・・・ぽとね・・・」

蜘蛛へハイ！

「いやあああああああああああああああああああああああああああああああ  
!!!!!!」

「すみれ？」

「うお・・・お助けええええええええええええええええええええ!!」

「・・・もしかして蜘蛛嫌い？」

「あ・・・あかつきしやん!!と・・・とつてええええええええええ!!」

「・・・わかった」

どうリアクションをすれば、わからないけど取り合えず、手の甲に乗っている蜘蛛を  
払いのける。

「大丈夫？もういないよ？」

「イタ．．．今．．．く．．．蜘蛛が．．．わたくしをかみましたわ．．．」

さっきのはきつと．．．毒グモ．．．ああ．．．わたくしは．．．もう．．．ダメですわ．．．．」

「イヤイヤイヤイヤ．．．」

(この時代にはまだ毒蜘蛛はいません．．．たぶん)

「．．．はあ．．．すみれごめん」

「ふえ？／／／／／」

取り合えず．．．手の甲の傷に口をつけ毒を吸い出す．．．

まさか．．．転生してこんなことをする時が来るとわ．．．

ㄟ)ㄟ)ㄟ)ㄟ)ㄟ)ㄟ)ㄟ)ㄟ)ㄟ)ㄟ)ㄟ)ㄟ)ㄟ)ㄟ)

窓の外にいるナニカの怨念は無視無視．．．はあ当分早朝ランニングはしないほうがいいなこれ

「あ．．．曉さん．．．その．．．／／／／／」

「（――ム））、ペット・・・取り合えず吸い出したからあと・・・消毒と包帯巻いとくね」  
救急キットから包帯と消毒液をだしテキパキ処置をして水筒からお茶で口を濯ぎ（――ム）、ペットする。

「それにしても・・・すみれ怖いものないっていつてけど蜘蛛が苦手なんだね？」

「・・・暁さんは口が堅い方ですか？」

「・・・うんそうだね所属柄硬いほうだよ」

「今からお話することは、他言無用でお願いしますわ・・・」

「わかった喋らないよ」

「あれは・・・何年前のことでしょうか・・・わたくしがまだ小さい頃、

わたくしの父は、神崎重工の社長。母は、活動写真のスタア。

二人共、娘の誕生日にさえ家にいられないほど忙しい毎日でした・・・

豪華なプレゼントなんか欲しくなかった父と母さえ居てくれれば・・・

恋しくて寂しくて・・・思わず庭に駆け出してしまったんです。

その時うつかり蜘蛛の巣に絡まってしまったのです。

気持ち悪くて・・・いくら泣いても・・・誰も来てくれなかった。

それ以降・・・どうしても蜘蛛が苦手になってしまったんです・・・」

「・・・そっか・・・」



「・・・滑稽でしょ？このわたくしが・・・たかが蜘蛛一匹に取り乱し泣き叫ぶだなんて」  
「そんなことないよ・・・うん・・・そんなことない」

「え・・・暁さん・・・それは本心ですか？」

「うん・・・誰にだって辛い過去や苦手なものはあるよ・・・特に俺はそう思うよ」

辛い過去・・・復讐するべき仇・・・すみれの辛い記憶とは別物かもしれないけど

痛いほどよく分かる・・・。

「・・・すみれ元気出して・・・今は一人じゃないんだし・・・さてそろそろ移動しよう  
う

「はい・・・」

「念のため肩かしたいけど・・・」

「だ／＼／大丈夫ですわ・・・」

「ここのう事態じゃなかったらおんぶできるんだけど」

「(フオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!)」

すみれは心の中で狂喜乱舞する見た目少年におんぶ・・・しかもあいてが好きな人これ  
れは

『捲る』と・・・因みに窓の外のアニカも色々トリップしてたりする。

「?・・・さあ行こう」

「は……はい……う」

「すみれ……傷痛む？」

「少し……めまいが……」

「（……あの蜘蛛に毒はないけど精神的な負担かな？）」

「暁さん……お願いというか……頼みがあるのですが……」

「なに？」

「わたくしがもし力尽きたら……カンナさんをお願いしますわ

あの方子供っぽい人ですからしつかりした方そばにいてあげないと……

暁さん……お願いしますね……」

「なんだ……やっぱカンナのこと何だかんだと心配してたんだ」

「い、いえそういうわけじゃなくて……」

「わたくしは、ただカンナさんがガサツだから……」

「（・▽・）ニヤニヤ」

「まったく……これではオチオチ気絶もできませんね」

うん、こんなところで気絶はやめよう……マジで（ハ）ハア……

「取り合えず一度この館から脱出しよう、調べることは調べたし

それまで頑張ろう……」

「・・・はい！」

〃〃暁組移動中〃〃

## 廃屋 食堂

「ん？大神こんなところにいたんだ・・・」

「暁!?そっちは無事だったか。」

「目立った怪我は、特にすみれ少し怪我しただけ」

「お、おい!すみれ無事だったか!?!」

「おや?カンナがすみれの心配・・・あゝなるほどこいつも何だかんだと、すみれの事が本当に心配だったんだな。」

「全く似た者同士め・・・。」

「大丈夫だよカンナ治療はしてあるから」

「全くギャーギャーとやかましい人ですわねこれだから・・・。」

「なんだとお!!人が心配してりや調子に乗りやがって」

「ほらほらカンナ・・・所で扉は空いたかい？」

「扉？」

「ああ・・・この先に脇侍が逃げ込んでね・・・ご丁寧に鍵までかけて・・・」

「なんか見かけによらずマメなやつら・・・」

「で・・・どうだい？カンナ？」

「いや・・・だめだあたいが体当たりしてもビクともしなくて」

「なら・・・」(ゴソゴソ)

「暁さん？なにをしていますの？」

「ん？鉄華団式開錠方法の準備」

暁は、リユックから一本のブロックのようなものを取り出し、

中にはピンク色した粘土のようなものがありそれを小さく切り取り

鍵部分にくっつけケーブルを接続していく。

大神はソレに・・・見覚えがあった・・・士官学校で何回か扱ったことのあるそれを

「あ・・・暁さん？・・・それは・・・まさか・・・！」

「なんだこりゃ？甘い匂いがするが菓子か？」

「暁さん？少尉？」

「たたらつたたく〜♪C4〜」

脱兎（大神廊下に退避）

「C4・・・てまさか！」

大神、カンナ、すみれの大抗議により爆破解除は却下され

どこからともなく現れた少女の幽霊が息を切らしながらこの家の  
マスターキーを渡してくれた。

解せぬ

## 第20話 似た者同士の深川探索③

幽霊少女から受け取った鍵でドアを開けると中には、得体の知れない御札がそこらじゅうに貼り付けられていた。

「なんだこれ？」

「御札？・・・まさか脇侍が祈願というわけではありませんし」

「おい、隊長さっきのやつあそこにいるぞ！」

なんでもいいや！こっちは4人一気にかたずけるぜ！」

「それもそうですわね・・・今度は逃がすなんてへマ・・・  
するんじやありませんわよ？」

「へッ！それはこっちのセリフだけ足引つ張んなよ!!」

「うっ・・・」

「どうした大神・・・」

大神がお腹をおさえているのでどうしたのか聞くと小声で

「いや・・・さっきから少し胃が・・・」

「あーうんそう・・・」

どうやら大神の胃が少々ピンチなようだ。おや・・・

「あー二人共・・・」

「どうかなさいました暁さん？」

「どうした？暁」

「後ろ見ないほうが・・・でも負う遅いか・・・」

「この気配は・・・」↑後ろ振り向き

「も・・・もしかして・・・」↑後ろ振り向き

蛇「待たせたな！」

蜘蛛「（・▽・）ノハイイ」

「すみれ目瞑って！」

「へ？」

「カンナもだ！」

「た・・・隊長？」

二人が叫ぶ前に二人とめ目を閉じてもらいその間に蛇と蜘蛛を処理するってか  
カンナって蛇だめなんだな・・・。

「二人共もう勝利したから平気だよ」

「ほ……本当か？もう蛇……いないか？」

「暁さん蜘蛛わ？」

「大丈夫だつて……」

カンナとすみれがお互い抱き合っていることには突つ込み不要だね……

「……………ふうホツとした少しめまいが……」

「あ……あたかも……」

「おいおい二人共、これから脇侍を追いかけないといけないのに」

「気休めだけどり○インのむ？」

取り合えず潜入には、必須のリゲ○ンを大神、カンナ、すみれに渡す、

栄養剤を飲み慣れていないすみれは顔をしかめていたが、

大神、カンナには高評価だったようだ取り合えず二人の気力も回復したので

いつの間にかいなくなっていた脇侍を追うために奥へと進んでいく。

「さーて！皆無事だったことだし行くか!!」

「おほほほほ!!さあ行きますわよ!!!」

「あー暁……さっきのドリンク変なもの入ってないよな？」



「多分平気・・・オタコンとか常飲してるし・・・」

「カンナ、すみれ・・・それに暁」

「「??」」

「俺は頼りないかもしれないけど・・・花組の隊長だ、

三人の大切な人たちの代わりはできないと思う・・・カンナの親父さんは、

厳しい修行を通して強く立派に育てた、それにすみれくんだっていろんな人に

支えられて来た、それは暁だって同じだ・・・詳しくは知らないけど、

サクラ君や米田長官から聞いているよ・・・だけどいつまでも、誰かに

頼ってはいけないと思う・・・俺たちは弱い苦手なことだつてあるし、

一人で解決できないこともある・・・でも二人いれば、いや・・・

花組のみんながいればなんでもできると思うんだ。

すみれくん、カンナ・・・お互いを認め合つて支えあうことはできないか？」

「・・・・・・・・仕方ねえすみれ・・・・・・・・ここは一時休戦、にしとくか」

「・・・・・・・・異存はありませんわ」

「敵はその階段から地下に行つてみたいだそれじゃ・・・暁？」

「うん？ああ・・・ごめん行こう」

ああ・・・ムカつく・・・大神のあの愚直なまでの真っ直ぐさ、  
自分が汚れていることをマジマジと実感できて・・・  
花組の皆は、それこそ青空に燦々と輝く太陽のようだ・・・  
俺みたいな、汚れた影とは別物・・・相容れないもの・・・  
それこそ・・・俺は白愛のような得体の知れない・・・黒（闇）  
ほんと・・・ムカツク・・・

深川 廃屋地下食料庫

食料庫に到着するとそこには、大量の御札が無造作に貼られていた

「ここは・・・食料庫？」

「御札がこんなに・・・なんだか気味が悪いですわ・・・つつ」

「おい・・・すみれどつか痛むのか？」

「いえ・・・少し目眩が・・・カンナさんこそよくみたら

傷だらけじゃありませんの我慢できますの？」

「ああ・・・正直・・・傷口がジクジク痛みやがるんだ」

「大神渡した救急キット使わなかったの？」

「いや・・・ちゃんと使ったよただ痛み止めは」

「へへへ・・・大丈夫だとおもったんだけどな・・・」

「無理せず飲みなよ」

「二人共もう少しだ頑張ってくれ」

「しっかし・・・奥の通路にも御札がびっしりだ・・・」

「?・・・あれ・・・?」

「暁?どうかしたのか？」

「さつきより・・・屋敷から感じてた霊力が弱まつてる・・・?まさかこの札!」

「この霊力を封じるものだと?」

「恐らく……」

「少尉、曉さんどうやら奥は行き止まりのようですね……」

「ん？ おい隊長！ あそこに協侍が」

「4人で一気に押さえ込みますわよ、皆さんよろしくつて！」

「よし！ いくぞ！！」

その時視界がチカチカと光るそれと同時に弱まっていた霊力がとうとう霧散して消えてしまった。

「つち」

「しかし……一体何のために……」

「隊長！ あいつハシゴを登っていくぜ！」

「今度こそ逃がすか！ ……みんな追いかけるぞ！」

四人は協侍を追うためにはしごを上っていく

「しっかし……このハシゴやけに長いな……」

「もしかしたら地上部につながっているのかも……」

「いつで！」

「大神どうしたの？」

「いやどうやらマンホールのようだ頭ぶつめた……」

「やっぱり外のようなだね慎重に開けて……近くに敵がいるかも」

「わかった」

カポン

「まぶし……急……」

無事に外に出ることはできたもののそこは

脇侍×10「……」

「「「……」」」

敵陣のど真ん中だった……

「(ヤベーーーー死んだああああ!!!)」

おいおい……。どうすんだこれ!!余りにもな状態ですみれ・カンナ呆然としてるやん!!

あと大神!祈ってもこのじょうたいじゃ何の役にも立たねー!!!

「フフフフ、やはり地脈ポイントはここだったか……よし!作戦開始

地脈ポイントを制圧する!!」

昔の花魁風の衣装の女が脇侍に支持をだしているしかし……

「地脈ポイント? やつら地脈を利用した魔術を使う気か……」

「地脈を使った魔術?」

「ああ……魔術の中には特定の陣をはって行う魔術もそんざいする」

「なるほど」出てきなさい!! そのネズミども」

「つち……見つかつたか!」

「大神この状態じゃ多勢に無勢だ少しでで会話を長引かせろ」

「暁?」

「すこしでも情報をこいつから抜き取るんだ」

「わかつた」「お前たち……ここで一体なにをしているんだ!!」

すこしでも時間を稼げば突破の足がかりに出来る……いまのすみれとカンナは、  
戦力にならないなら……俺がおとんりになれば……

「ふふふ……貴様らには解るまいがこの廃屋から大きな霊力が発せられているのだ」

「そんなのわたくしダッテ……モガモガ」

「すみれストップ!!」

「我らの『計画』にはこの霊力が邪魔になってた．．．そこでこの廃屋を封印し

障害を取り除いたのだ!!．．．そしてこれからが本番というわけさ」

「計画だと．．．帝都をどうする気だ!!」

「それを知る必要はない．．．なぜならお前たちはここで死ぬのだからな、

羅刹、刹那の仇撮らせてもらうぞ!

黒之巢会の怒りと恐怖その身に味わうがいい!!帝国華撃団!？」

「つく．．．光武さえあれば」

「いけい!脇侍ども!こやつらを八つ裂きにしてしまえ!!」

「少尉．．．このまっま黙ってやられるしかありませんの？」

「．．．ちくしょうなったら玉碎覚悟で!!」

「大神．．．すみれたちをつれでマンホールに俺が何とかする」

「ダメだ!暁!!!」

「お前や．．．すみれ、カンナはここで死んじやダメな奴だ」

暁が三人をマンホールに行くように促した瞬間

ドオオオン!!!

「なんだ？」

「いまのは砲撃……」

「隊長！上……」

「あれは……翔鯨丸!!」

「遅くなつてすみません！皆さんなん大丈夫ですか!!」

「さくらくん!!」

「さあ！あなた達も出撃よ!!!」

「よっしゃ!!やつたるぜ!!」

「これで役者はそろいましたわ……」

「よし！皆、光武に乗り込むんだ!!見てろよ……」

「いままでのカリキツチしかいしてやるぞ」

「了解!!」

「わかった」

翔鯨丸から射出された大神、すみれ、カンナ機に各々搭乗し、暁の雷電も射出される。

しかし前の雷電とは少し形状が異なっていた。

「雷電の形状が……」



『暁聞こえるかい？』

「オタコン・・・聞こえるよそれより雷電の形状が」

『ああ前の戦闘で得たデータを元に追加装甲を装備した雷電だ、

その名も漸雷だ、スペック情報は、あとで確認してくれ』

「了解」

暁は、機体に入り込むとぎつとスペックを確認する、どうやら雷電より移動速度が落ちるもの

人型蒸気用の大型榴弾なら問題なく防ぐことが出来る、しかも追加装甲はパージ可能で、

今回の武装は、漸雷用アサルトライフル、格闘用バトルソー、チェーンガン、

なかなかの装備だったが・・・難点は・・・」

「イ・・・ッ・・・」

追加装甲の影響で阿頼耶識システムの負荷が大きくなっていることだけ、現に若干鼻血がでる

「大神こつちも起動完了・・・ただ新装備のためあまり前に出ず後方から援護する・・・」

「了解・・・こつちはすみれくんカンナと同じ位置だけど、さくらくんたちとは別のところ

着地してしまった・・・濟まないが援護を頼む」

「2チームに分断と・・・わかった援護を開始するよ」

こうして大神チーム、マリアチーム、そして暁の三班で敵機を迎撃する。

大神チームとマリアチームはそうそうに合流後、抜群のチームワークで敵を次々と一掃していく

暁も、一人ながらチェーンガンの弾幕で複数の敵を蜂の巣にして行く。

「これで！終わりや!!!」

紅蘭が最後の脇侍を撃破し、花組と暁は、廃屋前にじんどつていた黒之巣会幹部『紅のミロク』を取り囲む。

「わらわは・・・紅のミロク・・・のぞみ道理お相手してあげましょう、

いでよ！我が忠実な下僕『紅蜂隊』!!」

そう叫ぶと

7体の紅色の脇侍が召喚される。

「フフフフ……まずは小手調べ」

そう言うのとミロクはまたどこかに姿を消した、

「大神……スキャン結果だけど……アレ今までの脇侍より

妖力量が多い……気をつけて」

「了解！各員紅蜂隊を蹴散らすぞ!!」

『了解!!!』

かくして紅蜂隊との戦闘に突入する。

紅蜂隊は、いつの間にか、こちらを囲むように陣取り一斉に攻撃を開始する、

しかし怪我をしているすみれ、カンナの動きが今まで以上にすごい、

ふたりの行動がまるで、事前に打ち合わせをしているかのような連携を見せた。

それはさつきまで大喧嘩をしていた二人とは思えないほどに、

ほかの花組のメンバーを二人に負けじと紅蜂隊を蹴散らしていく、

それを何処か俯瞰して見ながら戦う暁をよそに、

こうしてカンナ、すみれの活躍によって苦戦することなく紅蜂隊を撃破する。

「観念しろ!!もはや後はないぞ!!」

「フッフッフこれしきで勝ったと思っっているのか？」

その時ミロクから怪光線がさくら機に目掛けて放ちまともにさくら機に直撃する、しかし……

「ん？全然効かないわよ？」

「フ……これで終わったとおもうな……」

不可解にも全く効果なしのようだった……

しかしミロク本人はさほど気にしていなかった、そしてその言葉を残しどこかに消えてしまった。

「いまの言葉……どうゆうことだ？」

「……?」

暁は何処か違和感があるもそのいわかんがよくわからなかった。

まさかこれが、後にあんなことになるとは、花組のメンバーはだれも思いはしなかっただろう。

「まあやつの光線もただのハツタリだったようだし……それじゃく」  
「行きますわよ!!」

『勝利のポーズ!!』

『決め!!』

こうしていつものお約束も終え、花組は帰還、すみれとカンナは、  
途中、またいつもの調子で喧嘩に勃発……暁から麻酔弾をプレゼントされ、  
そのまま救護室に担ぎ込まれていった。  
因みに胃に限界がきた大神も仲良く担ぎ込まれていった。

都内某所

黒之巢会、死天王の一人、黒の叉丹が一人、謎の蒸気機械ともに佇んでいる。  
「ふっ……もうすぐ始まる……愚か者どもの宴が」

そうつぶやくと何処かに姿を眩ませる。

深川廃屋 子供部屋

そこにはふよふよ小さな人魂が漂っていた、それは何処か苦しそうに見えた。  
「可哀想に……異物を打ち込まれて……苦しいのねえ」

そこに今まで暁たちをストーキングしていた、白愛が姿を現す。

「ねえ……ここにいても愛したお父さんは帰ってこないわ……」

よかつたらお姉ちゃんと一緒に行きましよう？」

そう優しく声をかけるとゆつくりと人魂が彼女に近づき彼女の手に収まる。

そして、白愛は、徐に人魂にキスをするとみるみるうちに、人魂が

彼女のなかに溶け込んでいった。

「少ししたら貴女の体も作ってあげるからね」

白愛は、慈愛のこもった笑みを浮かべ自身の腹をさすっていた。

その日の深夜帝劇格納庫

時刻は等におそく、寝るのが遅い、オタコンでさえも眠りに就いた時刻

「……………」

突如さくらの光武から一匹の『妖魔』が這い出てきた、

その妖魔は、小さい体を活かし格納庫を抜け出し廊下を抜け

遂に外へとでる……そして夜の帝都を欠け最終的には

建物の屋上にいたミロクの手に収まり、

ミロクはその妖魔を躊躇なく握りつぶした。

あたりには肉の潰れる異音が響く、

握りつぶしたミロクは、邪悪な笑みを浮かべる、

その視線の先ある帝国劇場を見つめながら

そして一言

「見つけた……………」



## 第21話 優しい機械と壊す機械（暁）①

ドゴン!!

帝劇から何か壊れた大きな音とともに、『西遊記』

の夜の部の公演終了のアナウンスが流れる。

「・・・・・・・・つち」

「・・・・・・・・」

今日もカンナとすみれが必要以上に大暴れをして舞台装置を壊し

現在、暁と紅蘭が修理をしている。

実はこの二人、普段は、よく会話する仲であり、

暁は前部隊で自分の機体を自分である程度整備できるほどの機械知識があり、

帝劇では大道具といったポジションなので大体の機械工作はでき、

紅蘭は、言わずもがな、光武の修理、整備から趣味で色々発明をしている。

そんな繋がりがありよくオタコン、紅蘭、暁の三人で機械談義をするなかであった。

「・・・・・・・・..はあ.....」

「・・・紅蘭、疲れているなら後はやるよ?」

「暁はん・・・だいじょうぶや・・・それやったら暁はんは、  
上がって平気やで?」

「・・・俺大道具・・・仕事はきちつとしないと・・・」

「そういう、壊れた舞台装置を作業台に移動させる、その時誰かが舞台袖にやってきた。  
みんな、お疲れ様!お客さんたちもすごく喜んでいたよ!」

「脳天気になってきたのは、花組の隊長の大神だった。」

「・・・」

「あつ大神はん、みんなやったらもう楽屋で反省会やってるで?」

「あれ?入れ違いになったかな・・・あれ、紅蘭は反省会に出ないのかい?」

「・・・うち、舞台の修理があるさかい・・・ほら、今日もすみれはん達が

無茶したから・・・」

「ははは・・・あの活劇シーン、お客さんに大人気だからね

すみれくん達も力が入っちゃうんだろうね」

「せやな・・・喜んで貰えるなら・・・しゃーないよな」

「まあ・・・そういうことかな、じゃ俺も楽屋で待っているから

紅蘭も早くおいでよ」

「……しゃーないわけないやろ……この子らを

なんだと思つとるんや……」

「……紅蘭、どうした？舞台装置の修理終わったから

反省会に行つてきなよ……紅蘭は女優でもあるんだから」

「……暁はんは……機械を、この子らの事どう思つてる？」

「……機械のこと？それは……おれの雷電のことも？」

「それだけやないけど……」

「機械をいじるのは好きだけど……別に」

「そか……でも、雷電は、大事だよ……雷電はおれの一部だから」

それ……どういう意味や？」

「内緒、兎に角、雷電はおれの大切な相棒だよ」

「……」

「何考えてるかしらないけど早く行きなよ」

「すまん……暁はん」

様子があからさまにおかしい紅蘭は作業を中断して、楽屋へと向かい

この場には、暁一人だけだった。

「そう……アレ《雷電》は俺の一部《殺意》だから……」

暁そう呟き、金槌を振り下ろす……

舞台装置の調整とセットの修理が終わったのは何だかんだと

深夜までかかり、ようやく終えた。

「つ……疲れた……腹減った……」

作業に没頭していたので夕飯を食べそこねたので格納庫に置いてある。

非常食を食べようと思いき行くと何やら挙動不審なオタコンがいた。

「オタコンそんなところでどうしたの？」

「あ、暁……いやね……なんか紅蘭の様子がおかしくてね」

「あーそう言えばなんかさつき変なこと聞かれたな」

「変なこと？」

「うん……機械のことどう思ってた」

「ふむ……因みに暁は、なんて答えたんだい？」

「普通の機械は特に……でも雷電は、別、自分の一部だって」

「一部って……そうだね暁や、ほかのメンバーからしても阿頼耶識搭載機は体の一部っていえるからね……でも」

「阿頼耶識なんて、できれば使うことないんモノだし……ただ俺には必要だ。」  
「……まだ……いや……なんでもない」

「オタコンは機械についてどう思ってるの？」

「僕かい？……そうだな掛け替えのない友人で、僕の夢だね」

「僕の家系は代々技術者家系だった、父は欧州大戦で技術者として参加したでも……」  
「虐殺者ヒューイ……マッドエンジニア……この界限じゃ有名だ」

「僕も結局父と同じ虐殺者さ……コジマ技術を見つけて、確かに平和利用は可能だ、研究の成果で毒性を無毒化して更に運用しやすくした……けど」

「結局は、平和利用の前に軍事利用……か」

「こんな技術見つけるべきじゃなかったんだ……きつと」

「オタコンが見つけなくても誰か別の奴が見つけてたよ……それに  
力に善悪は無い有るのは……」

「人の善悪、使う人によって変わる……だね、リリイがフェイスに誘う時に  
言ってたよ」

「ごめん……オタコンやっぱおれ悪人だわ……」

「暁？」

「オタコンが見つけた力を仇討ちに使ってる……」

「……僕は、仇討ちに関しては何も言わないよ、それに暁は、悪人じゃないよ

それだけは断言出来る……だって僕のことや、花組の事何だかんだと気にかけてるじゃないか」

「……でも最近大神みてるとうまくムカムカする」

「あーうん多分愚直すぎるからなんじゃ？」

「……オタコン、シユミレーター起動お願いあとカロリー○イト」

「はいはい……ポテト味でいい？」

「ん……」

暁は上着を脱ぎインナーのみになり雷電に近づくとやつとこちらに気がついた、

紅蘭が声をかけてきた。

「暁はん……どないしたん？こないな時間に」

「飯食いつぱぐれたから、ここに置いてた非常食食べに来たのと、ついでに訓練しに」

「そういうテキパキと機体を起動させてシユミレートモードを立ち上げる。」

「この子……こないなことも出来るんやね」

「簡易的だけだね……本格的なのは本部いかなないとダメだけど……もういい？ハッ

チ締めるから」

「あ……邪魔してもうて堪忍な……ほなウチも光武の調整にもどるな」

「ん……」

少したった頃一段落したので、シユミレーションを終了し、機体を停止させようとしたとき

大神の姿が映り、暁はそのままカメラと集音マイク越しに様子を伺うことにした。

『機械つていつてもウチらの気持ちはちゃんと伝わってるはずやからな』

『うん……そうだね、それじゃあもう行くよ』

『ほな、またな見回りがんばってな』

どうやら……見回りだったようだ……しかし

「見回りついでに機体のワックス掛けか……雷電にしたことなかったな

まあ……特殊塗料を散布しちやってるから塗れないんだよな……」

雷電の装甲面には対霊子拡散塗料が塗られており霊子光学兵器からのダメージを軽減する効果があり、若干ではあるが防弾効果もあったりする。

まあそんなどうでもいいことは、置いといておこう。

「紅蘭さき上がるよ……あまり根詰めすぎないでね。」

「暁はん．．．お疲れ様でも．．．最近出撃が重なったからな、ちゃんと整備してあげんと」

光武が可哀想や、この子らは、ウチがいなかったらきちんと働けへんのやから」

「そう．．．でも無理して紅蘭が倒れたら無理させた光武が悲しむかもよ」

「え？」

「先に謝つとくごめん、大神との会話聞いてた」

「そ．．．そか．．．盗み聞きは関心できへんよ」

「だからゴメンって．．．で話戻すけどさつき紅蘭、ウチらの気持ちはちゃんと伝わってるはず。」

って言うってけど伝わってるなら光武も紅蘭のこと心配するんじゃないかなって」

「光武が．．．ウチを？」

「何となくだし．．．違うかもだけどそう思っただけじゃあおやすみ」

紅蘭にそう告げかいた汗を流そうとシャワーに以降としたとき『運悪く』

大神とばったりあつてしまった。

「大神．．．こんな時間にどうしたの？」

「いや．．．紅蘭が心配でね」

「大神はん．．．心配してくれてありがとね．．．でもうちは大丈夫や．．．」



うん大丈夫に全然みえない．．．紅蘭つて割となんでも話すタイプかと思つたけど、『肝心な部分』はなにもいわないんだよな．．．。

「紅蘭は．．．本当に紅蘭は光武のことが好きなんだねしつかり頼むよ」

「うん．．．ウチ、光武のことが好きなんや。」

「この子らはうちがやさしゆうしてあげるとちやんとこたえてくれる」

「でも．．．無理は良くないぞ。今日はもう休んで続きは明日にしたらどうだい？」

「．．．大神はんは、ウチの事は心配しても」

「この子らの事は、心配してくれへんのやな．．．」

「紅蘭、どうゆう意味だ．．．俺は紅蘭の事を」

「大神．．．もういいだろ．．．紅蘭は休むつていつてるんだ」

「暁．．．」

「．．．大神はもつといろんなことに目を向けないと」

「どうゆう意味だ？」

「．．．説明するのメンド．．．おやすみ」

「暁!？」

大神の横を通り過ぎようとした暁の肩に大神が手をおこうとした瞬間

「っ!」

「ナニ？」

暁の冷たい視線に体が動かなかった、それと同時に

『緊急警報！緊急警報！！上野に魔装機兵が出現！！被害拡大しています！！』

帝国華撃団・花組は至急、作戦司令室に集合してください！！』

「つち……先行くから」

そういい格納庫を後にする。

「ああああああ……ムカツク」

パイロットスーツに着替えながらだれにも聞こえないほど声で呟く  
冷たい瞳のまま

## 第22話 優しい機械と壊す機械（暁）②

暁が作戦司令室に入ると紅蘭、大神以外のメンバーは既に集合しており、暁は、自分の席に座る。そこでアイリスが小声で声をかけてきた。

「アカツキ……どうしたの？」

「（?……何が?）」

「（え……と今のアカツキ……ちよつと怖い）」

「（あ……）」

そこでふと、先ほどのやり取りで怒気がにじみ出ていたのだと気がつき、ゆつくりにじみ出る怒気を心の中に押し込める。

「（ごめんアイリス……空気読めないヤツのせいで……少しね）」

『空気読めない奴Ⅱ黒之巢会』とアイリスは思ったのかいつもの笑顔で

「そうだよね〜こんな時間に!!」（・ω・）フンスッ!と可愛く怒った表情を取る。

（やべ……可愛い）

暁、アイリスに萌えそうになっていると漸く。大神達が現れた。

「大神一郎少尉、李紅蘭ただ今到着しました！」

「……すみません、光武の整備に手間取つてもうて……」

「これで全員だな、大神、紅蘭、次は遅れるんじやねえぞ」

おやつさんが、二人に軽く注意をし、現状の説明に入る。

「どうやら深夜時間帯もあり、避難が遅れているらしく、速やかに、敵を排除しなければ  
被害が拡大する恐れがあつた。」

「隊長、すぐに出撃命令を！」

「マリアが大神にそう声を掛け、大神も領き号令をかけようとした時、紅蘭が割つて入る。」

「あ……あの光武の整備がまだ……」

「どうした紅蘭？整備班からは、整備は終了していると報告を受けているが？」

紅蘭の発言におやつさんも不思議そうに尋ねる。

「まだ……細かい調整が……」

「動きさえすればいいわ、今は一刻も争うのよ」

「マリアが紅蘭をやや強く論ずようにいい、サクラもそれに同調し大神に話を振る。」

「そうだな・・・光武のためにも頑張らないとな。

不調だとしても負けるわけにはいかないからな。」

「どんな理由があるにせよ、人々の平和を守るのが帝国華撃団だもんな。」

大神の言葉に、頷きながらカンナもそう答える。

しかし紅蘭は、

「そうゆうことやなくて、みんなにも光武のことも・・・」

紅蘭は、みんなの言葉を聞くもやはり『光武』が心配なように反論するがその言葉を遮った人物がいた。

「じゃあ・・・紅蘭は・・・大勢の人が死ぬのはいいんだ？」

暁である。

「つ・・・暁はん！」

「こんな事で時間かけて・・・いったいどうゆうつもり？さっきの概要で、避難が遅れるんだよ？」

こんなところでグダグダして・・・紅蘭は『いったい何人を犠牲にする気？』

「暁！そんな言い方!!」

「大神！」

「つく．．．みんなとにかく出撃だ！」

暁の鋭く、冷たい言葉に大神は、怒りを露にするが、おやつさんがそれを静止する。

暁はいち早く作戦指令室から退室する．．．その背中を睨むように紅蘭と大神も退室する。

くく 雷電コックピット内くく

イライラする．．．

無力な人が死ぬのが。

イライラする．．．

力があるのにそれを使おうとしない奴が。

イライラする．．．

モノの優先順位ができていない奴に。

イライラする……

自分ない光をもっている人達に嫉妬している自分に

「暁……聴いてる？」

「オタコン……ごめんもう一度お願い。」

「全く……いいかい今回は時間との勝負だ、本来は射撃支援に徹して欲しいんだけど  
初動で遅れてるから今回は砲撃支援はせずそのまっま近接戦闘で速やかに数を減らすよ。」

「装備は？」

「雷電用に調整した太刀に、取り廻しのいい腕部20mm砲」

「了解」

「アカツキ〜」

「ん？了子どうしたの？」

「どうしたのじゃないわよ……あんた精神が『機体』と同調しすぎ

もうすこしセーブなさい……それに感情パラメーターも少し変えよ？

魔力も少し淀んでるし……」

「……なんでもないよ……」

「とにかく戦闘終わったら医務室に来なさいいいわね？」

「……」

「返事は？」

「了解……」

そこで通信が切れる。

　　格納庫・了子デスク　　

「う~~~~ん」

「どうしたの了子ちゃん？」

「あ、オタコン……ちよつとね」

デスクトップ型の蒸気演算器には、暁の月毎のデータが表示されていた。

「暁の魔力データだね……これが何か？」

「ねえオタコン……暁がイライラしだしたのって深川から帰って来てからだったわよね？」



「うんそうだね、僕はてつきり大神君とウマが合わないからかなって。」

「まあ彼、……暁にはちよつと眩しくみえるところあるかもねでも……」

『今まで』他人にあそこまでイライラしたことあつた？』

暁は、敵んは基本容赦がない……無表情で敵の頭に風穴を開けることができず  
う

しかし基本は、どんな人でも話はするし、苦手な相手でもそれなりには対応できる。

実際、大神とは士官学校の時に何度か顔を合わせよく弄り倒していた。

なので『急に大神にイライラするのが不自然なのだ』

「暁って……特殊な血筋なのよね？」

「ああ……実際輸血する。時は前もって自分の血を抜いて輸血用の血液を確保するほどだよ」

「特殊な血……確か『オロチの血』だったわね。」

「僕も詳しくはしらないけど確か大昔に存在していた魔人なんだっけオロチって」

「魔人というか……荒神かしら……」

「たしか敵は、帝都に魔術をかけようとしているのよね？」

「詳しくは、まだ解らないけどそれが濃厚かな」

「その魔術って帝都に……『封じられているナニかを解き放つモノ』って考えられない？」

「封じられているものを解き放つ……解呪術式か……」

「そう……おそらく敵が深川の封印を解除したきっかけで封じてるモノが漏れ始めたとしたら？」

「それが暁のイライラの原因？」

「かもね……暁の血が封印されていたヨクナイモノと共振していたとしたら……」

「！これ以上封印が解けたら暁は……」

「最悪……血が暴走し理性無き獣になるかもね」

「つ……リリイに報告してくる」

「オタコンは、あわてて自分のデスクに戻りリリイに通信を繋げ始めた。」

「……」

「了子は、一人無言で現在の暁の機体情報を見守り続けた。」

くく上野公園くく

深夜帯にも関わらず公園内にはまばらに人がおり、

屋台で酒をのんでいた人もおり、酔っ払いも顔を青くしながら

逃げ惑っている。

屋台を無残に破壊し、人々を襲う脇侍の集団は、無差別に攻撃をしていた。

「隊長このままでは被害が増える一方です！」

「そうだな住民のひなんもまだだし早く片付けないとな」

マリア、カンナが大神にそう声をかける中、紅蘭は、心の中で、

(機械が……悪者やないのに……)

せやけど……脇侍を救うには、壊すしかないんや……)

紅蘭は、心の中で悲痛の叫びをこぼす、

「紅蘭? どうしたの……もう戦いは始まっているのよ?」

呆然としていた紅蘭にサクらは、声をかけ心配する。

「アイリス……眠い早くやつつけて帰ろうよ」

「全くアイリスは、いつまでたっても子供なんですから、

少尉チャツチャと片付けてしましましょう。」

「そうだなみんな協侍を撃破するぞ」

『了解!!』

大神達は、各自散開し協侍たちを撃破していく、しかし相変わらず紅蘭の動きが悪く、敵の撃破に手間取っていた。

「・・・つく」

思うように光武が動かない、少しずつ光武が傷ついていく、

それに心を更に痛め、やっとの思い出協侍を撃破するも物言わぬ残骸になった協侍をみてまだ心が痛む。

「ほんま・・・堪忍な」

撃破に戸惑っていた紅蘭とは、打って変わって、暁は次々と敵を壊していく。

ある協侍は胴を真っ二つに、またある協侍は、20mm砲で蜂の巣に、

撃ち、斬り、殴り、踏み潰し、刺し、抉る。

「・・・・・・・・・・」

アイリスはその光景に眠気が飛ぶ。

確かに暁は、ほかの皆より強い・・・でもあそこまで暴力的だったか？

確かに今は、急がなくちやいけない時でも・・・今の暁は、まるで

「悪魔・・・・・・・・」

あの、自分は助けしてくれた優しい彼がどこかに消えてしまったんじやにかと錯覚するほどの変異

「こんな暁・・・やだよ」

ポツリとそう言葉が漏れた。

くく暁（戦闘）視点くく

今日は、やけにスムーズに機体が動く・・・こんなに簡単に敵が壊れる。

気分がいい・・・

近接型と射撃型が同時に仕掛けてきた・・・

接近型の攻撃を躲し、その瞬間に、相手の相応を掴み、射撃型に投げつける。

飛んできた近接型を受けてしまった射撃型がバランスを崩したところに、腕部20mm砲で仕留める。

なんだろう・・・今日はなんだろう・・・さっきまでイライラしてたのに今は

トツテモキブンガイイ

くく暁（戦闘）視点くく終了。

「てああああ!!」

大神が最後の一機を斬り伏せ戦闘が終了し公園内には、紫電を散らした、脇侍の残骸を横たわっていた。

それを紅蘭は、ひとり悲痛の眼差しで見下ろしていた。

各自は、撤収準備をしている中、紅蘭はズつとこわれた脇侍をみていた、それに気がついたカンナが、『壊れた脇侍なんて使いもんにならねえだろ』と

「・・・・・・・・」

紅蘭はその言葉を聞き流した時。

ブオン

壊れた脇侍のカメラアイに赤い光が灯り、立ち上がり、紅蘭に襲いかかってきた。

「紅蘭!!!」

大神は、咄嗟に紅蘭を庇うも、敵の攻撃をモロに受けてしまった。

「ぐあ!!」

大神の光武もいまの攻撃で火花を散らしマトモに動けそうになく、しかし

それは相手の脇侍も同じく、所々爆発を起こしているものその凶刃を大神に向ける。

「隊長!!早くトドメを!!」

マリアが必死に叫ぶ、しかし紅蘭は。

「あかん……いま光武に無理させたら壊れてまう……」

「……しかし……」

その時、その場に声が響きたい……冷たく……重く

「そんなに……死なせたいんだ……でもヤラセナイ」

一筋の剣閃が脇士を一刀両断し、両腕の20mm砲を弾切れになるまで叩き込む。  
過剰な、攻撃をうけた脇侍は、爆散する。

「あ……あかつきはん……アンタ！」

「ねえ……なんであの時やめてつていったの」

紅蘭の怒りの声を遮り淡々と声をかける。

「そ……それは……もうあの脇侍は動けへんかった……それに  
……無理に動かしたら光武が壊れてしまいそうやったし」

「何を言ってますの！ 暁さんがトドメをs「すみれすこし黙てて」っ  
すみれが紅蘭に反論しようとした所を暁が止める。

「そう……なら紅蘭は、大神が死んでもいいんだ……」

ただの機械より……ね」

「ただの機械つて！ 暁はんは、何とも思わんのか？ 暁はんかて、



その雷電は相棒やっつていうとつたやないか!!」

紅蘭は、暁に叫ぶと暁自信めんどくさそうに言い放つ。

「相棒だよ?・・・俺の『復讐』を遂げるための力なんだから

そのためにコイツが壊れようとまた直しておれは戦う・・・復讐を遂げるまで」

花組達はいきを飲む、彼が復讐のためにたたかっていた事をしつて、

ただマリアとアイリスは、そのことを薄々と感じていた。

過去の自分を見ているようでいや・・・

過去の自分が変わらなかつたらキツト・・・あなっていたのだとマリアは思い。

アイリスは、日に日にかれの笑顔に陰りが見え、ひとりの時は、黙々と体を酷使する。

そんな彼を、彼女は心配でそして悲しかった・・・かれの必死な形相がまるで

『泣き顔』ようで・・・

花組メンバーに暗い影を落としつつ帝劇に帰還し、

格納庫でプツリと糸が切れた人形のように倒れる暁、そして

自分の光武から一向に降りてこない紅蘭。

その光景が広がるのだった。

## 第23話 優しい機械と壊す機械（暁）③

先の戦闘終了後、紅蘭は自分の光武から降りず

ただひたすら泣き続け、他の花組メンバーの

説得も虚しく紅蘭は、ただひたすら泣き続けていた。

「隊長、今はそつとしておきましょう」

「そうだな……俺はもう少しここに居るから

皆は、解散してくれ」

「解りました……処で暁のことは……」

「司令から面会を禁じられている、

それに小島博士達と暁の上司の方と米田司令とで

秘密裏の会議の最中で入室、聴き耳厳禁とのことだ」

現に作戦司令室前に、あやめ副司令が陣取り

誰も入れないようにしている。

同じく救護室前には、メイド（武蔵）が監視していた。

現在、オタコン・子・リリイ・米田の四人が

司令室にいる状態であった。

「暁の事も今は、どうする事も出来ない

さあマリアも今は休むんだ」

「解りました隊長……」

マリアは心なしか暗い雰囲気を出しつつ

その場を離れた、大神はそれを見送り、

視線を、小さく聞こえる泣き声の方に向けた。

司令室Side

司令室内は、ピリピリとした空気が支配しており

机には、様々な書類が置かれ

その一枚には『阿頼耶識』の文字が書かれていた。

「暁のこれまでの不調、異変の原因は

帝都に施された魔術の影響で漏れた

妖力が原因ねそして今回の戦闘での半暴走状態もね」

「つまり今回は、戦闘行為自体が

彼に悪影響だったと？」

「うーん現在の環境も要因かしら……」

「李紅蘭女史の癩癩……ね」

「……………」

「リリイ言い方!!」

リリイの発言に怒りの表情を浮かべる米田、

リリイの言い方を諫めるオタコンは、続けて

話し始める。

「僕は彼女の気持が少し解るよ」

オタコンもまた人の為の研究しそして、

とある地域の地下深く眠っていた新物質を発見する

『コジマ粒子』

この粒子エネルギーは既存の蒸気エネルギーとは、

比べ物にはならない程の力を発揮するも

初期段階のコジマ粒子には、広範かつ長期に渡る

汚染と人体に深刻な毒性が認められた。

現在、オタコンの弛まぬ研究の結果

無毒化、汚染値も現在の蒸気機関と

変わらぬ程に改善した。

しかし

平和利用目的に研究していた、ゴジマ粒子は、軍事目的に使用されていた。

現在彼はリリイの元で矛盾を孕んだまま研究、開発をしている雷電と言う兵器の……

「誰かを護る為に」と思いながら

「ふくさておじ様今までダンマリですが

何か聞きたい事があるのでわ？」

「まず……倒れたのは『八神の血』の影響か？」

「YES、八神の血正確には、オロチの血ですね

魔人才オロチの伝承は、御存知ですよね？」

「ああ……アイツの親父、八神宗蓮自身からな」

「なら説明不要ですね」

「しかし……本当にそれだけか？」

「？何が言いたいですか？」

「この『阿頼耶識』とか言うのせいじゃ

無いのかって言ってんだよ!!こんな……こんな!」

「コレが無ければ彼は、あの時死んでましたが？」

「貴方は彼が死んでもいいと？」

「そんな事いつてねえよ!!……だが……」

米田自身『阿頼耶識』のせいでは無い事位

解っているしかし、彼の……暁の身体を

思うと当たらずには、いられなかった。

「雷電に妖力遮断を強化します」

「本音を言えば彼を此方に戻して欲しいですが

『上』から却下されましたからね」

上……賢人機関に今回の顛末を報告するも、

花小路伯爵以外のメンバーがこれを却下、

理由は、様々なだったが、要は彼の攻撃力を

手放す事を良しとしなかったのだ。

彼を帝劇に出向させる際、花小路伯爵も絡んで

いたので今回のことは、強く言えない状態であった。

「処で今回の内容何処まで

彼女らに話すつもりで？」

「オロチの血や阿頼耶識のことは、言わねえよ」

「そうですか………処でおじ様『設計思想』と

いう言葉はご存知ですか？」

「なんだ？ヤブから棒に」

「設計思想、機械を設計する際のコンセプト、

基本概念………紅蘭女史が作った光武と

私達の作った雷電は、その設計思想は、平行線

なんですよ………悲し事に」

リリイはそう悲しげにそんな言葉を残し退席する

「何なんだ全く………さてあとは紅蘭の事か………

あやめ君、大神に後で支配人室に来るように

伝えてくれ………あとあの資料も」

「解りました」

リリイと入れ違うように入室したあやめに、

米田は、そう伝え自室にもどっていく



????  
S i d e

暗い……

眼を閉じているのか開けているのかも解らない

自分が立っているのか、倒れているのかも

ただ今解るのは、身体にナニカガ這う感覚だった

そこで彼、暁が眼をさまし目の前に……

「ハアハアハア!!」

俺に馬乗りになってアレな顔して体中を、

撫で回している変態（リリイ）がいた。

医務室前 S i d e

「……………」

「……………」

「……………」

医務室前の武蔵にアイリス、すみれが

無言のまま睨み合っていた。

事の発端は、会議が終了後、リリイが中に入って  
数時間後、空も白み始めた頃

仮眠から目を覚まし、いの一番に暁の

様子を見に来た二人を武蔵が入室を阻止したのが  
始まりだった。

「ちよつと貴女！いい加減

ワタクシたちを中に通しなさいな！」

「申し訳ありません許可出来ません以上」

「むくくいいじゃんケチ！」

「准将クラスの権限により

ココの立ち入りを禁止しています以上」

「キクク！この無愛想で無表情のメイドの

分際でこのわたくしに楯突くとわ！

こうなったら力づくで!!」

すみれが力づくで入ろうとした瞬間

ドギャン

「ひびく!!」

キリモミ回転しながら医務室のドアをぶち破って  
飛んできた少女……リリーの姿があつた。

その姿に誰にも気が付かない程小さく、  
ため息をつくメイド（武蔵）だつた。

## 第24話 優しい機械と壊す機械（暁）④

「アカツキ!!」さん!!」

変態を外に叩き出したと同時に、

すみれとアイリスが部屋に

なだれ込んできた。

「えっ……と?どうしたの二人共、

それになんで武蔵がかこに?」

「お久しぶりです暁様、以上」

どうやら武蔵は平常運転のよつだ……。

どうやら昨日の戦闘終了後に

ぶつ倒れ、今に至るらしい……。

「イテテエ……アカツキいきなり

ぶん投げるなんて酷くないかしら?」

「チッ!生きてたか」

（ゴメン、いきなりでビックリしてつい）

「本音と建前逆よ？」

人の心読むなし……………

「あ、アカツキ起きたわね？……………」

「なんでリリイが廊下で寝てるの？」

「了子……………ソレは、気にしない方向で」

「まあ何時もの事ね、さてと3人共今から

暁の検査するから退出して頂戴

リリイは、帰って仕事する事！」

了子が手を叩きながら3人に言うが、

アレコレいって残ろうとしたので

(特にリリイが) 武蔵に無理矢理

外に放り出しリリイを本部に連行する。

「さてと……………暁、

今の身体の状況は解ってる？」

「あーうん、などなく……………」

「アナタの中のおロチの血が帝都に

蔓延してる妖力の影響で活性化してるの」

「あーもしかして最近イライラも？」

「そうね、でも今は、イライラや不快感は

ないでしょ？ さつき、リリイが貴方に

纏わりつく憑いてる妖力を祓ったから」

それでも人が寝てる時にセクハラはやめれ

「それより紅蘭に謝っておきなさいよ？」

血の影響だったとはいえあんな物言い……

見る？ 盗撮してたから全部撮れてるわよ？」

「そう言い端末に今までの事が流れ……………」

死にたくなる。

「なんやねん完全にミカーモードやんこれは

「DOGGEZA案件よね？」

「今、格納庫で大神君が紅蘭を説得&口説いてる

から後で行きなさいね」

「わかった……………」

「後、米田司令に阿頼耶識の説明をしなきゃ

ならなくなつたから全部話したわよ、

詳しく復讐の事は、言わなかったけどね」  
「そっか……うん」

「今日は、一日謹慎ね、雷電の妖力遮断措置の

としないと駄目だからそのつもりでね

さあ今はゆつくり眠りなさい」

了子が言いながら頭を撫でる

暫くして暁の規則正しい寝息が聞こえてくる。

それと同時に警報が鳴り響いた。

後日談というか今回のオチ

あの後、格納庫にて紅蘭の目の前で

DOG E Z A を敢行し今までの琴を謝罪した

紅蘭もこの謝罪を快く受けてくれて

逆に謝られてしまった。

この後、すみれが徹夜までして作った

新しい舞台装置の設計図を元に、

俺と紅蘭、オタコンとで装置を作製、

吊り下げ装置『金斗くん』

最初は順調に作動し舞台『西遊記』盛り上げた  
まあ最後は、紅蘭のお家芸で爆発四散したが  
でもそこには観客、や紅蘭たちの笑顔があつた  
勿論俺もだが…………

????

「天海様…：帝国華撃団、壊滅の準備、

整いましてございます」

「そうか……………ご苦労じゃったな

六破星降魔陣、成就の為にはあ奴らは

目障りだからな……………一時の勝利に浮かれておれ」

「天海様、極みの魔装機兵『天照』の最終調整

も完了致しました」

「コレでコマは、全て揃ったというわけじやな

我が大望成就の時は近いぞお!!





## 第25話 崩壊の始まり①

夏もそろそろ終わる季節、

キントくんやすみれカンナのお陰で、

舞台『西遊記』の延長公演も今日で千秋楽

大神は、いつも道理モギリの仕事

暁はというと……

「あゝ離してくれない?」

「え? いや!」

浅草十二階下にある妖女が営む銘酒家

『刻影楼』の店主「白の白愛」が優雅に

紅茶片手に玉虫色のスライムに動きを

封じられてる暁の前にいる

テケリ・リ♪テケリ・リ♪

なんでこんな事になったかというと

朝の早朝ジョギング(大神、カンナと)

← 少しペースあげ二人より先に

← マンホールからテケリ・リ♪

← 飲まれる前に『たすてけ』と書き残す（血で）

← 今（ん）こ↑

「最近あの干物が五月蠅くてね」

「干物？」

「天海のことよく私一樣あいつ等に

作られた妖魔なの」

なんかサラツと重要な事言つたぞこのヤンデレ  
「それにあいつ等のやろうとしてる事って

私にもいい迷惑なのよ、帝都が無くなるよ

私達の食い扶持もなくなる訳だから」

そう言いながら机にファイルを置く

「私の知ってる限りの情報をまとめたの」

「お、おう……」

まさかここでこんな重要情報が手に入るなんて

嫌な予感しかしねえ……

「それでコレあげるから

「ゴホウビチョウダイ？」<ズイ

「ちよーよるな！触るな！」

アツー!!!

帝劇Side

早朝ジョギングの時に暁が誘拐され

急いで帝劇に戻り、司令に報告して

帰ってきた返答が

「居場所も解ってるから放つて置け」

だったのでこれ以上は、言えず

取り合えず怒り狂ってるあやめさんは  
見ない方向でこの場を後にした大神は、

『西遊記』の公演も終り館内を散策していた。

「そういえばそろそろ皆、

サロンに集まってるころだな…」

サロンに向かう道中でポロ雑巾な

様子の小さい人影が目に入る

暁である……

「あ、暁？大丈夫か……い？」

「よう……裏切り者……何で

助けにきてくれなかった？」

「いや、米田司令が放って置けって」

「ジジイ今度殺す！」

「しかし……凄いい格好だな……」

「男の尊厳を死守した結果だ……」

風呂行ってくる何か色々臭うしヌメヌメする」

「お、おう……」

取り合えず暁を見送りサロンに向かうことにした

(それにしても、あんな格好のまま支配人室に

何の用だったんだろ?)

そんな疑問がよぎるが気にせず歩きだす。

米田Side

朝の早い時間に玉虫色のスライムが手紙啜えて

窓に張り付いていたのは、きつとトラウマに

なるだろう……この歳になって変な声が出ちまった。

手紙の内容は、一言で言えばタレコミだ、

まさか倒すべき敵? からタレコミがあるとは、

最初は、半信半疑ではあったが現状藁にも縋りたい

状況だったので

「ま、いいか……」

暁を、生贄にした……

それから一時間後位に血相変えた大神が

飛び込んで来た、どうやら無事? 暁が拉致

されたようだ、取り合えず大神には、

放つて置くよう伝え（それで納得する大神もアレだが）  
それからたつぷり時間が経った昼過ぎに、

香水と言つて良いのか解らん甘つたるい匂いを

付けたボロ雑巾もとい暁が帰つて来た。

何か髪の毛がテカつてるが何が

あつたか聞きたくないのだ無視する。

「これ……白亜から……」

「おう（苦勞）」

「おい……おやつさん……何があつたか聞かないのか？」

「聞かんでも解るどうせあの妖魔に

拉致されたんだろ？」

「解つてるなら何で来てくれんのよ」

「いつも単独行動してんだ甘えんじやねーよ」

「後、何か裏で取引したようにスムーズに

事が進んでる気がするの、気のせいかな？」

「知らねーよ、ソレより何か臭うからとつとと風呂

入つて来い（夕方から夏公演の打ち上げするらしいし

から手伝ってやんな！」

「……………解った」

暁は、絞り出したような声で答え退室して行った

「さて……………」

白亜から寄越された情報を一人黙々と目を通す

「これは……………さて、どうするか…。」

米田は、この情報をいつ彼女らに伝えるか考える

そこには余り時間が無い事が書かれていた。



## 第26話 崩壊の始まり②

かぼ〜ん

「ああああああ……生き返る!!」

シヨゴスとあの変態にガリゴリ削られた

SAN値が回復する……

「はあ……後手に周りすぎてるよな……」

白亜が齎した資料を流し読みした感じでは

奴らは、地脈を利用した大規模魔術を行使

しようとしてる事、残り地脈ポイントは、

1〜2ヶ所……奴らの行動速度を考えれば

1ヶ所……

そして寛永寺に保管されていた

魔導具「楔」の紛失、寛永寺は元々、天海大僧正が

設立……何から何までか

「残りは日比谷か……リリー達間に合うと良いけど」

念の為リリイと鉄華団には伝えたが部隊の

特性上公に警備はできないし

日中はT Aも使用不可……

不安要素が多すぎる……

「わ〜い！ 誰もいない、1番風呂だ〜」

ゴス！< 暁頭強打

「あ、アイリス、タンマ!!今俺入ってる!」

「暁?」

「今出るから外で待ってて!」

「じゃ〜ん♪一緒に入ろうよ!」< N O衣服! N Oタオル!

「キヤーー!!」

結局アイリスと入浴する羽目に……

阿頼耶識の端子は見えない様に湯船に

凭れ掛かった。

今日なんか厄日だ……いや不埒な事にシテナイヨ

入浴後、打ち上げの準備を手伝い、粗方終わった頃、さくらが帝劇を出るのを見かけた。

「さくら買い出し？」

「さとし君？ええ急いで買いに行かないと」

「なら手伝うよ、さくらって

昔から慌てると変な力するし、

「もう！それは子供の時でしょ！」

「そうかあ？まあいいや、それじゃあ行こうよ」

「そうね、早く行かなきゃ」

そういえば、さくらと二人だけで買物って

子供の時以来かも……

そんな事を考えると少し笑えてくる。

根拠のない自信を持って先に行くさくら。

それを諫めつつ後を追う俺……

何時になっても変わらない光景……

「いいもんだよなあ……」

「どうしたの、さとし君？」

「内緒だよ」

「え〜」

そんなやり取りをしながら買い出しをしてたら

大分遅くなっちゃった。

カンナやすみれ辺りはもう始めてるかも……

「さくら急ぐうー……さくらっ？」

「……………」

少し震えてる？何でってああ……

「もしかしてまだ、あの事引きずってるの？」

「さと……………しくん……………」

空は、少し曇りだし遠くでゴロゴロと雷が鳴っている

「俺は、気にして無いんだからあんま思いつめるなよ」

「でも……………」

まあトラウマになってるなら仕方ないか……

「ホレ……………おぶってやるから行こうよ」

身長の事いったら傾す

「て……………繋いで……………おんぶは、恥ずかしい／＼／」

「やれやれ……」

さくらの手を持ち、少し早歩きだ帝劇へと戻る  
その間ずつとさくらは無言のままだった。

### 帝劇 Side

楽屋では、既に我慢出来なかつたカンナ、すみれ

打ち上げを始め、それに乗つかる様に紅蘭が

かくし芸をし始め、マリアは3人に小言程度の注意を  
入れるも度数の低いお酒を飲んでいた。

「さくら君に暁、少し遅いな……何かあったのかな？」

「おぼけにでも襲われてるんじゃないか？」

「ハハハまさ……か……」

うんアレは、オバケじゃ無いし……な

「あら？雨がふりはじめてるわ。」

「……夕立ですわね。この雨のせいで

遅れているんじゃないか？」

「うくんオバケか……」

「ここで少し考える素振りをした紅蘭がニヤリと笑い  
「そやー！良いこと思いついたで！」

皆でオバケのカッコしてさくらはん達を

驚かさすんや!!」

皆が心配しているところで悪乗り全開の紅蘭が

ドツキリの提案をだした。

「さくらはん達がビックリしたところで

『はい、ゴメン』ってな感じや。

打ち上げの余興や！」

面白そうでは有るがさくら以外に暁もいる状況で

こんな事したらナニされるか解らないと考えた

大神は……

「流石に少しふざけすぎだぞ。」

「隊長の言う通りよ、打ち上げだからと

いって羽目を外しすぎよ」

「まーまーたまには良いじゃなーか」

「せやせや！今日は無礼講や」

結局、紅蘭とカンナによってなし崩しにドツキリをする事に、カンナとアイリスは、テーブルクロスをかぶりすみれは懐中電灯で下から顔を照らしスタンバイする。

尚、大神とマリアは、部屋の隅にてその光景にため息を付きながら傍観している。

「……まだ雨が降っていますわね」

「アイリス、何だかドキドキしてきちゃった……」

「しっ……さくらはん達が帰って来たみたいや」

廊下から確かにさくらと暁の話し声が聞こえてくる

「はあ……すっかかり遅くなっちゃった……」

「いきなりの夕立だったし仕方ないよ

アイツら料理全部喰ってないだろうな……」

(まだやで……さくらはん達がドアを開けるまで

待っんや……)

コンコン

「あの……さくらです、遅くなりました。」

(フフフ……いよいよですわ……)

皆がいざ！驚かさうとした瞬間……

ピシャーーンと轟音と共に雷が落ちる！

「……!?雷……?」

その瞬間

「あつ!!」

「つーさくらー!」

さくらの悲鳴が『部屋の外』から響く

「あれ!?さくらくん達、部屋に入っていないのに

……何におどろいたんだ!?

二人共どうした?大丈夫か!?

大神達が部屋から出ると……

尋常では無い程に震え怯えながら眺に

しがみついているさくら目に映る。

「大丈夫ださくら!俺はここにいます!?!」

「雷様に……お、おへソとられちゃう!」



「はあ？」

「さくら……貴女、本気で言ってるの？」

「大神……打ち上げは中止だ。」

今は、さくらを落ち着かせよう……」

「解った……」

すみれとマリアは、さくらが何を言ってるのか

解らなかつたみたいだが、さくらの怯え方が気になる、

しかし……」

『大神少尉、八神中尉。米田長官がお呼びです』

司令官室まで、お越しください』

「くそつよりによつてこんな事時に……」

「マリア、済まないけど少しの間さくらを頼む」

「解つたわ……隊長も行って下さい」

「ああ……」

館内放送が流れ、暁と大神は、司令室に向かつた

『崩壊』が近づいてきている

## 第27話 崩壊の始まり③

「ハア…ハア…ハア…シンド……」

止めどなく襲つて来る脇侍を撃破し、

既にその残骸は20を超えるが今だにコイツは、  
増えている……切がない……

暁はこの時、躊躇い無く禁断の『スイッチ』を入れ

『阿頼耶識リミッター解除』

『蒸気機関エミュレーターモードから

コジマ粒子機関エミュレーターモードスタンバイ

Ready:GO!』

その瞬間、暗い格納庫に翠の光と蒼い焰が現れた…

『30分前、作戦指令室』

俺と大神は、作戦指令室を訪れると

米田司令とあやめさんが真剣は様子で

俺達を待っていた。

「来たな二人共……」

「漸く黒之巢会の目的が判明したぞ」

「何ですって!?!」

「」

「我々の蒸気演算器と第三者から

受けた情報を加味して判明した」

俺が頑張って持ってきた情報を演算器にて精査

したようだ内容は、最初に見た情報より

詳しく纏められていた。

やはり向こうの動きが早く、俺の予想通り

日比谷公園が最終ポイントだった。

「この魔法陣が完成したら帝都は確実に

魔の手に落ちる、

魔法陣によってどれ程の破壊が行われるか……

想像もつかん」

「これこそが、ヤツらの仕掛けた魔術だったのよ」

あやめさんが親指を噛む仕草をしながら悔しがる

「つまり俺らは、勝ち続けていたと思っていたが

その実ヤツらの企みは、

阻止出来ていなかったと……」

「なんてことだ!」

「天海が、400年前の魔人なのかどうか

定かではないけど……でも、彼らにとつて西欧の

文化に染まった、私達は帝都を汚す不屈き者

というわけ。」

「俺達の手で築いたこの帝都を、魔物どもの

好きにさせてたまるか。

大神以下、花組、八神は第一級戦闘配備のまま

待機しておくよつに!!」

「了解しました!!」

「了解……先に機体立ち上げて待機してるから

さくらの事頼むよ……」

「解った……頼む」

大神と別れ格納庫に向かう

暁Side

「機体の調子は？」

「妖力遮断処置は問題ないよ」

「コシマ粒子は？」

「出力は安定してるけど……」

「なんか……嫌な予感がする……」

日比谷公園の皆の状況は？」

「済まない……通信が繋がらない」

「無事……ならいいけど」

なー大丈夫だろ、殺しても死なない奴等だし

「！……暁気をつけて！？妖力反応感知！」

その時格納庫から激しい爆発音と振動が響く

「奴らまさかココを急襲！？オタコンと了子は、

退避を、コシマ兵器は？」

「以前の事以降、本部に輸送済みだ……これは…

敵の中に強い妖力反応！幹部クラスがいる!？」

「雷電出すぞ!! 皆は?」

『さくら機、隊長機はまだのようた……』

どうしたんだろ……さっきの爆発の影響で

何処か崩壊して……』

「済まないオタコン……頼む」

「……解った任せてくれ!？」

さて……コイツらをスクラップにしてやんよ!!

そして冒頭に戻る

「ハア……ハア……ハア……」

視界がクリアになる……機体が思い道理に動く

まるで自分の身体のように……

「馬鹿な……貴様なんだその力!？」

それにその焰……まさかオロチの?」

「お前には関係無い……いい加減クタバレ!」

紅い脇侍を鉄火無銘で両断しその残骸を蒼焰で

灰にする……

「暁……そつちの状況は?」

「問題無い……とは言えないかな?」

ヤベ……鼻血と右目から血が止まらねえ……

敵の攻撃をPAで防ぐ

「流石にAAをこんな所で使えないか……」

しかしこの妖力……鬱陶しい!」

周囲に達込める妖力の影響で少しづつPAが

減衰してきている……

「マリアもう少しでそつちと合流出来る大神達は?」

「別区画にから此方に移動中よ……私達の方は

敵しい状況よ……敵の数ど妖力のせいだ

機体にダメージが……」

「すぐ行く!」

敵を蹴散らしながらマリア達と合流するために、

最大速度だ移動する、

「合流まで後3分!？」

帝撃Side

「も、もう……あかん……」

「っ！諦めてはダメよ!？」

マリア達も多くの敵と交戦していたが

多勢に無勢、花組のメンバーも長くは保たない

状況であつた。

「……までだな小娘共、我らに齒向かつた事を

地獄で後悔するがいい！あははは……」

紅の弥勒が高笑いを上げる……その時！

『……までよ!!』

3人の声が響く

桜色と白銀の光武が脇侍を一刀両断し

サンドイエローのTAが敵を蒼焰で焼き斬る。

「なっ何!!」



「さくら、隊長!？」

「アカツキ!!」

「隊長!？」

「遅いで3人とも!!」

「まったくですわ!？」

さくら、大神、暁が揃い花組メンバーの

士気が回復する。

「あははは……たった二機で

なにかができる!!者どもいけ!」

「大神!みんなの所に、こっちは任せろ」

「暁くん!その焰……まさか……」

「さくらくん?それに暁その機体……」

「大丈夫だよさくら大神、機体のリミッターを

解除しただけだ……俺の本気見せてやる!」

(あの翠の光、それにこのエネルギー量まさか)

(コジマ機関!そんなまさか……人型蒸気に搭載

できるほどの小型化があり得へん……)

マリアと紅蘭が暁の機体の異変に気が付いた同様に、小型化コジマ機関もしそれが世界に広まったら、

もしそれが心無い者たちそう、黒之巢会の様な者に渡ったら……世界はコジマの光に包まれる。

「コレでラストオオオオ！」

斬馬刀で目立った敵を斬り伏せる

「ミロク……貴様もここまでた！覚悟しろ!!」

「フフフ……この紅のミロクの本当の力を

見せる時がきたようね。」

ミロクが今だに強気にあざ笑うが、

蒼焰を纏った八目のセンサーアイ

に紅い光を灯した機人がミロク目掛けて迫る、

「喧しい……死ね!!八神流『鬼焼き』」

ゴオウ!!

暁の腕から蒼焰が溢れ、飛び上がりざまに

ミロクを焼き払う。

「ぎやアあアあああ!!」

蒼焰がミロクを『ミロクだったもの』に変える

暫くミロクは、のたうち回りやがて動かなくなつた

「……………」

「おわ…………た…………つ!ぐあ…」

「暁!大丈夫か!」

「大丈夫…………少し無理、した…………だけだから」

「兎に角、医務室に!」

「解つた…………大神…。」

帝劇地下での戦闘も終わり安堵したその時

『暁!?!聞こえるかおい…!?!』

緊急回線から団長から通信が入る

「オルガ?」

・  
・  
・

『済まねえ…奴らに抜かれた!!』

「!?!コイツ等は、足止めか!!大神!?!」

奴ら『やりやがった』!!」

「まさか!？」

その瞬間、帝劇をイヤ、帝都全域に衝撃が走る。

関東大震災が起きたかのような揺れと共に、

ていとのと至る所で建物が崩壊し、路面電車が

事故を起こし、火災が広がる……

正に地獄そのものだった

「ぎ、ぎやああああ!!」

さくらが急に悲鳴をあげ気を失い

「ぐ……ああああ……」

コックピット内にいた暁は、

自身の暴れる『血』と『焰』を制御するため

苦痛に耐えていた……

耐えるため狭いコックピットで暴れた為、計器に

触れてしまい暁機のコックピット内の映像が

他のメンバーの機体に『送信』さらっていた

阿頼耶識と接続され、

鼻血と血涙で染まったコックピット内が……

## 第28話 血戦・命の限り①

天地がひっくり返る程の揺れが帝劇を・・・帝都を襲う。

帝劇の様な造りがしつかりしている建物は辛うじて崩落は、

していないものの窓ガラスは無残に飛散し。

壁に罅が走る、またそれ以外の建物・・・長家作りや木造民家は

揺れに耐え切れず倒壊・・・多くの人がその下敷きになり助けを乞う声が響き。

路面電車は勢いよく横転し多くの人を轢き潰し悲鳴があがる。

今まさに帝都東京は地獄の様相であるその中で尚も高笑いをしている人ならざる者

『魔人天海』がその地獄のような光景に歓喜する。

「おお・・・なんとという力だ！素晴らしい力、コレさえあれば我らの理想が復活するのだ  
!!」

天海がこの力に酔っている中、黒き叉丹がポツリとことばを漏らす

「コレが『六破星降魔陣』か・・・」

彼は含みのある笑みを浮かべる・・・

帝都に瘴気が満ち人々が疲弊仕切った頃、街中に天海の声が木霊する……

『ハハハハハハ！我は黒之巢会総帥、天海である!!』

帝都に生きとし生けるものどもよ!!見たか、我が力を!』

『我が力を以ってすれば、汚れた帝都から』

西欧の血を洗い流し……かつての徳川幕府を

復活させるのも造作もない!』

『哀れな帝都の市民に告ぐ!お前たちに残された時間は……』

あと一時間だ……』

『即ち午前四時まで、政府は解散し我らに降伏せよ!』

『その証として帝都銀行の保有金100億と米田中将並びに』

セレリーナ・リリイ・トラス准将の命を差し出すのだ!!』

『約束が守られぬ時は、帝都壊滅の瞬間が訪れる!』

ウワーハハハハ!!』

そう言い残し天海の姿はこつぜんと消え失せた。

????  
s i d e

「ちよつと．．．あの小物挽肉にしてきますね」へニツコリ

絶対零度の笑みを浮かべたりリイが愛用のスレッズジハンマーを見せながら、

ほかの賢人機関の人たちに注げる

「ちよ．．．ちよつと落ち着きたまえ『令嬢』」

議長を務める勇氣ある賢人機関の一名が彼女に声をかける。

「え？相手は所詮たいそうなお題目掲げていますがただの強盗風情．．．

『私達』なら瞬きする間に皆殺しですわウフフフ．．．」

普段の透き通る程の綺麗な蒼い瞳は血のように真赤に染まった瞳を

しながら議長にニツコリと答える。



「しかしこれからどうするべきか？」

「ふ、ふんバカバカしい断固無視すべきだ」

「しかし市民の命が最優先だ！ いかげしますか総理！」

「……皇居からはなんと？」

「……ただ一言『勇気あるモノたちの決断を優先せよ』と

まるでこの騒動を歯牙にもかけぬ様子ただ何時ものように優しく微笑んでいました」

「……何を考えているのだ陛下は……」

「陛下は、何も心配などしていません、この帝都が日本が滅びる事はないと

それに彼らがいる限り幕藩体制になど戻りはしませんわ……

それでは私はコレにて失礼させていただきます。」

「何処へ行くのかね？」

「勿論、素敵なパーティー（戦場）にですよ？ フッフッフ」

(コエエエエエエエエエエエエエエエエ)

sideout

『同時刻帝劇』

「あやめさん！さくらくんと暁の容態はどうですか？」

「さくらに関しては今直ぐに医務室に運び込んだけどまだ意識は……」

それに暁は……以前『あのまま』よ……」

「何故！早く医務室に連れて行かないんですか!!」

「阿頼耶識が接続されたまま気を失った場合無理に接続を切ると

身体にどんな悪影響がでるか分からないのよ……」

「つく……阿頼耶識とは一体何なんですかそれにあの惨状は……」

そこに一人の女性が表れる『了子・アスピナ・アクアビット』である

「正式名称、阿頼耶識システム脊髄に『ピアス』と呼ばれている

端子を外科手術によって埋め込み、これと操縦席側の端子を接続することで

機体とパイロットをナノマシンを介して直結させる」

「了子さん？」

「っ……」

「これによつてパイロットの脳に疑似的に空間認識を司る器官を形成し、

機体を自身の体の様に自在に動かす事が可能になる

そして『機体とパイロットが直結している』という状態はパイロット自身の意思

でしか解除できず、強引に動かすこともできない、パイロットが意識を失うと

機体との相互リンク解除を含む一切の操作が不可能になるの」

「何故……そんな危険な物を……」

「さくらちゃんから聞いてない？ 彼……子供の頃に彼と彼の家族が惨殺させたこと」

「なっなんだって？」

「彼のカラダの大半は人工物にそしてナノマシン治療をしなくては助からなかったその

時に」

「彼以外は誰も？」

「彼の妹の遺体がまだ見つかっていないのと、彼自身が攫われたところをみている……

おそろく今も

どこかで生きていると思うわ……真つ当生き方かどうかわからないけどね」

そこで大神は、暁が行ったことを思い出す……

『復讐』

「暁が言っていた復讐って．．．この事？」

「ええ．．．そしてその仇の候補が黒之巢会よ」

「まさか！」

「白の白愛っているわよね？彼女がその証拠．．．彼女ね

『暁の母親の頭部を媒介にして作られた妖魔』なのよ．．．彼女自身が教えてくれたわ」

「そ、そんな．．．暁はこの事．．．」

「教えてないけど薄々勘付いてるわ」

「暁は．．．大丈夫なんですか？」

「医務室につれてけないからはつきりとは解らないけど軽く調べた感じだと身体に異常は無いわ

リミッター外したせいで脳に負荷が掛かって血涙と鼻血がでたのね．．．まあこれ以上リミッター

外したら確実にどつか後遺症が出るわ．．．」

「なら！」

「戦闘から外すつていつても彼とまらないわよ？」

「つく……」

「さて……私はそろそろ行くわね……やること沢山あるからじゃくねく」

彼女はさつき迄の真剣な表情から何時もの様子に戻つてその場を後にした。

「あやめさんは……復讐の事は……」

「知つていたわ……でも……ダメね、いつも彼のお姉ちゃんのもりでいても結局

彼を止めることや……癒してあげることまでできないのだから……」

暫し沈黙が続き、その後あやめは、大神と一緒にさくらの眠る医務室に向かつていった。

それから暫くさくらの様子を見て医務室から出るときに

「大神くんわかつていると思うけどさくらの事や暁くんの事は……」

皆にだまつているように釘をささそうとしたその時、遠くから複数の走ってくる音が

「さくらはん暁はん無事か!？」

「お兄ちゃん、暁は？暁は無事なの!？」

「少尉……暁さんとさくらさんの容態はどうなんですの?」

「あ、ああ……心配いらないよ、さくらくんは全く怪我もないんだ今は眠っている。

「暁に関しても同じく眠ってるただ今は大事をとって面会は出来ないんだ」

「怪我也無いのに『医療ポッド』をつかつとるの？おかしいで、ソレ」

「さくらさんにかんしては頭をうったのかもしれないが・・・アカツキサンノハ？」

「オニイチャンアカツキハ・ネエ・・・ドコガダイジヨウブナノ？」

「あ・・・これ無理」

さくらに関してはこのはぐらかしでいけるが如何せん暁に関しては皆にコックピット内を

見ているので誤魔化しは難しかった。

「アイリス、すみれ落ち着きなさい暁がああ位でどうにかなるわけないわ」

　　マリアのその声でヤンデレ二人は少し考えそして

「そうだよね・・・暁ならヘイキだよね!!」

「そうですわね・・・暁さんのコトですものね」

「(マリア?・b・w)」

「さくらの事もわかりました、さあ皆、二人のことも心配だけど作戦会議が始まるわ」

「そうね。じゃ、みんな作戦司令室に行きましょう」

「(帝都は危機に晒され、暁やさくらくんは意識不明・・・なんて事だ)」

## 『作戦司令室』

そこには既にさくら、暁以外の全員が揃い、モニターにはリリーの姿も写っている  
「俺らの命がほしいだと・・・よおし、いいだろう！天海!!」

刺し違えてやるぜ！」

『フフフフおじ様、刺し違えるなんてとんでもないわ、あんな所詮金銭欲の固まりの小物・・・』

叩いて削ってへコマシテ豚も食わないパテにして差し上げますわ・・・フフフウフ』  
自分たちのトップがメチャ怖い件について・・・特にモニターの幼女!!

「長官!!」

「どけい!! 奴らがせつかく死に場所を作ってくれたんだ!!」

『ちよ!! 武蔵それにオルガ! 離しなさい! H A N A S E !!』

「いいえ! どきません! 司令一人を行かせる訳には行きません!」

大神が立ち上がり米田へと叫ぶ

ゴキ!!

「なに!!」

大神と米田がそんな暑いやり取りをしているなかモニター内では武蔵が金属バットでリリイを凹ませている。

「天海の所にいくのは司令ではなく俺たち帝国華撃団・花組です!

それに自分たちは死に場所を求めて行く訳ではありません

天海を倒すために……

帝都を守るために……

花組は出撃するんです!」

「警察は……陸海軍はどうしたんですの?」

「……忘れたの?軍や警察の装備では黒之巢会に抵抗できないわ

民衆を避難させるので限界のはずよ」

『失礼准将が不慮の事故で眠ってしまったのでこの武蔵が報告します以上』

「なにかしら?」

『現在フェイスでの皇居護衛人員以外での遊撃可能な戦力二個小隊の準備が出来ていま



す以上」

「さつきもいいましたが軍の装備では・・・」

「そちらこそお忘れですか？我々が『何なのか』どういう『集まり』なのか

『阿頼耶識搭載T A四機編成小隊2部隊』の準備は完了以上」

「阿頼耶識搭載機が計8機!!だと」

『はい・・・ですのでここでひとつ作戦提案がありますオルガ団長説明を以上』

『ウツス、フェイス実働部隊1番隊『鉄華団』団長オルガ・五花です早速作戦説明を」します』

色黒白髪 of 青年が淡々と作戦を説明する、作戦は単純な陽動作戦だ。

フェイス率いるT A小隊2部隊が敵拠点を襲撃派手に暴れることによつて敵の注意を引き、

花組メンバーで敵総裁『天海』を討つという作戦だった。

「しかしそれではそちらの被害が！」

『初対面の俺らの心配してくれるたあ嬉しいけどよ俺らを舐めんよ俺ら『鉄華団』およ

それに奴らには色々落とし前をつけてもらわねーとなだから隊長さんよ頼むぜ』

オルガは初対面の大神にいつもの口調で喋り・・・武蔵に殴られ退場・・・

『皆様の御武運を願っております以上』

「ならウチラは天海の居場所を突き止めなあかな!!」

「しかしどうやって?」

「そのための上記演算機やないか天海かどうか限定できへんけど

鉄華団の人らが敵を引き連れてくれとるからそれを除外して強い妖力を感知して地

図に

投影するれば!!」

「よし! やつてみよう・・・行くぞ!」

「それじゃあみんな解析の準備をするわよ!」

マリアの掛け声で花組メンバーはその場から離れ残ったのは、

米田とあやめの二人だけに・・・

「ふふふ・・・おれらの出る幕なし、だなあやめ君」

「ええ・・・頼もしくなりましたね彼も」

「ああ、ヤツももうすぐ一人前だな・・・イイ面になったじゃねーか」  
そんな感傷に浸っていると皆の足音が聞こえてくる。

「お？準備が終わったみたいだな」

「よっしゃ！準備は完了や！後は仕上げを御覧じろやな!!」

大型モニター、スイッチオン！蒸気演算機、計算開始や!!

モニターには帝都の地図とそこに無数の反応が表示されている

帝都の西側と南側に多くの反応が集まっていることから、

鉄華団の作戦が上手く機能しているようだ地図上には巨大な反応が二箇所特にその

一箇所は

高い反応を示していた。

「隊長・・・どう思われましたか？ひときは大きい光点が写っていましたが・・・」

「俺はあの大きさ・・・天海ではないと思う」

「何故です？」

「規則的に並んだ魔方陣の光点のなかで、あの光だけまさに異彩を放っていた、

どうもそのことが引つかかる」

大神が悩みながらそういうもすみれ、紅蘭、カンナがあの妖力を放つ存在を捨て置く

ことは出来ない」と

そして現にじかんが限られているなかどうしてもキメ打ちで行かないことには……  
「隊長わたしも皆の意見に賛成します今は、迷っている暇はありません出撃しましょう  
！」

「……そうだな判った！あの強い反応を天海と想定しよう」

「帝国華撃団・花組出撃せよ！目指すは天海の本拠地だ!!」

花組メンバーは暁、さくらを残し出撃したこの先に何かあるとも知らずに……

『格納庫雷電ハンガー』

オタコンと整備班が雷電の修理補給作業に追われている最中

雷電のコックピットでは、血を綺麗に拭き取られた暁が静かに眠り続けている

しかしいつも彼のバイタルや魔力を確認している了子は、さくらのところに言っていたため

たれも気がつかなかった・・・

彼の魔力と同調率と代謝機能が徐々に上がっていることに・・・

「あれ？」

「どうした？」

「いや・・・なんかこいつ今指動かなかったか？」

「気のせいだろ？ボウズはまだ寝てるよ・・・」

「そっか・・・気のせいかな・・・」

『目覚め』は近い・・・

おまけ

くく陽動メンバくく

「「無理無理無理無理!!多いつてコレエエエ」」

「無理じゃない!ほら!右から10体きてるぞ!!ぶつ殺せ!!」

ウオーモングーな小隊長率いる第一小隊が100体近くの脇士に包囲されるも善戦していた。

## 第29話 血戦・命の限り②

眠い……すごくねむい……

まるでぬるま湯に頭の天辺までどっぷりと使っている感覚が暁に襲いかかる  
寝てはダメだ……

頭の中でそう警告してくる……

ここで眠ってしまったらきつと……『戻って来れなくなる』  
だけど……

「眠い……」

意識が遠のく頭に警鐘が鳴り響くもこの心地よい眠りには抗えない……

「起きんかバカ息子！」へズブ♂

アツーーーーーーー!!

何者かが持っていたふと目の木刀で暁の尻を突き上げる

「何すんじやボケエエ気持ちよくねようとしてたのに危うく別の意味で昇天しかけたわって

．．．．．親父何してんの死んだはずじゃ？」

「残念だったなトリック（物理）だよ．．．つかあのまま寝てたら魂持ってたぞ？」

「何に？」

「雷電に．．．」

「うわゝマジかー」

「まあ多少持つてかかっているから何かしら症状は出るがな．．．久しぶりだな暁（さとし）」

「ん．．．親父も久しぶり．．．で何しにきたの？」

「そんなの決まってるだろ．．．．稽古だ！」

死んだはずの暁の父『八神宗蓮』が木刀を暁に投げ渡す

「オロチの血に飲まれおって．．．いいかオロチの力も所詮ただの力そこに善悪などない

力を振るうのは何時だって人だ、人が力に振り回されてどうする！」



蒼い炎を纏った斬撃が容赦なく暁に襲いかかるも暁は、  
それを受け流し相手の首を中途なく撥ねようと斬りかかる

「ほう．．．容赦のない攻撃ですが．．．『人を多く屠った』だけはあるな」  
「っ！」

「知らないとも思ったか馬鹿者め．．．だが私は咎めたりはせん、  
それがお前の誓った事のためなのだからな」

「．．．．．」

「復讐を果たし妹は助ける．．．か」

「なんだ！復讐は愚かなことだとも言う気か!!」

「いや言わん寧ろ存分にやるがいい．．．わたしも復讐をした事のある人間だからな」  
「は？」

「お前の母『八神紫』旧姓『神楽紫』．．．神楽家は退廃的で閉鎖的な一族でな

一族に他の血が混ざるのを嫌い近親婚を繰り返し自分の娘を犯し子を腹まそうとす  
る狂った一族だった」

「えらくクレイジーは一族ツスネ」

「うむ……で、紫の処女を実の父親に奪われ精神を病んだ紫のかわりに俺が神楽家を滅ぼした」

このオヤジ一人でお家壊滅させてらあ……このキチガイめ

「それから紫も落ち着き結婚してお前とマキが生まれたんだ……」

「復讐してどうだったよ？心晴れたか？」

「あ？晴れる訳無いだろ……寧ろ落胆したなここまで恨みつづけた相手がこんなにも『弱い生き物』だったとはな……と」

「復讐しても心は晴れん、晴れるとしたらその先、

復讐し手に残ったものが祝福してくれるものであるか無いかだ

少なからず紫は元気になりお前らが生まれてきたことが祝福だった……

復讐しなかつたらきつとこの祝福ななかつた紫は壊れ

ただの孕み袋になりさがってこの世全てを呪って死んだだろう」

「……………」

「いいか復讐を完遂したとき手に残されたモノを大事にしろ」

激しい剣戟の最中、親と子の会話が続いた……

「そっだ……お前にひとつ伝えておく」

「なんだよ？」

「紫似の妖魔……白愛だったか？あれは決して紫の生まれ変わりではない、魂は別モノだ」

「っ……まさか……」

「死体は所詮死体、神楽の力は魂と直結している魂無き肉塊で作った物など所詮似ているだけの

別ものだ、だから……近親相姦とか気にせずやって平気だぞ!!」

「死に腐れ!!!」

「ハハハ！金髪幼女に名家のお嬢様、妖魔に神様……お前中々豪華なハーレムだな!!」

「ウルセエエエエエエエ!!!」

パキ……

叫びながら宗蓮にかかった瞬間暁の中で何か硬いものが砕けた音が響く

その瞬間体がゴウゴウと蒼い炎が吹き出す・それと同時に左手甲に

蒼い月輪（ガチリン）の意匠が刻まれる。

「やっと……『成った』か……」

「親父?・・・コレは・・・」

「暁・・・この瞬間『八神流古流剣術免許皆伝、並び八神家頭首継承の儀』を終了する  
これよりお前の真名は『颯』である・・・」

「継承の儀・・・それに『颯』?」

「この時より暁・・・今後親しきモノ以外にこの名を明かすことは許されない」  
「・・・」

「ふう・・・さて堅苦しいのここまでだ・・・お前は早よ起きて日本橋に行け」

「日本橋?なぜそこが?」

「そこにあの干物がいる・・・魔を封じた門のある地それが日本橋だ」

「魔つて・・・天海立ちのことか?」

「あんな雑兵じゃねえ・・・降魔が封印されている場所だ」

「降魔つてオヤジが戦ったあの・・・」

「・・・」

「そう言うのと宗蓮の身体が徐々に霧散していく・・・」

「お前とこうして剣を交えて本当に良かった・・・さあ往けそして『復讐』を  
果たすがいい・・・マキを・・・頼むぞ」

宗蓮が完全に霧散した時いまままでいた世界に亀裂が走り砕けた

そしてそこで暁の意識が暗転する

『格納庫雷電ハンガー』

「一体何が起きているの!!」

了子の声が格納庫に響き渡る、現在補給と修理が終わり休止していた雷電が突如起動、期待数値が一気に異常値を叩き出す。

『呼吸数』『脈拍』『血圧』『体温』『魔力』そして『同調率』が

『アアアアアアアアアアアアアアアアアア!!』

「暁?目が覚めたの!!!返事なさい!!」

「暁!?!聞こえてるかいオイ!」

オタコンとい了子が叫ぶと一通り叫んだ暁から通信がはいる。

『聞こえてるよ二人とも・・・うん聞こえてる!』

「無事なのね?カラダの調子は?」

『問題ないよ・・・オロチの血も力も完全制御出来る』

「なんですって?どうやって・・・」

『今は時間がない直ぐに日本橋に行かなきゃ?』

「日本橋? 何故……」

「あの干物ヤローがそこに居るからだ!」

「どうして解るのよ?」

「クソオヤジが『教えて』くれたからだよ」

「まさか……兎に角曉聞いて状況を説明するから!」

オタコンここに持つてきたVのコンテナお願い!」

『『V』つてまさか! ここまで? 無茶だ!!』

『今は時間がないのお願いだオタコン』

「判った!」

そこから子から現在の帝都の状況、花組の動き、

そしてさくらがひた足先に出撃した事を

「曉聞こえるか?」

「米田のおやつさん……」

「無事、なんだな?」

「うん……」

「皆を……頼む!!」

「任せてくれ!!」

※『雷門仲見世通り』

〃〃緊急警報!!緊急警報!!〃〃

付近の住民は至急退避してください繰り返します

付近の住民は至急退避してください

翔鯨丸の出撃アナウンスが流れるが既に翔鯨丸はさくらを載せて飛び立っていた

地上ハッチが開きそこからせり上がってきたのは

カタパルトに固定された雷電しかしその背後には・・・

ロケットエンジンを幾重にも重ねたような巨大ブースター

『コジマ動力試作霊子甲冑雷電専用強襲追加推進器』

『ヴァンガード・オーバード・ブースト』

『進路クリア!コジマ粒子のプラズマ変換OK何時でもいけます!!』

「うむ……八神暁中尉出撃!!」

米田の命令で最終安全装置が解除される。

「さあ暁!鳥になつてらっしゃい!!」

※ 今、甲高い轟音と共に地上から『流星』が飛び立った……

品川・花組 side

現在、花組は黒之巢会死天王の一人黒き叉丹の策略により窮地に立たされていた。しかしそこにさくらが合流し状況は好転したかに見えるも、

敵陣は厚く中々突破できずにいた。

「つく早く突破しなくては!!しかし……」

「敵が多すぎるで!?!」

「ちくしょう!急いでるつてのにコノオ!!」



「少尉！どうにかありませんこと？」

キイイイイイイイイン

「隊長……ここは私が囿に！」

「ダメだマリア!!全員で突破するんだ！諦めるな!!」

キイイイイイイイイイン

「アイリスどうしたの？呆けて……」

「ねえ……みんな何か聞こえる……」

『え?』

キイイイイイイイイン

たしかに遠くから甲高い音が聞こえるしかもそれは……

キイイイイイイイイイン

明らかに近づいてくる……この異常に花組は勿論

てきの軍勢も固まる……そして

キイイイイイイイイイン!!!

敵陣の一角に流星が突貫し道を作り……空から蒼炎がまるで羽根のように靡かせ

る

「デザートイエローの人型蒸気が降り立つ……」

「あ……アカツキ!!!」

「yes! I am!!!」

「皆今のうちに撤退を!!」

「了解みんな行くぞ!!!」

「了解!!」

今ここに帝国華撃団・花組が全員集合したのだった……

## 第30話 血戦・命の限り③

品川の敵陣を突破し急ぎ日本橋に移動するため全員、

翔鯨丸に搭乗し移動している無論暁もだしかし・・・

「あーうん左目『持ってかれてる』よな・・・」

阿頼耶識の接続を切った瞬間、左目から光りが失われたのだ、

「親父が言つてのはこのことか・・・まあ手足動くからいいけど・・・」

「イイワケナイヨネ？」

ドン!!

聴き慣れているはずの可愛い声なのにどこか怖い・・・てかメチャ怖い  
アイリスにいつの間にか押し倒されていた。

「あ・・・ありのまま 今 起こった事を話すぜ！

俺は、正面を向いてボヤいていたと思つたらいつの間にか

押し倒されてマウントを取られていた・・・

な…何を言っているのかわからねーと思うが俺も何をされたのかわからなかった…  
頭がどうにかなりそうだった…催眠術だとか超スピードだとか

そんなチャチなもんじゃあ断じてねえもつと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ…」

「ソウユウネタ…イマワイイカラ…」

「アツハイ…」

「…目がそうなったのって背中の機械のせい？」

「あーもしかしてバレてる？」

「ううん…知ってるのはアイリスとお兄ちゃんとかあやめお姉ちゃんだけ」

「そっ…か…」

「アカツキ…」

「うん？どうs…」

「チュ…クチュ…」

「あー…うん…」

まさか押し倒された状態で…キスされるとはしかも深いヤツ…

「あのくくアイリスさん？」

「暁……子作りしよ？」

……

は？いや……なにいつてるのこの幼女!!!

「……なんでそうなるし……」

「暁が無茶!!スルカラダヨ……自分の体がジブンノモノダケジャナクナレバ

無茶……シナクナルヨネ？」

アイリスさんの目がグルグルしてるくく

綺麗な瞳が物凄く濁ってる!!!

「じゃあ……暁いただきます♪」へココ翔鯨丸の廊下ですが？

イヤアアアア金髪ロリに食われる!!!

満面な笑みを浮かべたアイリスが暁の服に手を掛けようとしたその時

「お待ちなさい!!」

その言葉と共に颯爽と現れたのは銀河美少女・・・じやなかった  
神崎すみれだった・・・

「すみれ・・・?助かった」

「ツチ・・・」

舌打ちすんなキチロリ!しかし本当に助かった・・・?b、ω、  
と思っただけ・・・

ツカツカとこちらに歩いてきたすみれは、暁を抱き起こしそして  
「暁さん失礼しますわ!!」

ズキユウウウウウウウウウウウウウウウウ!!

「暁さんの童●は私が貰いますわ!!!」

ぼっ

「バカジャネーノお前ら!!!それにど、ど、●貞ちやうわ!!!

「え?」

「あ……」

そんなやりとりをしていたらやはり騒ぎを聞きつけたマリアが二人に鉄拳制裁をして事無きをえた・・・  
さすが『ただの優しいオカンのマリア』・・・

「暁も一発逝つとく?」

「ごめんなさい……」

【翔鯨丸ブリッジ】

ここですくらが昏睡していた時の出来事やおれの事を皆に話、

の  
さくらの『破邪の血』と俺の『オロチの血』とそれを完全に制御出来ることとその証

『蒼い月輪』の紋を見せた。

「それじゃあ暁は、暴走する心配はないんだね」

「おう．．．みんなには心配かけたね」

「でも暁はんその左目．．．」

「あくコレ？帝劇の戦いで少し『魔力使いすぎでの反動』でこうなってるだけだからすぐ良くなるよ」

「つ．．．．．」

「．．．．．」

「それなら．．．よいのですが」

大神とアイリスはこの言葉が嘘だと知っている．．．もうその目は、機体と直結しなければ

見えることは無いのと、暁はこの戦いが終わるまで黙っておくことにしたのだ。

これから命をかけた決戦になるのだ．．．不安材料はひとつでも減らしておくべきだと、

後でいっぱい怒られよう．．．そう思うっていた。

「大神、日本橋についたらなんだけど．．．恐らくそこでも敵の数は多い筈だ

そこで俺を含めた花組メンバーを二分し一部隊は地上での足止め、もう一部隊で



天海を襲撃・・・撃破するという作戦で行こう・・・」

「そうだな・・・それが一番確実か・・・しかしどう分けるか・・・」

「悪いけどおれは討伐隊に参加するよ『上』からの命令でもあるからね」

「ならばは・・・さくらくん、アイリス、紅蘭で討伐隊。」

カンナ、すみれくん、マリアで足止めを頼む」

「解つたぜ隊長!!」

「カンナさんと一緒というのはアレですが仕方ありませんわね」

「隊長・・・御武運を」

「大神さん、暁くん・・・頑張りましょう!!」

「暁くアイリスも頑張るからね!」

「大神はん、暁はんやってやろうやないか!」

「よし!みんな行くぞ!!帝国華撃団・花組出撃だ!!」

『了解!!』

side out

【東京・日本橋黒之巢会本拠地】

『ヒヤッハーハー！汚物は消毒だ!!!』

翔鯨丸に（勝手に）装備されていた、対地貫通大型弾『グラインドバスター』を撃ち込み爆破！突入孔を作り討伐部隊は侵入し足止め部隊は、グラインドバスターの爆風に巻き込まれ数がある程度減っているもの。まだ多くのこっている脇侍の足止めを開始した。

『どうやら上手くグラインドバスターの効果が出ているようだな』

『全くいきなりあんなものを・・・』

『せやけどそのおかげで見えてみい大神はん、地下のてきの数をかなり減らせたしあのけつたいな機械のもダメージがはいってるよつて』

『うわくなにあれ気持ち悪い・・・』

『あの機械にとても大きい妖力が集まっています』

『恐らく脇侍の生産プラントやな・・・見てみい』

紅蘭がそう言うのとたしかにあの機械から新しい脇侍が表れる。

『残すと面倒だ・・・破壊しよう』

そういい腕に装備されている、75mm低圧砲を展開し狙撃していく

「こちらの高低差の有利を利用して着実にプラントを破壊する

『こちらさくら機・・・強い妖力を放つ機械を発見しました』

『恐らく動力部だぶつ壊せ!! さくら』

「てやああああああああああ!!」

さくらが三つの動力部を破壊し暁がプラントを破壊した瞬間奥の通路を封じていた

結界がとけ、奥に進むことができるようになった。

『この先に天海がいるのか?』

『取り合えず先に進もう・・・上の皆が心配だし』

『そうだな・・・急ごう、最終決戦だ!!』

そして五人は冥い一本道を進み使い孔を降りるとそこには開けた空間と

黒之巢会総帥『天海』が待ち受けていた・・・

「よくぞここまで、たどり着くことができたな・・・褒めてつかわそう」

『黒之巢会総帥『天海』! 帝都の・・・いや、この地上すべての

善なるものになりかわり・・・

貴様の命・・・ここで貰い受ける!』

「小賢しい! 百年早いわ!!」

天海が怨念混じりに叫ぶとその場に金色の魔操機兵『天照』が表れる、

そして天照を覆う様に薄い『翠の光』膜が貼られている。

『その光まさか! コジマ粒子・・・プライマルアーマーか!?!』

「如何にも!! この堅牢さはお主がよく知っておろう『オロチの落とし子』よ」

『大神・・・やつに生半可な攻撃を通らないやるなら全力全壊でぶん殴れ!』

プライマルアーマーを減衰させるんだ!』

『わかった行くぞ皆!! 天海を倒し帝都に平和を取り戻す』

『了解!!』

(しかし・・・いったいどこでPAなんて技術を・・・)

こうして決戦の火蓋は切って落とされた・・・

大神、紅蘭、さくらの猛攻を天海は、持ち前の妖力とPAにより

威力を半減させ逆にその高い妖力を持つて大神たちに襲いかかる、

辛うじてアイリスの防御壁と要所所で暁が自身のコジマ機関から粒子付加した

装備で確実に相手のPAを減衰させていく。

『つく・・・さすがが頭目今つまでの奴らとは違う・・・けど!!』

『向こうも確実にダメージが蓄積されてるで!』

『あの、翠の膜も薄くなってきた、大神さん今なら、一気に畳み掛けましょう』

『良し!! 行くぞ天海!!』



感受性の高いアイリスはそれをモロに感じ取ってしまい弱々しく悲鳴を上げる

「素晴らしい・・・全身に止めど無く力が溢れる様だああ」

『不味いなこりや・・・』

『つく物凄い妖気・・・今の戦力では・・・』

「今度は私の番だ、往くぞウオオオオオオオオオ！」

「(物凄い妖気・・・ダメか!?)」

大神がそう思った瞬間・・・

『お待ちなさい!!』

突如すみれ色の光武・・・すみれ機が天海へと襲い掛かりその薙刀で

溜め込んでいた妖力を切り捨て霧散させた。

「なんだとおお！」

『皆、無事だったのか!!』

『天海・・・これで戦力は互角ださあ・・・お前の罪を数えろ!!』

『帝国華撃団の名にかけてこの戦いに正義を示す!!』

「愛だの・・・正義だの・・・そのような甘ったるいまやかしにうつつを抜かし！

人の心の奥底に潜むモノを忘れたお前たちに、我が敗れるものか!!

千年早いわ!!!」

『早いかどうか確かめてみる!!これを最後の戦いとする

帝国華撃団、出撃!!」

『了解!!!』

そして第二ラウンド、いや最終ラウンドのゴングが鳴り響いた  
ここで全てを終わらすために……

??????

花組と天海が戦っている中、一機の白い『FA』がその様子を眺めている……

その手には大きなスレッジハンマーを持ち……

『頑張るのじゃぞ……我が子らよ……』

そのカメラアイ越しから伝わる慈愛の視線を向け……暗闇に消える



## 第31話 血戦・命の限り④

最終決戦は互いに膠着状態であった

花組・暁達は、天海の周囲にいる近衛型の脇侍により中々天海への攻撃が通らず  
天海側もその持ち前の妖力を用いて攻撃するも今の花組のメンバーには大振りな  
攻撃は躲され、そこに暁の蒼炎による攻撃が襲いかかる。

『大神ラチがあかない!、ここは近衛型を先に殺るぞ!!』

『わかった!しかし・・・天海がそうさせてくれるか・・・』

『俺が足止めする!その隙に!?!』

『気を付けろよ暁!直ぐに合流する!?!皆、近衛型を先に片付けるぞ!』

「させるものか!!」

『おっと!干物ヤローそつちには行かせねーぞ!!テメーには聞きたい事があんだ!?!』  
「つく落とし子風情が!!」

『キサマら7前の襲八神家襲撃・・・の実行犯で間違いないよなあ!!』

「?なんの事だあ・・・」

『惚けるな!!キサマらが我が母の首を使い妖魔を作ったのが何よりも証拠!!』

「ふん！言葉を解さん蛇が!!あの首は又丹が我に献上したものでよお！」

『なん・・・だと！ならマキ・・・我が妹は!!』

「知らんな・・・む？待て貴様!!妹・・・八神に生き残りが貴様以外？」

『白々しい事を!!キサマらが我が父の戦友『山崎真之介』を誑かし攫った癖に!!』

「山崎？知らんなそんな人間!!」

『（会話が噛み合わん！こいつら攫ったのではないのか？）』

「ハアハハハ！隙きありじゃ小僧!!」

『しまっ!!グアアアアアアアアア!!』

天海に隙を突かれモロに天照の妖力波を受け吹き飛ばされる、

機体の装甲に罅が入り、機関砲、低圧砲が破損使用不能にしかし暁専用装備

斬馬刀『鉄火無名二式』は健在・・・その分厚く硬い鉄の固まりは罅すら走らずその輝

きを保っている

『そんな攻撃が効くかああああああああああ!!』

『暁！雑魚は全滅した!!後は天海だけだ!!』

「貴様ら！なにゆえに我の邪魔をする？大義なきたわけ者どもがっ!!」

『大儀だと？巫山戯るな！貴様の何処に大義がある!!』

「幕府の再興！この」日ノ本の国を最も正しい形に戻すのだ!!」

「これこそ大義！それぐらいも解らぬから、貴様らはたわけだと言うのだ!!」

『……くだらん!!まったくもってくだらねえ!!』

『巫山戯るな！そんなもの認められるものか!!』

『部下に平気で死ぬという……お前のどこに大義がある!!寝言を言うな!!』

「この若造が！言いたい放題、言いおって……許さぬ……許さぬぞ!!」

『何言ってるんだ……コツチこそお前を許す気なんてない……謝罪も懺悔もいらぬ  
その魂ごと燃滅しろ!!』

「小賢しい!……我が下僕どもよ我が血となり肉となり我と共に戦え!!」

『な……なんだ!更に妖力が上がって!』

『ヤロー回りの脇侍の残骸から妖力を吸収してやがる!!』

「フハハハ!!コレでも我を倒すというか。己の実力、思い知るがよいわあ!!」

『やってやるさ天海!仲間を信じない貴様に俺たちは決して負けん!!行くぞ皆!!』

『了解!!!』

『先ずは私から!! 鳴り響け白夜の鐘【スネグーラチカ】』

『次はアタイらだ行くぜすみれ!!』

『言われなくてもわかっていきますわ!!!』

『当たると痛てえーぜ!!【一百林牌】』

『神崎風塵流!!【胡蝶の舞】』

『ナイスや! お二人さん!! 次はウチやで!! 行け!【チビロボ軍団】』

『皆を傷つけた事絶対にユルサナイんだから!!【イリス・マリオネット】』

『天海、覚悟!! ハアアア!! 破邪劍征【桜花放神】』

『燃えて焼滅しろ!! 八神流禁千式百拾壺式【八稚女】』

『これで終わりだ!! 天海! 狼虎滅却【快刀乱麻】』

花組全員の全ての痛烈な攻撃を天海に浴びせる、

もはや天照は最初の頃のような面影もなく金の装飾も剥がでその下から見窄らしい骨組みが見え

至るところから小爆発をおこし正に、満身創痍であった・・・しかし尚も

その膨大な妖力は衰えていなかった。

『・・・なに、』

次の瞬間花組全員に妖力で形成された槍が全員の光武を貫き壁に礫にした。

「ぐぐぐ……無駄だ!! 我は……何度でも、何度でも黄泉ガエルゾー!」

『くそう……もう復活なんてさせるものか!! 天海を、この世から消し去るんだあつ!!』

皆の……帝都を思う気持ち……を平和を愛する心を……俺にくれええ!!』

その言葉と共に不思議なことが起こった……

それに呼応するかのようには大神の光武が輝き、またそれに共鳴するように皆の光武も

輝き出す……

『【大神はああああん!!】』

大神の拘束が一つ砕け

『【お兄ちゃああああん】』

二つ砕け……

『【大神隊長おおおつ!】』

全ての拘束が砕け……自由になり

『【大神少尉!!】』

高速で天海の元へ駆け……

『【大神隊長ー!!】』

それを阻止せんと天海が攻撃をするがそれを霞のように避け

『大神さああああん!!!』

そして……すれ違いざまに天海を一刀両断する

「がはっ……!!まだまだ終わんぞおお!!」

そして暁の雷電も欠損した装甲から轟々とした蒼炎が吹き出し

赤い輝きを放っていたカメラアイは蒼く染まり炎を灯す……

『こつちも色々限界なんだ……ブチ貫く!!! K U T A B A R E!!!』

燃え盛る炎は拘束を灰にし一つの流星と化し……天照の土手っ腹に

見事な飛び蹴りを放ち……貫通する!

「ウギヤアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

『天海……これが「正義の力だああああ!!!」』

「馬鹿な……どうして……ここ、この偉大なる……わ、我が……な……何故

地は我を見捨てたもうたか……」

その言葉の瞬間、天照はしめやかに爆発四散した……

これで全てが終わったと思つた瞬間、地下空洞が鳴動し……崩れ始めた。

『ここ、この揺れは……洞窟が崩れる!?!しまった!総員退避!!!』

『了解!!』

『(結局・・・天海からは余り有力なことは聞けなかった・・・か)』

暁は、天海に勝利したコトよりもマキについての情報がまるで無い事に落胆していた  
 しかしこれで天海・・・いや黒之巢会は壊滅した・・・  
 ようやく帝都に『一時』の平和が訪れたのであった・・・

side out

【地上・日本橋】

そこには帝国華撃団のスタッフや整備班が待機しており

激しい戦闘で摩耗した機体を回収し簡易ながら退院のケガの治療が行われていた

「それにしても地下で俺たちを救ったあの光はなんだ？それにあの輝きは・・・」

「あれが彼女たちが帝撃に入った理由さ・・・」

大神の疑問に応えたのは、米田司令だった。

「あれが彼女たちの霊力だとすれば・・・」

「それだけじゃねえ・・・おめえの力でもあるんだ」





珍しくマリアもオロオロしてつつも暁を心配していた。

「どうやら目の事を了子が花組に暴露・・・現在大説教大会が開催されていたのだ!!」  
「大神おめえ触媒なんだからいつちよ逝ってこい・・・」

「い・・・」

「しつかし暁も最初の頃に比べていい顔になったよな」

カンナがしみじみと思い出したしかにと米田も勿論大神をそう思った・・・

「そういえば・・・みんな今回例のアレやってないんじゃない?」

爆弾を投下した了子が花組メンバーにそう言くと・・・

「あくたしかにアレ・・・やってへんな・・・」

「逃げるのに夢中でアレやってませんね・・・」

「どう言えばそうですわね・・・」

「そうだけアレ・・・やろうぜ!!」

「それじゃあみんな揃っている事ですし・・・行きますよ!」

『せくくの勝利のポーズ!!』

「キメエエエエ!!」へ米田ハツチャケ

( ; ^ ) キメエ

「……………」

「ちよ・・長官!!」

「あくアイリスも言うの〜!!」

「ま、堪には・・・な?」

「しかたねえ〜な〜」

「やれやれ・・・」

「ま、いいじゃねーかなあ? だあ〜ははは!!」

『アハハハハハハハハハハ!!』

本当にこうして帝国華撃団メンバー全員とフェイスの小島博士、了子博士

整備クルー、囷作戦で活躍してくれたTA招待の皆さん、そして首から

『私は無茶する悪い子です』のプラカードをさげた暁全員での記念撮影をして締めくくられた

ただ二人・・・セレリーナ・リリイ・トラスと武蔵を除いて・・・

????

そこは崩落した黒之巢会の洞窟にひとりのボロ雑巾・・・

天海がカラダを引きずりながら逃げていた心に花組への復讐を心に秘めて

しかしそこに白と赤のツートンカラーのFA『ステイレット X F—3』

が天海の眼前に立つ・・・そのてには大きなスレッジハンマーを持ち

『まさか・・・生きてるとは僥倖じゃな・・・』

「き・・・きさま・・・は・・・！その神気、神の使いか!!!」

『違う・・・お主のような塵芥になるほどのものでわないわ』

「ひ・・・ひいいいい!!!」

『妾の子らが言うただろう？生かして置かぬと・・・しかしその前にお主が無為に殺めた  
子らの

苦しみ味わってからじゃな・・・』

グシャ！

「武蔵・・・あとは宜しね」

「地下に拘束しておけばよろしいでしょうか？以上」

「ええ・・・情報官・・・いえ拷問官込みでね」

「了解ですそれではそのように以上」

こうして天海の率いる黒之巢会は壊滅を迎えた

長月の早朝であつた・・・

## 閑話 悪霊の家（太正版）

神無月の晴れた午後・・・暁は、特にやることもないので帝劇ないをウロウロしている。

サロンでお茶をしている、さくら、紅蘭、すみれ、それに大神を発見

「あれ？みんなこんなところで茶会？」

「あく暁うん・・・今日はこれといった用事もないからね」

「しっかし最近ほんま平和になって良かったわ」

「そうね」

「まったく皆さんは・・・まあ暇なのは認めますが」

「うゝんでも外に出るっていう気分でもないしな・・・」

「そうだね・・・あ！そうだ暁はなにか面白い暇つぶしはないかい？」

「暇つぶし？」

「うん・・・トランプやそういうテーブルゲームでなにか良いの知らないか？」

そこで暁は一つ心当たりがあった。

「なら向こうで流行ってはTRPGなんてどう？」

『TRPG?』

「うん『テーブルトークロールプレイゲーム』の略称なんだが」

「どうゆう遊びなんですか?」

「えーとサイコロとメモ帳があれば出来るゲームでシナリオにそつて自分が作ったキャラクターを」

演じながら冒険するゲームだよ』

「役を演じる・・・正に私たちにピッタリなゲームですわね」

「ホンマやな・・・それに演技の稽古にもなりそうや」

「TRPGには色々なシステムがあるけど・・・そうだなこのメンツならこれがいいかな」

暁はゴソゴソとここからともなく分厚い本を取り出した本のタイトルは

『Call of Cthulhu』

「さてルールとキャラクターシートの説明したから・・・」

ここから前書きとうりの進行になります

G M 暁：さて取り合えずキャラ出して

山神一佐 P L 大神：俺はこんな感じだ

G M 暁：ふくん探偵にしたんだって・・・お前 S A N 値やばない？

山神一佐 P L 大神：仕方ないだろう・・・サイコロが振るわなかったんだから

G M 暁：まじで運のないやつ

G M 暁：じゃあ次は？

李・燐蘭 P L 紅蘭：次わうちやな

G M 暁：どれどれ

G M 暁：大神よりは大分まだね・・・それにしてもエンジニアか

李・燐蘭 P L 紅蘭：あかんかったかな？

G M 暁：そんなことないよ面白いと思う

山神一佐 P L 大神：やっぱり紅蘭はエンジニアが似合うよね

G M 暁：さて次は・・・

神城桜子 P L さくら：中々良く出来てると思うんだけどどうかしら？

G M 暁：A P P が6のタレントが居るらしい

神城桜子 P L さくら：なにか？

G M 暁：いえ・・・なんでもないです後気になるのは・・・交渉系が割と高いね

神城桜子 P L さくら：このゲームって謎解きや情報を聞くのが主目的ってきいたから  
それ中心にしたの

G M 暁：なるほどね

G M 暁：さて最期はすみれか・・・

川崎董子 P L すみれ：オッホホホ!! どうかしら暁さんこのわたくしの分身! 中々一  
発ぶりにしては良くなかった?

G M 暁：久保帯人じゃねえええか!!!

山神一佐 P L 大神：すみれくん・・・

李・燐蘭 P L 紅蘭：すみれはん・・・

神城桜子 P L さくら：すみれさん・・・

G M 暁：まあ新サクラ出演おめでとうはおいといて能力は・・・ディレッタントか（A



P P 9)

川崎董子 P L すみれ：このゲームは外国の物とききましたのでもしかしたら英語などが出るかもしれませんので他の言語を取らせていただきますわ

G M 暁：なるほどね〜じやあ他の言語（英語）にしておいて

川崎董子 P L すみれ：わかりましたわ

G M 暁：さてみんなのキャラシも出来たしなかなか個性的なメンツだな

G M 暁：取り合えず後は、皆の関係ってどうなってるの？

山神一佐 P L 大神：そうだな・・・俺の探偵事務所にみんなが集まっているのはどうだろう

川崎董子 P L すみれ：でしたら私が少尉の事務所のオーナーというのは？仕事の様子をチヨクチヨク見に来るという設定で

李・燐蘭 P L 紅蘭：うちは・・・せやな大神は今のところでアルバイトしながらって感じやな

神城桜子 P L さくら：私は〜〜〜そうだ昔、大神さんに助けられてそれが切欠でよく遊びにくるって感じかしら

G M 暁：ダメボ持ちをダメボなしが助ける場面って一体・・・

山神一佐 P L 大神：うう・・・

GM 暁：低SAN値高アイディアのモヤシ隊長が居るらしい

山神一佐PL大神：もういいだろ!!

GM 暁：さて大神弄りはこれくらいにして・・・今からセッションは始めるから

GM 暁：シナリオは初心者にぴったりの「悪霊の家」だ

GM 暁：因みに余談だがフェイスでこのシナリオやると五分で終わる・・・

山城桜子PLさくら：そうなの？なら簡単な物語なのね!!

GM 暁：いや？普通は2〜3時間かかるよ・・・まあその五分の時はGMのリリイがブチキレれたけどな

山城桜子PLさくら：・・・

GM 暁：さて導入開始するよ

GM 暁：季節は神無月、夏の残暑も過ぎて少しづつ寒さが気になり始めたある日の午後、山神が居を構えてる探偵社にある男が来訪したのがこれから始まる事件の切欠であつた」

山南喜一郎：『私は山南と申しますココには川崎さんからのご紹介でお尋ねさせていだきました』

山神一佐PL大神：『初めまして私がこの探偵社の所長の山神と申しますそれで紹介した川崎というのは・・・』

川崎董子P Lすみれ：『私の父ですわね．．．全く』

G M 暁：じゃあすみれここでこの人が何の職業をしているのか【知識】振って

川崎董子P Lすみれ：わかりましたわ

川崎董子P Lすみれ：C C B < 〓 5 5 知識 ( I D 1 0 0 < 〓 5 5 ) ↓ 1 5 ↓

成功

G M 暁：成功だね．．．ならこのメモにかいてあるから

川崎董子P Lすみれ：『山神さんこの方は帝都でも有数の不動産をお持ちになっている社長ですわ【山南不動産】ときけばわかりますよね?』

山神一佐P L大神：G M 俺はその会社のことはしってるかい?

G M 暁：結構有名な会社だから知ってて問題ないよラジヲでも宣伝してるくらいだし  
山神一佐P L大神：分ったなら『ああ知ってるよ宣伝広告を聴かないことは無いくらいに有名だからね』

山南喜一郎：『いえいえそんな大層なことは何も．．．おつと話がそれてしまいましたなそれで今回、そちらにとある依頼を御願いしたく参りました』

山神一佐P L大神：『依頼ですか? 一体どのような．．．』

山南喜一郎：『はい．．．実は今、私が所有している空き物件の一つで色々とな  
いことが起きています』

川崎董子P Lすみれ：『よくない事ですの？』

山南喜一郎：『はい以前にとある一家にお貸しして物件なんですけどその・・・家主に不幸がありそれ以来空き家になりそれ以降、何人かに貸したのですが事故や病気が相次ぎ山南喜一郎：結局は誰も借りず仕舞いに・・・取り壊そううにも工事業者にも事故が多発しそれで・・・』

川崎董子P Lすみれ：『私たちにその原因の調査をと言うわけですわね？』

山南喜一郎：『はい・・・前金で64円、以来達成で640円お支払します』

神城桜子P Lさくら：『そ・・・！そんなに!!』へお茶運び

李・燐蘭 P L紅蘭：『そんだけあれば当分は安泰やな山神はん!!』

G M暁：・・・サクラはお茶を運んでるんだね・・・へニヤリ

G M暁：さてここでさくらがその金額を聞いてびっくりした事によってお茶を零さないか幸運ふって

神城桜子P Lさくら：な！ひどい!!

神城桜子P Lさくら：C C B < || 5 0 幸運 ( I D 1 0 0 < || 5 0 ) ↓ 4 1 ↓

成功

G M暁：つち・・・なら寸前のところで零すことなくお茶を出せたよ

山神一佐P L大神：G Mこの依頼って受け無きやダメなんだよね？

GM 暁：受けなきや話進まないし受けるしかないよね．．．後この人に聞きたいこととかあつたら聞いてみたら

山神一佐 PL 大神：そうだな．．．その貸していた一家というのはどうゆう人たちだったとかかな？

GM 暁：そのくらいならロールなしで教えてくれるよ

GM 暁：〔借りていた一家の名前は『マカリオつて言う家族』だね子供一人の三人家族〕  
李・燐蘭 PL 紅蘭：その家族は今どうなつとるかわ？

GM 暁：えーと

GM 暁：シークレットダイス

GM 暁：〔残念だけど山南はんは知らないよ〕

川崎董子 PL すみれ：ならそのマカリオつていう人の前は？借りてらつしやつた方はいますか？

GM 暁：シークレットダイス

GM 暁：げ．．．

GM 暁：SCCB < 40 (ID100 < 40) ↓ 5 ↓ 決定的成功／スペ  
シヤル

山神一佐 PL 大神：つぶ！

李・燐蘭 PL紅蘭：初クリがNPCって!!!

山城桜子PLさくら：たしかクリティカルってとてもいいことが起きるんですよ？  
川崎董子PLすみれ：コレはGMのダイス運に感謝ですわね・さあ情報プリーズ！  
GM暁：くそう「マカリオ一家の前にたしかに借りていた人物はいたしかも借りていたのではなく元々その人物の持ち家であった」

GM暁：「その持ち主の名前は『ウォルター・コービット』という人物」

山神一佐PL大神：何か一気に情報が入ったな・・・

川崎董子PLすみれ：それでは先ず調べなければいけないのは1、マカリオ一家の所在2、ウォルター・コービット氏所在ですわね

山城桜子PLさくら：その空家の住所は私たちはしっていますいい？

GM暁：無論！山南さんがおしてくれるよ

山南喜一郎：『では皆様よろしくお願いします』

GM暁：そういつて事務所を後にするよ、さてみんな何処いつて調べる？

山神一佐PL大神：そうだな・・・考えつくのは警察署とか空家近辺の聞き込み後は・・・

山城桜子PLさくら：うゝん

GM暁：そうだな・・・紅蘭ちよつと「アイディア」降ってみて

李・燐蘭 PL紅蘭：？了解や！ほいっと！

李・燐蘭 PL紅蘭：CCB<||40 アイディア (ID100<||40) ↓ 3

8 ↓ 成功

李・燐蘭 PL紅蘭：成功や!!

GM暁：ならここで燐蘭は、こうゆう記事なら新聞社にあるのではないかと考えたよ  
山神一佐PL大神：そうか新聞社かたしかにそこなら過去の記事とかあるしなにかい  
情報があるかもしれない

川崎董子PLすみれ：なら何人か分けて行動したほうが効率がいいですわね暁さん現  
在の時刻は？

GM暁：そうだな・・・丁度14時を回った頃だね

GM暁：なら18時に一度事務所集合にしよう

山神一佐PL大神：そうだな・・・なら俺とサクラくんが警察署、すみれくん紅蘭で  
新聞社で

川崎董子PLすみれ：丁度車持ちが別れていますしわたしは構いませんわ

李・燐蘭 PL紅蘭：うちもOKや

神城桜子PLさくら：わたしも

GM暁：なら先に警察署組からやるよ

G M 暁：さて大神運転振って

山神一佐 P L 大神：え？

G M 暁：事故らないかの判定・・・

山神一佐 P L 大神：いやいや・・・普通に運転するだけだし

G M 暁：まあまあいいから・・・大神もダイス振つとけって

山神一佐 P L 大神：しかたないな・・・

山神一佐 P L 大神：C C B < || 5 0 運転 ( I D 1 0 0 < || 5 0 ) ↓ 4 ↓ 決

定的成功 / スペシャル

G M 暁：・・・ハア？へキレ顔

山神一佐 P L 大神：暁？

G M 暁：そこは初ダイスからの初フアンブルだろ・・・空気読めよ

山神一佐 P L 大神：おい G M・・・

G M 暁：まあいいや・・・じゃあ山神達は安全運転していたのにも関わらず何時もより

早く目的地にとうちやくしたよ

G M 暁：具体的に言う通常 1 4 時から 1 8 時までだと 4 ロールしか振れないけど大

神たちは 5 ロールできるってことで

神城桜子 P L さくら：やりましたね大神さん!!



山神一佐PL大神：ありがとうさくら君

GM暁：じゃあ警察に到着したけどどうなの？

山神一佐PL大神：まずマカリオ一家の所在を調べるよ

山神一佐PL大神：『すみません・・・実はマカリオ一家の所在を調べていまして警察の情報を閲覧できませんでしょうか？』

警察受付：『はぁ・・・どちら様でしょうか？それに一般の方に警察を情報を開示する事は出来ませんが？』

山神一佐PL大神：あれ？

GM暁：まあ普通そうだよね一般人にホイホイ情報見せるわけないよね

山神一佐PL大神：なら自分は探偵である事件を調べているってことを伝えたらどうだろうか？

GM暁：うくん知名度にもよるけどまあいいか【信用】か【説得】で振って

山城桜子PLさくら：コレは私も降って平気？

GM暁：いいよ

山神一佐PL大神：あ・・・信用も説得もない・・・言いくるめじゃダメかい？

山城桜子PLさくら：私は信用も説得もありますよ

山城桜子PLさくら：では高い方の信用で

神城桜子 P L さくら : C C B < || 6 0 信用 ( 1 D 1 0 0 < || 6 0 ) ↓ 6 7 ↓

失敗

神城桜子 P L さくら : あう . . .

G M 暁 : 大神説得初期値でふつてもいいんじゃないよ?

山神一佐 P L 大神 : C C B < || 1 5 説得 ( 1 D 1 0 0 < || 1 5 ) ↓ 8 4 ↓

失敗

山神一佐 P L 大神 : ダメか . . .

G M 暁 : ( 序盤でつまずかれてあれ出ししかたない )

G M 暁 : 大神言いくるめでいいよ?

山神一佐 P L 大神 : C C B < || 5 0 言いくるめ ( 1 D 1 0 0 < || 5 0 ) ↓ 7 9

↓ 失敗

G M 暁 : . . . さくらもう一回 G O

神城桜子 P L さくら : 今度こそ!

神城桜子 P L さくら : C C B < || 6 0 信用 ( 1 D 1 0 0 < || 6 0 ) ↓ 8 7 ↓

失敗

神城桜子 P L さくら : えええええ

G M 暁 : ( 出目腐りすぎ笑えない . . . )

G M 暁：しゃああない

警察受付：シークレットダイス

山城桜子 P L さくら：？

山神一佐 P L 大神：？

警察受付：『あれ？貴女タレントの山城桜子さんじゃないですか？』

山城桜子 P L さくら：『え？あ．．．はいいまこの探偵の山神さんと事件の調査を』

警察受付：『そうなんですか．．．じゃあ本当はダメなんですけどココの3階が事件の調

査保管庫になっていきます最近滅多にひこが来ないので短時間ならバレませんよ』

山城桜子 P L さくら：『あ．．．ありがとうございます』

G M 暁：警察署の受付ですったもんだしたけど受付の人が保管庫を教えてくださいよ1

ロールのみ可能だよ

G M 暁：それ以降は18時過ぎるし他の警察官に出くわす危険があるよ

山神一佐 P L 大神：なら図書館で

山神一佐 P L 大神：C C B < 50 図書館 ( I D 1 0 0 < 5 0 ) ↓ 2 7

↓ 成功

山神一佐 P L 大神：よし成功!!

G M 暁：ならそうだね【マカリオ一家の所在の情報】を入手したよ

G M 暁：マカリオ一家は現在帝都から3〜4キロにある精神病院に入院している、一人息子は箱根の親戚の家に預けられている」

G M 暁：訂正マカリオ夫妻は病院

山神一佐 P L 大神：なんとかマカリオ一家の情報は得たな

山城桜子 P L さくら：でもコービツトさんに聞しては

山神一佐 P L 大神：後はすみれたちに任せよう

G M 暁：じゃあ次は新聞社組ね

川崎董子 P L すみれ：暁さん私も運転をつ振りますわ？

G M 暁：え？

川崎董子 P L すみれ：少尉がふつてクリティカルを出しているのですからこの私だけ  
て

G M 暁：（フラグ乙） まあいいや降つてみて

川崎董子 P L すみれ：C C B < || 6 0 運転 ( I D 1 0 0 < || 6 0 ) ↓ 9 4 ↓

失敗

川崎董子 P L すみれ：あ・・・あら？

G M 暁：すみれ幸運ふつて

李・燐蘭 P L 紅蘭：G M！うちも！うつも幸運振らしてええ

川崎董子 P L すみれ : C C B < || 5 0 幸運 ( I D 1 0 0 < || 5 0 ) ↓ 4 6 ↓  
成功

李・燐蘭 P L 紅蘭 : C C B < || 5 5 幸運 ( I D 1 0 0 < || 5 5 ) ↓ 5 5 ↓  
成功

李・燐蘭 P L 紅蘭 : よっしや!! 妖怪一足りたや!!

G M 暁 : うくんこの結果なら渋滞に捕まるもなんとか切り抜けたってかんじかな

G M 暁 : ペナルティはないよ

李・燐蘭 P L 紅蘭 : よしや! じゃあ調べるでえ

G M 暁 : じゃあここは帝都日報の本社で警察よりは厳しくないけどやはり対応は警察  
受付とおなじだね

G M 暁 : 言いくるめ、説得ででふって

G M 暁 : . . . . . 今気がついたこの組、交渉系すみれの信用しかないじゃん

G M 暁 : . . . . . 信用でふっていいよ

川崎董子 P L すみれ : C C B < || 5 0 信用 ( I D 1 0 0 < || 5 0 ) ↓ 2 7 ↓  
成功

G M 暁 : お! 一発成功!! なら

受付：『おやこれは川崎様今日ほどのような御要件で？』

川崎董子 P L すみれ：『少し調べものがありまして資料室に案内していただけません事？』

受付：『わかりましたコチラで御座います』

G M 暁：こうしてふたりは無事に資料室にこれたよ

川崎董子 P L すみれ：ではマカリオ一家について図書館を振りますわ

川崎董子 P L すみれ：C C B < 〓 5 0 図書館 ( I D 1 0 0 < 〓 5 0 ) ↓ 4 2

↓ 成功

川崎董子 P L すみれ：成功、当然ですわ

G M 暁：なら新聞の小さい記事に情報があつたよ

G M 暁：〔マカリオ一家の所在の情報〕

G M 暁：〔マカリオ夫婦は現在帝都から3く4キロにある精神病院に入院している〕

G M 暁：〔マカリオ一家だけではなくその他に自殺や事故、病死なんかもあつた〕

李・燐蘭 P L 紅蘭：こりゃあ……

川崎董子 P L すみれ：……

川崎董子 P L すみれ：『……本当に立て続けにふこうが起きているようですわね』

李・燐蘭 P L 紅蘭：『むしろこれは崇られてルンとちゃうか？』

川崎董子P L すみれ：『兎に角コービット氏についても調べてみましょう』

川崎董子P L すみれ：C C B < 50 図書館 ( I D 1 0 0 < 5 0 ) ↓ 3 1

↓ 成功

G M 暁：こつちはスイスイだな・・・GMとしては楽でいい

G M 暁：【コービットの情報】

G M 暁：【ウォルター・コービット氏と近隣住民の近所トラブルが多くなかでも自分の死にさいしての遺言の内容で大揉めをし一度警察沙汰に】

G M 暁：【遺言の詳しい無い様は帝都にある教会住民からは『沈黙チャペル』と呼ばれその神父が遺言書をほかんしている】

李・燐蘭 P L 紅蘭：『このコービットちゆうう人なんか問題が多かったようやな』

川崎董子P L すみれ：『沈黙チャペルですか・・・』後一回降れますしチャペルについて振りますわ

川崎董子P L すみれ：C C B < 50 図書館 ( I D 1 0 0 < 5 0 ) ↓ 5 ↓

決定的成功／スペシャル

G M 暁：はあああああ!!!

川崎董子P L すみれ：流石私ですわ!!オーホホホホ

G M 暁：グヌヌヌ・・・しかたない

G M 暁：〔沈黙チャペルの情報〕

G M 暁：〔ここは教会と銘打ってるけどキリスト教のような教会ではなく俗に言うカルト教団のようなトコでこの周辺で女兒の行方不明が多発していた〕

G M 暁：〔警察の捜査でこのカルティストが犯人と断定し手入れを開始その際3人の警官と17人の教団員が銃撃と火事で死亡した〕

G M 暁：ここからはクリ情報

G M 暁：〔沈黙チャペルの神父〕

G M 暁：〔検死は奇妙なほど情報がなくこれまでに54人の教団員が逮捕されるも8人は除いて後は釈放されておる事件の大ききの割にこのことは一切報道されていない〕

G M 暁：〔この事から何らかの圧力があつたと考えられている・・・8人のうちの一人『マイケル・トーマス神父は懲役40年が確定したものの脱獄し国外に逃亡』

李・燐蘭 PL 紅蘭：これは・・・

川崎董子 PL すみれ：怪しさ大爆発ですわ・・・

G M 暁：さてすみれ達もそろそろいいかな？

川崎董子 PL すみれ：ええ少尉たちと合流しましょう

李・燐蘭 PL 紅蘭：大神はんたちもなんか情報掴んでいるやろうやか？

川崎董子 PL すみれ：まあ交渉系技能の多いさくらさんに探偵の少尉もいますし大丈夫



夫でしょう

G M 暁：さて現在時刻は18時みんな事務所に無事集合出来たね

川崎董子 P L すみれ：少尉にさくらさん！なんですのコレ！全然情報がありませんの

！

李・燐蘭 P L 紅蘭：あはははは・・・ダイスの神様に嫌われてしまうたな

山神一佐 P L 大神：面目ない

神城桜子 P L さくら：うう・・・

G M 暁：さてこれからどうする？10月だしぼちぼちこの時間でも外は暗くなってきたよ

山神一佐 P L 大神：そうだなここは慌てず教会と空家にはあした行こうか

神城桜子 P L さくら：それなら明日のために何か必要なものをかいにいくのはどうでしょう？

李・燐蘭 P L 紅蘭：せやな・・・空家はどうなつとるかわからんけど教会は相当荒れといるとおもうで

川崎董子 P L すみれ：そうですね・・・懐中電灯やもしもの為にロープなんかあるといいかもしれませんわね

李・燐蘭 P L 紅蘭：あ・・・G M ちよつと相談なんやけど

GM 暁：何？

李・燐蘭 PL紅蘭：いまって10月なんやろせやったら暖房ように灯油なんか買  
いやすいんとちやうか？

GM 暁：・・・何する気だ貴様

李・燐蘭 PL紅蘭：何って・・・うちだけ武器ないよってここはうちの技能をい  
かして火炎瓶でも

GM 暁：作ってもいいけど使い方によつては貴様を逮捕するからな

GM 暁：マジで逮捕してやるからな

GM 暁：フリじゃないからね

李・燐蘭 PL紅蘭：わくとるわくとるって心配性しやなく暁はんわ

山神一佐 PL大神：取り合えず買うものは・・・懐中電灯にロープ、灯油、後は・・・

神城桜子 PLさくら：この近辺では何が買えるの？

GM 暁：基本は帝都で売ってるものならなんでも買えるよ

神城桜子 PLさくら：なら怪我してもいいように治療用具も買いますようか

川崎董子 PLすみれ：治療用具のこうははどうなりますの？

神城桜子 PLさくら：あれ・・・そういえば私たちって

李・燐蘭 PL紅蘭：応急手当もってへんな

山神一佐 P L 大神：応急手当の初期値は・・・

G M 暁：30 だね

山神一佐 P L 大神：G M なら回復量 +1 ではなく技能に補正を付けて欲しい

G M 暁：O K じゃあ治療用具一個消費で +10 の補正つけるよ

山神一佐 P L 大神：分ったそれでいいよ

G M 暁：じゃあ買物も済まして次の日の朝時間は7時にしようか山神一佐 P L 大神：今日は昨日のメンバではなく山神一佐 P L 大神：大神紅蘭ペアが教会山神一佐 P L 大神：さくらくんとすみれくんが空家にしよう川崎堇子 P L すみれ：わたしは構いませんがさくらさんあしを引つ張らないでくださいいな神城桜子 P L さくら：が、頑張ります李・燐蘭 P L 紅蘭：大神はんよろしゅうな山神一佐 P L 大神：紅蘭こちらこそよろしく頼むよ G M 暁：メイインディッシュの空家はさいごにしてまず教会からだね

山神一佐 P L 大神：分ったよ

李・燐蘭 P L 紅蘭：ほな頑張りまひよ？大神はん

G M 暁：じゃあ「山神と李がついた沈黙チャペルは、もはやチャペルとは言えない風貌でそこいらにある廃墟とあまり変わらない様相だった」

G M 暁：「草木は伸び放題でまだ午前中で日も燦々としているのにここだけ妙に薄暗いそれに雰囲気も淀んでいる」

李・燐蘭 PL紅蘭：『うひゃくく思ってたよりそうとうヤバイでコレ！』

山神一佐 PL大神：『そうだな……ここで大事件があったつてのは本当のようだ……』

山神一佐 PL大神：GMここから目星は可能かい？

GM暁：ここからじゃ今言った以上の情報はないね

山神一佐 PL大神：じゃあ建物の近くまでいどうして周囲を一回りしながらの目星を

GM暁：OKじゃあ目星降ってみて

山神一佐 PL大神：CCB<||60 目星 (ID100<||60) ↓ 1 ↓ 決

定的成功／スペシャル

GM暁：………

山神一佐 PL大神：………

GM暁：何？お前とうとうダイスの女神（クソビッチ）も攻略対象なの？

山神一佐 PL大神：え？いや!!そんなことないって

GM暁：白愛の店で誰を一番指名してるかここで暴露するぞ！

山神一佐 PL大神：ちよ！アレは……米田支配人にむりやり！

山城桜子 PLさくら：……サイテー

川崎董子 PLすみれ：……サイテーですわね

李・燐蘭 PL紅蘭：……大神はんドン引きや

G M 暁：まあいいや目星情報だね

G M 暁：【教会の外観の情報】

G M 暁：【外観はやはり長年の雨風によつて不食して元々は綺麗な塗装が施されていたがいまは見る影もないかんじだね】

G M 暁：【しかしその壁に奇妙な記号を見つけよ『3つのY字からなつておりYの2つの頂点が両側にある別のYの頂点に触れ合うように三角形の形をしていて】

G M 暁：【その中心にまるでこちらを見つめるように瞳が書かれている】

G M 暁：【そしてそのマークをみた探索者は額の中心にチクチクとした痛みが襲つた、今ほそれほでもない痛みだが気が散つて仕方がない】

G M 暁：そしてここからはクリ効果

G M 暁：【山神はその鋭い洞察力でその記号は侵入者を遠るものではないのかと気が付く・・・更にこのマークは『最近、毛刷で書かれた物』とはつきりわかつていい】

G M 暁：【しかし山神はそのマークが効果を詳しくわかつたしまったため紅蘭より強い抵抗・・・チクチクと指す痛みが襲う】

G M 暁：【その結果精神的にここから離れると警鐘を鳴らされたため心にすくなくならずのダメージがはいる】さあ初のSANチェックだ!!

山神一佐PL大神：え！そんな・・・

G M 暁：たしかにクリはいい結果がおおいけどばあいによって「知らない方がいい場合も」あるんだよ？特にこのゲームはね

G M 暁：取り合えず成功 0 失敗 1 d 3 のチェックだ

山神一佐 P L 大神：C C B < || 3 5 S A N チェック ( 1 D 1 0 0 < || 3 5 ) ↓

7 7 ↓ 失敗

山神一佐 P L 大神：1 d 3 ( 1 D 3 ) ↓ 1

山神一佐 P L 大神：ツグ・・・ダメか

G M 暁：「やはり心に負荷がかかったものその持ち前の使命感で警鐘を振り切った」

李・燐蘭 P L 紅蘭：外はこれ以上なにかあらへんよね？クリ情報も出てるわけやし

G M 暁：そだね

山神一佐 P L 大神：なら中に入ろうか・・・足元に気をつけようおそらくなかも荒れ放題だ

G M 暁：じゃあ中の描写ね

G M 暁：「中も外と同様荒れ放題長椅子もくちてポロポロ、壁や床にはなにか焦げた跡や転々と赤黒い何かの染みがみえる」

山神一佐 P L 大神：「中も・・・想像以上だな・・・」

李・燐蘭 P L 紅蘭：『取り合えず色々探してみようや』

GM暁：では二人ともが中ほどまで進んで行った時に・・・二人ともDEX×4で  
 ロールお願い

李・燐蘭 PL紅蘭：？わかったで

山神一佐PL大神：よ、よし・・・

山神一佐PL大神：CCB<||52 DEX (1D100<||52) ↓ 23 ↓

成功

李・燐蘭 PL紅蘭：CCB<||52 DEX (1D100<||52) ↓ 64

↓ 失敗

李・燐蘭 PL紅蘭：あ・・・

GM暁：では・・・

GM暁：[李が協会を探索していると突然『バキ!!』という音が鳴り自身の体が下へと  
 重力がかかり下に3mほど落下してしまうどうやら床板が腐っていたようだ]

GM暁：紅蘭は1d6のダメージをうける

李・燐蘭 PL紅蘭：あ、あかん!!デカスギイ

山神一佐PL大神：GM落ちる寸前に助けることは？

GM暁：じゃくく大神とCONと紅蘭のSIIZで対抗判定・・・

山神一佐PL大神：RES (9-16) (1d100<||15) ↓ 89 ↓ 失敗

山神一佐 P L 大神：げー！

G M 暁：おやおや・・・では

G M 暁：【山神は咄嗟に李の手を掴むが李の重さを山神は支えきれず・・・また李は反応できに山神のを握り締めていたので山神諸共下に落下する】

G M 暁：二人とも 1 d 6 な

山神一佐 P L 大神：すまない紅蘭

李・燐蘭 P L 紅蘭：仕方ないんよ大神はんでも助けてくれようとしておおきにな・・・

あ、あと暁はんは後で別室で O H A N A S I や

G M 暁：なんでさ・・・

山神一佐 P L 大神：1 d 6 ダメージ (1 D 6) ↓ 6

山神一佐 P L 大神：ゴフ!!

G M 暁：あ・・・

李・燐蘭 P L 紅蘭：1 d 6 ダメージ (1 D 6) ↓ 5

李・燐蘭 P L 紅蘭：ガハ!!

G M 暁：うわ・・・取り合えず処理つと紅蘭はそのまま5ダメ引いてね、で・・・大神なんだけど・・・一度に H P の半分のダメージを食らったので気絶判定

山神一佐 P L 大神：くそお



山神一佐 P L 大神：C C B < || 3 6 気絶判定 ( I D 1 0 0 < || 3 6 ) ↓ 5 ↓  
 決定的成功 / スペシャル

G M 暁：じゃあ成功ね・・・気絶しなかった・・・フム大神幸運ふって

山神一佐 P L 大神：C C B < || 3 5 幸運 ( I D 1 0 0 < || 3 5 ) ↓ 5 3 ↓

失敗

G M 暁：つち・・・じゃあ現在の体位だけど大神の上に紅蘭が倒れ込んでる感じ  
 だね後大神の頭の近くに本がおちてるよ

山神一佐 P L 大神：『いてて・・・大丈夫かい燐蘭』

李・燐蘭 P L 紅蘭：『あなた・・・大丈夫や山神はん・・・ん？なんやこの本？』

G M 暁：本の外見はタイトルのないほんで革製、本の背表紙には鎖の留め金がついて  
 いてさつきまで鎖で繋がれていたことがわる』

山神一佐 P L 大神：『革製の本？』

李・燐蘭 P L 紅蘭：『なにか重要な事があるかもしれないんな調べてみるで』

G M 暁：では・・・持つてるのは紅蘭？

李・燐蘭 P L 紅蘭：せやで！それでええかい大神はん

山神一佐 P L 大神：ああ、構わないよ

李・燐蘭 P L 紅蘭：じゃあ E D U × 4 でロールもしくは医学

李・燐蘭 PL紅蘭：ほな・・・

李・燐蘭 PL紅蘭：CCB<||40 (1D100<||40) ↓ 33 ↓ 成功

GM眺：なら・・・【その本ただけどいやに触りなれたことある感触だ・・・いや現に今無意識に本を落とし、自分の二の腕に触っている感触と同じであった】

GM眺：【そう・・・君はわかってしまうそれが『人の革で出来ている本』だと】

GM眺：紅蘭は強制1のSAN値減少

李・燐蘭 PL紅蘭：『ツヒイ・・・!!』

GM眺：で・・・中読む？

山神一佐PL大神：不気味だが・・・恐れている暇はないここは読んでみようきつとなにかある筈だ

GM眺：じゃあ山神が読むと・・・

GM眺：【山神が本を開いてみるとどうやら英語の文章のようだそれは手書ではあるようだが経年劣化が酷く虫に食い荒らされ文字もかすれて】

GM眺：【読むのも不可能に近かった・・・しかしそれでもこの本の不吉さは変わらず山神の精神を削っていく】

GM眺：1d2/1d4のSANチェックに+5%のクトゥルフ神話技能をプレゼン

ト

李・燐蘭 PL紅蘭：あ．．．これ俗に言う魔道書や!!

GM暁：ぶつちやけこれ【エイボンの書】ね．．．写本だけどしかもいった通り劣化が激しいから完全な呪文は覚えられないから

GM暁：大神、一樣忠告COCで勇氣に任せて特攻は文字どうり命に関わるから氣を付けよう

山神一佐PL大神：うぐ．．．

GM暁：でも一個人としてはその気持ちは大好きだけどね

GM暁：ささ、いい話はここで切つて．．．SANチエック振れ

山神一佐PL大神：くそうう

山神一佐PL大神：CCB<||34 SANチエック：(1D100<||34) ↓

11 ↓ 成功

山神一佐PL大神：成功だああ!!

山神一佐PL大神：1d2 (1D2) ↓ 2

山神一佐PL大神：初期SANが低いからこれでも痛いな

李・燐蘭 PL紅蘭：まあまあ大神はん．．．ほかこの部屋を探索しようや

GM暁：じゃあふたりは懐中電灯をもっているから暗さペナルティはなし．．．

GM暁：目星いらない範囲でわかることは通路が瓦礫で塞がれているコトとその近く

にはローブのようなものをきていた干からびた死体が二つそのはんたいがわには砕けた机

GM暁：あ・・・ここでの死体のSANチェックはいらないよこれ以上は大神がかわいそうだから

山神一佐PL大神：通路のがれ気はどかせないのかい？

GM暁：手作業じゃ無理かな？数トンのがれ気で塞がれてるし

山神一佐PL大神：つまり戻るには落ちてきた穴をよじ登るしかないか・・・

李・燐蘭 PL紅蘭：暁はん砕けた机の周辺になにかあらへん？

GM暁：書類が散乱してるの内容をしるには図書館でお願い

李・燐蘭 PL紅蘭：OKや

山神一佐PL大神：俺も振ろう

山神一佐PL大神：CCB<||50 図書館 (1D100<||50) ↓ 19 ↓

成功

李・燐蘭 PL紅蘭：CCB<||50 図書館 (1D100<||50) ↓ 98

↓ 致命的失敗

李・燐蘭 PL紅蘭：げえええ!!!

GM暁：なら・・・これは、燐蘭と山神は書類を確認していたがさうとう地下内

にホコリが待つてるようであんわらく燐蘭の目にはほこりがはいり痛みが走る

G M 暁：適切な治療をしない間は【調べる技能、目を使う技能に――10の技能補正】がはいる

李・燐蘭 P L 紅蘭：つまり登攀以外の技能が10%マイナスか

李・燐蘭 P L 紅蘭：『イテテテ・・・』

山神一佐 P L 大神：『燐蘭どうしたんだ？』

李・燐蘭 P L 紅蘭：『大丈夫や・・・目にゴミが入っただけや』

G M 暁：あくあと書類の情報ね

G M 暁：【書類の情報】

G M 暁：【どうやらコービットは自分の死後【コービット邸の地階に埋葬するように】と遺言を残したそうだからそれは本人と【闇の中に待つもの】の希望だった】

山神一佐 P L 大神：『これはなんとも・・・』

李・燐蘭 P L 紅蘭：『こないなこと近隣住民がしつたらそりやあトラブルになるで！』

山神一佐 P L 大神：『取り合えずここから出よう・・・』

李・燐蘭 P L 紅蘭：『せやな・・・このことを二人につたえな』暁はんここから出るのにはここをよじ登るしかないんやろ？

GM 暁：きほんはそうだけど色々考えてていあんしてくればその都度OKかだめか  
言うよ

山神一佐 PL 大神：GM もし登攀に失敗したらどうなる？

GM 暁：そだね 1d3 振って、出た目で高ききめてそこからダメージの量を出す感じ  
1m ならダメージなし 2メートルなら 1d3、3m なら 1d6 って感じ

李・燐蘭 PL 紅蘭：失敗した時のリスクが高いな・・・うちはいいけどへたな高  
さで失敗したら大神はん落下死や

山神一佐 PL 大神：ならこうしよう、まず紅蘭が先に登りロープを下ろすそして俺が  
ロープにつかまり紅蘭が引き上げる

山神一佐 PL 大神：見ててかっこ悪いがいまはそれくらいしか

李・燐蘭 PL 紅蘭：暁はんもしくは幸運でうちの荷物になにか爆発物のできる材料  
があったかかくにんしてあったら爆弾作って瓦礫吹っ飛ばすってできるんか？

GM 暁：出たよ、そういう質問・・・まあ判定によるけどで出来なくは無いや？でも  
ココかなり【老朽化】が進んでる事を忘れてないよねへニツコリ

李・燐蘭 PL 紅蘭：素直に大神はんの案でいきます

GM 暁：じゃあまず紅蘭、登攀振って

李・燐蘭 PL 紅蘭：CCCB < || 50 登攀 (1D100 < || 50) ↓ 19 ↓

成功

李・燐蘭 PL紅蘭：成功や！

GM暁：なら上りきれたね次は・・・香蘭のCONと大神のsizeでの対抗ロールせいこうで引き上げたことにする

李・燐蘭 PL紅蘭：RES(8-13)(1d100<||25) ↓ 29 ↓ 失敗

敗

李・燐蘭 PL紅蘭：惜しい！上がらへん

山神一佐PL大神：GMこの判定でおれも登るように体力を使うから紅蘭の数値にこれのCONの値を足すとできるかい？

GM暁：まあ・・・いいかOKそれでいこう

李・燐蘭 PL紅蘭：RES(17-13)(1d100<||70) ↓ 42 ↓

成功

李・燐蘭 PL紅蘭：今度は成功や!!

GM暁：おめでとう！なら二人は無事に地上に出れたよ

山神一佐PL大神：ならまずダメージを回復使用治療用具使用へ大神の分0

山神一佐PL大神：CCB<||40 応急手当(1D100<||40) ↓ 80

↓ 失敗

山神一佐 P L 大神：あれ？

G M 暁：一つの傷に一回までだからこれ以上は治療できないよ『傷の治療をおこなったが要領がえず上手くてきなかった』

李・燐蘭 P L 紅蘭：ほなうちも

李・燐蘭 P L 紅蘭：C C B < 4 0 応急手当（I D 1 0 0 < 4 0） ↓ 6 5

↓ 失敗

李・燐蘭 P L 紅蘭：ありやりや・・・

G M 暁：じゃあ二人とも失敗、二人がもつてる治療用具は 0、後で買い直すかして補充してね

山神一佐 P L 大神：「れじゃあ・・・」

李・燐蘭 P L 紅蘭：『山神はん向こうと合流してたどうやろうか？ 買い物してから・・・』 暁はん現在の時刻は？

G M 暁：そうだね七時頃から調査開始してこんだけやってるから昼過ぎかな 1 2 時半だね

李・燐蘭 P L 紅蘭：『こうゆうとき連絡手段がないと不便やね・・・』

山神一佐 P L 大神：『・・・一回コピービット邸に行ってみようもしかしたら二人に会えるかも知れない』



山神一佐 P L 大神：『なら大神はん移動中に追加の医療品のと通信機の方法を買いたわ』

G M 暁：医療品なら近くの店で買えるけど通信機の方法か・・・秋葉原のほうまで行かないと手に入らないかもね』

李・燐蘭 P L 紅蘭：ほなら・・・うちの自宅にいつて通信機の方法をもってくるのは？

G M 暁：まあ職業エンジニアだし紅蘭のキャラてきにはありか・・・でも材料が人数分あるかわ幸運で

G M 暁：更に制作にかかる時間は今からだとも4時間はかかるとしよう1機一時間の計算で

李・燐蘭 P L 紅蘭：なら二つだけ作るでそれなら二時間や

G M 暁：了解、ならまず材料が有るか幸運成功したら何個分あるかロールあとは、機械、電器修理の複合ロールだね

李・燐蘭 P L 紅蘭：じゃあまず幸運

李・燐蘭 P L 紅蘭：C C B < || 5 5 幸運 ( I D I 0 0 < || 5 5 ) ↓ 5 9 ↓

失敗

李・燐蘭 P L 紅蘭：ありや？

GM暁：じゃあ材料はなかったね

GM暁：買って補充してね

山神一佐PL大神：しかたない当初道理向こうに行つてみよう

GM暁：ではいったんこっちのシーンは切るね

GM暁：お待たせ、サクラたちの番だよ

川崎董子PLすみれ：まったく待ちくたびれましたわ……別室がいやに騒がしかったですが一体？

神城桜子PLさくら：まあまあそれじゃあ私たちは空家探索です

川崎董子PLすみれ：その前にいちど周辺の聞き込みをしましょう、何か面白いことがきけるかもしれませんわ

GM暁：では……

GM暁：シークレットダイス

GM暁：では二人が聞き込みをしようとする周囲をみわたすと丁度家の前を掃除していたおばちゃんを見つけるね

神城桜子PLさくら：『あのくすみません』

おばちゃん：『なんだい？何かあったのかい？』

神城桜子PLさくら：『私、探偵社のもので少しその空家の事を聞き込みをしていま

して』

神城桜子 P L さくら : C C B < 1160 信用 ( I D 100 < 1160 ) ↓ 12 ↓

スペシャル

G M 暁 : この宅でスペは存在しない

おばちゃん : 『あゝあの家 . . . 本当に困ったもんよ ! 入れ替わりが激しいし来た人来た人不幸が続いて . . . これもみんなあの外国人のせいよ』

川崎董子 P L すみれ : 『外国人 ? それはもしかやコービットという方かしら ? 』

おばちゃん : 『そうよお . . . あいつ . . . 故人の事、悪く言いたくないけど異臭騒ぎは起こすし近所の女の子に悪戯すは仕舞いには、自分の遺体をあの家 に埋葬してくれなんてどうかしてるよ』

神城桜子 P L さくら : 『じ、自分の遺体を?!』

おばちゃん : 『そうそう . . . 気味悪くてしょうがないよ . . . 何回か警官よんだけど全くといいほど効果もなく、取り壊しにきた工事の人も事故続きもう気味悪がつて誰も近寄りやしないよ』

おばちゃん : 『中に入るのは構いやしないけど気をつけるんだね . . . 』

G M 暁 : 『そうおばちゃんは『あゝやダヤダ . . . 』ぼやきながら家に入っ ていつちゃうね』

神城桜子 P L さくら：『どうします？ 董子さん』

川崎董子 P L すみれ：『どうも何も・・・はいるしかありませんわ！』

川崎董子 P L すみれ：『晓さん、念のため薙刀をすぐ使えるよう準備して空き家にはいますわ』

神城桜子 P L さくら：私も刀の準備をあと入る前に聞き耳を

神城桜子 P L さくら：C C B < || 5 0 聞き耳 (1 D 1 0 0 < || 5 0) ↓ 6 5

↓ 失敗

G M 晓：特に何も聞こえないね

川崎董子 P L すみれ：私も聞き耳を

川崎董子 P L すみれ：C C B < || 6 7 聞き耳 (1 D 1 0 0 < || 6 7) ↓ 3 6

↓ 成功

G M 晓：なら微かに〔ズリ・・・ズリ〕という音が聞こえることがわかる

川崎董子 P L すみれ：『！だれか・・・いるようですわ』

神城桜子 P L さくら：『ま・・・まさか・・・お化け？』

川崎董子 P L すみれ：『こんな朝っぱら出る訳ありませんわ・・・兎に角用心しますわ』

よ』

G M 晓：ではここで・・・ふたりが入るとそこは、家財道具が散乱した玄関でど

うやら前の住人の物らしい玄関口に写真なんか置いてありそのなかには

G M 暁：笑顔の3人家族の写真はおさまってる

G M 暁：さてこの空家だけど現在だと

G M 暁：一階 4、居間 5、食堂 6、キッチン

G M 暁：二階 1、寝室 2 寝室 3 寝室 浴室

G M 暁：地階 倉庫

G M 暁：山南さんからもらった間取りだとこんな感じだね

川崎董子 P L すみれ：でしたら1階から順に見ていきますわよ

G M 暁：なら4⇒5⇒6の順だね

神城桜子 P L さくら：4の部屋に入る前に聞き耳

神城桜子 P L さくら：C C B < || 5 0 聞き耳 (1 D 1 0 0 < || 5 0) ↓ 3 6

↓ 成功

G M 暁：時にこの部屋からは聞こえないね・・ちなみにさつきまで聞こえていたズリズリって音はどうやら二階から聞こえてるみたいだ

川崎董子 P L すみれ：『つまり二階にいくときはきをつなければ成りませんね』

神城桜子 P L さくら：兎に角中にはいります

G M 暁：4の部屋は

G M 暁：「中にはソファやクッション棚にはラジオや見掛け倒しの置物なんかがおいてあるねまあ一般的な居間その物だ」

川崎董子 P L すみれ：「一様今全体に再度目星って・・・私ありませんね」

神城桜子 P L さくら：「わたしも」

G M 暁：「あーここはアイディアでいいよ」

神城桜子 P L さくら：C C B < 〓 7 5 ( I D 1 0 0 < 〓 7 5 ) ↓ 6 9 ↓ 成功

川崎董子 P L すみれ：C C B < 〓 8 0 アイディア ( I D 1 0 0 < 〓 8 0 ) ↓ 7

1 ↓ 成功

G M 暁：「二人成功なら・・・二人はわかっていい」

G M 暁：「この居間には十字架とか聖母マリア像やその他にもカトリック関係の物品が多くある事に」

神城桜子 P L さくら：「この一家って聖職者の家系だったんでしょうか？」

川崎董子 P L すみれ：「どうかしら？もしかしたら怪異が起きすぎて正に神にもすがりたいといった心境だったのかもしれないわ」

G M 暁：「ぶつちやけこの居間はこれ以上の情報はないかな？」

神城桜子 P L さくら：「なら他の部屋に移動しましょう」

川崎董子 P L すみれ：「そうですね・・・ではつぎに5の部屋に」

G M 暁：了解・・・5 食堂

G M 暁：食堂には長いマホガニーのテーブル、作りつけのサイドボード、椅子が7脚、テーブルには三人分のテーブルセット

G M 暁：スープ入れにはライス・スープがはいってるが既に腐っている、

川崎董子 P L すみれ：『これは余程慌てて出て行ったようですね・・・』

神城桜子 P L さくら：暁くん初期値だけど部屋を目星

G M 暁：O K

神城桜子 P L さくら：C C B < || 2 5 目星 (1 D 1 0 0 < || 2 5) ↓ 5 8 ↓

失敗

川崎董子 P L すみれ：ならわたくしも

川崎董子 P L すみれ：C C B < || 2 5 目星 (1 D 1 0 0 < || 2 5) ↓ 1 5 ↓

成功

G M 暁：ならすみれはこれ以上ここに何も無いということが解ったよ

川崎董子 P L すみれ：あら？

神城桜子 P L さくら：まあまあすみれさん気を取り直して次行きましょう

G M 暁：じゃあキツチンだね

G M 暁：ココには一般的な氷式の冷蔵庫、マキのコンロ、少々小さめの食材置き場、食

材置き場にはまだ食べれそうな缶詰類と乾麺だ

川崎董子 P L すみれ：再度初期値目星

川崎董子 P L すみれ：C C B < || 2 5 目星 ( 1 D 1 0 0 < || 2 5 ) ↓ 7 9 ↓

失敗

神城桜子 P L さくら：私も

神城桜子 P L さくら：C C B < || 2 5 目星 ( 1 D 1 0 0 < || 2 5 ) ↓ 1 0 0

↓ 致命的失敗

神城桜子 P L さくら：ゲ！

G M 暁：ならさくらな色々みようととして其れと目が合うよ・・・ネズミだ

神城桜子 P L さくら：なんだ・・・ねずみか

G M 暁：しかしそのねずみ・・・〔何かがおかしい〕

G M 暁：確かに胴体はネズミのソレだ、しかし顔は・・・邪悪さが滲みでた人の顔をし、その手足は人間のようなまたそうでないような歪な形をしていた

G M 暁：そのねずみはさくらをみてにやりとわらし姿を消した・・・

G M 暁：さくらはこの衝撃的なものをみて精神におおきな深がかった

G M 暁：0 / 1 d 3 の S A N チエツク

神城桜子 P L さくら：『いやあああああああ!!』



神城桜子P L さくら：CCB < 50 SAN チェック (ID100 < 50) ↓  
 32 ↓ 成功

G M 暁：しかしさくらは余りに現実離れしていてあれは見間違いだと思うことでその  
 負荷を躲した

川崎董子P L すみれ：『桜子さんどうかなさつて?』

神城桜子P L さくら：『いえ・・・ね・・・ねずみが』

川崎董子P L すみれ：『ここまで荒れていれば鼠位出ますわ・・・ココにも情報になりそ  
 うなものはありませんわね・・・』

G M 暁：じゃあ次は何処に?

川崎董子P L すみれ：未だにそのズリズリという音はしていますのよね?

G M 暁：してるね・・・

川崎董子P L すみれ：ここは手っ取り早く情報がありそうなどころに行くべきですわ  
 ね

神城桜子P L さくら：上に誰かいるんですよね・・・

川崎董子P L すみれ：恐らく犯人そのものが、そうでなくてもなにか情報を持ってい  
 るのは間違いありませんわ

G M 暁：じゃあ・・・二階に行くってこと?

川崎董子P L すみれ：ええ！そうですわ二階に上がればどの部屋からなってるか直ぐにわかりますわよね？

G M 暁：そうだね・・・わかるよ？へニヤニヤ

川崎董子P L すみれ：でしたらゆつくり二階に上がり気取られないようにその部屋までいきますわ

G M 暁：OK さくらもそれでいい？

神城桜子P L さくら：ええ！私もそれで・・・

G M 暁：なら二人は・・・二階、階段を上りきったすぐ近く3の部屋からなってるのに気が付くしかもズリズリというところからカタガタという音に変化している

川崎董子P L すみれ：『ここですわね・・・桜子さん一気に踏み込んで相手を制圧しますわよ！』

神城桜子P L さくら：『わかりました!!』

G M 暁：では・・・勢いよく二人は中に入るとそこには・・・誰もいなかった

川崎董子P L すみれ：『・・・あら？』

神城桜子P L さくら：『だれも・・・いない？』

川崎董子P L すみれ：暁さん物音は！

G M 暁：未だにしてるね・・・おそらく窓の方からだ

神城桜子 P L さくら：ちよつと近づいてみますね

G M 暁：ならさくらは気が付くね・・・どうやら立て付けが悪くて風でガタガタ言っていたのだと

神城桜子 P L さくら：『なんだ・・・風か』

川崎董子 P L すみれ：私もその窓を見に行きますわ

G M 暁：ふくんそう・・・じゃあすみれも窓に近づくと？

川崎董子 P L すみれ：？ええそれで構いませんわ  
G M 暁：なら二人とも幸運ふろうか！

神城桜子 P L さくら：え？

川崎董子 P L すみれ：え？

川崎董子 P L すみれ：C C B < || 5 0 幸運 (1 D 1 0 0 < || 5 0) ↓ 5 9 ↓

失敗

神城桜子 P L さくら：C C B < || 5 0 幸運 (1 D 1 0 0 < || 5 0) ↓ 6 0 ↓

失敗

G M 暁：・・・なら二人共聞き耳

神城桜子 P L さくら：C C B < || 5 0 聞き耳 (1 D 1 0 0 < || 5 0) ↓ 7 5

↓ 失敗

川崎董子P L すみれ：C C B < || 6 7 聞き耳（1 D 1 0 0 < || 6 7） ↓ 9 5

↓ 失敗

G M 暁：あくくうん二人共・・・どんまい★

G M 暁：二人は窓枠にきを取られて気がつかなかった・・・そもそもなぜ『ズリズリ』という引きずる音から『ガタガタ』いう音にかわったのか

G M 暁：まるで誰かが自分たちを窓枠に近づけるかのように・・・そこでふたりはハッと後ろを振り向くが既に遅かった

G M 暁：二人は勢いよく突進してきたベットの体当たりを喰らい、窓を破壊しそのまま外に放り出されたのだから

G M 暁：民家の二階から落下しなおかつ地面には無数のガラスの破片が・・・

神城桜子P L さくら：そ、そんな・・・

川崎董子P L すみれ：まさか・・・

G M 暁：二人共2 d 6のダメージ逝ってみよう・・・大丈夫だ！出目次第では死なな

い

神城桜子P L さくら：神様お願い!!

神城桜子P L さくら：2 d 6（2 D 6） ↓ 7 [3, 4] ↓ 7

神城桜子P L さくら：つく

川崎董子 P L すみれ : 2 d 6 (2 D 6) ↓ 7 [3, 4] ↓ 7  
 G M 暁 : おお! 無事二人は生きてる . . . でもさくらは体力の半分を削られたので気  
 絶判定

神城桜子 P L さくら : C C B < || 4 4 気絶判定 (1 D 1 0 0 < || 4 4) ↓ 8 6

↓ 失敗

神城桜子 P L さくら : あうう . . . .

G M 暁 : 気絶したね、さくら

川崎董子 P L すみれ : 『桜子さん無事ですの . . . !』

川崎董子 P L すみれ : 暁さん彼女に応急手当

G M 暁 : じゃあ降って

川崎董子 P L すみれ : 治療道具使用 . . . + 1 0

川崎董子 P L すみれ : C C B < || 4 0 応急手当 (1 D 1 0 0 < || 4 0) ↓ 8 0

↓ 失敗

川崎董子 P L すみれ : そんな . . .

G M 暁 : さくらは 1 d 1 0 だって復活時間をきめるから

神城桜子 P L さくら : ダイス合計 : 9 (1 D 1 0 || [9])

G M 暁 : ならさくらは九時間後に目覚めるね現在がそうだね . . . お昼前 1 1 時半に

しよう・・・だから復活は20時半だね

川崎董子 P L すみれ：さくらさんはこのままなんですの？

G M 暁：いや病院とか行けば治療は可能だよ回復量 1 d 4 入院なら 1 d 1 0

G M 暁：割と二人とも重症だから医者が入院を勧めてくるからそこは説得してね

川崎董子 P L すみれ：運転技能はなにかマイナスでもありますの？

G M 暁：そだね・・・今日一日は—10かな

川崎董子 P L すみれ：でしたら・・・おそらく少尉たちが向こうを調べ終わったらこちらに来ると思うのでここで待っていますわ

G M 暁：了解では・・・一時間そこで待機していると見慣れた車がくるね

G M 暁：大神、桜たちと合流でいいよ

山神一佐 P L 大神：わかったよ。。。つてどうしたんだいさくら君それにすみれくんも

李・燐蘭 P L 紅蘭：二人共ボロボロやないか!!それにしっかりして—なさくらはん

川崎董子 P L すみれ：少尉たちもボロボロですわね

李・燐蘭 P L 紅蘭：取り合えず病院にいこうな・・・

G M 暁：じゃあみんなは帝都病院にいくと直ぐに治療をしてくれるよ

山神一佐 P L 大神：1 d 4 (1 D 4) ↓ 2

李・燐蘭 P L 紅蘭：1 d 4 (1 D 4) ↓ 3

神城桜子 P L さくら : 1 d 4 (1 D 4) ↓ 4

川崎董子 P L すみれ : 1 d 4 (1 D 4) ↓ 3

G M 暁 : 次に入院回避ロール

神城桜子 P L さくら : C C B < || 5 0 説得 (1 D 1 0 0 < || 5 0) ↓ 3 6 ↓

成功

G M 暁 : なら医者は少々といった感じだけど入院は逃れたけど後日かならず来るように言われたよ

G M 暁 : 現在は治療やもろもろで夕方になつてる 1 6 時ごろだねボチボチ暗くなり始めている

川崎董子 P L すみれ : 『今すぐ！戻つてこの落とし前を耽るべきですわ!!』

神城桜子 P L さくら : 『董子さん落ち着いてください』

李・燐蘭 P L 紅蘭 : 『せや! . . . なんも準備もなしで行つてもまた返り打ち似合うだけや』

山神一佐 P L 大神 : 『冷静になるんだ董子くん . . . 』

川崎董子 P L すみれ : 『たしかに . . . . . そうですよが』

山神一佐 P L 大神 : G M、一通りの準備をしたんだけどどのくらいになる

G M 暁 : 何やるかにもよるけど . . . . . 日は完全に沈んでるよ?

山神一佐 P L 大神：なら使ってしまつた分の治療用具あとは防具になりそうなもの

李・燐蘭 P L 紅蘭：後、灯油、砂糖、新聞紙、カラ瓶や

G M 暁：……まじでやる気だこいつ

G M 暁：じゃあ買ひ物はぶじ出来たよ防具に十2の防刃効果のある物が替えたよ火炎瓶の材料も

G M 暁：何本分買ったの？

李・燐蘭 P L 紅蘭：取り合えず10本分や

G M 暁：なら機械修理でふつてせいこうなら1d10本できたつてことで

李・燐蘭 P L 紅蘭：おおきにな

李・燐蘭 P L 紅蘭：C C B < || 60 ヒヤツハ一タイム (1D100 < || 60)

↓ 35 ↓ 成功

李・燐蘭 P L 紅蘭：ダイス合計：8 (1D10 || [8])

李・燐蘭 P L 紅蘭：火炎瓶八本出来たで

神城桜子 P L さくら：紅蘭でも火はどうするの？持ちものにないわよ？

G M 暁：(バ、さくら余計なことを!!)

李・燐蘭 P L 紅蘭：せやせや忘れてたで……マッチも購入しとくで

G M 暁：……なら一様の『死にに逝く準備』はいいね



GM 暁：じゃあひと晩開けて・・・全員体力1回復していいよ

山神一佐 PL 大神：さてそうれじゃあ・・・コービット邸に行こう

川崎董子 PL すみれ：『情報によればおそろく地下ですわね』

川崎董子 PL すみれ：『今日で終わらせませます』

山城桜子 PL さくら：「きましよう山神さん」

李・燐蘭 PL 紅蘭：『目にものみせてくれるわい!!』

GM 暁：じゃあ全員・・・コービット邸に移動中の描写はカット現在1階だよ

山神一佐 PL 大神：なにか引きずる音は？

GM 暁：してるね・・・ってか昨日窓ガラスぶち破つたのに今日来てみると修復されてる

川崎董子 PL すみれ：『二階は無視ですわ!!』

李・燐蘭 PL 紅蘭：『なら地下に直行やな』

GM 暁：では地下に移動した面々はそこが倉庫だとわかる

GM 暁：地下は真つ暗で電球や電源ボックスがあるがスイッチをつけてもうんともすんとも言わない

李・燐蘭 PL 紅蘭：『ここはうちの出番やな』

李・燐蘭 PL 紅蘭：CCB<||50 電器修理 (1D100<||50) ↓ 74

↓ 失敗

李・燐蘭 PL紅蘭：『ああれ？』

GM暁：じゃあ機械修理でもう一回

李・燐蘭 PL紅蘭：CCB<||60 機械修理 (ID100<||60) ↓ 2

↓ 決定的成功／スペシャル

GM暁：クリか・・・じゃあ電器は無事付くことができた、しかも故障原因は何者かによつてヒューズが切られていたことが原因だった

李・燐蘭 PL紅蘭：『このヒューズ人為的に壊されとる・・・』

山神一佐PL大神：『やはりだれかが・・・』

GM暁：電気が灯いたおかげで倉庫内がはつきりわかる・・・色々な荷物が散らかっている、モノを探すには目星が必要だ

山神一佐PL大神：ならここは俺が

山神一佐PL大神：CCB<||60 目星 (ID100<||60) ↓ 28 ↓

成功

山神一佐PL大神：よし!!

GM暁：では大神は荷物の中からなんかゴテゴテ裝飾された錆びたナイフを見つけた・・・しかし

山神一佐PL大神：『これはナイフ？でも・・・これは!!』

GM暁：錆びに見えたそれは・・・犠牲者の血が乾いてこびりついていたのだ更に

GM暁：そのナイフは独りでに浮かび山神を貫こう飛んできた

どどんとふ：シークレットダイス ↓ 成功

GM暁：ナイフの攻撃成功、ダメージロール

GM暁：1d4 (1D4) ↓ 2

山神一佐PL大神：つくナイフを刀で切り落とす

山神一佐PL大神：CCB<||70 剣術 (1D100<||70) ↓ 58 ↓

成功

山神一佐PL大神：1d10 ダメージロール (1D10) ↓ 7

GM暁：では山神は襲い掛かってきたナイフを攻撃するように受け流したら『パキン』

と音を立てナイフは壊れ地面にらっかする

GM暁：しかしナイフが独りでに浮き襲ってくるという異常を目の当たりにした全員

SANチエック

GM暁：1/1d4

山神一佐PL大神：仕方がないか

山神一佐PL大神：CCB<||32 SAN (1D100<||32) ↓ 45 ↓

失敗

山神一佐 PL 大神 : 1 d 4 (1 D 4) ↓ 1

李・燐蘭 PL 紅蘭 : C C B &lt; || 5 4 S A N (1 D 1 0 0 &lt; || 5 4) ↓ 7 6

↓ 失敗

李・燐蘭 PL 紅蘭 : 1 d 4 (1 D 4) ↓ 2

山城桜子 PL さくら : C C B &lt; || 5 0 S A N (1 D 1 0 0 &lt; || 5 0) ↓ 4 0

↓ 成功

川崎董子 PL すみれ : C C B &lt; || 5 0 S A N (1 D 1 0 0 &lt; || 5 0) ↓ 2 0

↓ 成功

GM 眺 : 失敗は大神、紅蘭か

山神一佐 PL 大神 : だんだんと殺意が高くなってきている

川崎董子 PL すみれ : 敵が近い証拠ですわね・・・

李・燐蘭 PL 紅蘭 : でもここには人っ子一人おらんで？

山城桜子 PL さくら : それに情報には遺体が地下に安置してあると

山神一佐 PL 大神 : まさか隠し部屋か？

川崎董子 PL すみれ : 眺さんこの部屋の壁を全て確認してみますわ

GM 眺 : そこまで断言されたら仕方がない

G M 暁：地下の壁は一角を除きすべて石造りになっているが一面だけ板で出来ているその板張りの壁には掠れた文字で沈黙チャペルと書かれていた

川崎董子 P L すみれ：おそらくこの奥ですわね・・・

山神一佐 P L 大神：G M こじ開けれそうか？

G M 暁：全員の S T R たさなくても自動成功だね・・・みんなが勢いよく体当たりをすると壁はくだけ隣の部屋につながるよ

神城桜子 P L さくら：中のようすは？

G M 暁：部屋のなかにはチェストが置かれ部屋の中央にわら布団がしかれその中央にだれかが横たわっている

G M 暁：部屋の中には腐臭が立ち込めていきものの気配がまるでない

川崎董子 P L すみれ：『つくひどい臭いですわ・・・』

神城桜子 P L さくら：『あの藁布団の上にいるのが・・・』

山神一佐 P L 大神：『おそらく・・・コービット氏だ』

李・燐蘭 P L 紅蘭：『兎に角調べてみようや・・・』

李・燐蘭 P L 紅蘭：暁はんコービットの遺体に近づくと

G M 暁：O K・・・なら紅蘭幸運ふって？

李・燐蘭 P L 紅蘭：あ！やっでもうた!!」

李・燐蘭 PL紅蘭：CCB<||55 幸運 (1D100<||55) ↓ 24 ↓  
成功

GM暁：では燐蘭は寸前のところで『コービット』に捕まれずにすんだよ

山神一佐PL大神：『な、なにいいいいいいいい!!』

川崎董子PLすみれ：『し、死体が・・・うごいてる』

李・燐蘭 PL紅蘭：『う・・・うそやろ?』

山城桜子PLさくら：『いやああああ!!』

GM暁：では皆さん・・・このシナリオ最後のSANチェックだ

GM暁：1/1d8だ

山神一佐PL大神：すぐ・・・

山城桜子PLさくら：大きいです・・・

GM暁：まあ・・・死体、動いてるししかたないよね

李・燐蘭 PL紅蘭：CCB<||52 SAN (1D100<||52) ↓ 12

↓ 成功

山城桜子PLさくら：CCB<||49 SAN (1D100<||49) ↓ 37

↓ 成功

川崎董子PLすみれ：CCB<||49 SAN (1D100<||49) ↓ 46

↓ 成功

GM 暁：さあ・・・なんでトリにしたか解ってるよね？

山神一佐 PL 大神：くそう

山神一佐 PL 大神：CCB<||31 SAN (1D100<||31) ↓ 6 ↓

スペシャル

GM 暁：なんだよおおおおおおおおおおお!!

山神一佐 PL 大神：っほ・・・

GM 暁：誰ひとり発狂なしかよ・・・やっぱコービット使えねエ

山神一佐 PL 大神：おい！GM

山神一佐 PL 大神：さてお持ち兼ねの戦闘だ!!

李・燐蘭 PL 紅蘭：まずうちからやな

李・燐蘭 PL 紅蘭：コービットに火炎瓶

GM 暁：じゃ投擲と幸運

李・燐蘭 PL 紅蘭：幸運？

GM 暁：周りのモノに延焼しないか

李・燐蘭 PL 紅蘭：お。。。OKや

李・燐蘭 PL 紅蘭：CCB<||60 投擲 (1D100<||60) ↓ 67 ↓

失敗

李・燐蘭 PL紅蘭：CCB&lt;||55 幸運 (1D100&lt;||55) ↓ 12 ↓

成功

GM暁：攻撃は外れたものの延焼はなし

山神一佐PL大神：次は、俺だ刀で攻撃

山神一佐PL大神：CCB&lt;||70 剣術 (1D100&lt;||70) ↓ 74 ↓

失敗

山神一佐PL大神：あ・・・あれ？

GM暁：次さくら

神城桜子PLさくら：同じく居合で攻撃

神城桜子PLさくら：CCB&lt;||60 武道、居合 (1D100&lt;||60) ↓ 1

8 ↓ 成功

神城桜子PLさくら：ダメージロール

神城桜子PLさくら：2Dd10+1d4 (2D10+1D4) ↓ 11 [9, 2]

+4 [4] ↓ 15

GM暁：はあ!!

GM暁：コービット回避



どどんとふ：シークレットダイス↓ 失敗

G M 暁：桜子の強烈な居合は、相手の魔術装甲を突破し10ダメージが入る

川崎董子 P L すみれ：おほほほほ!! 私でとどめですわ!!

川崎董子 P L すみれ：C C B < || 6 0 武道 薙刀 (1 D 1 0 0 < || 6 0) ↓ 5

4 ↓ 成功

川崎董子 P L すみれ：2 d 5 (2 D 5) ↓ 8 [3, 5] ↓ 8

G M 暁：回避いいいいいいいいいい

どどんとふ：シークレットダイス ↓ 失敗

G M 暁：チクシヨオオオオオオオオ!!

G M 暁：・・・はい・・・董子の強烈な一撃によりコービットは立っていられなくなり膝から崩れ落ちると砂のように砕けのこったのはかれが首にさげていた鎖付きの石だけだった

山神一佐 P L 大神：やったのか・・・?

G M 暁：おめでどう・・・この空家でおきていた怪異の元凶を滅ぼしたことにより依頼達成

李・燐蘭 P L 紅蘭：なんか・・・あっさり終わってもうた

G M 暁：まあ初心者卓だから色々オミットしたり緩くしてたから

GM 暁：ではアフタープレイ開始するよ

山南喜一郎：『みなさん今回は本当にありがとうございます』

山神一佐 PL 大神：『いえ．．．お力に慣れてよかったです』

山南喜一郎：「コチラ．．．成功報酬とあの家の地下で見つけた宝石です．．．よかったですらお収めください」

山神一佐 PL 大神：『宝石なんて．．．そんな！』

山南喜一郎：『いえ．．．私どもはどうもこの宝石をもっているには相応しくないと感じてまして勇敢なあなた方にならキット役に立つと思ひまして』

山神一佐 PL 大神：『はあ．．．．．』

山南喜一郎：『では．．．また『何か』ありましたら是非お願いします』

GM 暁：そうい．．．山南は探偵社を後にした

GM 暁：その後分ったことが一つ．．．あの空家の地下にあった遺体の一つが

GM 暁：依頼をしてきた山南のもものだったという事．．．しかも死後2年は立って  
いたことがわかった．．．

GM 暁：はたして．．．依頼してきた『山南』はだれだったのだろうか．．．

山神一佐 PL 大神：．．．．．その話は本当か？

GM暁：うん・・・さあ、誰だったんだらうね

「ここから何時もの書き方に戻ります

「どうだった？やってみて・・・」

「うっくん面白かったんだが・・・」

「なんともスツキリせん終わり方やったな・・・」

「これが普通なんですか？」

「あくCOCは基本こんな感じかなでも今回は割とマイルドな終わり方だったよ？」

基本COCは救いが無いから・・・」

「そうなの？」

「考えてもみて何の力もない人が妖魔や悪霊の事件に関わるんだよ？」

俺らならいざ知らず何処か病んだり魅入られて破滅つてのは良くある事さ」

「・・・たしかに昨今の作品にはあまりない感じですよ・・・それがあある意味新鮮でいいですよわね」

「こりゃ．．．少し直せば帝劇の舞台でもいけんとかやうか？」

「は？」

「わ．．．わたしはホラーはちよつと．．．」

「そうですわね．．．他の皆様にもご覧になってもらいましょう」

「案外マリアはんとか好きそうなじやるかもしれないへんしな!!」

「こうしてはいられませんわ!!わたくし米田支配人に掛け合ってみますわ!!」

「お、おい!すみれ!!おれのルルブ返せ!!」

「やれやれ．．．」

大神はため息をつきながらもうつかり夕闇にそまつた外をみる．．．

いままでやった物語が実はこの近くでヒツソリと起きていないことを願いながら

## 閑話 解つた事と解らない事

季節は霜月もうすつかり町は秋から冬の表情を出しており

道行く人々もすつかり冬衣すがたであるが子供は相変わらず元気に町を駆け回っている。

ただ一人を除いて・・・

「・・・・・・・・寒・・・・・・・・」

例外・・・暁は一人とある場所を目指し寒さを紛らわすように早足であるいていた。

「リリーのヤツ・・・いきなり呼び出しやがって、折角炬燵には入ってコーヒー飲む作業してたつてのに」

そう・・・暁はこの日の雑務を終わらしゆつくりしていたところに突然の呼び出しを喰らいこの寒空の下にいる

(これでくつだらねえ要件ならどうしてくれようか・・・)

そんな事を考えるとコチラに手を降る男性が目に入る。

「こつちだ暁！」

「幻十郎のオッサン・・・」

コチラにてを振っていたのは『風鳴幻十郎』、今回の目的地

『フミタン・アドモスインターナショナルスクール』であり、ここがフェイスの本部である

表向きは国内外から様々の文化を学び、様々な国で柔軟に活躍ができる人材を

育成を主眼にしているマンモス校であり国内外の著名・財界の子弟・令嬢だけではなく一般市民の生徒も偏見なく

学ぶことのできる数少ない学校である。因みにこのオツサンは表向きは、

女子高等部の体育の先生であり学年主任であり裏では、フェイスと

各省の調整や宮内省の整備隊の司令でもある。

「なんだ暁？元気がないな・・・ちやつとメシ食ってるか」

「あんたが無駄に元気なだけだよ・・・こんなにクソ寒いのに」

「ハハハハ！この位軽く運動すれば直ぐに温まる！そうだ・・・この後うちの生徒たちと一緒に

カラダを動かすか!!」

「考えとく・・・でリリイは？」

「理事長室で仕事をしている筈ガツシャアアアン!!・・・だ」

「……………」

「……………」

「はあ……………」

金髪のナニかが本校舎最上階から窓ガラスぶち破って落下していった……

「……………先に理事長室にいつてるから」

「解った、俺はアレを拾って校長に渡してくる」

「わかった……………」

幻十郎と別れ暁は学園の敷地内に入る

「あれ？あのちっさいの！」

「くく暁ちゃんだ!!」

「最近見なかったけどどうしたんだろく」

「わたしこの前、パパと一緒に帝劇行ったらそこで働いてたよ？」

「おい暁ちゃんくくあとで一緒にあそぼく」

遠くからこの生徒に声をかけられたりするもそれは何時ものことなので

かるく挨拶したりいなしたり蹴りいれたりしていく……

因みに暁や鉄花団のメンツは年齢が若い層が多いので教師としては無く

この広大な校舎の全体を管理している用務員や生徒としてこの学校に所属している。

無論暁は用務員として働いている……最初は学生として所属しようとしたら

とあるバカが初等部に入れようとして戦争になりに

用務員として落ち着いたのはまた別の話である。

「む？オーガス久しいな」

「あ……長門」

「ここでは先生と呼べ……こんなところでどうした？迷子か？」

「はっ倒すぞ!!ロリコン」

「な！ロリコンだと？心外な？全く相変わらずだなお前は……」

「つたつく……リリイに呼ばれたんだよ？」

「理事長に？なら急ぐといい……そろそろサボり始める頃だ」

「さつき窓から紐なしバンジー決めてたぞ？」

「何？そんな危ない遊びを！かわいい生徒（ロリ）が真似をしたらどうする気だ!!」

今日こそ勘弁ならん!!成敗してくれる!!」

「……」



長門は、猿叫をあげながらその場を走って言ってしまった。

「教師が廊下を走るな」へスツパ〜ン

「クハ！・・・有澤先生・・・」

「アホらし・・・」

~~~~本校舎【理事長室】~~~~

コンコン

「チワ〜〜ス」

「晁さん・・・こんちには今日はどうかしましたか？」

「あ・・・武蔵」

「今は教師職中ですので・・・」

「そうだったフミタン校長」

「結構・・・で今日は一体？」

「リリイによばれて来んだよ・・・居ないみたいだけど」

「居眠りをしていたので外に出しました」

「お．．．おう．．．」

ガチャ

「あゝゝゝ死ぬかと思つたわ．．．」

「つち」

「．．．．」

「ちよつと！校長先生・あれはいきらなんでも酷くないですか？危うく死ぬとこですわ
!!」

「死ねばいいのに失礼すこしやりすぎました」

「きこえてますわよ？．．．．さて暁いらつしやい」

「．．．お、おうで何か用？」

「重要容疑者Tへの尋問が完了したからその結果を伝えようと思つてね向こうだと少し
過激な内容だからだれが覗き見してるか解らなかつたからここに來てもらつたの

後で叔父様には送つておくわ．．．尋問の様子みる？」

「．．．．見る」

暁はそう言うのとフミタン元い武蔵はカーテンを広げ映像の準備をする

このフロアは理事長室以外はないので他の人が聞き耳を立てることもない下より防

音、防盜聴

処置は完璧である

「正直私も見るに堪えない内容よ・・・汚すぎて全くやりすぎよ阿部先生にゲド先生・ジャック先生」

「・・・・・・・・・・」

詳しい内容はDVD&ブルーレイ特典なのでカット

「あくうん・・・ようは何も解らない事が解ったつて事だね」

「天海本人の目的はハッキリしているがあなたの妹を誘拐した事やあなたの一族を滅ぼしたことは否認どころか

知らないと一点張り・・・」

「あの責め苦で言わないと言う事は本当に知らないと思うと判断します以上」

「つまり葵 又丹の独断・・・と又丹の足取りは？」

「不明よ・・・黒之巢会本拠地跡地にも痕跡無し」

「・・・今回の事件はまだ終わってない？」

「ええ・・・謎が残りすぎている、葵 又丹いや・・・山崎真之介の捕縛しない限り」

「葵 又丹の正体は帝撃には？」

「まだ言わないはなにせ・・・アソコと山崎の縁は深すぎる」

「靈子甲冑【光武】やその他帝撃の装備の設計者にして元降魔部隊の隊員」

「精神的ダメージがヤバイ事になるな・・・」

「時期をみて叔父様に報告はしますが・・・できれば帝劇に知られる前に処理したいですわ」

「雷電の改修は？」

「既に終了しているけど・・・場合によったら新型を建造したほうが良さそうね」

「新型？」

「覚えていると思うけど雷電はいわば試験運用機。プロトタイプ」

「正式運用機を建造する？」

「各所必要なデータは今日の戦闘で集まっているし各種オプションパーツの問題点もわ

かった

私の機体のノウハウもある……」

ここで一枚の書類を覗にみせる

【コジマ動力正式運用型霊子甲冑建造計画概要】

「コードネーム【震電】雷電のバリエーションパーツの漸雷や榴雷のノウハウを使った

機体よ稼働時間も大幅に向上出力も上がっている……いま本国から必要な機材を
発注してる

完成は来年頃ね……最も必要がなければいいのだけだね」

「……………」

「……………さて真面目な話はこの位にして師走にむけての話をしましょう……」

「ん？師走？なんかあんの？」

「忘れたの？師走の二大イベント……………クリスマスとコミショよ!!」

「……………」

コミショ・・・正式名称【文化芸術発掘即売会】俗称【コミックショータイム】ぶっちゃけコミケの事であるしかし現実のコミケとは規模が違いあそこまで大々的なものではない

コミショでは全3日間の肯定でジャンルは6部門【1日目】絵画・芸術【2日目】文芸・論文

【3日目】音楽・映像の計6つである。

ここでは新進気鋭の芸術家、作家、映像作家、キネマ監督の見本市でなかには新人の俳優や歌手何かが自費制作した

レコード、フィルムを販売している、それが有名監督や出版社の目にとまりデビューすることもあるため、

規模は小さいながらもその分内容は濃いものになっている。

因みに二日目文芸ブースのとある壁端は異界化している程であるその中心こそ

ここにいる『セレリーナ・リレイ・トラス』作家名『白百合きいと』

が書き上げる純愛と禁断の愛をテーマにして書き上げる小説が多く清き女性を腐海と百合の沼に落としている

一度、有名出版者の目にとまるもその内容に酷評と罵倒をした者がいるが、その者をそれを見たと見たものが居らず

出版業界では作家『白百合きいと』は正に触れてはならないモノとなりそれ以降表舞台には出ずヒツソリとしかし確実に

年末のコミショでその沼の汚染者が増えている。

「さあ!! 晝!! 挿絵のラフとベタ作業よ!! 暇な鉄華団のメンツは漫研に放り込んであるわ!!」

尚小説といつても現代のライトノベルのように所々に挿絵が入っている見たくもない絡みの絵を漫研部長とリリーの命令で……

「……………」(# ^ ω ^) ピキピキ

スタスタへリリイに近づき

ガシツ!! へリリイの首根っこを利き手のじやない方で掴み

ガラ!! へ武蔵が窓を開け

（。・ω・）σ（*ぼいへリリイを外に放り投げる

「ちよちよちよ!!ま・・・まっつて落ちる!!」

「で?クリスマス準備つて?」

「あくそれね・・・クリスマスといえは聖夜!!デートの準備よ!!暁は誰とデート行くの?

アイリスちゃん?それともすみれちゃん?白愛?もしかして私?イヤ〜ン」

「お前は最後に殺すといったな?」

「え?言つてないし聞いてない!!」

「あれは嘘だ・・・」へパツへ手を離す

「ウワアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

「これでも死なないんだよな〜」

「何せ神様ですから・・・ところでデートは誰といくのですか?以上」

「武蔵・・・お前まで・・・」

「すみませんですが少々気になりまして・・・準備をするのでしたら

それなりに詳しくそうな人を呼びますが・・・香取先生や陸奥先生・・・微妙ですが
ウイン・D先生を

呼びましょうか？以上」

「やめて……特に少佐は……精神が死ぬ」

「フフフ……」

「武蔵……最近性格悪くなってるないか？」

「武蔵先生の影響です以上」

「そうかい……あ、コミシヨたしか盤上遊戯部もなんか出すみたいだからそっちいこ」

「新しいシナリオを書いていと言っていましたね」

「そうなんだ……じゃあまたね武蔵」

「お気をつけて暁さん」

マンモス校だけあり広大な校庭では、青春の汗を流す運動部の姿や

教職員と地獄の追いかっこをしている不良や用務員

校舎内では吹奏楽部や軽音楽部のメロデーが響き

文化部特有の姦しくも楽しい声が響いている。

まあなかには補習や罰則掃除をしている悲惨な生徒もいるが学校生活とはかくあるものである

そんな声と雰囲気懐かしくそして少し寂しい気持ちになりつつ

目的地にむかって暖かい校舎を歩いていく・・・

オマケ1

「止まるんじやねーぞ、おれはこの先にいるぞ・・・だから止まるんじやねーぞ」へ死相
「団長おおおおお!!!」

「これが人間のすることかよおおおおおお!!」

「はいはい〜寝ない! 嘆かない、叫ばない〜」

「ノ、ノ、*(。▽。)* ノ、ノヒヤッハーwwwwwwしめきりちかいぜ〜」

「秋雲!! マルガ・・・落ち着け」

オマケ2

「全く理事長という立場でありながら二度もまどから飛び降りるとはなにごとですか
!!」

「しかも途中、指導中の生徒巻き込み挙句の果てには・・・」

「風鳴先生・・・西村先生ここは何時ものやつておきますか？」

「デイビッド先生そつちは終わりましたか？」

「ええ幼等部で怪しいうごきをしているミス長門を湿落としてきました」

「・・・」へちーん

「さてキサマら覚悟はいいな・・・理事長、吉田、坂上、ついでに長門先生」

『シヨータム（補習）だ!!』

『ギヤアアアアアアアアアアアア!!』

自己紹介2 (学園版)

【風鳴幻十郎】(風鳴弦十郎)

年齢36歳

職業【表】

女子高等部体育教師

2学年主任

2-A組担任

中国拳法部顧問

職業【裏】

フェイス皇居防衛隊【聖歌隊】司令

詳細

フミタンアドモスインターナショナルスクール

女子高等部二年生の学年主任

性格は基本シンフォギアと変わらず

そのチート性能も健在、ここでは霊力は無いが

その肉体的性能で脇士やドイツ製の人型蒸気を粉砕できる

この世界線では了子とは恋仲ではなくかんけいとしては異母兄弟よく彼女のノロケをききげんりしているも幸せそうである

裏では皇居や皇族の守護をもくてきとした部隊の司令官で

【聖歌隊】 || ギア奏者達とおもってくれればOkである尚

この世界戦はシンフォギア本編というよりはXDに近い為
奏とセレナは生存

【フミタン・アドモス】(武蔵)

年齢??歳

職業【表】

校長

料理研究会顧問

職業【裏】

フェイス最高指揮官補佐

作業班班長補佐

詳細

皆さん御存知の武蔵です

裏と表で名前が違い服そうもメイド服からビジネススーツにメガネ

玉に忙しいとメガネ装備メイドで校内で目撃されるもかなりレアなので

男子生徒にはとても人気がある。

料理が得意なのとストレス発散で料理研究会の顧問に

学園内でも男女関係なく人気のある部で所属数もそれなりに多い

【山本長門】(長門)

年齢25歳

職業【表】

共学中等部1-B担任

日本史教師

トライアスロン部副顧問

職業【裏】

フェイス横須賀鎮守府第1旗艦

訓練教導隊長

詳細

容姿は、まんま艦これ長門、動きやすい服を好みGパンスカジャン愛用
学校ではその男らしい言動や整った容姿で女子生徒ににんきがある
一部男子生徒もその豊満な胸の虜に・・・でも脳筋過ぎるのでいまいち
だが以外にも乙女ちつくでよく一人で歌劇や純愛小説を読むのが趣味
だがロリコンである。

裏のほうでも余り変わらず関東近海とロリを守っている

霊力量は並みで艀装補助で海面上にて行動が可能で

帝国海軍の保有している通常艦船より小回りがきき尚且つ

同等威力の艦砲を扱える。だが砲で打つより殴る方が好きらしい

【山本陸奥】（陸奥）

年齢23歳

職業【表】

共学高等部 2—B 担任

数学教師

ダンス部顧問

職業【裏】

フェイス横須賀鎮守府第 2 旗艦

訓練教導隊副隊長

詳細

長門の妹、容姿は長門同様艦これと同じ

服装はビジネススーツ、ダンス部顧問で

長門とは逆に男子生徒の人気は高い

少々ドジっ子属性でたまにラッキースケベ

にあったりしている。しっかり物の姉と

何処かおっとりとした妹で長門、陸奥コンビは

学校でも有名、裏では第二旗艦を努め陸奥は接近戦より

艦砲射撃が得意でも何故かしら第三砲塔に被弾しやすい

もはや呪いか？ 皆には秘密だが彼氏持ち交際 3 ヶ月目

【ディビッド・プリスキン】（ソリッド・スネーク）

年齢 47歳

職業【表】

男子高等部体育教師

野外活動研究会顧問

職業【裏】

フェイス教導隊司令官

海外工作員

詳細

容姿はMGS4のフェイスクラムでのミドルスネーク

表では男子高等部の体育教師で

そのウエットな物言いが人気で先生自体女好きなので

親しみのある先生・・・野外活動部ではキャンプやアウトドア

の素晴らしさを部員に教えまた自分も楽しんでいる・・・

がいきなり野山から動物やきのこをとってきて食べないで欲しい

と一部生徒から苦情がはいるダンボール教教主

裏ではフェイスに入隊したての訓練生に基礎を叩き込む鬼教官

そのため入隊ごも「ビックボス」といわれ慕われるがそれは嫌がつている

オタコンは旧知の仲、海外では潜入や工作といった工作員として活躍

【有澤隆広】(有澤隆文)

年齢 60 歳

職業 【表】

教頭

温泉同好会顧問

戦車道顧問

職業 【裏】

フェイス整備班班長

兵器開発局局長

詳細

学園の教頭先生、ナイスミドルの武人タイプ

オジメンスキーの教師、女子生徒に人気

お風呂、温泉がすきで休みの日には温泉、銭湯めぐりをする

温泉をみずから掘る温泉同好会なる良くわからない部と

戦車道というあらたな武道（華道や書道に通じる）を編み出し日夜

うら若き乙女を洗脳している。

裏ではフェイスで使用されるすべての装備を開発、整備、修理を手がけている

むかしは帝国陸軍の戦車隊所属しており最終階級は大佐、現在は婿養子として嫁ぎ先

の企業を夫婦そろって力をあわせ現社長に付く子供は娘が二人現在この学校に在籍

戦車部の部長、副部长として活躍している。グレネードがあれば生身でも敵を

爆砕できる御人

【西村恭一郎】（西村宗一）

年齢 45歳

職業 【表】

共学高等部2—F担任

共学高等部二年学年主任

生活指導担当

英語教師

トライアスロン部顧問

レスリング部監督

職業【裏】

無し

詳細

基本バカテスと同じ生活指導の鬼

生徒のみならず一部教師の恐怖の対象

しかし不良だとしても決めつけず真摯に生徒と向き合う

良き先生、学校の秘密(裏の事)には薄々気が付いているが特に

不満はなく寧ろ自分も出来ることをと積極的に活動している熱血漢

顔に似合わず英語の担当しかも頭はとても良く、了子女史に2く3番目に頭がいい

風鳴先生VS西村先生のガチンゴレスリング対決はこの学校の伝説

筋肉フェチ大歓喜、既婚者、嫁は20歳歳下のため一時期ロリコン疑惑が

尚ひろめた犯人一味は四八時間補習の刑に処されている。

阿部孝之先生(25)

ゲド・戦部先生(30)

ジャック・O・ランタン先生(45)

職業【表】

男子高等部

保険教師⇒阿部

英語教師⇒ゲド

倫理教師⇒ジャック

自動車部顧問⇒阿部

男子陸上部顧問⇒ゲド

盤上遊戯研究会顧問⇒ジャック

職業【裏】

フェイス特別情報官(拷問官)

詳細

ゲイブンそれ以上でもそれ以下でもない

生徒からの人気は何故か女子生徒の人気が高い変わりに

男子生徒からは、西村先生とは別の恐怖感をもっている

三人とも妻子持ち娘も在学、勿論百合属性持ち

授業はともわかりやすく丁寧で親身に生徒と向き合うので

いい先生なのだがいかんせん性癖でマイナスである

裏では趣味と実益を兼ねている元々阿部は一般人だったが

リリイがスカウト、特別情報官三番目の柱になる

某Tさんがひどい目にあっている。

学校説明

〔フミタンアドモスインターナショナルスクール〕

〔概要〕

本校は、人種、国家、宗教、地位に囚われず、世界で活躍できるスキル、価値観、柔軟性、自主性、を育てることを主眼に置き生徒一人ひとりの可能性を引き出す手伝いをする教育機関です。本校では必要最低限の校則以外は生徒自身が校則を決めていきます。主義、主張は数多く存在するこの世界大きく賑やかにして行きましょう

〔学部〕

本校は、男子学部、女子学部、共学部を基本に幼等部から高等部まであり高等部卒業後任意で大学部、専門職部に進学ができます。
幼等部・・・共学のみ期間6年次
中等部・・・ここから男子、女子、共学と別れます

期間3年次

高等部・・・男子、女子、共学と別れます期間3年次

(中等部で男子、女子、共学選択以降変更不可)

大学部・・・共学のみ4年次

専門学部

芸能科、機械整備科、帝国海軍教導科、帝国陸軍教導科、警察教導科、
公務員科、農業学科、経済学科、教育学科、スポーツ専門学科、
科学技術科、畜産学科、芸術学科、医学部、法学部、インターナショナル科

【学校行事】

林間学校・・・幼等部から高等部一年次の7月

修学旅行・・・幼等部から高等部二年次の9月

スクールフェスタ・・・開催10月後半全学部共通

海外研修(ホームステイ研修)・・・高等部二年次夏期休暇(希望者のみ)

卒業旅行研修・・・高等部三年次二月(進路確定者のみ)

合同体育祭・・・五月中旬

大学部・専門学部研究発表会・・・4年次九月期間20間

【試験】

試験は学期末試験と大学部入試試験のみです

なお試験があるのは中等部以降になり幼等部は試験ではなく
各月末に各教科のテストを実施しています。

【留年・停学・退学】

留年・・・各年次での必要単位が不足かつ補講をうけなかつた者が対象

同等部年次計3回以上留年したものは教育意欲なしと判断し

退学処分とします。

停学・・・各生活指導担当が著しく重大と判断した場合最長2ヶ月の

停学処分が課せられ同等部年次計3回以上停学処分を

受けた者は生活指導担当、校長、理事長での裁判の結果で

退学処分となります。

退学・・・学校内外での犯罪行為、各停学規定、留年規定に当てはまる者は

通知後一ヶ月に退学となり今後一切本校の敷地内に立ち入る事は
できません、もし立ちいた場合は本校のセキュリティによる拘束、

司法機関に移送します。

【理事長から皆様へ】

本校は各生徒の良しと主張を尊重し尚且つせかいで活躍できるようにお手伝いする学校を目指しています。

もし各教員や生徒により理不尽な目に遭うようなことがあれば恐れずに各生活指導の先生方や私や校長に教えてく

ださい必ず力になるとお約束します、長い学園生活でハメを外しすぎていろいろな処分を受けられるかもしれませんがその時に如何に失敗しないか、

もしくは以下に誤魔化すかも人生において必要な事だと思っています

勿論教師陣一同真剣にその誤魔化しを見抜いて行けるよう努力していきます。

最後に……いろいろな個性の若人と共に学んでいくことを愉しみに待っております。

理事長

セレーナ・リレイ・トーラス

「どう!!この学校説明の用紙中々かけてると思うの!」
「理事長・・・まあ・・・いいでしょう」へため息

「ちよ！なんで！！」

閑話 聖夜の舞踏会

師走 某所

その暗く冷え切った格納庫で膝をつく女性が二人そして、その二人を見下ろす一人の女性

「フフフ・・・勝った!!」

天にVサインを高らかに突き出しけして大きな声では無いがはっきりとそう言い放った。

師走 23日

東京もすっかりと冷え込み帝劇の前を寒そうに足早に過ぎていく人が殆どです。すでに年末も近きたる年始にむけての準備に人々は文字道理師走の様相であった、そんな人々の姿を帝劇の支配人室から見ながら支配人の米田は口を開いた。

「すまねえ．．．おめえさんが頼りなんだ．．．暁」

「え？普通に嫌なんだけど．．．」

米田のお願いをすっぱりブツた斬る暁。

「そこうんとか！この通りだ．．．．神崎重工のパーティーに出てくれ!!」

何故米田がこんな事を言っているのかというと、神崎家に脅迫文が送られたからである。

内容を簡潔に言うとは神崎重工が参入するプロジェクトから手を引け、さもなければ

神崎家の一人娘の命はないという内容であった。

勿論、普通なら暁は二つ返事で了承し犯人に鉛色のクリスマスプレゼントを叩き込んだだろう

しかし

「パーティーって舞踏会じゃん!!」

そう舞踏会なのである．．．無論そういつた場では何時もの恰好ではドレスコードも何もない、

つまり．．．

「衣装はまかせなさい!!」

鼻息荒く目がやばい藤枝あやめとりリイが天井から降ってきた．．．降ってきた

のであった。

「げえ！変態!!!」

「じゃあー二人とも頼んだぜ〜」

「は？ふざけんな!!ちよ．．．二人ともや．．．やめ．．．」

「アツーーーーー!!!」

「やれやれ．．．たのんだぜえ暁．．．」

それから暁は明日の舞踏会で切る衣装選びや着付けで変態sの着せ替え人形にされ、
(悪乗り発動で女装させられたりしたが)

その後は、なぜかノリノリのマリアによるダンスのレッスンと立食でのマナーなどを
叩き込まれ、

(いつも男役のため女性パートのダンスができたためノリノリ)
気が付けば深夜になっていた．．．

「．．．．．犯人絶対許さ苗．．．」ガク

時間は少し遡り【神崎邸、すみれ私室】

「我が世の春が来ましたわあああああ!!」

現在絶賛命狙われ中の神崎すみれは有頂天である。

「嗚呼・・・暁さんと明日の聖夜を共に過ごせるなんて・・・何時もでしたらこんなパーティー

あまり参加したくありませんけど・・・今年は。。。うっふっふっふっふっふ

昨夜の聖夜暁さん争奪戦でこの勝利のVサイン（チョコキ）であの腹黒キチロリと牛乳ロリ

を降しこの栄光をものにししましたわまあわたくし神崎すみれには造作もない事

時代はロリより姉キャラですわオウウホホホホ!!」

「すみれさん!」

「ウツヒャアアアア!!」

「ようやく気が付きましたね・・・すみれさん」

「お、・・・お母様!!」

すみれが勝利の雄たけびを上げていた中いつの間にか部屋にいた女性こそすみれの

母

神崎雛子である。

「部屋の外まで声が漏れていましたよ全くはしたない」

「申し訳ございません・・・」

「まあいいでしょう・・・時にすみれさん、明日の準備はできていますか?」

「え?」

「明日意中の殿方が来られるのでしよう?たしか八神暁さんだったかしら?」

「どうして!お母様が暁さんの事を?」

「神崎の情報網を甘く見ないことです・・・しかし・・・ふむ」

「何か・・・」

「中々可愛らしい子ですねそれに家柄も・・・裏御三家の一つ【八神家】の当主」

「・・・」

「すみれさん・・・必ず射止めなさい!!」

「はい?」

「この見た目で16歳ああ・・・こんな子が私の事をお母様と呼ぶと思うと・・・ふふ

「ふ」

「お母様?」

「いいですか！すみれさん明日は気合を入れなさい、神崎の女たる者

狙った獲物（殿方）は逃してはいけません・・・そのために貴方の警護を彼にするよ
うに

米田氏に打診したのですから！」

「お母様!!・・・ありがとうございますごいませこの神崎すみれ必ずや彼の心を射止めますわ!!」
「期待していますよすみれさん・・・」

「ウフフフフフフフフ」

因みにすみれの父茂樹さんは少なからず難色を示すも雛子の眼力で封殺されていた。

12月24日16時

「動き・・・憎い」*誤字にあらす

「それじゃあ暁くん頑張つてね」

「何かあつたら直ぐに連絡を入れてくれ俺たちもすぐに行くから」

さくらと大神が暁の見送りに来ておりほかのメンバーは現在忙しく二人が代表で来てくれた

「そういえば……昨日からアイリス見てないけど何かあった？」

「そうなのだ、アイリスならいくら忙しくても必ず来ているのに今回は何故か姿がないのだ。」

「あく〜うんアイリスは少し風邪気味だね」

「え……ええそうなの風邪は引き始めが肝心ですもの今はゆっくりと寝ているわ」

「そ……か」

「言えない……」

クリスマスデートをかけた聖夜戦争（じゃんけん）で負け黒之巢会も裸足で逃げるほどの

負のオーラをまき散らしているとは、そんな状態で暁と接触させればきつと……

なので花組（すみれ除き）総出で接触しないようにしていたなんて

「なら帰り買えたら何かケーキでも買ってくるかな、あ！後大神にお願いがった」

「ん？なんだい？」

「もし天辺までに帰ってこれなかったら俺の部屋にある赤と緑の包装されてるプレゼントを」

アイリスの枕もにお願い……ほんとはおれがしなきゃだけどまにあわなかったらお願い」

「あ……ああ……任せてくれ……」

「大神さん……」

「暁待たせたな！」

「あ、オルガありがと……じゃあ行ってくるね」

二人にそう伝えパーティー会場へと車を走らせた。

「しっかし暁のそういう恰好みるのはなんか新鮮だな」

「オルガも着る？」

「止してくれ……いまだにビジネススーツすらなじめえんだからな」

「そっか……でパーティー会場周辺の警備は？」

「問題ねえーよ明弘たちが出張ってるんだしかし中はな」

「もぐりこめない？」

「少しは入れたんだが流石神崎重工ってとこだな下手するところちが不審者扱いだ」

「そう……」

「まあ……お前はいつも道理やれば平気だ、だけど今回は殺しは無しだ」
「解った……そうだよねこんな日くらいはね」

「聖夜……ね俺らにはあんまり関係ないイベントだけどな」

「オルガはデートとかしねーの？」

「おい……喧嘩うってんのか？お前みたいにぼんぼんできたりしねえよ」

「はあ？ ぼんぼんって……あ〜〜」

最近、自重がバイバイしてる金髪ロリ

元々自重がない母親似の人外

虎視眈々と狙ってくるお嬢様

色々ダメな駄女神……

「普通の子がいない件についてどう思うオルガ？」

「あーすまん」

そんなやり取りをしながら微妙な空気が車内を支配しつつ会場に向かった。

12月24日18時頃

暁は、すみれとの待ち合わせ場所のホテルのロビーに入ると色々な人々にぎわっていた、

見た感じパーティーの参加者が殆どのように着飾った人が多いかし・・・

「……………つち」

自分の無茶で左目の光を失ったせいで瞳の目の色が薄くなっているのと

自分の見た目から奇異の視線が少なからず向けられている単にヒソヒソと

小声ではなすこえも聞こえる内容も聞き取れるが一切無視する。

「あかつきさん!!こつちですわ」

「あ、すみ・・・れ」

すみれの声がしたので振り向くとそこには、紅いドレスに胸元を下品にならない程度に

開けて、派手にならならずかといって品のある装飾品を身に着けたいつもと全く違う
雰囲気のみれがそこにいたのだ。

「どうかしら?このドレス、選ぶのに少々時間がかかってしまいましたの」

「え?あ・・・ああ凄く似合ってるよ何時もとなんか雰囲気違って驚いちやった」

「あら?では何時もは、どんな感じなにみえますの?」

「いつも・・・優雅の中にも暑い思いが溢れてる元気な女性かな?」

「……で、では今は、どうですか？」

「あくどくか妖艶でも下品じゃなくてとても綺麗な女性……かな？」

「……………／＼／＼／＼／＼」

「……………あー」

「少しよろしいかしら？」

「ん？」

「あ、お母様それにお父様」

「お初にお目にかかります、すみれの母の神崎雛子と申しますわ」

「此方こそ帝国陸軍中尉、暁・オーガスと申します」

「八神暁と名乗らないのですねフェイスの遊撃隊長さん……」

「……………」

「そう警戒なさらなくても結構です。わたくしも暁さんと御呼びしますわ」

「はあ……わかしりました神崎夫人」

「別にそこはお継母様でも構いませんわ暁さん？」

「は……………はあ……………」

「雛子そろそろ……………」

「重樹さん貴方もご挨拶をした方が宜しくのでは？」

「……すみれの父の神崎重樹だ、噂は色々と聴いているよ」

「全く……すみれさん後は、暁さんと一緒に行動なさい、」

暁さん後の事は宜しくお願いいたしますわ、もし傷物にしたら責任を取っていただきますから」

「解りましたお任せください、お二人もお気をつけて」

「お心づかい感謝いたしますわ」

「すみれ何かあつたら直ぐに近くものに声を掛けるんだぞ

君もあまり騒ぎを起こさないでくれ……」

茂樹からの若干の敵意を受けつつ夫妻はその場を離れていった。

「全くお父様つたら……昨日からあの調子で御免なさい暁さん

お気を悪くなさいましたよね……」

「大丈夫だよあの位、一人娘の相手を俺みたいのがするんだから当然だよ」

「余り自分を下卑しないでくださいませ……さて私たちも会場に向かいましょう」

「そうだね此処だと視線がね……それではお嬢様お手を……」

「暁さん……ハイ、エスコートお願いいたしますわ」

差し出された暁の手を取ったすみれは微笑ながらホールへ向かっていく。

会場では、オーケストラの音楽とそれに合わせて踊る男女、ワイングラス片手に

談笑する人々、配膳やビュッフェの料理をちようりするコックなどがある。

「暁さん挨拶回りにお付き合いただけですか？」

「構わないけどおれの紹介は任せていい？」

「構いませんわ」

それからは、すみれの学友の所や各企業のお偉いさん、そして

「あら？ トーラスのご令嬢もご参加していたのですね」

「げ・・・」

「あら？ すみれさんそれに暁も、こんばんわ」

白いドレス（アズレンのイラストリアスのドレスと同じ）を着たりリイがワインを楽しんでいた

「神崎重工の社長様から招待状を頂きましてね息抜きにさんかしましたの」

「そうです・・・因みに協定の事は」

「解っていますわ今日は、小事をかたずけてからお暇しますわ、ここはなにやら視線が悪いので」

確かにさつきら男どもの視線がねっとり突き刺さってくる、若いところと俺と同年、高年齢だと

米田のおやつさん位の男共のしせんが二人に注がれていてどれも欲にまみれている

のが解る。

「確かに品のない方々を多いみたいですね」

「それに所々殺意の……まあいいでしょうではお二人とも良いお年を」

二人にそう告げ会場を後にするリリイを見送った後、すみれが……

「暁さん少し踊っていただけませんか？」

「ああ……構わないよ、でも不慣れで」

「構いませんわそれに暁さんの事ですもの大丈夫ですわ」

微笑ながら暁の手をとりオーケストラの音楽にあわせワルツを踊る。

マリアの特訓のお陰で中々様になっている暁と踊りなれているすみれ

二人は今だけは他の人の視線を気にせず楽しく踊る……

「お上手ですわ……暁さん」

「ありがと……でもやっぱり苦手かな」

「フフフフそのうち慣れますわ」

「そうかな……っ！」

一通り踊ったところで暁はいままで以上の殺気を感じ気持ち切り替え会場を見渡す

ローストビーフを切り分けるコック、談笑する婦人、煙管を加えようとしている男性

お酒を配膳するボーイ……

次の瞬間、何かがキラつと光、トスと軽い音が暁に聞こえた

それは針だった長さ5センチ程の針はすみれの胸元に刺さる……前に暁の右腕に刺さる

「暁さん？」

「何でもないよ……ごめん少し手洗いにいってくるから神崎夫妻と合流してくれるかな？」

「……なにかありましたの？」

「ううん、何でもないよちよつとした手洗い行くだけだから」

そういい微笑ながらその場を離れる。

はあはあはあ……

楽な仕事だと思っていた、

成金の令嬢の命を奪う簡単なお仕事・・・なんてことない

会場に入り、酒と旨い料理を堪能して仕事道具を吹いて終わり

銃なんて音が酷く匂いが酷く相手を無駄に苦しめる・・・美しくない

その点俺の仕事道具は音も匂いもせず相手を無駄に苦しめずに絶命させる

しかし・・・

針は相手にまっすぐ命中するはずだった

一緒に踊っていた子供の右腕で「防がれ」なければ
針には俺独自の調査でされた薬がたつぷりと塗られている
刺されば数秒で絶命する薬が

しかし

子供は絶命しなかった・・・

ありえない

人間なら必ず死ぬ毒で死なないのはそれは人間ではなく

「化け物め・・・」

「ひどくない？人を化け物って」

「え？」

パス

軽い音が人気のない廊下に響いた瞬間、男の右足に熱と激痛が走る

「ぐっゴ……」

激痛に声を漏らす瞬間、口に堅い何かが突っ込まれる……

「しゃべるな……」

目の前には先ほど腕に針を受けた子供……左手には子供に似つかわしくない

もの……銃が握られてそれが自分の口にねじ込まれていた

「依頼者はだれ？早くしゃべってくれないかな」

「誰……が」

パキ……

暁は男の小指を小枝を折る用にへし折る

「~~~~~!!!」

「もう一回聴くよ……依頼者はダレ？」

光が無く色の薄い冷たい目をした子供がタンタンと話す

おれはここで・・・

「トヨシマ自働織機の幹部の・・・だ」

「ふーん」

「なあ・・・なんでお前死なねえんだよ・・・？」

「ん？ああ・・・このスーツとシャツ特殊繊維で出来ててなあんな物貫通しないんだよ」

「ナニモンだよ：お前」

「散らない鉄の華だよ・・・」

ああ・・・そうか・・・

俺の人生も・・・ここまでか・・・

「お待たせすみれ・・・すこし待った？」

「暁さん大丈夫ですわ、それにしても少し遅かったですわね」

「ごめん少し道が混んでてね」

「・・・問題は無事に済んだようですね」

「神崎夫z「お継母様でしょ？」お継母様・・・」

「すみれさん・・・部屋をとってあります今夜はそこに泊まりなさい勿論暁さんも」

「ちよ！雛子何を言つて「何か？重樹さん？」つぐ・・・」

「では後は当人同士でゆつくりしなさい・・・早く孫の顔が見たいものです（ボソ）」

「・・・・・・・・・・」

「初めて会った時から思ってたけど・・・すみれってお母さん似だよね」

「え!!」

それから・・・

「ウフフフ・・・アカツキシちゃん・・・ヒック」

「あの・・・すみれさん？」

「フフフフ今夜は寝かせませんわ．．．さあ夜は長いですわよ．．．ヒック」
「あ．．．やめ此処風呂場!! ってめっちゃ酔ってる!!!」

「アツーーーーー!!!」

すみれ合流前

煙管に偽装した吹き矢を所持していた暗殺者を気絶させ、待機していた警備員に引き渡して

事後処理をしていると一人の男性が一人歩いてくる。

「フォツフォツフォ．．．其の齢で見事な手際じゃのう．．．」

「あんたは？」

「む？おお．．．すまんすまん儂は神崎忠義、すみれの祖父じゃ」

「すみれの．．．おじい様、初めまして陸軍中尉、暁・オーガスと申します」

「フォツフォツフォ．．．噂は米田君から聞いておるよ八神君、今夜は

すみれの警護感謝しておるよ……此奴の事はこちらに任せてもらおうか」

「解りました」

「時に此奴の雇い主について何かしやべったかの？」

「トヨシマ自働織機の幹部の……だそうです」

「あやつか……フム解った」

「それでは自分はこれで……」

「フフフ解ったわい……すみれの事今度もよろしく頼むぞい」

そこで暁と別れた忠義は、内心喜びで震えていた

（すみれの奴め良い男子を見つけたものじゃ……如何にか神崎に婿入りして

ほしいものじゃな……しかし裏御三家の当主、ムムム……如何したものかのう）

深夜

帝劇アイリス私室前

「……入ったら命はない!!すまん暁約束は守れ」

キイ．．．

「え？」

オニイチャン．．．アカツキ．．．ドコ．．．アカツキノ匂いガスルヨ．．．

「ア．．．ア．．．ア．．．ア．．．」

サク．．．サク．．．

昨晚深々と降った雪が積もり道路を雪景色に変わった道を一人歩く暁は

どことなくクタクタであつた、昨夜酔つたすみれと一線を超えそうなところだ
が酔いつぶれ

事なきを得るも風呂場で寝てしまったのでベットに運びバスローブを着せて寝か
しつけたので

もう色々とみてしまい悶々としつつソファで眠りについたのだからだの節々が痛
い

「やっと帝劇について．．．た」

朝も早く本当なら帝劇のみんなも寝ているだろう早朝なのに

「御帰りなさい！アカツキ!!」

満面の笑みを浮かべ彼女に挙げる予定だった眉太の熊のぬいぐるみを抱いたアイリ

スが

お出迎えしてくれた・・・うつすらと見える紅く濁った眼をしながら

どうやらまだ休めなさそうである

第32話 新たな年、新たな敵①

太正13年元旦午前2時 帝国陸軍習志野演習所

年が明けて二時間が経った頃習志野演習所では所狭しと人が慌ただしく動き指令所近くには様々な機材が積まれている、

焚火と照明に映し出される濃青の巨人が幾つもの姿を見せている。

「さむ………」

「ね……眠い………」

焚火の前で暖をとっている二人の姿……暁とオタコンは少し凹んでいる
ステレンレスのカップの中身をのみながらぼやく

「オタコンまだ準備できないの？」

「今、弾薬の装填とバッテリーの最終確認をしてるからもうそろそろだよ」

「しっかし……約四か月でよく仕上がったね……新型」

「壱七式戦術霊子甲冑改 震電……リリイ達や整備班、トールラス本社が総出で頑張ったからね」

そういい簡単なスペック表を取り出す

全長：4.4 m

本体重量：2.8 t

全備重量：4.8 t

最大速度：65 km/h

最大行動時間：36 h バックパックのエネルギー供給時間)

乗員：1名

主な武装：25 mm機関砲、ミサイルランチャー、プラスチックロッド、試験型レールキャノン

「バッテリー容量が上がってる……」

「うん、でも常人では36時間の行動なんて無理だ、向こうのテストパイロットが数名意識障害で病院送り……」

「そこにそれ……怖い」

「だからその容量の多くなった電力で『アレ』を運用することになったんだよ」

「流石……変態ども」

目線の先には低圧砲より二回りデカイ砲が鎮座していた

「壱七式戦術靈子甲冑改専用超電磁砲試作壱号機」

「あんなん装備して走り回れと？馬鹿なんじゃね？」

「威力は申し分ないよ？一発で翔鯨丸だつて撃ち落とせる」

「こんなもの作つて喜ぶか変態どもめ」

『アハハハハほめんつて!!!』

「はよ巢に帰れバカ者ども！」

変態（整備班）共に近くにあつたスパナを投げ付け……ぬるくなつたコーヒーを飲んでると

この場に似つかわしくない恰好をした女性が現れた。

「暁、オタコン明けましておめでとう♪」

振袖をきたセレリーナ・リリイ・トールラスと何時ものメイド姿の武蔵がいた。

「リリイなにその恰好？」

「あはは……似合つてるねリリイ」

「もくオタコンでもいの一に番に褒めてくれるのに暁は無し？」

「あゝハイハイ似合つてる似合つてる……でそうしたの？」

「まあ……いつかえつと……この試験が終わり次第浅草に初詣いくから前もつてね」

「今年の振袖は中々の出来とと自負しています以上」

「武蔵の手作りかい……」

「すつ……」

「さて……暁向こちらの準備も出来たようだしそちらも準備を開始、

完了後速やかに搭乗、予定されているテストを速やかに実行、テスト終了後

迅速に撤収準備……お願いね」

「了解……暁・オーガス遊撃隊長これより試験を開始します」

「暁これを……新型用の起動OSだ」

「サンキュー」

「全員に通達これより Tactical armor type17EX SHIND

ENの最終試験を開始します」

了解!!

こうして帝劇での年越し返上で色々な人からブライングを受けていた
暁の新しい年一発目の任務が開始した。

太正13年元旦午前7時 帝国劇場支配人室

『米田支配人明けましておめでどうございます、今年もよろしくお願いいたします』
「おう！今年もよろしくな皆」

「皆、明けましておめでどう今年一年もよろしくね」

「ハイ、あやめさんもよろしくお願いします」

「しつかし・・・こうも皆着飾つてると壮観だな」

「そうですね、みんなは之から初詣かしら？」

「ハイ！自分とさくら君は少々別行動ですが概ね一緒です」

「おん？大神まさかデートかい？このこのく」

「指令・・・アハハハ・・・」

「もう大神さんつたら」

「しつかし暁のヤローも新年早々憑いてないぜ・・・」

「まさか・・・年越し蕎麦を食べてるときにいきなり拉致ですもんね」

「まああの羽つ返りに何言ってももう無駄だ」

「う~~~~!!!!せつかくアカツキデートできると思ったのに!!!」

「アイリス落ち着きなさい、彼も言つてたでしょ用事終わり次第すぐ帰るつて」

「マリア~~~~でも~~~~!!」

「全く~~~~今日は帰れない訳じゃないのですから我慢なさいな」

「黙れ~~~~淫乱」

「つ~~~~アイリス?」

「な〜に?お兄ちゃん?」

「いや~~~~なんでもない~~~~」

「変なの~~~~」

「な〜隊長そろそろ出発しようぜ?」

「せやな~~~~はいかんと人でエライ事になるで?」

「隊長~~~~そろそろ」

「そうだな~~~~では指令我々はこれで失礼します」

「おう~~~~気をつけてな~~~~」

花組の面々が部屋から出たの確認してとある資料を広げた、そこには今回暁が拉致された原因と

その元凶についての資料だった。

「元旦くらいゆつくり出来ねーもんかね・・・」

「此方もそれ相応の準備をしていましたが・・・」

「・・・本当に今年はいいい年になってほしいもんだぜ」

書類に挟まって所々しか見えないがそこには人のものでない異形の姿が写真に収められていた。

太正13年元旦午前10時 浅草、浅草寺

花組の皆様とお参りし各々屋台や大道芸人、仲見世を楽しむなか

一人アイリスは浅草寺を散策していた。

「はあくどうしよう・・・一人だしなんか楽しくない」

とぼとぼと一人で歩いていると向こうから見知った人・・・いや人外が歩いてくる

何時もの闇色のないドレスではなく黒と赤を基調とした振袖に、

銀系の髪に紅い華の金簪をさした狐耳の女性・・・白愛であった

「あら？アイリスちゃんどうしたの一人で？暁は？」

「ア……」

「フフ怖がらなくて良いわよ、もう貴方がたに興味はないもの……」

でもアイリスちゃんは別かな？」

「っ……」

「可憐で……綺麗な魂で……でもどこかその心にドロツとした闇があるところが」

「……ふふふ」

そう妖艶に笑い名が優しくアイリスの頭を撫でる

「もしよかったら一緒に廻らない？こっちは二人だったけどこの子無口で退屈してたのよ」

そう後ろを振り向くと白と青を基調とした振袖の褐色の少女が居た

「テケリ・リ……」へアイリスに綿あめ差し出し

その少女はまるで心外だと言わんばかりに音を発しながら右手に持っていたイカ焼きをほうばる

「で？どうする？」

「……」へコクリ

アイリスは首を縦にふるうと白愛は満面の笑みを浮かべる、それから二人と一匹は色々な店を回ったり芸を見て回った。

最初は警戒していたが段々と慣れてきて今では談笑できる程だった。

「でねくく昨日一緒に年越し蕎麦たべた行き成り!!」

「まあ・・・本当にあの女・・・つたら」

「でも終わり次第こつちに来てくれるんだって!」

「そう!なら私のお店で簡単なパーティーでもしようかしら?」

「もちろんアイリスも!」

「ええ勿論よ初めてお店に来てくれた時だしたクッキーもあるわよ?」

「あのクッキーとつても美味しかった!」

「なら今度作り方を教えてあげるは簡単だから直ぐにできるわよ」

「ホント!ありがとうおねえちゃん」

「いえいえ♪」

「あ・・・そうだ本当はきいていいのか解らないけど」

「なに?」

「おねえちゃんつて・・・その・・・暁のお母さんの」

「・・・ええそうよ・・・でもね私は似てるだけの別物、魂は別物」

「・・・私は妖・・・でもね心は成るべく人間でいようとしているわ」

「・・・」

「知ってる？ 妖魔は愛を知らないのよ？ 愛が解る生き物は人間だけ……私は彼を愛してる」

「この思いの最初は依り代の影響かもしれないけど今の気持ちははつきりといえる私の気持ちだつて」

「お姉ちゃんでも負けないから!!」

「フフフフ……アイリスちゃん世の中にはね共有物……」

「一人でダメならみんなで分け合おうって言葉があるのよ？」

「え？」

「アイリスちゃん……私と同盟を組みましょ？ 私とアイリスチャンで暁をイツパイアイシマシヨウ」

「共有……二人で……」

「愛に順番なんか無い彼に等しく愛してもらえればいい……」

「でも……」

「案外男の子つて……ハーレム願望があつたりするのよ？」

「あ……」

「アイリスちゃんに私、あと癪だけどあの駄女神にお嬢様で囲んでしまうのそうすれば

他の雌は近づけない」

「つまり・・・出し抜くとしても警戒するのは私以外の人達ってこと？」

「そう考えてもいいしね・・・恋の駆け引きなんてロマンじゃないかしら・・・特に大人の女性なら」

「大人の女性・・・」

「私はアイリスちゃんのこと、子供とは思わない一人の立派なレディーよ」

「お姉ちゃん・・・アイリスその同盟に乗る!!」

「流石アイリスちゃんね・・・さてこの話ほかの二人に話すのは少し後にしましょう」

「なんで？」

「だって・・・最初は3Pのほうがチョウドイイデシヨ？」

「3P？」

「フフフフフそういうった用語は今度教えてあげる」

「アハハハハハハハ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

甘味処のテーブル席で行われるガールズトークを無視しながらカウンター席に座る褐色少女は

5枚目になるぜんざいを手を付け始めてこう考える……
阿保じゃね？つと……

太正13年元旦午前12時 浅草、浅草寺

「それじゃあまた後でね」

「うん!!」

仲見世通りの先に花組のメンバーがチラホラ集まってるよなので白愛は
面倒になる前にアイリスと別れる。

「さて……帰りましょうかお店の準備もありますし」

ククククこんな所でなにをしている？

「っ……！！」

グサ……

「え……？」

黒い外套で姿を隠した三人と一人の男が持っていた刀が深々と白愛の腹部を貫通した

「おま……え……さた……」

「ふん……」

勢い良く抜かれた刀から黒い液体が流れる……しかし周りの人々はこの異変に気が付くことはなかった

「その妖魔を運んでおけ……」

「解りましたサタン様」

ガタイの良く人物に抱えながら白愛は、アイリスとの約束を守れないことを少し後悔する

暁を除く花組の面々は再度合流し仲見世の様子や言って皆所の話などをしていると
マリアがふと何かを感じとる

「……っ！この気配は」

「あそこです!!」

さくららが鳥居の上を指さすと四人の人影が佇んでいた。

「また……会えましたね、帝国華撃団の諸君」

「貴様は!!」

「我が名は……葵 叉丹!!」

「黒之巢会め!まだ生き残っていたのか!?!」

「黒之巢会……?バカバカしい、天海ごときではあの手度が限界、

所詮徳川に飼われていた坊主!」

「なに!!」

「だが・・・葵 又丹は違うぞ・・・容赦などせん!

貴様のように女にうつつを抜かしているようなくだらん男に・・・

私を止めることなど無理だ・・・」

「なんだと!?!」

「この帝都を根こそぎ破壊し人間どもを恐怖のどん底に突き落としてやる」

「貴様の目的はなんだ!」

「目的?・・・クククアハハハハハハ・・・!」

俺は・・・人間どもが幸せそうな顔をしているのが嫌いなさ!

苦しみ、恐怖し泣き叫ぶ姿が堪らなく嬉しいのさ」

「そんなこと・・・絶対には許さない!」

「俺は貴様たちが愛するモノや人をぶち壊してやる・・・いつのようにな!!」

葵 又丹は花組の前に何か大きなものを放り投げた・・・

ベチャつと音をたてたものは・・・

腹を貫かれ、両目を刀で潰されその銀糸の髪は黒く汚れていた・・・

変わり果てた白愛であった・・・

「お・・・おねえちゃん!!」

「こいつは確か!!!」

「ひどい……」

「化け物の分際でなにが愛だ……所詮は作り物の紛い物のくせに恥を知れ」

「貴様!!!」

「ふふふふ……来れ!帝都の下層に息つき抑圧されし魔のモノよ!

我こそが魔の解放者也!!!出でよ降魔!!!」

その瞬間地面から無数の魔獣が姿を現し花組を包围する

「これは!」

『ギギギ……ガギギギギ』

「な……何やのこいつら……」

「気を付けて!みんな」

マリアが驚愕し、紅蘭後ずさりしさくらが皆に警戒を促していると上空からあやめの声が響く

『何とか……間に合ったようね!』

「アツ翔鯨丸!!」

「あやめさん……」

「翔鯨丸や……助かったで!」

「よおしメツタクソにしてやんぜ!!」

「よし!みんな光武で迎え撃つぞ!」

「みんないくよ!」

翔鯨丸から各員の光武が降下、搭乗うい臨戦態勢をとる

しかし

まさかあのような結果になるとはこの時誰も…思っていなかったであった

※白愛
リスポーン中………(笑)

第33話 新たな年、新たな敵②

「帝国華撃団、参上!!」

境内には無数の降魔と鳥居に葵 又丹と三つの人影

そのうち一人が声を上げる

「ハハハハハ！虫けらにしては威勢がいいな!!我が名は三騎士が一人、猪また会おう!!

もつとも貴様らが生きて居ればの話だな」

「俺の名は鹿、三騎士の一人だ・・・もし生き延びることができたら

次はこの俺が相手をしてやる」

「ワタシは三騎士の一人、蝶。このワタシに会えるなんて幸せなヤツらね

オホホホホ。死ぬ前にこのワタシに会えたことを神に感謝するのね」

「その者たちが、充分なもてなしをしてくれるだろう

では失礼・・・」

素晴らしい三騎士と葵 又丹はすがたを消しその場にのこったの異形の怪物立ちだつた。

『今までの敵とは訳が違うわ・・・みんな充分、気を付けて!!』

「了解！」

あやめの通信に大神は返答し眼前のてきを見据える、確かに光武の妖力計が今まで見たことのない数値を出していた。

それでも大神たちは攻撃を開始する

しかし

「つく．．．．．攻撃が全く効かない!!」

「キヤ!．．．．．嘘．．．一発攻撃をもらっただけで．．．もう光武が」

「なんやねん．．．こいつら．．．」

「隊長．．．．．どうすれば!」

「クソウ．．．．．攻撃を捌いても機体がもたねえ．．．」

「つく．．．．．このままでは」

「いやあ．．．．．回復が追い付かないよお．．．」

花組の必殺技を諸共せず逆に敵の攻撃は一発、一発がすべて必殺級の威力

「このまま．．．．．では．．．」

大神が如何すべきか考えていると通信が繋がる

「大神！聞こえるか？今すぐ鳥居の奥に避難しろ」

「暁！来てくれたのか！」

「いまはそんなことより早く退避を支援砲撃を開始する

お前らが退避しないと【俺ら】も翔鯨丸も撃てない」

「解った皆！鳥居の奥まで退避だ」

『了解!!』

シューシュー!!

フェイス専用飛行輸送機の降下ハッチ前に雷電が狙撃状態で固定されておりその右腕に

先ほど習志野演習場で試験発射実験をおこなっていた試作型超電磁砲を装備していた

「電力臨界！中尉、これはあくまで震電用で雷電での発射は想定外です
撃つて3発ですそれ以上は機体が耐えられませんからね」

「了解・・・翔鯨丸の砲撃に合わせて掃射する、輸送機揺らすなよ」

「ラジャー！」

「中尉、花組後10秒で退避完了しますカウントを開始してください」

10・・・砲身の駆動が悲鳴を上げる

9・・・特殊弾頭が装填される音がする

8・・・バッテリーの焼ける匂いが酷くなってくる

7・・・雷電の人工筋肉が過剰電磁波の影響で異常伸縮する

6・・・人工筋肉の異常伸縮を無理やり抑え込み姿勢を安定させる

- 5 阿頼耶識の深度を深め集中
- 4 敵目標の位置を自動照準する
- 3 荒くなっている呼吸を整える
- 2 高まる魔力を雷電にすべて叩き込む
- 1 トリガーに指を掛け
- 0 トリガーを引く



轟音が機体の内外に響く
1 発

2 発

3 発

4 発

5 発

と・・・そして轟音がやむとそこには

右腕が過剰電磁波と熱で装甲は融解し人工筋肉は焼け爛れ、発射の衝撃で機体バイタルパートの装甲が吹き飛び脚部の内部骨格が破断し股関節部分は脱臼していた。

「つぐ・・・花組は!!」

歪んだハッチを蹴飛ばして暁が這い出なが近くの作業員に声をかける

「中尉!何やってんですか!!あれほど言ったのに!!」

「いいから状況は!」

「え・・・と花組健在ですアンノウンの被害大・・・マジかよ

全アンノウン健在まだ生きてます・・・レールキャノン5発に艦砲射撃だぞ」

「やっぱりか・・・」

「中尉それが解つてて・・・」

「奴らは降魔だ・・・あの降魔戦争の原因のな」

「あれが……」

『中尉、花組抗戦を開始……順次撃破しているようです』

「わかった近くの発着場に緊急着陸、トランスポーターの準備だ」

暁は輸送機のスタッフにテキパキと指示をだし終え自分の後ろにある相棒に目を向ける

今まで共に戦ってきた相棒の変わり果てた姿、いままで無茶してきたけどこんかいの無茶は

「すまない……相棒……」

暁の言葉に答えるかのように8つのカメラアイが一瞬光りそして消えた

「何とか……撃破したか」

「しかし……凄いな」

「雷が5回落ちたかと思いました」

「ん?・・・あれ・・・光武が動かないぞ!」

「あかん!!みんな脱出するんや!!」

花組のメンバーは急いで後部から脱出すると程なくして光武が小爆発を起こし地面に横たわっています。

「光武が・・・壊れてしまったわね」

「ああ・・・長い付き合いだっただけど・・・もうこいつは」

「グスン・・・もう機体も武装も限界超えとったのに・・・この子達

ほんまよう・・・働いたで・・・なあゆっくりおやすみウチの【光武】」

「それにしても・・・あの魔物の攻撃で装甲がボロボロですわ

一体なんなんですか?」

「もし・・・またあんな魔物がまた出たら」

今回は花組が勝利したかに見えたが実際は光武全機再起不能、

事実上彼らの敗北といってもよい状況であった事はこの時誰も口にはしなかった。

一月二日 帝都日報 号外

【新たな敵出現す】

【明治神宮 大混乱】

明治神宮に異形の怪物出現、帝国華撃団・花組大苦戦

初詣で賑わう明治神宮境内に異形の怪物出現し、あたりは

一時騒然の様相を呈す、帝国華撃団・花組出動。

之を撃退せしも被害甚大、霊子甲冑・光武破損か？

新たな怪物出現に帝都市民も衝撃を隠しきれぬ様子である。

「バカヤロー！ みつともねえ記事書かれやがってこのスカポンタン!!」

「お言葉ですが長官、奴らは【光武】でかなう相手ではありませんでした」

「大神イ！ テメエ何様だ!! 花組の隊長じゃねえのか!!」

士官学校で習ったのは弁論や処世術だけか!!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「帝都の市民は黒之巢会に続く脅威に怯えているわ」

「みくくんな怖がつて家に隠れてでできやしねえお陰で帝都の経済はガタガタよ

俺はよお・・・そのことで昨日から政府のお偉いさんから嫌味を言われっぱなしだぜ

もく胃がキリキリ痛くてしようがねくや」

「それお酒の飲みすぎのせいじゃ？」

「(バ！暁!!)」

「なんか・・・言ったか？胃痛の元凶・・・」

「うんにゃ？」

「いいか大神・・・黒之巢会を倒したからって平和ボケしてんじゃねえぞ

これ以上醜態をさらすようなら專業モギリに降格だ!!」

「い・・・專業モギリ・・・」

「それが嫌ならとつとと化け物相手の対策でも考えやがれ!!」

「あ、はい!!」

「解つたらとつとと行け!!」

「あ、はい!!失礼します!!」

大神が慌てて出ていき残ったのは米田、あやめ、そして暁三名は・・・

「フフフフ・・・長官少し脅かしすぎじゃありませんか？」

「正月ボケで腐りきった頭には丁度いいんだよ……」

それに治にいて乱を忘れず平和な時も油断しねえこつた……」

「先の黒之巢会の戦い……詰めが甘すぎましたね」

「こつちの諜報部が尻ぬぐいしたけど……全く解らず仕舞い天海を尋問してもあれはただの」

傀儡だつてことしか解らないようだよ」

「なに!?天海を尋問だど!そんな報告訊いてねーぞ」

「家が独自にしていることだし……」

「はあ……今後何かわかったら逐一教えてくれ」

「リリイがOKしたらね……」

「つたく……」

「でも心配しなくていいよ……今回のことは家も重く受け止めてる」

花組との協力体制をとるように調整してる」

「フェイスが……天皇直属の秘密部隊がか……」

「御上も降魔復活に大変危惧してるからね」

「解つた……頼むぞ暁」

「それにしても葵 叉丹、天海より油断できねえ相手の様だぜ」

「.....」

暁と米田がかいわをしてる最中、あやめは深刻そうな表情をうかべうつ向いていた

????

ギギギギ.....ギギギ

「いよいよお前たちが地上に上がる時が来た.....この世に生きる全ての命を奪うがいい
全ての血肉を喰らうがいい.....」

だがその為には邪魔者を葬らなければならない、素晴らしい敵がお前たちを待つてい
るぞで」

ギギギギ.....ギギギ
!!!!

帝劇 暁私室

「降魔か……何の因果かまた湧くなんてこれも全部、葵 又丹か……

よくあんなのと生身で戦えたな親父達……」

帝国陸軍対降魔部隊、化け物の巣窟かよ!!

親父sへ失敬な!!!

「震電の機種転換と最適化まで結構かかるからその間に出来ることやらないとな」

そう眩きながら右手の月輪の文に魔力を流し蒼い炎を出し精密動作の訓練を開始する

そこで通信が入る。

「なんやねん……いまいいとこなのに」

『ハイ……』

『暁今大丈夫?』

『リリイ?どうしたこんな時間に』

『暁・オーガス遊撃隊長に新たな命令を出します』

『は?』

『一両日中に本部の帰還し機種転換訓練と八神流の禁術の習得訓練を実施します』
『……』

『つきまして出向期間の短縮につき出向任務を終了します速やかに準備を』

『は?どうゆうこと……』

『中尉復唱は?』

『了解、暁・オーガス中尉は一両日中に本部に帰還そのご各種訓練を開始します』

『よろしい……御免ね暁』

ツブ……ツーツー

「やれやれ……」

どうやらこの楽しくも騒がしかった帝劇生活も終わりの様だ……

「さて……準備しなきゃな」

先ほどの通信を報告するため暁は自分の部屋をでる…その時ふと部屋を見回す
(色々あつたよな……ほんと)

パタン

次の日の朝を期に暁と【アイリス】、そして【すみれ】の姿が消えることとなった

その頃

「んあ？・・・(い)ど(い)ら？」

三騎士と葵 叉丹の手によって重症を負っていた白愛は、見慣れない一室
でめを覚ますことになった。

第34話 新たな年、新たな敵③

降魔襲撃から三日目の朝、帝劇に衝撃が走る暁、アイリス、すみれの失踪であった。しかし3人の所在はすでに分かっているので騒動は直ぐに鎮静化した。

「このタイミングで帰還命令か・・・」

「しかし理由は納得できるものですが」

「まさかアイリスまで行っちゃまうとはな」

「能力強化のため特例出向要請ですか・・・」

「たしかにアイリスの霊力は高くそれ故に制御が難しいがああの連中なら適役か」

「それと後日、紅蘭を技術交流という名目でフェイス開発局に招致したいと」

「表向きは花組強化なんだろうが・・・」

「本心は何を考えているか全く解れねえときてる・・・」

「それにすみれの行動も・・・」

「新型光武開発の資金確保のために神崎家に戻っている」

光武の開発、整備、維持には莫大な資金がかかる上に現在の帝都の経済はガタガタで新型機を建造する余裕はない状態である。

実質トーラス直営組織といっても差し支えのないフェイスは帝都経済に左右されることなく

建造、研究が可能となっている、しかし

トーラス社、代表取締役「フロム・ジェームス・トーラス」は実質お飾りで実権は一人娘のリリイが握つちる。

会社運営の方はリリイの腹心の者が運営している状況である。

リリイパパ「え？ニート生活最高!!」へヒヤッフッフッフ

「ところで大神たちはどうだ・・・」

「現在作戦指令室で今後の方針を決めています」

「そうか・・・当分寂しくなるな」

「恐らく個々の能力の強化で帝都を離れるかと・・・そうなった場合帝都の守りは・・・」
「先ほどリリイから鉄華団の分隊を派遣してくれるようだ」

資料には鐵園昭弘中尉、碓いかずち中尉、載場志野中尉率いる3分隊が花組不在の間の帝都防衛でうごいてくれるよう手続きがなされていた。

その後、花組メンバーは己の能力向上の特訓期間に突入した。

カンナは修行時代籠っていた霊峰に入り、マリアは横須賀にある海軍の施設で銃技の向上

大神も同じく横須賀の軍施設で初心に戻り総合力と総勢力の向上

さくらは仙台に戻り剣の修行と己の破邪の力と向き合い

紅蘭は帝劇で光武の修復、しかしその途中、了子の進めで東京都大田区城南島の近くの

トーラス社所有の埋め立て地に存在する開発区にてトーラスの技術の吸収と

トーラス整備班と合同で破損した光武の修復と強化プラン用の装備を開発していた。

「いや〜〜テンション上がるわ!!!」

「おう・・・ねえーちゃん今日もやってんな・・・」

「あ！榊原班長おはようございます」

「どうだい・・・その子らの調子は」

「はい、やっと修復は完了して今はそれからの発展のためにプランをねつてるところです」

「流石、帝劇きつての整備員・・・うちの連中に見習ってもらいてえよ」

「そないなことありません・・・うちもええ刺激が貰えてほんま感謝してます」

「アスピナ嬢ちゃんが連れてきたやつだからどんな奴か心配していたがいい子でよかったですよ」

「班長くく紅蘭ちゃん資材の準備完了しましたくく!!」

「おう! シゲ!?! 手筈道理迅速に始めるぞく野郎共ボヤボヤしてつと後ろから蹴り上げんぞぞ!」

『応!?!』

「さて．．．うちももうひと頑張りや!!」

ムサイ男共と一緒にしながら油まみれになるも着実に前に進んでいることが実感できている

フミタンアドモスインターナシヨナルスクール地下施設訓練室B

「はあ．．．．．はあ．．．．．はあ．．．．．」

「最初より大分良くなつたわね．．．暁．．．でもまだまだ、まだ眼に頼ろうとしているわ片眼が見えないだけで遠近感は大分狂う．．．それなら．．．『両方見えなく』ても知

覚

出来ればいい・・・あなたにはそれができるはず・・・

勘と・・・視覚以外の感知器官・・・そしてその魔力なら」

「このドS・・・無茶いいやがる・・・」

暁は八神流【禁術習得】後の見えない右目をカバーするため・・・心眼の習得の訓練を

皆のアイドル白愛が特訓を手伝っていた。

「因みに・・・ここで気絶したら・・・搾り尽くすわ」

そういう両手指から魔力で出来た銀糸を暁にむけて振り下ろす

「こんの色ボケ狐!!!」

「愛のために早く・・・イって!!!」

「ふざけんなああああああああああ!!!」

同訓練室A

「アイリスさん、今からあなたの訓練を始めるわね」

「ハイ・・・」

「あなたの特性は再生と【破壊】」

「再生と破壊?」

「ええ……あなた、戦闘中味方の事を回復することができる、それはとてもすごい事なの

普通は有機物の【治癒】と無機物の【修復】は別物でもあなたをまるで同じかの様にしている

これは言わば人のできる限界を超えているといつてもいい……さらに貴方昔……力の暴走で建物を【破壊】している……」

「ツ……」

「確かに能力の暴走で物を壊したり部屋を消し炭にするこはいるでも……あなたのは巨大建造物を一瞬で破壊している……これも普通じゃあり得ない」

「そうなの?」

「ええ……だからあなたがもし今よりも強くなりたいと思うなら【再生】も【破壊】も制御していかなければならぬ……あなたにその覚悟はある?」

「それができれば……暁を守れる?」

「ええ守れるわ……でも大きい力にはいつだって責任が付きまとう

【全てを再生】しても【全てを破壊】してもね」

「わかったアイリスやるよ」

「では始めましょう・・・ステッパー貴方の中の闇とお友達なりましょう」

素晴らしいリリイはアイリスの白い胸元に手を「挿し込んだ」

「ふふふ・・・頑張るのじゃぞ・・・愛しき・・・小悪魔ちゃん」

「ア・・・／／／／／／／／／／」

ズルリ・・・

アイリスの胸からアイリスとうり二つの・・・ナニカを引きずりだす

掴む左手が甘くて振るう右手が甘くて（苦くて）

甘くて（苦くて）

甘い（苦い）音色と私とあなた（ワタシ）と

笑う口が裂けてもそれが楽（悲）しくて

楽しくて（脳髓を焼くように）楽しくて（悲しくて）震えて（奮えて）楽しくて

赤い（黒い） 赤い（黒い） 赤い（苦い） 甘い（苦い） 甘い（苦い） 甘い（苦い） 甘い（苦い） 甘

三週間後 帝劇ロビー

大神は、久しぶりの帝劇に足を踏み入れる、たった3週間留守にしていただけなのに、
すごく懐かしく思える、それだけ濃密な3週間だったと言える

「おう！隊長久しぶり!？」

「カンナ！久しぶりだね」

大神に声を掛けたのは見違えたカンナがそこにいた、

雰囲気が一回り大きく見える・・・彼女の霊力の質が大きく重くそして鋭くなっている証拠である

「さくらの奴も今帝劇について一息ついてるぜ・・・しかし隊長、いい男になったじゃねえーか」

「そうかな？・・・自分では良く解らないけど」

「ああ・・・まえとは全く違うぜ」

「大神さん！お帰りなさい」

「さくら君ただい・・・どうしたんだい服がボロボロでそれにその汚れ」

「ああ・・・ごめんなさい向こうでひたすら剣と・・・心に向き当てて・・・格好の事まで行き届かなくて」

確かにさくらの霊力は前よりも鋭く一切の揺らめきがなくまるで一本の刀の様に
しかし優しい気配になっている。

「すこし・・・体をきれいにしていますね」

「わかったよ・・・さくら!!」

「う・・・!!」

「っ・・・あ・・・!!」

帝劇ロビーの空気が一変する・・・重く、甘く、そして見知った気配が

「あれ?お兄ちゃんたちだ!!ただいま〜♪」

逆光で一瞬だれかわからなかったが声でアイリスだと気が付く
しかし

一瞬別のナニカに感じてしまった

「アイ・・・リス?」

「?なくにお兄ちゃん?」

「あいらす・・・だよな?」

「そうだよカンナ？もしかして忘れちゃった？ヒドゥイ！」

「……」

「どうしたのサクラ……みんな変だよ？」

「いや……大丈夫だよアイリスそれにしても見違えて驚いたよ」

「そう？エヘヘ……アイリスこれでも一人前のレディーだからね♪」

「そっか……ところで暁は？」

「暁なら先に格納庫にいつて色々準備をしてるよ？」

「準備？」

「うん！紅蘭も一緒に」

「なんだ紅蘭も戻ってるのかでもなんでこっちに顔ださねえんだ？」

「内緒さつて！」

「そう……」

「そういえばすみれ君はどこに行ったんだろう？」

「アイツの事だからどっかふらふら遊び惚けてんじゃないな？」

「そんなことないもん！多分この中で一番すみれが頑張ってるんだもん」

「そうなのアイリス？」

「うん向こうで聞いたんだけどすみれったら色々な所に奔走してたんだって

昼は各財閥に出資のお願いとか夜は財界のパーティーに

アイリスが訓練した暁の部隊の指令のお姉ちゃんにも頭下げに行ったり

あんまり家族と仲良くないのに実家に依頼したりと……一度倒れて

暁とアイリスで病院に運んだりしたんだよこれも全部新しい光武の為につて」

「そんな……」

「すみれの奴……相当無茶したんだな……」

「すみれくん」

「だからすみれの事わるくいったら……メ……ナンダヨ」

「わかったよアイリス」

「さて俺はそろそろ……米田長官に帰還報告をしてくる皆は作戦指令室に集合してくれ」

「解りました」

大神は、三人と別れ米田のもとに向かった。

コンコン

「大神一郎・・・ただいま戻りました」

「おう、大神か・・・まあ入れ」

「はっ！失礼します」

「お久しぶりです、支配人！ただいま、特訓よりもどりました！」

「お・・・ちったあく引き締まった顔つきになったじゃねえーか結構結構」

「先ほどさくら君、カンナ、アイリスと会いましたがほかのみんなはどうしていますか」

「あくすみれ君はいま自室で休んでいる暫く休ませてやれ、暁と紅蘭はちつと仕事を

頼んで格納庫にいつてるから後で顔見に行きな」

「そうですか・・・」

「まあ無事にみんな帰ってきてきて何よりだ・・・しかし」

「アイリスのことですか？」

「おめーにも解るか？ありや一皮むけたってレベルじゃねえな・・・」

「向こうでなにかあったんでしようか・・・」

「まあ大体見当はつくさ・・・どうせあのじゃや馬がやらかしたんだろ」

「・・・」

「大丈夫、危険はねーよあの子は変わらず優しい子さ少し大人になっただけさ」

「そうですね．．．解りました」

ビー！ビー！ビー！

「警報！まさか．．．降魔？．．よし特訓の成果を見せてやる」

作戦指令室

「大神以下、帝国華撃団・花組全員集合しました」

「うむ．．．降魔がこの銀座に現れた。至急出動してくれ」

「でも．．．米田長官．．．光武が使えませんか？」

「心配するな．．．みんな格納庫に来てくれ」

米田が素晴らしい全員移動するとそこには、新しい光武と暁の新型が並んでいた

「フフフフフ．．．これぞ！ウチやトーラスさんすみれはんの努力の結晶！

新型霊子甲冑【神武】や！！！！」

テンション振り切れてなんか怖い紅蘭がガハハハと説明する

「こ．．．紅蘭？」

「しっかしこんなイカした奴かくしてたなんて！」

「ただ新しいってだけじゃねえ紅蘭、例のモノを」

「はいな!!」

「紅蘭はポケットからカード型の機械を取り出す」

「之は暁はん等が使うとる阿頼耶識の簡易型で之をこの神武に組み込むことで

靈子甲冑の動力の伝達を最大限引き出し操作性、機動性を高める物や

なすけて【阿頼耶識・花形】や!!」

「紅蘭．．．あなたこれを作るために．．．」

「せや．．．いや／＼不謹慎やけど楽しかったでグフ．．．グフフフ!!」

「お．．．おう．．．」

「つまり．．．これを作るのが紅蘭の特訓でしたのね」

「せや．．．後万が一の為に前の光武も修理、改造してパワーアップしてある

せやけどまだ細かい調整や設定がまだなんやせやからこの子らは予備機と考えてな」

「すげえ．．．」

自身の能力ともう一人のジブンと向き合い「同化」し強（狂）化されたアイリス
個々の能力が向上したさくら、大神、カンナ

昔の冷酷さといまの優しさを兼ね備えたマリア

トーラス整備班との触れ合いで色々自重とかが振り切れるも新しい技術を吸収した
紅蘭

みんなの為に奔走し新しい力を手に入れる努力をしたすみれ
そして

「大神……雪辱戦しつかり頼むぞ！」

眼帯をし前より「大きく」なった暁が声をかける

「ああ……こちらこそ頼む暁!!」

「よし！大神出撃命令をだせ」

「帝国華撃団・花組出撃！降魔を迎撃するぞ！」

『了解!!』

出撃命令後速やかに各員は神武に搭乗起動させる

「すごい……」

「出力が光武の10倍……これなら」

「ええか皆、出力が上がったお陰で花形があってもこの子はじゃじゃ馬や

体に大きく負担になると思うから気いつけてや」

「へ！．．．今までのアタイらじゃねーんだ心配すんな!!」

「みんなこれまでの特訓の成果、俺に見せてくれ!!」

『了解!!』

「大神さん．．．．．頑張りましょう」

「ああ．．．．．」

バッテリー．．．．．OK

コジマ粒子ジェネレーター．．．．．OK

PA．．．．．OK

AA．．．．．オフライン

FCS．．．．．OK

IFF．．．．．OK

阿頼耶識TYPE—D．．．．．OK

人工筋肉．．．．．OK

魔力・・・OK

各種リミッター・・・OK

全オペレーティングシステム・・・OK

Tactical armor type17EX SHINDEN起動確認

「フェイス遊撃隊長・・・暁・オーガス・・・震電、出るぞ!!」

こうして二度目の降魔戦の幕が切つて落とされた・・・

第35話 新たな年、新たな敵④

『グアハハハハハハハ！焼焼けいいい！焼き尽くせえええ!!』

この世のすべてを灰にしてしまえ!!』

銀座の街に降魔の群れが街を破壊している様を、猪のような風貌の妖魔が見ながら叫びをあげる。

しかし

その暴挙を許さぬものがこの帝都には居る

『そこまでだ!!』

帝国華撃団！参上!!!

白、桜、紫、黒、紅、金、緑そして・・・群青の巨人達が姿を現す。

以前とは比べられない程の雰囲気と気力を漲らせながら眼前の悪を討つ為に

「大神突っ込め!!援護射撃を開始する!!」

アサルトライフルの援護射撃の間を奇麗に抜けながら降魔の一体を袈裟懸けに切り捨てる大神

その後迫る降魔に深々と突き刺さるソードメイス『鉄華無名二式』

貫かれた降魔は蒼い炎に包まれ灰すらも残らなかつた。

暁の父の形見の大太刀『鉄華無名』、さくらの使う霊剣『荒鷹』と同じく霊剣であり刀鍛冶も同じであり……つまり兄弟刀であり、その破損した刀身を修復し改良したのが以前

雷電で使用していたがさらに改良し（魔改造）したのがソードメイス『鉄華無名二式』である

「すまない暁！」

「大丈夫だ大神！次行くぞお」

の
他ペアもアイリスが敵をかく乱しその隙を紅蘭が砲撃し撃破し、要所要所でアイリス

『破壊の力』でてきを文字道理ミンチにてヘイトを稼ぐ（その光景に紅蘭ドン引き）

カンナ、マリアも古参同士の息の合ったコンビネーションで敵に囲まれても

その銃弾でその拳で敵を屠っていく（まるでカプコンゲーみないなスタイリッシュに）

さくら、すみれペアは、すみれが縦横無尽に舞い、さくら水流が流れるようにその太刀を振う

まるで舞台に立つ様に敵を優雅にそして鋭く斬り伏せる。

三週間前であつたら降魔の戦力に成す術なく敗北していただろうが、今は、特訓による能力向上

そしてその能力を遺憾に発揮できる武器、そして新たな敵にもう負けないという思いが揃い

ここに新生帝国華撃団の誕生である。

「これでラスト!!!」

「大神さん！この区域の降魔の反応は奴だけです！」

「よし！残りは、貴様だけだ降魔!!」

「グフフフフフ……我が名は『猪』！喰らうがいい!!地獄に燃える悪の炎を!!」
猪がそう吠えると足元に魔法陣が展開され中から大型の魔装機兵が出現する。

『我が魔装機兵『火輪不動』に勝てるものか！貴様ら全員灰にしてくれるわ!!』

火輪不動が両手を広げそこから火炎弾を発射し攻撃してくる。

「ちい！あのヤロー！見かけ道理火力が高い！」

火炎弾を回避した暁は命中し陥没した地面を見てぼやきながら火輪不動に向けて銃撃するしかし

その分厚い装甲に阻まれ大したダメージが入らない。

「グアハハハハハ!!そんな豆鉄砲効くわけなからうが!!死ねい」

「つく！サトシ君下がって……てやああああああ!!!」

暁に突進してきた猪の射線から暁は、退き代わりにさくらが相手の突進を利用した一撃を見舞うも

刀がはじき返されてしまう。

「か……固い！」

「ブハハハハ無駄無駄無駄!!」

「それなら……皆！靈力を高めて一斉攻撃だ！そうすれば

幾らあの装甲でもタダで済まないはずだ!!」

「よっしやあ!! ならずはアタイからだ!! はあああ!!」

霧島流最終奥義! 四方攻相君!!」

「ぬう!!」

カンナの鋭い拳が火輪不動を捉えその巨体が浮く

「今だ!! 千億の夜を越え今輝く．．パルークヴィチノイ!!」

フェイスから支給された折り畳み式のスナイパーキャノン氷の霊力弾が発射され
機体が浮いている猪は逃げる術が無く凍結する。

「ダニイ!!!」

「そろそろどんどん行くでえ、四神降臨! 勝利の科学!! 出でよ、聖獣ロボ!!!」

リリーの入れ知恵なのか変態共の技術の結晶なのかは知らんが．．．

四体のロボを『空間転移』させてきて猪をタコ殴りにしている。

「紅蘭出鱈目すぎい．．．」

「しかし今が好機! 神崎風塵流、鳳凰の舞!!」

機体後部から霊力がまるで鳳凰の翼のようになりそれにあわせ薙刀の舞捌きに合わせ
せ

猪の炎とは比べられないの爆炎を上げ猪を焼く。

「そっお!! 破邪剣征、百花繚乱!!!」

桜の花びら模した霊力刃が一斉に猪目掛けて降り注がれ、火輪不動を切り刻む、今までの攻撃により装甲には大小様々な亀裂がはいり先ほどまでの堅牢さはなかった。

「バ…馬鹿な!!!こんな…こんな筈は!!!」

「ねえ…アナタ…みんなの虐めたんだよね…そんな人は

『壊して』いいよね…イリス・克蘭ベリートラップ」

火輪不動の全方位に克蘭ベリーのようない霊力球が浮遊していた。

「ふん…こんなコケ脅しにこの猪様が、ビビるとでも…死ねい!!!」

猪がアイリスにみけて拳を振った瞬間その拳が紅い霊力球に触れた瞬間…

パン!と何かがはじけた音がしそして…殴りかかった腕が砕けていた。

「な!!!」

「これであなたは…ウゴケナイ」

悲報、アイリスが完全に別キャラ（フランちゃん）になりました…。

「…兎に角好機!!八神流裏参百拾六式『豺華（さいか）』」

蒼い炎を纏ったソードメイス『鉄華無名二式』を地面に深々と突き立てた瞬間

身動きの取れない猪の足元から高角度で吹き上がる高威力の火柱が発生し容赦なく

焼く

「グアアアア！あ…あつい、熱い!!!!!!」

火だるまになる火輪不動から悲鳴が上がる。

「いまだ大神!!オオトリは任せた!!」

「解った!…行くぞ!!狼虎滅却…無双天威!!」

霊力が雷のように帯電した刀から鋭い斬撃で火輪不動を十字に切り裂く……

「ば、馬鹿な！たかが人間如きに……」

又丹様お許しを〜「ぐぎやあああああああ!!!」

猪は最後にそう叫び機体は爆発四散しその業火で灰すらも残らなかった。

「や……った、みんな、これが特訓の成果だ……」

「大丈夫か大神？」

「ああ……しかし神武の性能が凄まじくて」

「私も……もう動けません……」

「体に予想以上に負担がかかっていますね」

「ハアハアハア……こりやもうちよつと調整せなアカンかな？」

「み、みな、さん……だらし……がないです……わよ？」

「おめえもが一番ポロポロじゃねーか……無理に喋んなよすみれ」

「そうゆうカンナもポロポロだね？」

「……なんでアイリスさんは……平気なんですかね？」へ暁ドン引き

「えーそんなことないよーツカレタナーウゴケナイナー」へチラチラ

こっつち皆キチロリ……

「と……兎に角最後に何時ものをしようか……紅蘭お願いしていいかな？」

「OKや、ほないくでーく勝利のポーズ!!!」

『決め!!!』

こうして元旦から始まった新たななる戦いから、特訓を経て新たな脅威に立ち向かえる力を得た。

しかしこれは新たな戦争の始まりに過ぎないのであった。

(蒼叉丹……待ってろよ……妹の……マキの事を必ず吐かせてから殺してやる)

暁の心の奥底でゆらゆらと蒼叉丹への怒りと殺意が燃える……蒼く……静かに

第36話　く散らなき鉄の花く①

一月の新たな敵の出現からひと月が経ち、二月あれ以降『降魔』の散発てきな襲撃が有るものの

大規模な攻勢もなく、花組の面々も警戒をしつつも次の公演練習にも力を入れてい

る。
しかしとある人物だけ少し様子が変であったその人物とは……

「風邪ね……」

「風邪……ですか？」

了子が、カルテを見ながら藤枝あやめに告げる。

「今年是一段と寒さも厳しいし色々と心労がかかるで出来事が多かったしね」

「そう……でしょうか？」

「貴方も副指令という重い責任のかかるポジションだし、知らず知らずたまったのね」
「……」

「風邪薬と整腸剤を出しとくわ、風邪薬は漢方由来のモノだから体に負担が少ないわ

食後に各3回両方とも忘れずに飲みなさいね」

「了子博士ありがとうございます」

「ハイハイ、お大事にね」

パタン

あやめが医務室から出て行った後、了子は険しい顔をしながら電話を掛ける

「ん．．．．．解った．．．．．うん注意しとく．．．うんじゃあ後で」

チン

暁は、出先に急にかかってきた電話に対応して電話を切る。

現在暁はラジヲ放送局に来ていた、どうして彼がここに居るかというのは、

リリイが布教していたCOCが色々な所で注目してしまい、とある放送作家に目にとまり

リリイとコネがあり尚且つ帝国歌劇団のスタッフの彼にCOCを題材としたラジヲドラマに

花組のメンバー・・・マリアとカンナが抜擢されたのだった。

別の放送局で人気の『少年レッド』に負けじとこの企画を立ち上げたらしい、しかしCOCは少年レッドとは違いダークな雰囲気のホラー作品がメイン客層は、子供というより青年や大人向けであるので競う相手が違うようにも思う・・・

「確かにでもアタイは、ヒロイン役のマリアも見てみたいぜ」

「もお・・・からかわないでカンナ」

因みに、カンナ演じる主人公『網馬貞次』はしががない元刑事の探偵であり、赤霧探偵事務所に席をおいている、そこで数々の怪奇な事件に巻き込まれていくのである、

マリアの演じるのは『ナイア・カオスウォーカー』網馬が初めて怪異に巻き込まれる事件の

調査を依頼した謎多き美女である。

うん……網馬貞次（アーミテツジ）とナイア・カオスウオーカー（這い寄る混沌ニヤル）

これは酷い!!!

カンナはどうかは解らんけど……マリアには直ぐばれる……
バレたあとが怖すぎる……

このシナリオ作った奴は絶対SAN値ゼロが愉悦部だろ……

（微妙にマリアもノリノリだしなー）

今は、広告用の写真を撮るため、二人は衣装に着替えていた、

カンナは、明智探偵とは違い洋服だが絶妙にヨレヨレの背広に啞え煙草

いかにも疲れた探偵といった風貌で、マリアは黒い西洋ドレスに黒い帽子、

黒いベールに日傘顔は、薄いベール隠されているが星の様に明るい金髪が良く映えている、

この二人を並べると少々ミスマッチでは、あるがそれでもどこか『お似合い』にみえ

る。

「なーこの衣装もう少しラフにきていいか？」

カンナは首元のネクタイを緩めながら第一ボタンをはずしながら言うと、スタッフさんが

にこやかに了承していた。

「どう？ドレスの着心地は？」

「フフフ……あまり着慣れてないけど……とてもいいわ」

「なんか凄く新鮮でいいかも……こんど帝劇でもドレスきれる役やってみたら？」

「そ……それはちよつと／＼／＼」

「ニヤニヤ（・▽・）」

「ちよ！二人とも!!」

そんな楽し気な雰囲気ですら撮影と録音が始まった。

「さて……どうすつか」

暁は、電話の相手……了子からの報告に頭を悩ます

『暁……悪い知らせよ』

『なに？……敵？』

『そうじゃないわ……今あやめが体調不良で診察しに来たのよ』

『それで？』

『結論から言うわ……彼女の霊力が変質してる』

『変質？』

『ええ……原因は不明だけど、日に日に霊力が妖力に変質してる』

『治療法は？』

『残念だけど原因が解らないことには無理ね、今は風邪薬と』

偽って抑制剤を処方したわ』

『抑制剤？』

『ええ……抑制剤といっても霊力の質を活性化して変質した妖力を対消滅させて』

抑制する薬よ……でもクスリに耐性が付くと効果も落ちる』

『いつから変質を?』

『恐らく一月頃ね』

『降魔が始めたころか』

『恐らく・・・』

『このまま変質して霊力は完全に妖力になつたら?』

『・・・人には戻れないでしょうね』

ザワ・・・

あやめが人間じゃなくなる・・・

小さい頃から何かとよくしてくれた姉が…化け物に

バケモノに

『アカツキ?大丈夫?』

『・・・ああ大丈夫、この事は?』

『米田指令には報告する予定よ、それ以外は指令に丸投げね』

『リリイには?』

『報告済み……リリイ的には何とかかしたいみただけど』

『だけど?……』

『……彼女曰く魂レベルの話らしくてね』

『……そつか』

リリイは、神様であるがそこまで高位の存在ではなく尚且つ此方に現界するため

力の大半が使えないときている……

『今回の事は奴らと関係ないって事はないでしょうね……暁も気を付けてね』

『……解った注意しとくじゃあまた後で』

「あーしんど……」

外を見るとすでに暗くボンヤリと月が見えるしかし……その色が幽かに紅を帯びていた。

——次の日食堂にて——

「暁君!!デート行きましょよ!!!」

抑制剤ではなくなんか別のヤクをキめてるんじゃないかと思うほどの
テンションが振り切れた藤枝あやめがそんなことを言い出した。

「……あやめさん？」

「なーに暁君？」

「仕事は？てかテンション高すぎない？」

「フフフそれがね今朝支配人が、私の体調に気を使ってくださって今日は非番になった
のよ

それで部屋で、過ごすのも何だから一緒に出掛けようかなって、最近ゆつくり二人で居るって事

なかつたでしょ？」

まあ何時もは、キチロリとかすみれ・・・または、白愛がいるからな・・・そういえば今日はまだ二人を見ていないな・・・

「アイリスとすみれは『まだ眠ってるわ』心配いらないわよ」

一体どうんな手を使って眠らせたのやら・・・生きてるよな？

「てか・・・体調いいの？風邪なんでしょ？」

「それが・・・ええクスリをのんで一晩ぐっすり眠ったらよくなったわ」

少し言いよどむところに不信感が過るもいつもよりテンションを高い以外、何時ものあやめだ、

「まあ・・・いいけど、どこ行くの？」

「久しぶりに仕事抜きで活動写真でも行きましょう・・・その後は、町を散策しましょう」
「解つたよホールに何時に行けばいい？」

現在時刻は7時前で、暁以外には、カンナ、大神、マリア、さくらがいる、

アイリス、すみれは除外して紅蘭は、現在自室で夜通し発明をしておりハイになっているが

ボチボチ、リリイが持ち込んだ魔剤（エネドリ）をキめて降りてくるだろう・・・

「そうね・・・早すぎても向こうで待つことになるかもしれないけど

9時にしましょう、『面倒』なのはその頃ならまだ起きてこないし」

ホンマに生きてるよね??あやめ姉さん・・・

「・・・さっさと準備するか、厄介なのが起きてくる前に」

いまもぐつつすり眠ってる二人を心配しつつ手早く朝食を食べて自室に戻る・・・

長い一日がこれから始まる

第37話 散らなき鉄の花②

了子女史から風邪薬を処方されたその日の夜、言いようのない寝苦しさに魘され、ボンヤリとした夢のようなもの見る……そこには何かの人影が見える。

『あなたは……だれ?』

どうやら女性の様だしかし様子がおかしいでもどこか見覚えのある姿……

『うふふふ……』

謎の女性は聞き覚えのある声で嗤う……

『誰?……だれなの?』

誰なのか尋ねた瞬間視界が真っ白になり本能的に叫び声をあげる、

そして飛び起きると、そこは……見慣れた自分の寝室だった。

「はあ……はあ……はあ……」

乱れた息を整えながらぼーん、ぼーんと時計が丑三つ時を知らせる。

【帝国劇場ホール】

暁はいつものジャンパーとシャツとミリタリスボンといった格好で待機していた、

「あれ？アカツキ君こんなところでどうしたの？」

「あ、おはよう椿」

売店の掃除をしていた帝劇三人娘の一人、高村椿が声を掛けてきた、

「おはようアカツキ君、誰かと待ち合わせ？もしかしてアイリス？」

「いや、なんかテンションが異様に高いあやめ姉さんと」

「副支配人と？そういうえば副支配人、体調大丈夫なのかしら？」

「薬のんだらよくなったって・・・多分疲れが溜まってたんだろうね」

「あーお正月から凄くバタバタしていたものね」

「うん、今日はなんか米田のおっさんが、気を利かせて休みにしたんだって」

「そっか、副支配人もいい息抜きになるといいわね。じゃあ私は仕事に戻るね」

「うん仕事頑張ってるね」

そこで椿は忙しそうに掃除用具をもって帝劇の奥に消えていく、そこで

私服姿のあやめが駆け寄ってきた、白いコートにロングスカートに縦セーターといっ

た

あたたかそうな恰好だった。

「おまたせ暁君まった？」

「いや大丈夫、椿と雑談してたし」

「……そう、ならイキましようか？」

一瞬、不穏な空気をだしたがそれもすぐに収まり、暁の手を握り、デートを開始する。

【支配人室】

部屋には米田指令ともう一人女性がおり米田は、了子からあがってきた

藤枝あやめのカルテと、結果報告を確認していた。

「……こいつは、くそ……」

内容としては、霊力変質症の詳細と原因の仮説、投与処方した薬剤の詳細と

経過予測が記載されていた。

薬剤を決まった感覚で服用すれば二か月程は、状態を保てるがいつ薬剤の耐性が付き効力が

効きにくくなるのは、個人の体質によるので不明、外的要因で症状が悪化する事が予測される

といった情報が書かれていた。

「以下の通り・・・彼女をここから遠ざけた方がいいと私は考えます」

了子とその隣に・・・あやめと【瓜二つ】の女性が米田にそう伝える

「そうか・・・」

「候補としては、仙台辺りかしらあそこは、破邪の血を受け継ぐ真宮寺や今は亡き八神家のある地

邪気や妖力といった外的要因も受けにくいし私たちの研究所もある

上手くすれば効果的な治療もできるかも」

「了子女史の案が現実的ですが・・・あの人をまさか実験動物にはしませんよね？」

謎の女性は厳しい視線を彼女にむけながら棘のある言葉を投稿付ける。

「そんなことしないわよ、彼女は彼の・・・暁の【大切な】人物ですもの」

「・・・アナタにはドイツでの【前科】がありますから信用できませんが、

彼に免じて今は、流しておきます」

「はぁーオメ等あいい加減にしねーかつたく・・・でそっちの受け入れはどうなつてんだい？」

「準備や調整もありますから明日ごろには、移送できます」

「その間の副指令は私が・・・」

険悪な空気を米田が一喝して霧散させ、今後の対応を二人から聞き目頭を揉む・・・心の何処かに言いようのない不安をかかえながらため息をつく、

「そういえば彼女は？ここに来る前に部屋を訪ねたらいなかったけど」

「彼女なら彼とデートよ」

「デ、デート!?この緊急時に？なにを考えているの!!」

女性が憤慨しながら了子に掴みかかるがそれを了子はひらツと躲す

「私に食って掛からないでくれる？許可出したのは支配人よ？」

「米田支配人!!どうゆう事か説明してください」

女性の鬼のような形相で米田に詰め寄る

「お、落ち着け!!・・・俺あただ休暇を与えただけだデートなんか知らねーよ」

「ま・・・まさかあの人が勝手に!!あの人は自分の体の事は？」

「まだ教えてないわよ・・・変に不安にして周りに気づかれると士気に影響があるし」

「……私は彼女たちを探してきます！」

バタン!!!

「つたく……何時もならもつと冷静なんだが」

「仕方がないと思うわよ？ 何せ肉親の命の危機んだから……」

女性が勢いよく出てつたドアを見ながら苦笑しながら米田に向き直る

「じゃあ受け入れの準備をしておくわね」

「頼む……あやめ君を頼む」

「はいはい〜」

バタン

「さてと……もしもし？ あーナナちゃんお久々先生いる？」

うん……そそ……ボン先生の専門だと思っから……背に腹は代えられないのよ

だって……今度も救えなかつたら彼……【壊れちゃう】かもだから」

受け入れ先の医師の助手の子に電話をして数分後、医師からカルテと経過報告書、帝

都の

一月く今日までの天候、気温、湿度、自然霊力数値、自然妖力数値の情報を寄越すよう連絡が入り

明日の午後には、助手数名引き連れて空路でこちらに来るそうだ。

「さて……一仕事しますか……」

必要なデータを書き込むため書類をだし移送先の病院を記入する『祈手医療研究所』と

「本当はここには頼りたくないんだけどねー」

コーヒーを一口飲み視線を書類作成を開始する。

ところ変わって浅草六区

ここは多くの活動写真館や芝居小屋などの娯楽が集まる歓楽地であり、平日にも拘らず多くの人で賑わっている。

「さて・・・何見ましようか・・・」

「うーんホラーとかアクション系は今はお腹いっぱいかな」

「もしかしてカンナたちのラジヲドラマの関係？」

「ああ・・・ライターからシナリオの確認とか最近引つ張りだこだったから」

「そう・・・あやめ姉さんはサンプルは何本か見たでしょ」

「ええ・・・リリイ少将が原案ときいていたけど・・・中々独特なお話ね」

「好きな人が解れるよね・・・うん」

「フフフそうね・・・暁君はどのサンプルシナリオが好きなの？」

「あーよくゲームでやるから、『悪霊の家』か『ダンウィッチの怪』かな

あやめは？何かあつたりする？」

「私は『奇妙な共闘』と『インスマウスの影』かしら・・・」

えーそのチョイス？・・・あんた下手するとそのシナリオみたいに変化しちゃうの

に・・・

あ・・・まだ知らねーんだった

「そ・・・そうまあそのシナリオも有名だからね」

「あーならあれにしましょう!!」

あやめが指さしたのはどうやら恋愛系の活動写真の様だ、並んでいるのも女性が圧倒

的に多い

「ふうんたしかにあんま見たことないジャンルだけどなんか新鮮かも」

「じゃあアレにしましょうか」

数十分待つと列が動き無事に中に入り売り子が売っていた、ポン菓子とラムネをあやめの分を買い

席について数分後にあたりは暗くなり共産の帝都ニュースが流れる、内容はやはり

最近の降魔の事と帝撃の事にかんしてのニュースだ、

観客もそのニュースに食い入るように見ている。5分程のニュースの後に本編が始まる。

ストーリーとしては、身分違いの少女が自分が使仕える幼馴染の財閥の男の子に恋をするも

許嫁の女性らに苛めを受けながらも愛する男の子を諦めきれず……

許嫁どもを次々と謀殺、虐殺し許嫁どもの家を没落させ、

ヒロインの事を疑っていた先輩女給を火頂責めで口封じして

最終的には燃え盛る屋敷の寝室で男の子を押し倒したヒロインが

屋敷ごと爆死する悲恋作品である

これ悲恋か？

ただのヤンデレ逆○じゃね？

むしろ火頂責めとか・・・先輩どんだけ恨まれてんの!!

この女ただのサイコパスやんけ!!

暁が戦慄していると…周りからスンスンと女性たちの咽び泣く声が聞こえる……
感動するところあった？ねえあった???

「……グス……いい作品だったね暁くん」

「……セヤナー」

もはや声をしぼりだしながらの相づちしか打てなかった……
女ってよくわからん……

その後、浅草を散策し大道芸人の芸に足を止めたり、雑貨の屋台で互いに装飾品を買い
い

交換しあったり、隅田公園のベンチに座り他愛もない会話を楽しんで楽しい時間は過
ぎていく

「・・・ねえ眺くん・・・最後に銀座でダイナーなんてどう?」

「もうそんな時間か、でも遅くなって皆心配しない?」

「支配人にはさつき電話で遅くなることは言ってるわ」

「・・・手際良いね」

「この分だと既にお店も予約してそうだ・・・」

「でも俺ドレスコードなんてしてないよ?」

「そこまで畏まった所ではないわ、私たちが演劇の打ち合わせとかでよく使うお店なの」

「へえーどんなお店なの?」

「個室制の洋食店よ」

「ウフフフ眺くんが好きなオムライスもあるわよ?」

「おい・・・子ども扱いか?」

「フフフ・・・ごめんなさいさあ・・・イキマシヨウ」

「?ああ・・・」

やはり何処おかしい事に訝しぐも、あやめの予約したお店に移動する
空は、すっかり暗くなり『紅い月』がランランと輝き二人を照らす

「そっだ暁……」

「ん？な……に？」

あやめに呼ばれて振り返るとドスっという肉を貫く音と自分の腹から

紅い鮮血が地面を染め……目の前の藤枝あやめの目は氷の様に冷たかった、
そこれ俺の記憶だ途切れたのだった。

第38話 〈散らなき鉄の花〉③

「えーと……闇より出し魔物、現世に來りて悪を為す……」

暁とあやめが街に出たと同時刻、大神はサロンの椅子にすわり古い古文書を頭から湯気が出そうに悩みながら読んでいる、机には筆記用具にメモ、何かの事典もあり、メモにはなにやら書き込んであった。

「これは……大和かな？……暗黒の大地……『大和』……封印により……えーとダメだ……難しいなあ……」

古文書から顔を上げ茶を一口つけうなだれていると……

「大神はん、さつきからなにうんうん悩みながらなにしてるんや？」

紅蘭が見かねて大神に声を掛けてきた、どうやらいつの間にか周りにはアイリスとすみれ、マリア以外の面々が集まっていた。

「うん、少し降魔について調べようと思って……」

「ふくん、なんの御本なんですか？」

さくらが繁々と大神の手元の古文書に目を向けながら訪ねると、大神はああと

いつて皆に古文書を見せる。

「『放神記書伝』の写本だよ。米田司令にお借りしてきたんだよ」

「へえ〜ちよつと見せてくれよ」

カンナが手を伸ばしたときに大神がそれを慌てて止める。

「おいおい・・・大切な本なんだ、大切に扱ってくれよ！

貴重な本なんだから!」

大神がカンナを窘めたところでマリアがこちらに歩み寄ってきて、

「あつ隊長ここにでしたか。司令が・・・」

どうやら大神を探していたようだが言葉を続けずに大神の持つ『放神記書伝』

に目をやると「あら？その本・・・」と呟く、どうやらマリアもこの本の事を

知っているようだった。

「マリア、この本の事しってるのかい？」

「ええ、私が花組の隊長になったときに司令が貸してくださったんです」

「へえ〜マリアにも？」

「ええ、何でも花組の隊長として知っておくべき事が記してあるという事でしたので

もつとも私は、あやめさんに指導を受けたので読めたのですけれど・・・」

「そうか・・・まあ自分で頑張ってみるよ丁度暁から必要になりそうな事典とか色々借り

れたから

これ以上は甘えられないかな・・・」

疲れた表情をしつつも事典にてを置きながら笑顔で答える。

「流石、俺らの隊長だぜ！」

「でも大神さん無理はしないでくださいね、最近あやめさんも体調が優れないよですし」

「せやな・・・大神はんまで体調不良とかしやれにならんで」

「解つた気を付けるよ・・・おや？そろそろ公演に時間じゃないかい？」

大神が時計を目にやると確かに公演時間が迫っていた。

「あ！本当だ・・・」

「そういえば今回の公演はなんだっけ？」

この質問に紅蘭が嬉しそうに「大恐竜島やウチとアイリスが主演なんやで」

紅蘭の説明にさくらが「そういえば『つばさ』以来の久々の主演でしたね」と続ける。

どうやら内容としては、南海冒険活劇のようで笑いあり、アクションありと正に

紅蘭主演にピッタリな演目の様で分類としては笑劇『コント』であり今回はマリアの

出番はなく

裏方だという・・・

(マリアのコントも見てみたい気もする)

などと大神は、こころで呟くのあった。

「あ、隊長！・・・忘れていました米田司令が御呼びです」

「え？ 解った司令は何処に？」

「作戦司令室でお待ちです」

「わかつたすぐに向かうよ」

「では失礼します」

こうして花組の面々と別れ大神は地下に足を向ける

【作戦司令室】

大神は中に入ると神妙な面持ちの米田一人が座って大神を待っていた。

「どうしたんですか？ 作戦指令室にあつまって・・・」

「すぐにわかる・・・」

重々しい雰囲気を出しながら指令室のモニターに電源を入れる

そこには降魔が映し出されていた。

「・・・これは・・・」

「こいつらが今、我々が戦っている敵・・・降魔だ、

こいつらが、出てきた以上お前に話しておかないといけない事がある

大神、これを見ろ……」

机に大きな蒔絵を広げる。

「これは……こんな昔の絵に降魔が！」

かなりの年代物の蒔絵にはくつきりと降魔と解る絵が描き記されていた。

「これが現在確認できている最古の資料だ……降魔との闘いは、今に始まったことじゃねえ

今から400年前から人類と奴らは、この地で戦いを繰り広げてきた、

この時は我々人類が勝利し辛くも奴らを地下深く封印することができた……しかし奴らは身を潜めつつ地上に侵攻する機会を密かに伺い続けてきた」

米田の言葉に息をのみつつ大神は話を聴く。

「現にやつらは過去何度か結界の綻びを付いて小規模な攻撃を仕掛けてきたしかしその都度人類が迎撃し、再び地下に追いつ返してきた」

「そんな昔から……」

「陸軍対降魔部隊も文字道理さうゆう目的で作られたものだ……」

ずっと昔の話さ……帝都を魔物から護るなど誰も本気にしていなかった

時代だったよ、俺と真宮寺一馬……さくらの父と秘密裏に仲間を増やしていった、

魔の気配を常に感じながらな．．．」

ここで大神は疑問におもったことを聴く．．．その時代には靈子甲冑のないのに戦えたのかと

「無論、今の様に対等に魔物と戦えたわけじゃない、

我々には己の体と剣しかなかったからな．．．．

降魔戦争の終わった時には、我々は、真宮寺一馬、山崎真之介、八神宗蓮の三人を失ってしまった

一馬と宗蓮は死に、山崎は行方をくりました．．．．

一馬と宗蓮は降魔戦争を終わらすため、二人は己の命と引き換えに降魔を封じたんだ．．．．」

一馬は、類まれた靈力．．．．【破邪の力】、宗蓮は、遙か昔日本で猛威を振るった

荒神【オロチの血】を受け継いでいたからな．．．」

「破邪の力．．．．それいオロチ？」

「前にも話したが太古の昔から存在する『魔を狩る者』の力、その力を受け継ぐ血統も数えるほどしかいない．．．．真宮寺もその一つ、それにオロチを継ぐのは

もはや八神家のみ．．．．つまり現在は暁しかいない、暁には妹がいたが現在は行方不

明．．．．」

「しかしそうするとさくら君にもその力が……」

「うむ……しかしその力を引き出す方法は、秘伝とされている、一馬はさくらが

おとなになってからその方法を教えるだった……一馬がいない今、降魔に対抗する手段は暁の『オロチの血』しかないがお前も知っているとと思うが

それに頼るのは危険が大きすぎる」

確かに暁は、過去二回オロチの血の力を使い、そして天海戦、もつと言えばその前、紅のミロク戦で左眼に後遺症を残した……

「だが……我々には対降魔の切り札がある」

「切り札？」

「そうだ……切り札、いや最終手段といってもいいなそれが……これだー」

そういうモニターを操作するとそこには、『剣』と『珠』と『鏡』が映し出されていた

「これは？」

「これは……『魔神器』と言われているものだ」

「まじんき……」

「見ての通りこいつは『剣』『珠』『鏡』からなる古の祭器だ、

これを善なるものが持てば、魔を抑えることができる……その効力は絶大だ」

「!!」

「しかしコイツは余程のことがない限り使用はできねえ!・・・
いや使つちやいけねえんだ!!」

米田は語気を強め・・・『絶対に使わない』と暗に言っているようだった。

「米田・・・司令?」

「いや・・・なんでもねえ、『魔神器』は言わば増幅器だ悪しきものが使えば
魔の力が増大するんだ・・・黒之巢会の六破星降魔陣により降魔の封印が解かれた
今、

降魔が地上に現れるのを、かろうじて防いでいるのがこの『魔神器』という訳だ。

『魔神器』は我々にとつての最後の砦だ」

「最後の・・・砦」

「そうだ、しかし大神こいつは最大の脅威ともなる方が一こいつが敵に渡つたら・・・
奴らの力が増大しいつきに地上は降魔で溢れかえる、文字道理『魔』と『神』の力を
秘めた

究極の祭器つて訳だ・・・」

「しかし何故そのようなものがここに?」

「銀座本部は帝都の霊力が多く集まる地脈のツボだ・・・霊気とは自然と

そこに生きる生物の力、言わば人々の『想いの力』だ、そこで花組たちが

歌い踊る……古の祭器を守りつつな」

「……………」

「多分あの男……葵叉丹の狙いはこの魔神器だ」

「……………」

「この魔神器は聖魔城の封印を解く、鍵だ……そいつは今我々の手の内にある

「聖魔城？」

大神は米田のその言葉に疑問をうかべ訊き返す

「数百年前に殺戮のために作り上げられた城だ、そんなもん地上にあげちやいけねえ

いいか此の事は軍部でも最高機密だ。誰にもしゃべるんじやねーぞ

この保管庫を開けるのは俺とあやめ君だけだ！だから奴らはここに攻め込んでくる

……………覚悟しておけよ」

「はい……………」

この短い時間で沢山の重要な事が判明し、その重圧に耐えながら大神は、

覚悟のきまつた眼をしながら答えた。

「もうわかつていると思うが帝撃の真の目的は、野心あるものからこの『魔神器』を

護ることだ、お前にはあやめ君と一緒に『魔神器』周辺の警備の強化をしてもらう」

「了解しました！」

「今、あやめ君を急遽呼び戻している・・・合流次第頼む」

その時、風組のかすみ緊急の連絡が入る

『司令大変です!!』

『どうした何があつた!?!』

『副指令と連絡が付きません!!緊急の通信をいれても応答がありません』

『一緒にいた暁とはどうだ?』

『こちらダメです!!それに帝都全域に妖力反応多数!』

「くそう・・・二人の搜索は月組の任せる大神は、このまま魔神器の警備を！」

「了解!!」

「大神くれぐれもこの事は他言無用だ・・・当然花組にもだ！」

「・・・・・・さくら君は父親の死の真相はしつていいますか?」

「いや・・・教えていない・・・お前は言えるのか?一馬は魔物と戦って死んだと

今、戦っているのがその魔物だと・・・18歳の少女が背負うには、余りにも重すぎる

そのことを知ったら・・・」

「さくら君は・・・・」

「大神間違つてもさくらにはこの話はするなよ．．．いいな！」

「はい．．．」

大神は神妙な面持ちで指令室を後にする。

その頃花組は、演目の真つ最中で現在、紅蘭とアイリスが宝を探す

一番の見せ場を演じている所であつた。

そこで紅蘭がアイリスに道中に罠があることをおして回避指示をだす

しかしその指示は、指示したところは歩くなという意味合いで

アイリスはその指示道理に歩を進め最後に頭上から落ちてきた金盃が脳天に直撃した。

楽屋

「イッターイ!!紅蘭やり過ぎ!!」

「アハハ．．．すまんすまん」

「しかし．．．コントも楽しそうに見えたけど結構大変なのね」

舞台裏から見ていたマリアは、アイリスと紅蘭のようすを見ながらつぶやく

「一樣、隊長に葉でも貰ってきたらどうだ？」

痛がるアイリスにみかねてカンナがそう提案すると、さくらが暗い顔をしながら

「それが・・・大神さんがいなくて」

「いない？どないしたんや？」

「あれ？さつきお兄ちゃん地下に降りて行ったよ？」

「地下のほうえ？」

「それにかすみさんも姿がみえませんでしたわね・・・」

「何かあるんやろうか？」

「・・・あやしいですわね！」

「大神さん・・・」

地下施設

あやめさん、暁が行方知れずの中、搜索は鉄華団や月組なる部署に任せ、大神は見取り図を

広げながら防衛器具やトラップを仕掛けていた。

「ここにトラップを仕掛ければ司令室にはたどり着けないな……」

大神はオタコンから借りた工具とトラップツールをしまし見取り図にマーキングしていく

その近くにはかすみしが合流しており大神の手伝いをしていた。

「いったいどんなトラップを？」

「催涙性の高圧蒸気を噴出するものだよ倉庫から蒸気管からも催涙ユニットにつなげて

噴出するんだ」

「なるほど……」

「上へ通じている副蒸気管をつかうのがミソなんだ、見てみたら

丁度いい配管があったので……」

「流石海軍士官学校主席ですけれども手馴れていて！」

「アハハ……士官学校時代陸軍と合同演習の時、暁にしこたまお見舞いされて

嫌になるほど経験していますから……」

蘇る陸・海軍士官学校、地獄の合同演習が……あの小さな悪魔に何度自分や同期の加山が

かかりその都度教官にどやされたことか……いまでも思い出すと寒気が……
 「あら……大神さん？ 頬に油污れが……」

かすみが頬の汚れを噴こうとするがここで大神が遠慮するが、「遠慮しないでください」

といいながら頬を拭いてくれた。

「これからの時代、殿方も身だしなみは気を付けなきゃだめですよ？」

かすみが微笑ながらそう言いながら大神の頬をふく……

(やばい……いい匂い……／／／／)

そんなイチヤついている後方の物陰には、花組の面々が様子をうかがっていた

「……何をやっているのかしら？」

「……!!」

「あの少尉の顔……恋にトロトロって感じですよ！」

「ありゃ……イチヤつてる顔だね」

「アカン！ 大神はんには、高嶺の花や！」

「お兄ちゃんデレデレしてかっこ悪い」

（（お前が言うなキチロリ））

「大神さん……」

さくらは大神とかすみが仲睦まじい姿を見て心がとても痛む感覚を味わう……

????

「又丹様例の小僧を確保しました……」

「そうかよくやった蝶……」

「勿体なきお言葉!!」

「ところで『アレ』の姿が見えないが？」

「あの女なら一度帝劇に戻るとのことです。」

「そうか．．．．いよいよだ！いよいよ魔神器がこの手に！！

それに今宵は、紅き月が輝く日．．．．最強の降魔が復活し

我らに最も頼もしき破壊の力もたらす!!!

鹿よそれまでお前は時を稼げ．．．．」

「仰せのままに！」

「くれぐれも猪の仇討などと余計な考えはおこすなよ？」

「はっ!!（又丹様にこの俺こそが最強だと認めさせたい．．．）」

「ところでオロチの小僧はいまどこに？」

「あの女が手傷を負わせたので死なれては困る為、治療槽に」

「ふむ．．．あやつめ加減を間違えたか．．．まあいいオロチの血は貴重だ

丁重に扱え．．．．例の力の制御は？」

『『協力者』の助力により『ヒューイ』なる科学者とコンタクトが取れました

もうじき安定して使用できるかと．．．．」

「そうか．．．．今宵はとても楽しいことになるな．．．．」

第39話 散らなき鉄の花④

「ぼ……ぼ……ぼ……」

「……は……クツサ!!」

粘液の水槽で目覚めてすぐ形容しがたい生臭さが鼻を衝く、

顔に付いた粘液を拭おうしたとき、ジャラリという音と独特な重さが腕にかかる

腕には嚴重に手枷で封じられ尚且つ奇妙な文字の書かれた札がこれでもかツと

張られている……

「あー封印か……面倒くさ……」

先ほどから手枷を破壊するために魔力を練っているもすぐに魔力が霧散してしまい

破壊することができないそこで……

「あらあら……流石『オロチ』の血のモノあの深手がこうもあっさり……」

この『粘液』とあいしょうがいいのかしら……」

顔面白塗りのオカマ……確か『蝶』だったか……がクスクスと嫌な笑みを浮か

べ

ながら此方を見下していた。

「起き抜けで臭さとカマ野郎の顔みて機嫌悪いんだけど．．．ここどこだよ」

「カマ野郎！ですって？口に気を付けな『半端モン』．．．まあいいわここが何処だったかしら？」

いいわ．．．教えてあげるここは．．．聖魔城の尋問室．．．いえ拷問室かしら？
死にたくなかったら魔神器の隠し場所を吐きなさい!!」

「うわっ!!」

壁に掛けられていた鞭を手に取り、暁に攻撃するも寸前の所で回避する

全身が異常に重く旨く力が入らないものの何とか動けそうだ．．．

しかし．．．今の自分の恰好をみて絶句した．．．

全裸なのだ．．．

そう．．．全裸なのだ．．．!!

「なんじゃこりやああああああ!!!!」

叫ぶ．．．それら叫ぶ．．．この緊迫感がMaxな状況で自分がフルフロンタル．．．

「ふん！捕虜の身ぐるみを剥ぐのは当然の事よね．．．ナニを持っているかわからないんだから

別にシヨタの裸体に興味があつたあつたからじゃないわ!!!」へボタバタ

「鼻血だしながらほぎくなカマヤロー」

再攻撃の隙をつき相手の懐に入り込み、蝶の鼻つ面に膝を打ち込み、蝶の鼻柱をへし折り

悶絶しているところに左ハイキックを顎に打ち込み……昏倒させる。

「さて……どうするか……」

現在の装備は無し……服もない……近くにもない……

「さてどうするか……」へ蝶を鞭で拘束して水責め用の井戸に投げ込み

「グギャアアアアア」へジュウジュウ

どうやら井戸の中は何かの溶解液のようで何かが溶ける音と煙が上がる

「……よし……」

カマを無難に処理をして通路に出ると人影がないのに何かの気配が充満しており、

嫌な空気がながれている

「とりあえず移動するか……」

暁は兎に角この場をあとにして探索を開始する

通路は薄暗く時折、悲鳴と獣のような雄たけびが響き肉壁が脈動する音が響く

途中ここに拉致されたであろう、被害者の遺体から着物を拝借し、刃こぼれした刀を

入手して

道中を探索する。

「なんか目ぼしいものないな．．．あれ？何だこれ？」

とある部屋の前を通ると翠の光が少し漏れており中を見ると不可思議な機会と研究機器が並んだ部屋であった。

「(ハハ)は．．．まさかー！」

中を調べると実験機の中には翠色の結晶を培養、精製していた正にそれは

「コジマ粒子の結晶!?!．．．まさか(ハハ)コジマ粒子の研究施設．．．」

中にはコジマ粒子を貯めている貯蔵缶や組み立て中のジェネレーターに研究資料だった、

研究資料のサインには『ヒューイ・エメリツヒ・イーガー』と

ヒューイ．．．オタコンいや春・エメリツヒ・小島の父で欧州大戦で米国にてその革新的な

兵器によりおおくの犠牲者をだしたことから『虐殺者ヒューイ』と軍部で言われ、

米国の非正規組織『X O F』に所属その後、とある傭兵組織に席を置くと傭兵組織の情報をも米国に売り

傭兵組織を壊滅するという経歴があるもそこで自身の妻を殺害していた。

コジマ博士こと、ハル・H・小島は母方の実家のある日本に預けていたことで

オタコンは無事であったがオタコンの妹はヒューイの実験により他界してしまった、

しかし凝んな床に何故ヒューイの研究資料があるのか？

「……まさか……こいつ黒之巢会とつながってる？取り合えず

こいつな押収したいけど……」周りを目ぼしすると見覚えのある装備が保管されていた、

そう暁の装備であった、幸運な事に誰かがここに保管していたようだ、
「ずさんな管理しやがって……まあ助かった」

ズボンから工作ツールを取り出しそのなかから二本の薬品を取り出し

その一つを手枷の鍵穴に注ぎ、続いて二本目の

薬品を注ぐと直ぐに煙が発生してボン！と小爆発し枷のカギを破壊し外す、

若干手首に火傷を負うも無視してテキパキ装備していく、

「さて……写真写真」〈資料写真撮り

「さてと資料廃棄と機材破壊しないと……」

研究室にあった部品を使い即席の起爆装置を作成し各所に設置しその場を離れる。

その後、再度探索を開始すると開けたところに出る、そこは吹き抜けになっており下は暗く底が見えないが所々怪しい光が漏れ通路には降魔が徘徊していた。

、降魔がぞろぞろという中で怪しい光を放つ炉のようなもだと

解るのが何個か設置されていた、そこで急に形容しがたい『音』が鳴り響くと

それまでそこいらに居た、降魔が一斉に移動しだったのである、
一体どうしたのかと思案してみても一つの考えが頭をよぎる。

「あ．．．．脱走バレたか」

流石に蝶を井戸にボツシュートして結構な時間が経っている

「戻ってくる前にちやちやつと調べるか」

炉に調べるとどうやら降魔の生産炉の様だ、その中には形容しがたい泥が
蠢き妖力が沈殿している。

「さてどうするか．．．このままにするのは不味いし」

ポーチからC4を取り出し設置する、しかし炉の個数は多く手持ちでは足りなく
全部を処理することはできなかった、

「後は．．．仕方ないな、次は．．．下か」

暗く底が見えない下を身を下ろしその時、地面が大きく

揺れ自分がせり上がる感覚を覚える、

「まさか．．．聖魔城が地上に？ってことはいよいよマズイか．．．」

聖魔城が地上に出現したということは、帝撃が魔神器を守れなかったって事だ、
階段を降りる途中で、炉から十分離れたところで起爆スイッチを押す。

ケタタマシイ爆発音と爆風が上がるその習慣上部に居た、降魔も気が付き上部に

集まってくることを確認する。

「本格的にやばいな・・・通信機材ある所が有ればいいんだけど研究室にはなかったしもううえには戻れないし、光武とは言わないが人型蒸気でもあればいいんだが・・・」
最下層に到達し降魔をやり過ごしながら奥へ進むと大きく開けた部屋に到達する、

「なんだ此処？無駄に拾いな・・・あれ？あそこ、スイツチか？」へ警戒しつつ押すすると壁が開く、どうやら隠し扉だったようだ中には、巨大な人影が鎮座されていた。鎧武者のようないで立ちで鬼の面、腰には大刀を携えた鎧人形、

暁はこの存在をしっている・・・暁になる前、前世でみたアニメで、
暁が現在駆る、震電のオリジナル・・・「餓沙羅の舞」を踊ることを許された、
「嵬（またはインヴェイター）」だけが操縦できる巨大な鎧人形。

シンボルでは「オリジナル」と呼ばれるその名は、『骨嵬《クガイ》』
「な・・・なんでこれが!？」

「・・・それは貴様の隠し蔵から回収した遺物だ」

暁は、咄嗟に距離をとり懐から拳銃を向ける其処には、最悪な人物
葵 叉丹がそこに佇んでいた。

「最悪だ・・・まさかお前に見つかるとか・・・」

「ふん・・・コソコソとなにやら細工していたようだが無駄なことだ、

聖魔城も復活し最強の降魔も復活した・貴様になにが出来る暁・オーガス
いや・・・『八神暁』、宗蓮に似て忌々しい奴だ・・・」

「テメエ・・・答える骨嵬《コイツ》をどうする気だいや・・・そもそも
コイツをどこで知った!!」

「最初は・・・貴様の家に保管されていると思われた魔神器『鏡』を回収
するつもりだったが発見できず：しかしまさかこのような遺物を見つけられたとは、
幸運だった・・・こいつには魔装機兵建造のアイディアと技術を使わせてもらった
まあ・・・回収する際・・邪魔な女がいたか排除したがな・・・」

「女・・・まさか!」

「そうだ貴様の母八神紫だ・・・健気にも奴の鈍で私に盾付きおって・・・簡単に
首をはねることができたわ・・・しかし神楽の力も魅力だったしかも宗蓮にはもっ
たいたい

程の美しい顔・・・新しいき仲間にする予定だったが・・できたのは不良品・・・」
「・・・テメエ・・・はもう喋るなあ!!!」

叉丹に向けて全弾発砲、ナイフを構え炎を纏い斬りかかる

「ふん・・・動きが単調だな!宗蓮の方がまだ骨があつたがな!!!」

相手の袈裟懸けをバックステップさけ再度懐に入り蹴りを放つ

「そんな蹴り……つくー！」

俺の蹴りを寸前で躲すがサタンの頬に切り傷を付ける。

「バクバクカ！」へ中指立て

カツンカツンと靴を鳴らすそこには仕込みナイフが装備されてた

「小癩な!!」

それから切結び膠着状態に……その時人の気配を感じ視線を送ると
変わり果てた……あやめが冷笑を浮かべていた……

「あやめ……姉さん……」

「そっ!!」

「しまっ!」

持っていたナイフを弾かれ又丹の斬撃が襲うも、間一髪回避する。

「あやめ姉さん……偉く過激にイメチェンしたね」

「フフフ……ありがと……ねえ……アナタもこちら側に来なさい」

「……殺女？」

「……」

「サタン様……この子の力は知っていますよね？荒神オロチの血族

骨鬼の適格者……魔の楽園に存在する価値もあります……」

「サタン様と私とこの子……夫婦子供仲良く……この世を闇に染めるのも良いと思うわ……」

「……………」
「へ暁&叉丹」

「おいそこのクソヤローお前の降魔だろなんとかしろ！」

「……………」
「どうやら変化が上手くしていないようだな……まあ時期に安定するだろう」
「このキチ姉……変異しても根っこは変わらないのかい……………」

「フッフ……………」
「はい隙ありv」

「へ?……………」
「ぐあ!!」

突如背後から衝撃が突き抜ける……体から数本何かが折れる音も響く
背後を見ると……骨鬼が拳を振りぬいていた

「つぐ……コイツ……………」
「動いた?」

「どう?驚いた?……………」
「アナタを刺した時に採取した血液を培養して一回限り
だけど動かせるのよ……………」

「アヤメが笑いながら近づいてきてかがみ声を掛ける……………」

「サタン様……このままこの子を骨鬼へと……後は骨鬼が勝手にしますわ」
「……そうか」

又丹は暁の襟首をつかみ引き上げると骨鬼の胸部が開き中からコードが飛び出しその一本がスルスル背中に入り込み……カチと音がしたところから急に意識が遠のく……この感覚……阿頼耶識の接続といっしょ……

「さあ……坊やお眠りなさい目覚めたときには新しい世界が貴方を待っているわ」
そう聞こえた気がするがそのままですがまま骨鬼に取り込まれる、

最後の力を振り絞り又丹と殺女に向けて……中指を立てた

第40話　　散らなき鉄の花　⑤

大神が地下施設にトラップを仕掛け終わった後、上階に戻る途中で、アイリスが此方にやってくる。

「お兄ちゃん！」

「アイリス？ どうしたんだいそんなに慌てて」

「アカツキ……見つかつた？」

「っ……アイリス何故それを？」

暁とあやめが行方不明になっていることは風組の三人と自分、米田司令だけのはずだ。しかし何故アイリスがそれを知り得たのかそれに、何時ものアイリスなら、

おれたちの言葉を無視してでも探しに行くはずなのに今は……

何かに怯えているようだった。

「……　　由里おねえちゃんと椿が話しているのを聞いて……」

「あの二人……まあ良いしかし……アイリスどうしてそんなに怯えているんだい？」
大神は誰からも見れば分かるほど顔を青くし震えていた

「なんか……凄く怖い感じが……誰かいなくなるような、

ものすごく嫌な予感が・・・ねえ、お兄ちゃんアカツキは大丈夫だよな?」

「ああ!あの暁がそう簡単に死んだりしないさ、今は風組や月組というところが探してる。それにリレイさんたちもすでに動いてるはずだよだから大丈夫さ」

「・・・うん、そう・・・だよな」

アイリスは力なく笑い自分の部屋に戻っていく。

「少尉、少しよろしいかしら?」

「すみれ君?君もアカツキの事かい?」

「ええ・・・そのつもりでしたがアイリスとの会話が聞こえたので大丈夫ですわ

それよりも・・・少尉何を隠していますの?」

「え?・・・いやなんの事だい?」

アイリスと入れ替わりすみれが声を掛けてきた、その内容は・・・大神の隠し事をお見通しといった内容だった、大神はそのことに不覚にも顔に出してしまった。

「少尉・・・少しは隠す努力をしませんと他の人に囲まれて口を

割らずにはいられなくなりますわよ?大方、米田支配人に口止めされていますわね?

まあ・・・いいでしょう後で米田支配人からお話していただきますのでそれより・・・

さくらさんに少し気を回した方がよくなってよ?何やら勘違いしているようなので」

「さくら君が・・・勘違い?」

「地下でかすみさんといましたわよね．．．そこで恋仲と勘違いしたようですわよ？」
「つぶ!？」

「早く解かないと．．．大変なことになりますわよ?」

「わ．．．わかつたよ、ありがとうすみれ君」

大神は、大慌てでさくらのもとへ走っていく．．．が
間の悪いことに帝劇内にサイレンが響く、敵がきたのだ。

「叉丹様はかく乱せよと申されたが．．．構わぬ！」

「この鹿の実力をお見せするためにも花組をここで全滅させてくれるわ!」

「そこまでよ!！」

『帝国華撃団、参上!!!』

鹿の眼前に華撃団が着地し構える、そこで米田がみんなに通信をつなげる

『みんな…聞いてくれ奴の目的は、まず間違いなく帝劇に隠された最重要機密の確保だ
敵を帝劇に近づけない様にしてくれ、それに現在暁、あやめ君が行方不明になつてい
る』

「な!?!」

「それはホンマか!米田はん!?!」

「なんで教えてくれねーんだ司令!?!」

「……………」

「……………お兄ちゃん」

「……………大神さん!」

『今は帝劇防衛に集中してくれ…詳しい話はあとでする魔神器や暁たちの事も含めて
な』

「あたいらに隠し事なんて水臭いぜ」

よっしや!なら早よ片付けてその訳をで詳しくきかせてもらおうやないか!」

「兎に角みんな……………敵を帝劇に近づけないでくれ」

『了解!!』

「くくく……華撃団、お前らの本拠地ごと破壊してやる

この最強の降魔『鹿』がな!!」

帝劇周辺に降魔と怪しげな機械が配置される、大神が機械に攻撃を仕掛けるもビクともしないが……なぜかカンナが攻撃したら簡単に破壊できた。

『大神さんどうやらその機械は降魔の召喚機のように、その機械が充填期、靈力を貯めている

時にしか攻撃が通らないようです!!』

「了解かし……充填期の見分けが!」

『機械が明滅しているときに充填期のようにどうやら神武の行動で

充填期のサイクルが変わるようです』

「要は……あのきかいの近くで動いてりやたまるって事か!!」

カンナが帝劇の外壁に近づくと敵を遠くに殴り飛ばしながら答える

「皆!敵を排除しつつ召喚機を破壊してくれ!」

それからは数匹の降魔が防衛網を突破して使節内に侵入しようとしたが大神が仕掛けたトラップにより防衛出来ていたが、その機能を停止して

しまっている。

「数が多かったがなんとか・・・防衛出来た！」

「だけど・・・外壁がボロボロだぜ・・・」

「ですが残りは鹿とかいう馬鹿だけですわ!!」

「小娘が・・・最強の降魔『鹿』の実力をみせてやるわ!!」

「皆、ここが踏ん張りどころだ・・・しかしこの冷気は」

『みんな聞こえかい?』

「小島博士？」

『みんなよく聞いてくれこの異常な冷気・・・奴の魔装機兵から放出されている・・・

しかも冷気のせいで神武の駆動系が氷結する恐れがある、攻撃は極力

受けないようにしてくれ一時的だけでも行動に制限がかかるよ』

「了解しました、みんな聞いた通りだ成るべく攻撃を受けないようにしてくれ」

『了解』

しかし戦闘がかいしされるも流石、自分で最強というだけあって前回の猪とは比べられない程

強く、自身の調子が上がると自分の実力も上がる用で、花組は苦戦を強いられていた。

「フツハハハハ花組よ！貴様らも中々やるようだが……わたしの敵ではないな」
「つく……こいつ強え……！」

「機体が……うまく動きませんわ」

「うえ……ん回復が追い付かないよ……」

「こいつを調子づかせるのは不味い……隊長！」

「皆、頑張るんだ……」

鹿が不敵な笑みを浮かべ、一際損傷の酷いカンナに攻撃を仕掛けようとする

「ヤベエ……！」

「まずは一人!!!」

鹿の攻撃がカンナに当たる瞬間……一条の閃光が鹿に直撃する

「なに!!ぐあああ」

「なんだ？」

『みんなお待ち……援護するわ』

了子女史の通信と同時に、何もないとこからドラム缶に足の生えた機械が現れる、

『米田司令の依頼で防衛装置の開発依頼がって急ごしらえなんとか五基は作った

防衛用無人機よ、上手く活用して』

「小癪な!!……うおっ」

の
三機の無人機から機銃を掃射されダメージが低いものの鹿の動きを阻害し残り二機

無人機が各機の応急手当をする。

「うおおおおりやあああああ!!!」

必要最低限の処置が完了したカンナが鹿の隙を付き渾身の力を込めた蹴りが相手に直撃し貫通する。

「馬鹿な……俺は……俺は……最強の降魔だあああああ!!!」

鹿の絶叫が雪の闇夜に木霊し爆発四散する。

「よし……なんとか帝劇を守り切れたぞ……」

「しかし隊長今後……敵はここを狙ってきます辛いたたかいになりますね」

「ああ……しかし俺たちは負けない、負けられないんだ」

「ふん……使えん奴だ、しかしそろそろあやつが目覚める時か」

【帝劇地下】

「なんとか……防衛できたかさて破損箇所は……あれあれは？」

先ほどの戦闘で出た被害を確認していた小島は、とある人物を発見する

「あやめさんじゃないか!! いつ戻って来たんだい? 暁は?」

慌てて彼女に付かずいて声を掛けるも反応がないそこに了子が小島が

騒いでいるのに気が付いて扉から出てくる瞬間、

パンパンパン……

あやめが小島を銃撃し小島が力なく倒れる……

「オタコン? ……つハルウウウウ!!!」

あやめは凶悪な笑みを浮かべ叫んでいる了子にも発砲するも

了子とはとつさに『障壁』をはり防御する

「誰か……誰かああ!!!」

「なんだ?……今の声は!?!」

突然の発砲音と女性の悲鳴に大慌てで米田が司令室をでるとそこにはあやめがあるものを

抱えていた。

「それは!・魔神器!?!あやめ君いったい何を?・それをどうするつもりだ!」

米田があやめを追おうとした時に銃撃される、咄嗟に障害物にかくれやり過ぎすも逃走を許してしまった。

【帝劇外】

「ふふふふ……」

戦闘終了後の事後処理中に不穏な笑い声が帝劇に響く

「あれは！」

「ああつ!?!」

さくらとマリアが上を見上げると又丹と彼に寄り添う『あやめ』の姿があった。

「あ、．．．あやめさん!!」

「ふふふ．．．あはははは、魔神器は確かに譲りうけた」

「魔神器？」

「さあ．．．あやめ、此方に」

「．．．はい．．．又丹．．．様」

「だ、．．．だめだ!あやめさん」

又丹に魔神器を渡そうとしているところで大神が叫ぶ、そこであやめの目にすこし光が戻る

「大神君．．．私を．．．撃ちなさい．．．早く」

「そ．．．そんな!」

「早く．．．早く撃ちなさい、命令．．．よ」

「大神さん!撃たないで．．．」

大神は懐から拳銃を抜くが照準がぶれる．．．撃たなければ魔神器が奴らに渡り

帝都が

しかし撃てば．．．あやめさんが．．．暁の大事な姉の様な存在を．．．殺すことに
大神は．．．撃てなかった。

「く．．．くそ．．．」

「大神君．．．自分を偽らないあなたのみままで．．．いてね」

「ふふふ．．．己に掛けた封印も最強とは、皮肉なものだしかし」

お前は既に一人は手に掛けた．．．あの禁忌の翠の光の発見者をな

それに自分の大切な弟にも牙を向けた」

又丹が指を鳴らすと．．．何かの液体の中でうかんでいる暁が映し出される、

「オロチの落とし子はわたしが預かっている．．．もつとも貴様らの事を

覚えているかはわからんがな．．．」

「アカツキ!!」

「暁さん!」

「てめえ．．．二人を返しやがれ!」

「ふん．．．さあ目覚めよ、あやめ．．．あの失楽の園の記憶を」

そう呟きあやめの唇を奪う又丹．．．そしてあやめの霊力が完全に変質し

その体を変異させる、黒い羽根をはやし、冷酷な笑みを浮かべ花組を見下ろす。

「ふふふ．．．最強の降魔にして最も頼りになり我に最も近しき者．．．
殺女よ．．．よく目覚めた！」

「はい．．．我ら対なる．．．もの前世の契りに従い、今度こそ御側に．．．
「ふ．．．」

「今宵の邂逅こそ永遠、我らの行く所、あまねく魔の楽園が広がりましょうぞ」

「フフフ．．．」

「さ、これこそが我らが求める鍵．．．魔神器を御納めください」

あやめ．．．いや殺女が叉丹に魔神器を手渡す。

「ああ!!」

「あやめさんそれは渡しちやだめだ!!!」

「フハハハ!! 貴様らに待っているのは．．．苦惱、絶望!!!」

「．．．．．そして．．．破滅!!!」

そう宣言し叉丹と殺女が飛びあがる。

「あやめさん!!!」

「おまえの知っているあやめは死んだ!! あの紅い月と共に!？」

「．．．．．そ、そんな．．．」

「．．．．．」

【???】

「黒き雨よ、魔の風よ、怨念の海よ今こそ封印を解き。我に力を!」

「そしていよいよ復活する・・・聖魔城が!!!」

「・・・・・・・・フフフフ」

【帝都】

帝劇では、先の事後処理も終了したがあやめの変質、暁の誘拐、

オタコンの銃撃されると帝劇内の空気は、落ちるところまで落ちていた、

大神も、色々世話をしてくれたあやめさんが敵になったことで精神的に参っていた、

了子は、救護室にてオタコンの手術をしている、途中仮面をかぶった不審者集団が現れるが

「どうやら医者集団のようで手術室にはいり小島博士の手術をしていた。」

「……………」

大神は一人作戦指令室で先ほどの事を考えていた……

もしあの時、彼女を撃つていれば……そもそも彼女の異変にどうして気が付かなかったのかと

後悔が頭にこびりついていた、そこで誰かが部屋に入ってくる……米田だ。

「なんだ……大神まだここにいたのか……」

「米田司令……」

「今の……あの子達をささえてやる奴が必要だ、オメエのことだ大神だけ、

早くみんなの所に行つてやんな……」

「……………わかりました」

米田の言葉に頷き司令室を後にした大神を見送り、米田はリリイに通信をつなげる、

「リリイいま大丈夫か？」

「問題ないですよおじ様……ことらでも状況を把握しているわ……

アカツキやオタコンの事も……そして魔神器の事も」

リリイは神妙な面持ちでどこか落ち込んでいる表情をしている

「なに落ち落ち込んでんだ……暁もそうだが小島も大丈夫だ、お前らの医師団もきてん

だ

「ところで例の建造はどうだ？」

「あの【秘密兵器】ですネ……問題なく現在整備班総出で動いていますし神崎重工も花屋敷総出で動いています、のこり作業も最終調整だけです。それに……」

「それに？」

「同時しんこうでこちらの【秘密兵器】も一部出撃できるようになりました」

「お前のとこの秘密兵器……怖くて聞きたくないな」

米田は胃をおさえながらため息をつく

「良ければみます？」

リリイは画像を表示させ……米田が吐血するへゴフ

「おじ様？」

「お……おまえなんだこれ？こんな建造してるのか……」

「ええでもフルではなく現在稼働できるのは一部『武蔵野』と『奥多摩』

だけですわ……」

シレつとリリイが言うとき米田は諦めたようにこれクラスが後、6隻と呟く

「戦闘に関しては問題ないと判断します以上」

リリイの背後にたっていたメイド『武蔵』が珍しくフンスと自慢げだったまあもつと

も

「一見しては変わらないように見えるが

「まあ……いいさてこちらでも今後の準備を始める、そちらも頼む」

「解りました……ところでおじ様……この件が終結ら魔神器の管理に關してですが」

「……」

「此方で管理しましょうか？」

「それは……」

「まあ……いまはイイですねこの話は後日には失礼します」

通信は切れモニターは暗くなる。

【帝劇内通路】

大神はあの後、花組のメンバーと話しをしながら勇気づけることができた、

後は……

「マリア君とさくら君は何処にいるだろうか……」

ふたたりを探して回っていた。

「念のためマリアの部屋に行ってみるか」

大神は、もしかしたら部屋で落ち込んでいないかと思い

マリアのへやまでやってきた。

コンコンコン

「マリア居るかい？少し話がしたくてもいいかい？」

「……どうぞ」

「どうやらマリアは部屋にいたようだしかし、何時もにまして声が弱弱しくきえそうな声だった。」

「マリア……あやめさんの事なんだけど」

大神が話をきりだそうとした時にマリアが話を遮り……

「隊長……私とあやめさんは、華撃団結成当初から一緒でした。」

「え？……」

「花組の中で……わたしが一番付き合いが長かったです、

そして……私に命をくれたのも彼女なんです」

「命をくれた? それはどうゆうことなんだい?」

大神がそう質問すると顔を歪めながら、まるで思い出したくない様に語る
「華撃団が出来る前は私は アメリカにいました」

報酬の為に人を撃つ 殺しや稼業に身を落としていました」
ほつりほつりと昔の自分を悔いる様に語る

自分の命も 他人の命も 紙屑同然だった毎日
その時は自分は 死んでいたと語るマリア、それを黙って聞く大神。

「そんな時 私を救ってくれたのがあやめさんでした、
あやめさんは私に『帝都を守る』という生きる目的をもらいました、

心を失っていた私に 生きる希望を与えてくれたのです」

「そうだったのか あやめさんとはそんなことが」

大神は、マリアの過去の話を聴き、二人がどれほど信用し心を
許していたかを感じ取った

「 こんな事、話せるのはあやめさんだけだったのに」

そのあやめさんも」

「マリア」

悲痛な表所のまま視線を下におろし震える両手を固く握りしめているところにそつ

と大神が

手を握り優しく答える。

「俺でよければ……力になる、だから元気を出すんだ……」

マリアの両手を優しく包みなら元気つける……自分には、この位しか出来ないがマリアの

震えるてを握る。

「隊長の手……暖かいんですね、……忘れていました人には……」

暖かさがある事を……でも……今はその温もりが足枷になります、

……自分自身で結論が出るまで……一人にさせて下さい……

もうしばらく……」

一瞬マリアの表所が明るくなるものの……やはりその表情に影を落とす……

「……それじゃ俺はもう行くよ……」

「私も休むことにします……今日は、少し疲れましたから……」

それでも最初よりは表情が落ち着いたようだ、それをみた大神も少し安心し

「ああ、それがいい……おやすみマリア」

大神はそう言いマリアの部屋を後にする……やはり皆、あやめさんが

あのようなことになり悲しんでいた。無理もない……

彼女は、自分含めて姉のような存在だったのだから……。

自分も誰かと話をしていないとマイナスな事が頭から離れなくなっている之じゃだめだとわかっているはずなのに……

「いこう……後は、さくらくんとはなしをしないと……」

大神はサロンの方にむかつて歩き出す、先ほどまでいたすみれは居らずどうやら部屋に戻ったよう……すみれとアイリスは特に落ち込みが酷かった……無理もないあやめさんのだけでは無く暁まで向こうの手に落ちてしまったのだから……心配ないと思うがやはり……心配だ、彼には、色々と助けられた……帝劇で生活して花組の皆や俺の事、喧嘩や衝突もした事なんか小さい事含めれば数えきれないほどに、最初彼は、出向で花組と共にいたけどいまではそんなこと関係ない花組の一員なのだから……

「待っていてくれ……今度は俺たちが助ける番だ」

あやめさんだけではなく暁も助けると意気込みあるいていると

「あれは……」

テラスに見覚えのある黒髪……さくらが街の夜景を眺めていた。

「さくら君……」

「大神さん……………」

「ここは寒い……………中に入ろう」

「いえ……………冬の寒さは、好きです……………身が引き締まる感じがしますから」

「……………」

「実は私……………あやめさんに憧れていました、いつかああゆう人になれたらつて

そう……………思っていました、なのに戦わなきや……………いけないなんて

「こんなの！ひど過ぎますよ……………」

悲痛な胸の内を泣きそうな顔で大神に打ち明けるさくらに大神は……………

「さくら君……………それは違うよ、俺たちは戦うんじゃない、救いに行くんだ！」

大神はまつすぐに自分の心内を明かす、それがどんなに難しいことか解っていてそれでもなお

さくらに伝える、まるで自分い言い聞かせるように……………

「でも……………」

「さくら君が信じたあやめさんは、そんなに弱い人だったかい？」

その言葉にさくらは微笑ながら思い出しながら自分の信じたあやめに対しての思いを口にする

「いえ……………強くて優しくしてそして深い思いやりをもった素敵な女性でした……………偶に

暁君にたいして暴走もしたけどそれでも素敵な人でした」

今まで帝劇で暮らしてきたことを思い出しながら大神に伝え、大神もまた微笑ながら「ならそれを信じるんだ．．．あやめさんは俺たちのもとに帰ってきてくれるはずだ」
「はい．．．私の信じたあやめさんを．．．わたしは信じています、

大神さんありがとうございました、もう少して私．．．自分に負けるところでした
．．．会いに行きましよう大神さん、あやめさんの所にそして必ず助け出すんです
！」

「ああその意気だ！さくら君．．．それじゃあおれはそろそろいくね」

さくらの表情がいつもと変わらないほど元気がでたようなのでこの場を離れようとしたとき

「大神さん．．．」

「え？」

さくらが自分を呼ぶのでたちどまった瞬間、背中に暖かい感触が．．．さくらが自分の背後から

抱きついていて、余りの事でおおがみは頭が真っ白に．．．

「さ、．．．さくら．．．くん」

「あたし．．．頑張ります．．．だけどそれは大神さんが居てくれるから．．．」

大神さんの匂い……ぬくもり……こうしているとすごく安心するんです

今だけでいいんです……今だけ、大神さんを独り占めさせてください」

さくらの言葉に色々思考が巡る、偶に士官学校時代の悪友が『イテコマセ!!』と悪い囁きや

今はない暁が「キース！キース!!」とキスコールをしていたが鋼の精神で振り切り一言。

「ああ……わかったよ」

と紳士的な対応をする……ドコから舌打ちの嵐がきこえるが無視である。

「大神さん……大好きです」

その言葉を数十分言葉はなく……その後サクラが「私も……もう行きますね」と頬を紅く染め帝劇内に入っていく……がそこで振り合えり

「そういえば……大神さんってかすみさんの事が好きなんですよね？」

さくらが不思議な質問をしてきた、そこで……前にすみれ君が教えてくれたことを思い出し、

さくらの誤解を解く、そこでさくらが頭から湯気をだしながら謝り、此方も誤解され
そうなことを

したことに謝罪する、さくらは逃げるように帝劇内に入っていき直ぐに姿が見えなく
なった、

大神はそんなさくらを苦笑しながらふと夜空を見上げると、雪がちらつき始めてい
た。

「あやめさんも……どこかでこの雪をみているのだろうか……」

その問いには……誰も答えてはくれなかった。

第41話 散らなき鉄の花⑥

大神は、花組メンバーと会話し何とか落ち着かせ元気づける事が出来たと思う。

「みんなとも話せた．．．司令のところに声を掛けなきやな」

大神は支配人室に向かい、扉をノックする

「．．．誰だ？」

「大神です．．．」

「おう．．．そうか．．．入んな．．．」

米田の声も何処となく落ち込んでるように聞こえる、無理もない

「失礼します司令．．．」

「おお．．．花組の様子はどうだった？」

「ええ．．．」

大神は、花組のメンバーと話たがやはり全員動揺し落ち込んでいた

「まあ．．．いいご苦労だったな」

米田もまた察してくれたのかこれ以上は触れなかった。

「．．．」

「・・・そうだ、おまえに頼みたいことがあったんだ」

「はい・・・なんででしょうか？」

米田は思い出したかのように大神に頼みごとを話す。

「あのよ、実は、報告書を書きてえんだがよ・・・報告用紙、

どこにあるかしらねえか？」

「は？・・・報告用紙ですか・・・？」

行き成りの頼みごとが・・・事務用品のある場所がどこかどこか緊張した空気がぬける

「ああ・・・たしか棚にあったはずなんだが・・・」

「・・・棚ですか」

「はあ・・・全くな情けねえ今まで何もかもあやめくん任せつとたからな」

米田は寂しそうにぼやく

「・・・」

「女手一ついなくなっただけでこの様だ・・・」

「・・・司令」

「・・・なあ大神」

「・・・」

俺の恐れていたことが現実になるかもしれない・・・」

「どうゆうことですか？」

「・・・聖魔城の復活だ」

「聖魔城？なんやそれ？」

「紅き月の夜、封印と解かれし時、降魔の聖域蘇らん、聖域には破滅の神機有りき

その神機、裁きの光をもつて地上を灰燼に帰さん・・・『放神記書伝』の一文だ。」

「『放神記書伝』？たしか以前大神さんがよんでいた古い本でしたね」

さくらが以前うんうん唸りながら解読していた大神をおもいだし発言する

「ああ・・・魔神器と共にこの帝都で最も尊き御方の元に代々伝えられた預言書だ」

【皇居某所祭壇】

「ぶえつくしよん!!」

「神奈子様風邪ですか？」

「んにゃ・・・どっかの酔っ払いが私の噂してるんだろ？」

「噂ですか？」

「そうそう……さて聖魔城の復活も秒読み……人の帝国子華撃団よ
踏ん張り時だよ……」

【帝劇作戦指令室】

「聖魔城のことが本当なら地上を灰燼に帰すという破滅の神機というのは？」

「恐らく太古から伝わる霊子砲の事だろう」

「霊子砲……？それが裁きの光を？」

「ああ……そうだ、その光は天空を裂き、大地を霧に変えんと……ある

だ
400年前の戦いの再現だ、封印されし幻の大地【大和】が浮上しようとしているんだ

もはや時間がない、一刻も早く東京湾に向かい聖魔城復活の阻止するんだ!!」

『了解!!』

その瞬間、帝劇が大きく揺れる……帝劇が攻撃を受けたのだ、

『その汚い小屋から出てきなさい．．．帝都の狗共!』

「この声は．．．．．」

「あやめさん!!」

華撃団から又丹の元に降ったあやめの声が帝劇に響く

「グズグズしてられない．．．みんな行くわよ!!」

マリアの号令で各員は戦闘準備を開始する。

【銀座某所】

其処には大量の降魔と鹿と猪が使用していた魔装機兵の同型機と光る玉のようなものが多数出現し

街を破壊しまわっていたしそこに．．．

『それまでよ!!帝国華撃団参上!!!』

花組が到着し光球を破壊する。

「……出てきたわね、坊や」

「あやめさん、俺です！大神です」

「ふふふ……可愛い子ね、あやめは死んだと言ったでしょう？」

「貴方も今……殺してあげるわ」

あやめの手のひらに妖力が集まり大神にそれを放つ、大神は辛うじて防ぐも

ダメージを受け苦悶の声を上げる。

「大神さん!!」

さくらが大神に近づきあやめを睨む。

「ふっははは……」

再度妖力を放つもそれは不可思議な軌道をとおり大きく外れる。

「あやめさん……わざと外した？、もうやめてください!!」

その習慣大神の頭上から先ほど破壊した光球から攻撃が降り注ぐも間一髪で回避する。

「フフフ……さいこうの舞台が始まるわ……」

「そういいながらあやめは姿をけす。」

「あやめさん!!」

『大神!!』

そこに米田から通信が入る

『奴ら厄介なものを仕掛けていったみたいだ、どうやら電気系攻撃装置の様だ
どんなものか解らん以上迂闊に近づくな』

「つく……どうすれば」

「大神はんあそこに避雷針のようなものがあるで」

その時攻撃装置から紅色の雷が発射され……避雷針に落ちる、これを見た

紅蘭が「あの避雷針を移動させて安全地帯をつくればええんや」と
教えてくれる。

「よし！反撃開始だ降魔を撃破してあやめさんを取り戻すぞ!!」

「了解!!」

かくして花組のメンバーは次々と降魔と量産型の魔装機兵を倒していく、

途中、避雷針を動かしながら落雷をさせ、時にはそれを利用して敵にダメージを与えていく、

ある程度数が減った時に新たに一体の紫色の魔装機兵が出現し攻撃してきた、

雷光どどろかせながら妖力弾を発射し運悪く回避に失敗した紅蘭の神武が急に機能停止した。

「紅蘭どうしたんだ!!」

「アカンいまの攻撃で神武の機能がフリーズしてもうた!!」

「大丈夫ですの紅蘭?」

「大丈夫やすみれはん……今再起動しとる所や皆もあの攻撃には気を付けるんや!

下手に機能停止したら狙い撃ちされるで」

「解った皆も気を付けてくれ」

紫電不動の攻撃を上手く回避し着実にダメージを与え何とか破壊する、その瞬間

魔装機兵からドロリとした廃液のようなものが漏れ出て炎上する

幽かに「さた……んさま……」と聞こえる

「あやめさんは?」

敵を全滅し辺りを見回すと夜空に飛ぶ立つあやめが

「あやめさん……あやめさああああああん!!」

夜の帝都に大神の叫び声がこだまする……

【東京湾】

高波荒れる海に独りの人影、又丹が高笑いし邪悪な祝詞を捧げ海に浮遊している
魔神器の一つに妖力を放つ・・・放たれた妖力は魔神器に吸収され反射され
海底と放たれる・・・。

『甦れ！失われし聖なる都!!!』

又丹の絶叫と共にまばゆい光と地鳴り・・・そして海底から何かが
せり上がり浮上する・・・、それは又丹の言う通り『都』である。
降魔はびこる魔の都、地響きと共に・・・ゆつくりと現れる

失われた大地『大和』、そして殺戮の為に存在する城『聖魔城』が

【銀座某所】

帝劇への大攻勢を乗り切り、空は白み始めそろそろ夜が明けそうだった。
帝都にかかっていた霧も晴れかかっている、空は段々と茜色に染まる。

大神たちは、必死にあやめを追跡していたが終ぞ見失ってしまった。

「隊長……時間がありません、早く東京湾に向かいましょう」

「ああ……」

「（もう……どうすることもできないのか、あやめさん）」

大神の心に影を落としそうになった時、

「見てみい……霧が晴れてきたで、……もうすぐ朝や

この世に開けない夜なんかないんや……」

紅蘭のその言葉に大神は空を見上げる、

夜の闇の黒、朝焼けの茜、澄んだ青空の蒼そしてその狭間にみえる紫天

その美しさに心の闇が晴れる感じを覚える大神、しかし……

現実の夜の『闇』はまだ晴れない……アイリスの叫びで実感する。

「ああ……あれを見て!!!」

「な、……なんやねん!!」

山が現れた……東京湾にとてつもない山……いや大陸が隆起していた、

その中央に天を穿つほどの城が聳え立っていた。

「ああ……あああつ」

「どわああああ!!あ、．．．あれわ．．．」

「．．．．．聖魔城」

「あれが．．．．．聖魔城だと．．．まるで都市じゃないか!?!」

花組全員の目の前に聖魔城が現れてしまった。

『見るがいい!!!』

「ここら一体に叉丹の音が響く

『これこそが、歴史より抹殺された幻の大地『大和』だ！

もはや我が野望は止められぬ、われこそが支配者!?!

天帝叉丹なり!!!」

「憎悪よ、怒りよ、絶望よ、今こそわが手に．．．新たな帝都は

「ここ．．．．．大和にあり!!!」

それからの降魔の大侵攻は激化した。

花組やフェイスが総動員で活動するも被害は拡大・・・帝劇も地下司令部は健在だが上層部の劇場部は以前の面影もなくボロボロに破壊されていた、

皇居周辺は如何にかリリーの指揮する防衛隊により守られている状況であうが何時までもつか

解らない状況である。

フェイス本部となっているフミタンアドモスインターナショナルスクールも、

鉄華団率いるオルガ・五花の防衛でその機能は保たれていた、

浅草十二階下に棲む妖魔『白の白愛』の配下の神話生物群は、白愛の封印術で休眠しフェイス最下層に安置されている、封印しなければ大和の妖気に

充てられ暴走する恐れがあるからだ、現に白愛自身、自ら精製した封印水晶の中で眠っている……本当は、暁をいの一歩で助けに行きたいが、己自身、この呪縛に

抗いずらい……自身は叉丹に作られた存在のようなものだ……子は親に勝てない……

眠る前に……アイリス、そしてすみれに……

「あの子を助けてあげて……お願い……」

泣きながら二人に懇願し眠りについた……

今まさに帝都東京は……地獄とやら変わりはしない。

【地下司令部】

「浅草……上野……銀座……どこもかしこもひどい状況だ、

残念だが……聖魔城は復活し帝都壊滅も秒読みの段階だろう……

このままでは……世界の運命も……」

全員、今までに見たこともない強大な敵にどうすればいいか各々考えているなかで、マリアがこれからどうするかと大神に尋ねる、みんなの視線が大神に集まる中、大神は「ここは少し考えよう」と伝える

「今むやみに戦っても返り討ちに合うだけだ……ここは少し考えよう」

確かに大神の意見はもつともだが紅蘭が「考えようと言うても相手は東京湾いっぱい
の

どでかい島やで……考えてどうこうなる代物とないんとちゃうまつか？」と異議を
唱える

その異議を聴き再度花組になにかいい考えはないかと質問する。

各隊員が各々を意見と案を出すも現実的では無かったり更に難題が浮上するな
どし
て、

会議が踊っている時に、米田が口を開く……。

「みんな……聞いてくれ実は一つだけ、たった一つだけ打つ手がある……
我々が最も恐れていることは霊子砲の発動だ。聖魔城は復活したばかりで
霊子砲発動に必要なエネルギーを集めている段階のはずだ……」
「はい……」

「今のうちに聖魔城に侵入し、まだ準備のできていない霊子砲を破壊する、
これで勝機が見える筈だ……だが」

「それしかなさそうですね……」

「だが……聖魔城はてきの本拠地、いったいどのくらいの降魔がいるか
検討もつかん……。しかも霊子砲は聖魔城の中心部にあるとされている、
悪念で強化された降魔の力はいまままでの比ではないはずだ……」

この作戦でいったとしてもお前たちの命の保証はできない……」
米田は……悲痛な面持ちでしかし語気をつよめつつ大神に説明する、
大神は……静かに「もちろん……承知の上です」と静かに答える
するとマリアも「私たちはいつだって命がけでしたわ」と

その言葉に米田も沈黙し目を伏せる……。

「……は一番の大勝負！わたくしが逃げるわけにはまいりませんは、
それをお願いされてしまいましたから……暁さんを助けてと

ねえ……アイリス」

「うん!!あの白愛おねーちゃんが涙を流してお願いされたんだもん、アイリスも助けに行く……絶対負けたりしないんだから!」

「何が来ようと……この拳でぶち破るだけだ!!」

「せやせや……大船にのったつもりでまかせとき!」

「帝国華撃団は舞台と……平和に命を懸けているんです!」

みんなの意気込みに米田は「お、お前たち……」と驚愕する。

「それに米田司令……俺たちは誰が止めても俺たちは行きますよ!」

帝都は、俺たち帝国華撃団が守ってみせます!!」

「……」

『いいえ……帝都は帝国華撃団が守るものではありません』

帝国^私華撃団とフェイス^たが守るんです』

すると突然ノイズ交じりにモニターが点灯しリイが映し出されていた
なにやら周りが慌ただしく動き回っているおともさせながら、

「おめえ……」

「突入作戦に我々も切り札を切りますモニターにとある資料が写される。

走り書きに『連結式準バハムート級航空都市艦 “武蔵”』
と読み取れる

これは・・・本来の用途は帝都に壊滅的な被害を受けた際に脱出用として建造された航空都市艦のプロトタイプです現在は、中央前艦 “武蔵野” 中央後艦 “奥多摩” のみ運用可能です此方を今作戦に使用します、戦闘面に関してもフルスペックではないものの

問題ありません・・・おじ様もアレを切るのは今しかないと思いますか？」

リリイ准将の切り札にド肝を抜かれている花組をよそに・・・米田はつぶやく

「私はね・・・お前たちが命を懸けている間、ここに座っていただけのダメ軍人だ・・・

だが・・・君たちを誰よりも愛し・・・そして君たちの命を尊いと思ってきた

しかし・・・あやめくん！断じてこの世界を魔の手に委ねるわけにはいかん!!」

素晴らしいモニターにとある戦艦・・・米田の切り札が映し出される。

「これが帝国華撃団の秘密兵器

空中戦艦『三笠』だ!!」

其処には帝劇の地下いや帝都の地下に隠された巨大戦艦が映し出されている

その大きさは翔鯨丸の何倍も大きく、先ほどの武蔵の『武蔵野』と同じくらいの大

さがあつた

「大神号令をかける!!」

「はい! 帝国華撃団・花組出撃!! 目標的本陣聖魔城!!」

『では…私も、大日本帝国機動情報統合統制隊第一旅団全機出撃!!』

これ以降艦長を武蔵に譲渡…ここ作戦本部を今から『足りない本部』と命名します

武蔵あとは宜しく…』

『武運を…以上』

作戦本部をでてちこうとしているリリイに米田は呼び止める。

「オイ…何する気だ!」

『みんなが命をかけて前線に行くのよ…その長たる私が出なくてどうしますの

それに…あのヤローには大事なものをカツサラワレタママデスカラ…』

そこで通信が一方的に切れその場には…米田ただ一人が残る

『緊急警報! 緊急警報! 市民は安全域までの避難をお願いします』

『装甲版解放…ハッチ開閉完了!!』

『靈子機関最大!!』

『よし! 空中戦艦『三笠』発進!!!』

『緊急警報・・・・緊急警報・・・・』

『学園施設内にいる各種作業班並びにBクラス以下の非戦闘員は所定の位置に以上』

『トーラス社製表面式コジマ駆動機―船殻式特零六番 〃荒鎮波〃並びに

トーラス社製表面式コジマ抽出機構―船殻式特零六番 〃風有妻〃起動』

『中央前艦 〃武蔵野〃 中央後艦 〃奥多摩〃 接続完了』

『対城塞級障害物重力制御砲ACC―GCC0021S 〃小兼定〃起動』

『聖魔城攻略部隊の方々は奥多摩に集合し都市攻略兵器F装備にて待機以上』

『これより連結式準バハムート級航空都市艦 〃武蔵〃 は対聖魔城攻略に向けて抜錨します
す

『大日本帝国機動情報統合統制隊部隊長セレリーナ・リレイ・トーラス』に変わり

自動人形『武蔵』が総艦長に就きます以上』

帝都の空に三隻の巨大戦艦が現れる一つは飛行機雲を作り聖魔城にそしてもう二隻は、太いケーブルと外壁で接続されまるで一つの艦の様にして船尾には光の波・・まるで海を渡るかのように空に波紋を広げながら雄大に死地に向かう今まさに帝都の運命を決める戦いが始まる。

第42話　く散らなき鉄の花く⑦

武蔵、三笠がとびたち一時間・・・

散発的な降魔の襲撃があるもののそれを上手く迎撃し進む

『三笠の性能はこちらに比べ落ちる為、此方がサポートします以上』

『おう・・・しかし相変わらず規格外な技術をしているな』

『社長令嬢の特権という奴です・・・上にも少なからず情報を

開示していますが・・・争いの種になりかねませんので以上』

武蔵に配備されている機動兵器が耐えず防空監視をし偶に対空砲火と

障壁を展開し被害が出ない様に行動している。

『聖魔城城門を主砲の射程位置に捉えました！』

「よし！93センチ砲準備!!・・・発射!!」

三笠から一発の砲弾が聖魔城の城門に直撃そして大きく爆発しその余波で

周囲の降魔を吹き飛ばす。

『武蔵【主砲ショートバレル小兼定】要救助者がいる為出力を最小に

非貫通術式セット・・・砲撃開始、並びに聖魔城の対空兵装を無力化します

無人機動兵器により砲撃を開始・・・花組及び突入班に被害の出ない様に以上」

「米田司令！武蔵より連絡突入ルート確保、上陸サレタシと通信」

「よし!!大神、翔鯨丸で突入以降の判断はお前に任せる」

『続いて聖魔城突入部隊、同じく花組と共に突入を以上』

「了解!!帝国華撃団・花組出撃します」

『鉄華団第一遊撃隊作戦行動を開始するぞ!!』

【聖魔城外周部】

「此方大神無事聖魔城に到着しました、内部侵入口を探します」

『オイ・・・アンタ』

大神が米田に現状を報告終えた直後

暁の乗っていた霊子甲冑と瓜二つの機体の一つが声を掛けてきた。

「アンタが大神一郎だな・・・」

「ああ・・・アナタは？」

『俺は古園昭宏だ・・・本来は二番隊の隊長だが一番隊長がアカツキだから俺が代わりだ・・・短い間だが宜しく頼む』

震電に大型シールドと大型ライフルを装備した機体から通信があり

『俺は二番隊副リーダーの乗場シノだ・・・よろしく!!』

背中に二本の砲を装備した桃色の震電からも挨拶が来る

『私は五十土イカリなのです・・・主に衛生担当ですので何かありました

お声をおかけ下さい』

『うちの総長・・・まあリリーの事だが後程此方に合流するそうだが待つに侵入するぞ』

『まさか准将が?前線に?』

『あくく普通驚くよなー普通はだけど』

『ウチは普通じゃないから・・・な!!!』

昭宏背後に振り向き迫つて来ていた降魔を銃撃する

『来るぞ大神!!気を抜くな』

『すまない・・・皆入口を探すぞ!』

『了解』

花組と鉄華団のメンバーは、敵を迎撃しながら侵入口を探していると

上の方に入口を発見する。

「隊長、侵入口を発見しました!？」

「よし! 侵入するぞ……」

「お? ……あれが開閉装置か……」

カンナが周囲を見渡すと開閉装置らしきものを発見し操作する、すると鈍い音をさせながら扉が開きカンナと昭宏が殿を務め

最後に中に入ろうとしたとき背後に赤、青、紫の妖力が集まり

見覚えのある三魔が現れる、『猪』『鹿』『蝶』である。

「グヒヒヒヒ……華撃団の奴がきやがったぜ」

「くつくつくここで殺されるとも知らずに馬鹿な奴らだ」

「んう? ……なにやらない奴らもいるようだが……関係ない

又丹さまの為にここで貴様らは死んでいけ!」

その言葉と同時に空には数えきれないほどの降魔が天空をまい何処かへと向かってた

「まさか……奴ら三笠に!!」

『心配すんな……武蔵さんが付いてるそれよりもこつちを心配しな!』

『シノ……先に駆け後から追いつく!』

「アタイも残るぜ……一人より二人だ! 隊長先に行ってくれ直ぐに追いつく!!」

カンナは開閉装置を破壊し扉を閉める

「な！カンナダメだそれに昭宏君」

「オメエ何しにここに来たんだ!!あやめさんを助けるんだろ！」

又丹を倒すんだろ!!・・・世界を守るんだろ!!!

甘ったれたこと抜かすなこのタコお!?!」

「カンナ・・・」

「隊長・・・カンナの言う通りです急ぎましょう・・・」

完全に閉じられた堅牢な扉の前で大神は首を垂れるも

マリアの声掛けで先へと進んだ。

【聖魔城侵入口外】

「わりーなビンボー籤引かせちまって」

「いいって事よ・・・アタイ等の隊長ならすぐにでも又丹のヤローを

ぶっ飛ばしてくれるさ・・・」

「イイ女だな・・・あんた!!」

「へ・・・よせやいきて：死ぬにはいい日だ!!!」

「おう・・・かかって掛かってきやがれ豚野郎!!!」

「ケ・・・二人だけ残るたあー泣かせる馬鹿だぜ」

「桐島流空手じゃあ相手に背を向けるのはご法度でな!」

「鹿、蝶先に行け・・・こいつらは俺の獲物だ!!」

カンナの拳とそれを援護するように大型ライフルと隠し腕から巨大な斧を取り出し

攻撃する昭宏・・・しかし・・・

「無駄だ!!!」

猪はそれを真つ向からうけるも逆にカンナと昭宏を吹き飛ばす

「グアアアア!!」

「つぐ!!」

「弱い・・・相手になんねえぞ!!」

「ヤベェ!!」

猪の火炎攻撃を咄嗟に昭宏が大型シールドを展開するもその威力により二人まとめ

て
侵入口に叩きつけられてしまう。

「……つ……うあ……親父……大神隊長……」

「一発でいい……アタイに……力を……最後に力を」

『オイ……アンタ……大丈夫か……おれが動きを止めるその間に!!』

昭宏はシールドを捨て猪に組み付き投げ飛ばし、

猪の魔装機兵を掴み上げ背後から羽交い絞めにする、

「なにいいいい!!」

『俺の震電はなパワーをカスタムしていな鉄華団一馬鹿時からなんだあああ!!!』

「貴様離せ!!!」

「いまだやれえええ!!!」

「……おう……風よ……自由に、自在な天空の王者よ……」

今こそわが命を糧にし吠えろ、猛れ!空に舞い天を駆ける!!!

四方功相君しほうこうそうくん

カンナの渾身の突きは猪の魔装機兵を捉えると同時にカンナは力尽き機体が停止する

「ゴハ……おのれ小娘如きが……」

カンナの一撃は相手に致命傷を与えるもトドメを差し切れていなく……猪は逆に

カンナにとどめを刺そうとしたとき……機体に衝撃が走る

「何い!! 貴様……」

「おいおい……女ばつか注目しすぎだ豚野郎……」

昭宏は大型シールド変形させ『巨大な鋏』で猪の魔装機兵を挟み込み力づくに鋏を絞める

「グアアアアやめ……やめろ!!」

「テメーはここで死んでいろおおお!!」

バチン! という音と主に魔装機兵を分断し爆発四散するその爆炎に昭宏も飲み込まれながら

【武蔵艦橋作戦本部『足りない本部』】

『鉄華団遊撃隊二番隊昭宏機反応……ロスト』

『至急近くの隊員は確認を以上』

『敵約2000……対空防衛……無人防空兵器稼働率60%に低下』

『三笠損害率55%……障壁三笠に集中』

『PA減衰率70%』

『こちら武蔵・・・米田司令、そちらは大丈夫ですか以上』

「つく・・・あなたのお陰でなんとかな・・・」

『了解・・・ですが危険と判断したら退艦し此方に避難を以上』

「へ・・・まだまだこれからよ!!」

「司令!!メインエンジン出力低下!？」

「左舷高射砲・・・炎上!!」

「右舷副砲・・・復旧の見込みありません!」

『三笠へ至急応急修理班並びに護衛機動隊を』

「何から何まで・・・すまねえ武蔵」

「いえ・・・米田司令、武蔵だけでは本艦の呼称と被り指示に影響が出るので

わたくしの事は『武蔵さん』と御呼びください以上』

「・・・了解した武蔵さん」

上空では、三笠、武蔵が降魔をひきつけ迎撃するも段々と被害が出てきていた。

【聖魔城内部】

大神の神武にカンナ機のシグナルがロストしたことが告げられていた。

「カンナ……」

「……ひつく……カンナア」

「カンナさん……!!」

「……っ!」

「さ、最後の最後まで……勝手ばかり……最低のヤボ……ヤボですわ……」

最低の……」

すみれが涙を流しなら……地面をたたきながらそう零す所でシノがすみれ機に通信を入れる。

『おいアンタ……だ、大丈夫だ……昭宏の奴もいるんだ』

あのネーちゃんやんは死んでなんかいねーよ、だから……先急がねーとな』

『(シノさん……昭宏さんの信号も)』

『(いうんじゃねー五十土……あの筋肉馬鹿が簡単にくたばるかよ)』

「すみれ……それに貴方も先に進みましょう……」

「……」

『だ……っ!!』

次の瞬間、氷を纏った妖力弾がすみれに直撃しそうな瞬間、シノの震電が庇う。

『つく!!……こいつはさっきの!!』

『シノさん!!』

「あ、あなた……!!」

『オイ!隊長さんよ……こいつは俺が何とかする、先行きな!!』

五十土……お前もだ行け!!』

「しかし……!!」

『俺らの任務はアンタらの護衛も含まれてるんだ……気にするな』

『大神隊長さんここはシノさんを信じてほしいのです……』

「……すまない」

「逃がすか!」

鹿が追おうとした瞬間、震電用アサルトライフで動きを止める

「おいつるっハゲ俺と遊ぼうじゃねーか……なあ!!」

シノ機の背部キャノンから徹甲弾を発射し鹿を引き剥がし、再度アサルトライフルで

銃撃する、しかし……相手の装甲が厚く余り効いていないようだった。

「ええい!!鬱陶しい雑魚が!」

鹿の冷気砲を諸にうけたシノは吹き飛び倒れこむ、機体のあちこちは

氷結し上手く行動できずにいる。

「ふん……相手にもならんわ、さて奴らを追うか……」

シノ機を一瞥し花組を負うため背後を見せた瞬間、鹿の機体にワイヤーが絡む

『だあ……から逃がすかって言っただろぅが!!!』

シノ機の背部キャノン後方に腰部の別ユニットが接続され幽かに翠色の光が漏れる

「その光……まさか!! 貴様こんな細い道でそんなもの使ったら貴様も奈落に!!」

「それが如何したハゲ!! 一緒にバンジージャンプでも楽しもうじゃねーか!

必殺! スーパーギヤラクシーキャノン!!」

二条翠色の閃光が鹿を貫き鹿の魔装機兵を爆砕しその残骸は奈落に吸い込まれてい

く……

しかしその衝撃で地面が砕けシノ機もまた……奈落に転落する。

『(シノさんのシグナルが……)』

……五十土機にシノ機のシグナル喪失のメッセージが届く

しかし自分が動揺しては花組に迷惑がかかる・・・

「どうかしたかい・・・」

『いえ・・・大丈夫です』

「おん?・・・これは・・・」

「紅蘭・・・どうした?」

「いや・・・この文様なにか気になるんや、ウチが調べますんでみんな先にいつてな」

『紅蘭さん・・・大丈夫なのです?』

「ああ直ぐ調べてすぐに合流するで五十土ちゃん、問題がなければ直ぐ追いかけますわ

それにウチの神武には秘密兵器があるんや万が一があつても大丈夫や」

「え?なんだいそれは・・・?」

「秘密やから秘密兵器なんやで・・・ささ先急いでや大神はん」

「解った・・・でも無理はするなよ紅蘭」

「了解や!」

大神と別れた紅蘭はさっそく壁の文様をスキャンし解析していく、

紅蘭の神武には、色々なデータが組み込まれておりなかにはリリースから齎されたデー

夕も

あり直ぐに解析が完了した．．．その内容がなんとも恐ろしい物だった。

「これは．．．反魂の魔術やないか!!．．．又丹の奴．．．これで三騎士と

不動を蘇らせたんやな．．．せやけど、もう復活なんかさせへんで．．．

カンナはん．．．。あんたらの出番は終わりや!! 舞台は引き際が肝心やで!!」

紅蘭は装備させている有りつ丈の砲撃を魔法陣に打ち込む、通常の石壁ならば簡単に破壊できるが、その魔法陣は障壁で守られており傷一つついていなかった。

「何ちゆう．．．頑丈な代物なんや．．．」

その硬さに驚愕していると、突然魔法陣が光り輝き、大勢の降魔が召喚された。

「しまっ！キヤアアアアア」

紅蘭は囲まれる形で降魔の集中攻撃をうける、紅蘭の神武の周りには、

薄い翠の膜がはられているがそれを無視して降魔の攻撃が紅蘭を襲う、

「なんや．．．これ位．．．ウチの居場所！ウチの未来!!ウチの夢!!

やっと手に入れた大事な．．．大事なウチの宝物や!!

ぶっ壊されてたまるかいな!!!

帝国華撃団・花組：：舐めたらアカンで!!!」

紅蘭はフェイスの整備班と仲が良く整備班長との仲も良好で

班長経由でリリイにある申し出があつた・・・彼女にゴジマ機関の

運用法を教えたいと・・・。

最初リリイはその提案を渋つたが彼女の person となりや、花組での活躍が決め手になり

許可を出した・・・そして整備班の方々に教えられながらとある装置を完成させた、
『P A 発生装置』をである。

しかしまだテスト段階で花組に装備するには不安が残り、まず自分の神武で

テストをしていたのだ・・・当然P A 『プライマルアーマー』が発動できるので
あれば、

A A 『アサルトアーマー』も発動できるといふ事だつた。

しかしA Aの実験はその範囲が原因でまだ一度もテストしていなかつた・・・
「ウチ等の科学の力の勝ちや!!!」

眩い翠の光が紅蘭と降魔を包む・・・

【聖魔城中心部付近】

大神は突如、激しい揺れと、強烈な翠色の発光が後方……、紅蘭がいたあたりから

発生するのを見、それと同時に花組の全員に紅蘭機の沈黙を告げるブザーが機体内に鳴り響く。

「紅蘭……………」

「……………っ！」

「もう……………嫌だよ……………っ」

「紅蘭!……………紅蘭!!」

「紅蘭……………敵は必ず……………ううっ」

『(今のは……………AA……………じゃああの人は……………もう)』

花組の皆の悲痛な通信を聴きながらも、自分の心を押し殺しながら絞り出すよう、
『先へ急ごう……………』と大神はみんなに告げる。

「フフフフ……やるじゃないの……でもここから先へは行かせないわよ!!!」
突如、後方から蝶が出現し紫電を放射し花組や五十土を攻撃する。

「うっ!」

「きゃあ!」

「つぐ!」

「ああ!!」

『うきや……』

以前の量産型と比べられない程強化されており大神たちも苦戦する。

「くそ……迂闊に近づけない……」

蝶の攻撃に責め姐ぐも一瞬の隙を突きマリアが蝶にタックルをし拘束する。

「時間がありません……ここは私が抑えます!!先に行ってください隊長!」

「マリア!つバカな……君まで!!」

「隊長!……アナタには帝都を守る使命があります……さあ、急いで!!!」

その間にも蝶の攻撃がマリアに襲い掛かるも、一步も引かず抑え込む。

「私……最後のわがまま……を、きいてください」

「……解った」

大神は、そう眩きマリアの横を抜け先へ進む……最後尾の五十土が一瞬足を止めるも

大神の後を追いかける……

「離せ……離すのよ!!」

「昔……わたしは感情に任せて間違いを犯した……許しは請わないわ……

罪は罪ですもの……隊長!後は任せます!!

そう叫び蝶から距離をとり背部に装備されたスナイパーカノンを構える

「喰らえ!パールクヴィチノイ!!!」

マリアの渾身の氷結霊力弾が蝶を捉え……浮遊腕諸共、機体本体を破壊する、

しかし……マリアの攻撃も今のが最後の力を振り絞った攻撃であり……

カノンの収納し先に進もうとしたとき静かにその機能を停止したのだった。

程なくしてカンナ、紅蘭に続きマリアの神武のきのうが停止したことが、花組に伝わ

る

先に進むにつれ．．．仲間の命が散っていく、アイリスの嗚咽交じりの泣き声やさくらの噺り泣き．．．すみれの悲痛な息遣いが大神の心を深くえぐる．．．その光景をただ見つめることのできない花組ではない五十土は．．．自分の無力を痛感する．．．昭宏やシノの犠牲でも私の任務は．．．この人たちを中心部に連れて行く事．．．この人たちだけでも．．．と歯を食いしばる。

そしてマリアと別れて10分ほどで大きな扉のまえに到着するしかし．．．五十土機が敵のロックオン警告が鳴り響く、後方を確認するとそこには．．．マリアと交戦していた筈の蝶がいたのだ、だが敵の機体もボロボロで所々火花や翠の光が漏れていた。

「ふ、フフフ．．．やられたわ．．．私はもうダメみたいね．．．でも!!

あたしの命に代えても又丹様の邪魔はさせない!!それが．．．私の又丹様への忠誠．．．そして愛!!お前たちも道ずれよおおおとおお!!」

蝶の機体から妖力とコジマ粒子が異常にもれ光り輝く、

「マズイ! 奴め自爆する気だ!!」

大神が叫んだ瞬間．．．砂色の機体．．．震電が蝶に取り付く

「もうこれ以上は!!! やらせないのです!!!」

五十土が蝶を羽交い絞めに脚部スラスタにエネルギーを為急加速する

「何をして無駄よ！この周辺は、跡形もなく消し飛ぶわ!!」

『残念だったのですね．．． 私たちの機体には標準装備でアサルトアーマーが

装備されています！その効果範囲を変更し攻勢範囲を五十土の正面、貴女の方

に固定すればあなたの爆風は、五十土のAAで相殺．．．被害が出るのは貴方と

五十土だけなのデス!!!」

震電の各スラスタのリミッターを解除し蝶事OB（オーバードブースター）で

移動し大神経ちとは別の方向に移動する。

「離せ!!はな．．．せ」

「次に生まれてくる時は．．．平和な世界だといいな．．．ねえ．．．お姉ちゃん」

【武蔵艦橋作戦本部『足りない本部』】

『……突入支援部隊全機シグナル喪失、生死不明以上』

『了解……あとは花組のメンバーを信じるほかありません以上』

『三笠から通信、損害甚大、ほとんどの戦闘能力を喪失』

『米田司令……至急退艦を此方の受け入れは可能です以上』

『武蔵さんかい……すまねえが退艦するのは風組の連中だけだ……』

俺は最後の切り札の為にここに残る……』

『どのような切り札があろうと……現在の三笠では効果的な攻撃は

不可能と判断します以上』

「へ……それでも……」

「長官!!……霊子砲のエネルギーが急速に高まっています!？」

「なに!!」

『こちらでも確認しました……残り時間はもはやありません以上』

『ショートバレル“小兼定”のフルパワーでの砲撃で破壊できますが』

確実に突入班並びに外周の味方部隊の命の保証が出来ません以上』

「武蔵さん……さつき言った通りに風組を収容してくれ」

『了解しました……救護艇を派遣します並びに其方にて応急修理をしていた

整備スタッフも回収しますよろしいですね？」

「構わねえ……頼む」

『了解……収容作業を開始以上』

『これより指揮権を武蔵野に譲渡以上』

『譲渡を確認これより本艦の式は武蔵野が代行します』

『ではあとは宜しく願います以上』

そう言い残し武蔵は艦橋を後にこの場を離れた。

【三笠艦橋】

既に風組三人娘や帝撃、フェイスの整備スタッフは退避しておりこの艦に生きて居る人間はただ一人……米田しかいなかった。

「フフ……わしに、軍人としてのいい死に場所をくれたな……あやめ君!!

……感謝する!……全機関出力最大!!目標、聖魔城!

人間を舐めるなよ!!!突撃————!!!

「了解……並びに船首に障壁展開……突撃効率を上げます以上」
「は？……いやなんでお前がここに!!」

「今貴方に死なれては戦後処理が大変なので勝手に死なないでください後、戦後処理の前に盛大に祝勝会をしますのであなたがここで逝くとその計画もおじゃんなので貴方を守りに来ました以上」

艦橋の入り口に淡々と米田に毒を吐く武蔵さんがいた。

【聖魔城中心部入口】

ここまで、カンナ、紅蘭、マリア、それにフェイスの支援部隊の方々全員が散り残すは、大神、さくら、アイリス、スマレのみに……さくらが後ろを振り向こうとしたときに

大神は、それを制止する。

「振り返るなさくらくん」

「…………でも」

「まだ終わつちやいないんだ……又丹を倒し世界を必ず救うんだ！」

「大神さん…………」

「少尉…………」

「お兄ちゃん…………」

「みんなの思い…………けて無駄にはしない……見ていてくれ」

そして中心部に侵入する。

中は広くその中央に巨大な砲が鎮座されていた、その近くにあやめと

一体の大型の鎧人形が佇んでいた。

「ようこそ…………」

「…………！」

「あやめさん!!」

「よくここまで来たわね……ようやくあなた達と決着がつけられるわ」

「どいてくれあやめさん……おれたちにはやらなきやいけない使命があるんだ！」

「そうですわ!!それに早く暁さんを返しなさい!!!」

「そうだ!……アカツキを返して!」

「フフフ……ダメよ……あの子は私と又丹様の大事な子……それに

『あの子は帰りたくない』みたいよ?」

素晴らしいあやめは鎧人形の腹部を撫でると鎧が開くと中には、コードの様な物で絡めとられ

意識のない暁がぐったりと首を垂れていた。

「さあ……わたしの愛しい坊や……あの邪魔な小娘たちを……殺しなさい」

その言葉をきっかけに鎧は閉じ鎧人形の鬼の面の目が紅く怪しく光り、腰に添えられていた

野太刀を抜きアイリス、すみれに斬りかかる……

絶望の夜はまだ明けない……

第43話 〈散らなき鉄の花〉⑧

骨嵬の斬撃をモロニ受けたすみれ、アイリスは大きく吹き飛ばされるも何とか態勢を維持し

骨嵬に薙刀と霊力弾を構える。

「少尉……此方は私たちがなんとかします!!その間に霊子砲を!」

「……アイリスたちは大丈夫だから!!」

「わかった……!!」

「気を付けてね二人とも……」

大神、さくらは骨嵬の相手を二人に任せ自分たちはあやめに向き直る、

「……あやめさん……今すぐそこをどいてくれ!出ないと……いくらあなたでも」

「……フフフフ」

アヤメは妖艶に笑いながらスルスルリと大神の神武にの肩に座り、

「いくら……私でも……なあに?フフフ……大神君にわたしが倒せて?」

「……」

「いいわあ……決着を付けましょう……二人でねえ」

「やめてくださいい大神さん!!」

「大丈夫だ・俺があやめさんを説得してみせる、さくら君は手を出さないでくれ」

「楽しくなってきたわ・・・二人の決着を付けましょう誰にも邪魔はさせないわ・・・」

そういうと地面の魔法陣からアヤメ色の魔装機兵神威が現れる。

「行くわよ大神君!!!」

すみれ、アイルス side

骨鬼の攻撃は野太刀による斬撃のみであるが神武より一回り大きいためその分のリーチが

広く、中々間合いに入れずにいるすみれと、霊力弾で攻撃するも悉く切り払われ、攻撃が命中しても翠の薄い光の膜によって無効化されてしまっていた。

「全く厄介な奴ですわね・・・」

「う～～全然効いてないよ・・・」

「曉さん!!!もし、早く起きてくださいまし!!!」

「ねえ……起きてよアカツキ!!」

「……………」

骨鬼からは全く反応がなく代わりに呼びかけによって、隙のできていた、右腕を鞭のように伸ばし

すみれ機を掴み壁に叩きつける。

「きゃああああ!!」

「すみれ!!……………このお!!フォーオブアカインドwithスターボウブレイク!!」

アイリスは、自身の分身を4つを生み出し一人づついるとどりな靈力弾を降らせる、

宛ら靈力の雨の様に……………通常の降魔ならば瞬く間に光弾に触れアイリスの破壊の力により

粉々になる所だが、骨鬼は、ギリギリの隙間を縫うように回避していくそれでも、異音を発しながらその装甲を削られる。

「まさか……………あの光弾の雨を避けるなんて……………ですが今が好機!!」

光弾の雨を切り払いながら骨鬼に接近し薙刀に靈力を込める。

a a a a a a a a
!!!!!!

「キヤアアア!!」

突如、骨鬼が吠える！鬼の面の口部が開き獣のような声を上げ暴れ、アイリスは振り落とされる。

「危ない!!」

地面に落下する寸前いすみれがアイリスを回収し大事に至らなかつたが骨鬼から蒼炎を漏れ出し、

眼光は紅く煌めく、骨鬼の野太刀に蒼炎が集まりアイリスに向け振り下ろすと、蒼炎が斬撃波が襲う、

アイリスは間一髪自分の神武に再度搭乗し障壁を張るも数秒防ぐも易々と突破しアイリス機の左ウイングと左腕を破壊し正面装甲も一部抉り内部が見える状況になつていた

先ほどもまでの綺麗な黄金色の装甲も焼けこげ煤で汚れている。

「あか……つき……もどつて……きて」

額を破片で傷つけたのか血を流しながら弱弱しく暁の名前を呼ぶ、

しかしその声にも無視するかのようにアイリスにトドメを刺そうとした瞬間、

骨鬼の頭部を何かが貫き爆砕する……

「……え？」

「いったいなんですの……？」

通路の奥から発射されたようにみえすみれは其方に目を向けると一瞬紅と白の装甲と

バーストレールガンの銃口が見えたような気がした……。

「っ！そんなことより今なら!!」

頭部を失ったことにより野太刀を手放しよろけていた、そこに今度はすみれが取り付き

押し倒し、いつも持ち歩いている折り畳み式の薙刀を展開し

『無理やり曉に絡みついているコードをすべて切断する』

A r a : : : : : a : : : : : a

骨鬼が暁をうしなつた瞬間、獣の音が徐々に掠れ、無音にそして機能を停止させる。

「はあ……はあ……なんとか暁さんを……しかし」

すみれは以前、小島達から阿頼耶識の危険性を聞いていた、機体と人体が接続されている状態で

意識をうしなっている状態で無理やり接続を切断すると人体に何らかの悪影響を及ぼすと

しかし

骨窟を……暁をこのままアイリスや他の人達の命を守るにはこれしかなかった
「暁さん……いま御側に」

切断了際、バランスを崩し地面に叩きつけられ体の数カ所の骨が折れていて
その痛みに耐えながら地面によこたわっている暁の元に、アイリスもまた
体を引きずりながら暁の元へ……

「あか……つき一緒に……」

「もう……はなしませんわ……」

アイリス、すみれが暁のへたどりつき二人は倒れこみ動かなくなる。

side out

大神

side

「すみれさん!! アイリス!!」

さくらが二人に声を掛けるも反応がない……

「大神さん！二人が……」

「つぐ……さくら君それより早く霊子砲を!!早く!」

「そうわせないわあ!」

さくらが霊子砲に行こうとした瞬間アヤメは妖力弾をさくらに放ち吹き飛ばす

「あやめさん!!もうやめてくれ……おれは貴女とは戦いたくない!

俺たちの目的は又丹を倒すことだ……だからどいてくれ!!」

アヤメの攻撃を防御しながら幾度と声をかけるもアヤメの攻撃は弱まるどころか

激しさを増す、

「又丹様の邪魔はさせないといったはずよお?教えてあげる……」

私たちに逆らうことの愚かしさを!」

大神の防御の隙を突いた斬撃が大神に被弾し、大神の苦痛の呻きが漏れる。

「このままじゃ……大神さんが……」

「何故、何故なんだ……世界の破滅が

貴女の望んだ事なのか!」

「……そうよ、私は、あの人と出会い私の世界が変わったのよ

嫉妬、憎悪、恐怖……この世界に満ちた邪悪なる意思が私に力を与えてくれる!」

そして再び斬撃を繰り出し、大神を痛めつける。

「つぐ．．．．．」

「どうしたの？君の決意、君の力はこの程度なの?!そんなに私を傷つけるのが怖い？

本当．．．．．可愛いコ!!直ぐにらしくしてあげるわあ．．．．」

そこで今までよりも重い攻撃を大神に浴びせそのまま霊子砲の元へ飛ぶ、

「あやめさん!!お願いです! 私たちといた、アのあやめさんに戻ってください!!」

さくらの悲痛のな訴えも無視し霊子砲を見下ろしながら

「今宵、霊子砲は放たれ世界は．．．闇に還る見なさい!!」

あやめが指さす先には、光が灯ったが石板があり、明滅し霊子砲の砲身に妖力が集ま

る、

「血の涙は我が美酒．．．その慟哭は快き旋律．．．そして絶望は我らが時を告げる鐘

幾億の．．．絶望と恐怖に．．．又丹様とあの子と共に．．．酔いしれるのよ．．．

骨鬼が砕かれ命火が消えても．．．又丹様のちからで黄泉還る．．．そこに転がってい

る

哀れな小娘たちは犬死．．．フフフフフ」

「．．．．．く」

「さようなら．．．．大神くん!」

アヤメの急降下からの鋭い一撃が大神に襲い掛かる瞬間……桜色の機体、さくらが飛び込み

大神を突き飛ばし庇いその凶刃を受ける……。

「な……なんて事を！俺を……庇って」

「大神……さん……かつて……きつと……勝つて……ね」

さくらの力のない声が……大神にはしつかり届くその言葉に大きく頷きながら

「わかったよ……さくらくん」と伝える、そのやり取りを見ながらアヤメは

苛立ちながら「人間とは、時々こんな奇妙な事をする……」言い放ち

小声で「かつての私なら……きつと」と呟く、その瞬間大神の機体から

真っ白な霊力が炎のように溢れてくる。

「な……なんだ……その力は!？」

「……俺はね……あやめさんとえ邪悪な化身となつていても俺は貴女に

憧れていた……世界が減びても全てを失つても、貴女の居たあの日常に帰りたいと

心の何処かで思っていた……でも!!皆が……そして貴方が教えてくれた

負けてはいけないと気が!全てを捨てても進まなければいけない時があると!!!

もう……おれは迷わない!?!……見ていてくれさくら君!!!」

「……はこ」

大神は、今までの防御態勢を解き、腰に添えた二刀を抜き放ちアヤメと立ち向かう

s i d e o u t

?????
s i d e

ふと俺は目を覚ます・・・見なれた部屋・・・もう大分懐かしいとさえ感じる錯覚がするも・・・見慣れた部屋、趣味で作ったプラモデルの飾られた棚・・・乱雑に置かれたエネドリの缶とPC・・・間違いないここは・・・八神暁になる前・・・

「あ・・・れ？」

自分の体を確かめる、そこには30代のくたびれたおっさん・・・●●の体だ・・・
「ちよつと！●●いつまで寝てるの！遅刻するわよ〜」

「っ!!」

聞き間違えする筈はない・・・懐かしいときえ感じる自分の母親の声だ
そこで色々と思いつく・・・あのコンビニで働いていた時起きた地震で

おれと同僚がウオークイン冷蔵庫で棚の下敷きになり死亡し、それが原因で
無理なシフト体系と労働基準違反での店側の過失致死ということで店がつぶれ、
俺は一年かけて弱った体を治しながらアルバイト先を探し、漸く都内の

家電量販店の裏方作業員として働くことになったのだと・・・

「つて・・・ヤバ!!遅刻する!!」

そう叫びながら着替え、簡単に朝飯を食べ出勤する・・・

その日は平日にも関わらず電車には乗客が不思議とだれもいない・・・

おれは電車の座席で転寝しながら音楽を聴く・・・あか・・・つき

時折ノイズが走り気分が上手く乗らない・・・そろそろこのイヤホン変え時かと思

いながら

また目を閉じる。あか……つきさん

コンビニ時代の教訓を鑑みて出勤時間11時、退勤を19時の週四日で

働くことに、俺以外は基本年下の子達で上司の社員を除けば俺より年上は

3人ほどの部署で気の合う若い子たちと無駄話をしつつ商品の仕分けや品出し、

偶に来る上司の無茶振りに振り回されつつ仕事をやるあか……起きて……まし

「つぐ……」

「何してるんすか？中二病でも発症しましたか？」

「うるせー幻聴だ幻聴!!」

「あー……頭だいじょうぶですか？」

「まだ平気だよ!!……なんか今日は疲れた」

「係長の無茶振り今回やばかったですもんね……」

「まあ……今年もあと一か月ちよいで終りだからな……」

次の瞬間……脳内にいままでの夢の後継がフラッシュバックする。

帝劇でキチロリとヤンデレとブラコンに追われた日々

米田と大神の夜遊びの尻ぬぐいとそれがバレて・・・花組とあやめ姉さんに俺まで折檻受けた事

フェイスでのリリイの尻縫いに奔走する俺と団長・・・それを学園の皆がわらつて
いる光景

リリイ、了子、小島とで内緒の密談をしながら格納庫でひっそりとした飲み会

クリスマスパーティーですみれを暗殺者からまもりそのままホテルで一夜をあかし

た事

強化訓練の時アイリスに押し倒されて・・・喰われたこと

白愛とシヨゴスとアイリス、すみれで甘味処で集まって買い物した光景・・・

そして・・・マキの大切な妹の満面な笑顔を

全てが蘇る

「●●さん？」

「悪い!!今から早退するから!!」

「はあ!!!」

「係長に伝えといて後・・・いままでありがとうがとうございますって!!!」

「・・・・・・・・しゃーないな・・・・・・・・暁は」

俺は着の身着のまま家に帰る・・・・・・・・そこには食卓を囲む親父にお袋、それに最近ルームシェアをやめて帰ってきた姉がいた。

「どうしたの●●？そんな恰好で・・・・・・・・何かあった？」

「・・・・・・・・どうしたの？」

「・・・・・・・・」

アカツキ

暁さん

大事な二人の声が脳内に響く・・・・・・・・ここから離れたくない

●●をここまで育ててくれた肉親から・・・・・・・・でも

「待ってる人がいるんだろ？」

急に親父がそういう・・・少し涙交じりの声で俺は・・・

「・・・うん」

「●●!!」

何時も強気な姉が泣きながら俺を抱きしめる・・・

「母さん・・・●●がいなくなつて本当に悲しかったんだよ・・・でも

貴方がやるべきことを見つけたんなら・・・頑張つて」

いつ以来か・・・母に頭を撫でられたのは・・・俺も家族も

この家で命一杯泣いて・・・最後の家族の夕飯をすまし改めて家族と最後の挨拶をして

家を出る玄関には家族全員が手を振ってくれた・・・。

俺はポケットにしまいつきりだった煙草『BLACKJACK』を取り出して

泣くのを我慢しながら吸う・・・目の前には白い空間・・・

自分が死んでは初めてきたあの空間だ・・・

そこには・・・

「つえ……ぐ……えつぐ」

ロリ巨乳神……リリイが泣きじやくっていた……

「何ないてんだよ……」

「だつて……だつて……」

「いいからとつとと向こう帰らせる……アイリスとすみれには、いっぱい迷惑掛けたんだ」

「挽回せにやならんからな」

「……どいして……お主は悲しくないのか!!どうして儂を恨まん!!!」

儂は……おまえから日常を……」

リリイは叫びながら俺に抱き着き号泣する……悲しくないわけがない……どうでもよくない

でも……」

「アンタがいたから大切な人たちに会えた……たしかに両親や姉にはもう会えないけど」

今度はちゃんと別れの挨拶も出来た……それに頑張つてつて言われた……なら

頑張るしかねーわな!!」

「そうか……解つた!!!」

「おう……あ……後最後の特典……決まったから序に（。D。）クレ」
「!……本当か？」

リリイは驚きながら答え俺は「おう」という……

「……以前も言った通り後付けは、体にも魂にも負担がかかる何らかの後遺症が出るのを覚悟でか？」

「おう……多分この『力』があれば色々何とかなると思うし……リスクなんて既に目持ってかれてるんだから今更感がな……」

「……解った……では参ろうか……暁」
そうリリイが言うのと二人まとめて床の穴に落ちていく

side out

大神side

大神はあやめの攻撃を掻い潜りながら着実にダメージを与えアヤメを追い詰めてい

く

「つく!!このお!!!」

アヤメの大振りの斬撃を一刀で防ぎ残りの一刀で神威を袈裟斬りにする、あやめの神威から

黒煙と火花を散らし膝を付く。

「やるわね……さああなた自身の手で私に早くトドメお刺しなさい……」
既に戦う力をうしなつたアヤメは、大神にトドメを刺すように促す……
しかし大神は刀を鞘に納め、

「何故!トドメを刺さないの!?!いまなら私を……」

「解らない……でも俺は貴女を倒すことができないんだ……」

「おか……しな子……アナタたちの藤枝あやめはもう存在していないというのに」
徐々にアヤメから敵意が薄れゆくなか……

「茶番はやめろ!!殺女!」

葵叉丹が霊子砲の前に現れた。

「叉丹様?」

「失せろ!!虫ケラ!!!」

叉丹の両手から凄まじい妖力を発し大神を攻撃する、司会は真っ白に染まり

大神が叫ぶも。。。。一向に攻撃の衝撃が来ない・・・何故ならその攻撃を
アヤメが庇っていたからだだった。。。。。

「あやめさん!!」

攻撃を防ぎ切ったアヤメは数歩大神に歩み寄るも途中でちから尽きる。

「あ、あやめさああああああああん!!!」

又丹はその光景に「下らんマネを・・・」と吐き捨てアヤメを見下す、

「どっまでも・・・愚かな女だ・・・」

今まで付き従っていたアヤメをまるで露頭のゴミのように蔑む態度に、

大神は刀を抜き放ちおのれの感情を爆発させる。

「許さん・・・葵又丹!!俺たちが正義の鉄槌を下してやる!!」

「ハハハハハ!敵に助けられた奴が何を言う!?!・・・心配するな

貴様らまとめて殺女の待つ地獄に叩き落としてやるわ・・・」

又丹は獯猛な笑みを浮かべ大神の前に立ちはだかる、そこでさくら機の機能がある程

度回復し

戦列に復帰する。

「大神さん、此方は大丈夫です・・・一緒に又丹を倒しましょう!!」

「さくら君・・・よし!いくぞ!!!」

「まもなく世界は滅ぶ．．．貴様らの命も戦いも．．．死も全ては無に帰す!!!
見よ！これが我が神機．．．神の脅威．．．『神威』である!!」

そう言い放つと魔法陣からアヤマの搭乗していた魔装機兵と同じ機体が出現する
違いとしてはアヤマ色から漆黒の黒へとそして絶え間なく神威を包む翠の光の膜
今までに見たどの敵の膜よりハッキリと確認できるものを纏っていた。

しかし大神はそれに臆する事無く又丹に言い放つ。

「葵又丹．．．貴様を倒し帝都に平和を取り戻す！いくぞさくら君!!」

「了解!!」

かくして帝都を．．．世界の運命を決める最後の戦いがいまここに幕を開ける。

side out

聖魔城場外上空、武蔵野side

「リレイ総長から入電『要救助者ノ確保ニ成功、至急射出作業を開始サレタシ』以上」

「了解、震電輸送用コンテナ準備並びに対城塞貫通弾頭準備、弾頭にコンテナ収納後

対シヨック緩衝材散布、無傷で彼に送り届けます以上

「聖魔城突入班の回収完了しかし『花組機の所在不明』」

第44話　　く散らなき鉄の花く⑨

又丹との決戦が始まり、大神とさくらが見事なコンビネーションで攻撃を繰り出すも
又丹の剣の腕もさることながら一番の要因は翠の膜・・・PAによる攻撃の無効化が
大きい

「こ・・・攻撃が!!」

「あの膜に阻まれて・・・」

「ふん!口ほどにもない・・・それにしても人間とは本当に愚かなものだ

この破滅の力をまさか人間自身が掘り起こすとは・・・」

「破滅の・・・光?」

「そうだ!!本来この粒子はこの世界には存在しなかったモノ・・・それが

突如世界に現れた・・・まさに神の光!!人間の原罪を焼き腐らせる光!

貴様ら如きがこの神の力を破れるわけがなからうが!!!」

神威の周辺のPAが収束しAAを発動、大神、さくらを巻き込み大爆発を起こす

「きゃあああ!!」

「ぐああああ!!」

AAの爆発により後方へ吹き飛ばされた瞬間、神武のセンサーが異常を察知し警報を鳴らす

『有害物質散布感知』と

「こ……これは！……っぐ」

「大神さん……息が」

異常な息苦しさとコックピットの排気機能がフル稼働し排気ファンの音がけたたましい音を発する、

それに合わせて「くくくく……」と叉丹が笑いながら言う。

「本来のコジマ粒子はその絶大な力の裏に人体と環境に重度の悪影響を及ぼす諸刃の剣！

小島とかいう人間が無毒化したようだが……そのせいでこの力の3割の力しか發揮できていない

ときた……だが我が協力者はこの力を十全に發揮できるようにした……所詮甘さなど

偽善にはかなならぬ!!!……選ばせてやる毒でもがき苦しんで死ぬか……

俺に斬られて死ぬか!!」

サタンの凶刃に妖力とコジマ粒子が収束しさくらを切り捨てようとした瞬間……

『魔力が込められ蒼炎を纏った見覚えのある薙刀』が振り下ろそうとした腕を貫く

「な．．．．．なにいい!!!」

「ま．．．．．まさか!!」

「い．．．．．生きて居たのね．．．．」

「暁!!!」

「暁君!!!」

そこには上半身裸で何を投げたモーシヨンで立っている暁が立ち上がっていた、

その傍らには、毛布に包まれ応急手当とガスマスクを付けられ眠りにについている

アイリスとすみれがいた．．．

「．．．．．まったく．．．．．ふがいなさ過ぎてムカつく．．．．」

皆に一杯迷惑かけて．．．．．花組の皆の命の危険に晒して．．．．．あんな骨董品で自我

飛ばして

大好きな女性殺しそうになって．．．．．自分の馬鹿さ加減にはらわた煮えくりかえ

る．．．．．

でも一番ムカつくのは、おれの友人の夢の力でナニトチ狂った事してだ

ロリコン野郎!!!」

暁の体から蒼炎が迸る．．．．．

体に異常は『二カ所』以外無し・・・これなら・・・コイツを殺せる。

その瞬間、轟音とともに壁が吹き飛びナニかが地面を抉りながら止まる、そのナニかはまさに砲弾それが分解され中らコンテナが出現それと同時に

暁はそのコンテナに駆け寄る、するとそれに合わせてコンテナが稼働し

なからいったいの巨人が姿を現す・・・暁の震電であった。

「しまった!!」

それを呆然と見ていた叉丹は。暁が機体に乗りに込むことを阻止できなかつた。

「阿頼耶識接続・・・完了、機体起動・・・コジマ機関リミッター解除・・・

魔力変換開始・・・帝国華撃団・花組補佐『八神暁』戦闘行動に復帰します!!!」

今ここに花組の最後のメンバーがそろった・・・。

「暁・・・体の方は?」

「・・・問題あるけど今は奴をぶっ転がすのが先だ! P A の減衰は俺がする

後 A A はこれ以上喰らうなコジマ汚染で機体や人体が持たない・・・だがそこが弱点

だ」

「弱点?」

「ああ・・・奴の積んでる P A 発生器と A A 発生器は二つで一つの機構の機械だ、

AAはPAの防御を攻勢エネルギーに変換して攻撃する……つまりAAを使ったら一定時間PAは張れない！」

「だからさつき暁くんがなげた薙刀が又丹の腕に刺さったのね！」

「そうだ」

「なるほど……暁さつそくで悪い頼めるか？もう時間がない！」

「了解!!」

素晴らしいOBを起動し又丹の元に、途中スモークで目くらましを展開し

かく乱、クイツクターンで又丹の背後をとり、腕に装備されていた07—MOONL

I G H T

での斬撃、しかし間一髪のところであ丹が防ぐもその出力により徐々にPAが減衰

していく、

「しつてるか又丹!!PAが攻撃で消失すると発生機に安全機構が働いでAAでの消失の

二倍の時間がかかるって！」

「な……なに!!」

「あのクソ野郎の研究資料見せてもらったぜ……テメイには聞きたいことが増えた……

誰がテメエら裏で糸引いてやがる!!」

暁は又丹を蹴り飛ばしヘビィライフルを掃射、PAはどんどん減衰させていく

「そっ!!」

更にサクラの鋭い攻撃が神威の翼を斬り落とす。

「攻撃が……通じた!!」

「未だ大神! さくら!! でかいの一発ぶちかませ〜〜!!」

「応!! さくら君!」

「ハイ……大神さん!!」

『破邪剣征・桜花乱舞!!!』

大神とさくらの霊力が混じり桜の花吹雪のような霊力波が広がり又丹を飲み込む

「ぬおおおおおおお!!」

「うお!……すげえバカツプルパワー」

又丹は大神たちの合体攻撃をなんとか耐えきり威圧する。

「ぐ……くだらぬ互いの傷を舐めあうしか出来ぬ人間どもよ……」

「この私に身をゆだねれば楽になれると思わぬのか……」

「あ?」

「なんだと……」

「この世界に正義なの……ましてや愛などまやかしにすぎぬ

絶対の力! それこそが、世界の真理!! 神の真理なのだ!!」

又丹が怨嗟混じりに吠えるもさくらはそれは断じて否と否定する。

「それは違うわ!!皆がいたから戦えた!!皆で支えあつて来たから、

此処まで来れた!観念するのは貴方よ!もうこの世界の何処にも逃げ場はないわ!!」

「……この私が逃げる?面白い事を言う……災厄を!不幸を!全てのの人に

絶対の絶望を貴様らに与えてやる!!!」

「ぎゃあぎゃあ喚くな……ロリコン野郎……

テメエ如きが神気取りか笑わせる!」

「なにい?」

「テメエなんぎ……本当の神の前じゃ只のちつぽけな子悪党だよ……力こそ世界の真理?」

確かにテメエの言うことも一理ある……だがな!!

力なき正義は無力だ!貴様の言う通りだ……けどな正義無き力もまた無力だ!!

現に周囲を見てみる……貴様の降魔も三騎士もここには居ねえ、ご自慢のコジマパ
ワーを得た

その魔装機兵も大神たちの力でポロポロ……すでにテメーは大神たちの……花組

の正義の『力』に

負けてるんだよ!!!」

「黙れえええええ!!!」

「大神……こいつの始末はおれが着けるこつからは手出ししないでくれ……」

「暁君……でも!!!」

「……」

「頼む!」

「解った……決めてこい暁!!!」

「……おう!!!」

「おのれ……舐めおって……死ねえええ!!!」

又丹の妖力を収束させ暁目掛けて放つ……それは一条の光の砲撃である、

「本当はお前をここで八つ裂きにしてやりたいが後にとつといてやらあああああ

!!!」

月輪の紋が光り輝き蒼炎が震電の背後にまるで天使の羽根の様に展開し両手でしっかりと

ソードメイス『鉄華無名二式』持ち水平に構え……OB起動妖力の砲撃に突貫する。

「フ……馬鹿め自分から死ににいったわ……やはり口だけの愚かな人間よ」
 「暁君!!」

「いや……さくら君あれを見ろ!!」

「……え？」

妖力の光に飲まれた暁はソードメイスで砲撃を切り裂きながらスピードを落とさず
 其のまま突貫している、

「な……なにいいいいいいいいいいいい!!」

「はっ……ことらゴジマ粒子をあつかつてるだけ? 応用法なんざいくらでもある!!」

「こんな風になあああああああああ!!」

「この……バケモノガアアアアアアアアアアアア!!」

「ぶっ貫けええええええええええええええええええええええ!!」

八神流奥義! 八坂の鏡!!!」

妖力砲を突き抜けその勢いのまま叉丹の駆る神威を貫き吹き飛ばす。

「や……やった!!」

「大神！さくらら!!今のうちに靈子砲を破壊しろ」

暁の言葉に二人は頷き靈子砲へと向かう……

「バ……馬鹿な！この私が……貴様ら如きに……」

又丹はよろめき名が立ち上がると周囲の魔法陣から妖力を吸収し無理やり

活動を再開する

「認めん……認めんぞ!!」

「大神さん！暁さん!!又丹が……」

「なにい!!」

「つち……しつこい野郎だ……」

「……すべての決着をつける時だ……行くぞ!!」

「大神合わせろ！久々のコンビネーションだ！忘れてないだろうな士官学校時代の」

「!……解ったやろう!?!」

大神の二刀に白い稲妻を纏い靈力値が急激に上昇し、暁もまた蒼炎を翼のように展開する

そして又丹もまた自身のかたなに妖力を込める、大神の機体に装備されたウイングが展開し

スラストアーにエネルギーが集まる、震電の6つのカメラアイに蒼い鬼火が灯る、神威の悪魔の翼が

展開さで妖力が上昇する・・・その刹那先に動いたのは・・・暁だ!

ソードメイスに魔力を込め魔力刃を無数に射出し一瞬遅れで動いた又丹の動きを止め

すかさず大神の高速の一閃を繰り出し上空に舞う、さらにその一閃にてのけぞった又丹を

ソードメイスで上空に打ち上げる追う。

『龍虎滅却・・・龍・虎・滅・牙・斬んんんんんん!!!』

蒼炎を纏ったソードメイスの斬り上げと大神の白雷の如くの垂直落下の二刀の斬撃が同時に決まり

又丹を強制的に地面に叩きつけた瞬間四方に白い霊力が走る・・・二人のコンビ攻撃にて神威は爆発四散する。

「・・・やったか?」

「コラ大神それ・・・フラグだ馬鹿野郎」

その時爆炎の中からナニカが凄まじいスピードで二人の横を通り過ぎ霊子砲まで移動していた

蒼叉丹だ……神威は既にボロボロでうごいてるのが奇跡な状態であった

しかし残った腕で靈子砲の動力部を握りながら言い放つ

「フフフ……この城の全エネルギーを解き放つ……世界に恐怖の……雨を

降らせてくれるわ!!……さらばだ帝国華撃団やはり……

貴様らの負けだああああ!!!」

「やめろおおおおおお!!!」

次の瞬間、靈子砲は白の妖力をすべて吸い尽くし破滅の光を発射した……

しかし

「させるかあああああ!!!」

『いえ……アナタの逆転は有りません我々人類の勝利です以上』

米田の叫びと武蔵のこえが大神たちに届く

聖魔城からはなられた靈子砲の光はミカサに接触する瞬間、武蔵のよういした障壁に

命中し

その余波でミカサを破壊するもミカサの突撃を止めるには弱い

「これで終わりだあああああああああああ!!!」

まるで米田の気迫がミカサに乗り移ったかの如く霊子砲諸共叉丹をミカサで轢き潰すした。

「全く無茶するよ米田のおやつさんは……」

「二人とも無事か!」

「なんとか……あ!すみれさんとアイリスが!!」

「大丈夫……無事だよ」

素晴らしい震電の腕の中にはきをうしなっている二人が眠っていた。

「しかし……これは……ミカサが米田司令が……」

「後なんか武蔵さんの声もしたな……まああの人がいるならおつちゃんも大丈夫だろ」

「……俺たちは……勝ったのか?」

「ああ……流石にこれにくたばったろ、畜生やつには聞かなきゃならねーことがあったのよ」

「か・・・勝ったんだ」

大神が勝利に喜ぼうとした瞬間、大神たちに途轍もないプレッシャーが襲う
いままでに感じたことのない威圧感・・・先ほど又丹の比ではない程に

「な・・・なにい」

「震えが・・・止まらない・・・なにかの力」

「・・・野郎しつこいってレベルじゃねーよ・・・」

目の前には又丹の遺体が宙に浮かび妖力だ再び彼を包むその瞬間・・・

葵又丹と山崎真之介がダブって見える・・・そして妖力の繭が破れ

中から現れたのは・・・葵又丹でも山崎真之介でもない・・・ナニカだった

「我・・・蘇りたり・・・我は罪、我は闇・・・永久なる不滅の王にして古の蛇
全能の父に背いた原始の叛逆・・・我の名は・・・サタン!!」

葵又丹否・・・サタンが言い放つときさらに周囲のプレッシャーが増す

「あれが・・・葵又丹の正体？」

「つうより・・・葵又丹の中にいた奴・・・前世の姿っていったほうがいいか？」

「前世？」

「ああ・・・稀に居るんだよう上位存在の欠片が人間の魂に入り込んでしまつてその異能を顕現しちまう人間が・・・」

「そんなことが・・・」

「なーに身近に居るからめずらしくもねえ・・・だが最悪だ

寄りにもよつてサタン・・・がラスボスとはな・・・冗談キツイゼ」

「来れ・・・裁きの時はきた・・・」

まだ平和の夜明けは開けない・・・

第45話 〈散らなき鉄の花〉⑩

「この世界を……始まりの闇に戻す……」

その言葉と共に帝都中に青白い妖力が降り注ぎ街を次々と破壊していく、
「天よ泣け、地よ振えよ……今日こそが大いなる暗黒の始まりの日

今日こそが！我が望み成就する日!!!」

圧倒的な妖力により大神は数歩後ずさりしながら、絶望的な状況に
心が折れ掛ける、しかしはさくらは、気丈にも「こんなことで！」

平静を保つ、それをみた大神もまた「ああ……そうだな！」

と己をさいど奮い立たせる、暁はそんな二人を見ながら実際どうするか、
思案していくつかの案を考える……。

「(だが現状は最悪……此方の霊力や魔力は不足、大神たちの機体は限界
おれの機体だけはまだ余禄があるけど魔力が心持たない……『あの力』を使えば
勝てるけど……こつちのリスクが計り知れない……こつちが『ズレ』て妖魔化な
んかしら

本末転倒……さて……どうしよう)」

「暁大丈夫か？」

「ああ・・・大丈夫すこしこの状況をどうするか考えてた」

「何かいい案が？」

「いや・・・あるけどリスクが高すぎて無理最悪サタンを倒せても今度は俺が敵に回るかも」

「そんな！」

「ダメ・・・それは絶対ダメ!!!」

「だよなーさて・・・どうするか・・・」

その時暁だけに『彼女』のこえが届く・・・

暁君貴方の力で・・・私を解き放って・・・

「え・・・」

「暁？」

「暁君？」

あなたの……『調律』の力で……私を……暁君

「あやめさん……!!」

暁は、あやめの元に移動し神威のコックピットを引つpegしあやめを引き上げる

「暁なにを……?」

「大神、さくら……今からすることは米田のおっさんいがいバラすな……頼む」

暁は、自分の『感覚のない』右手であやめに触る、するとあやめが黄金の光に包まれる。

『調律』
チューニング

この力は暁の新たな、そして……最後の転生特典『調律』
チューニング

この世のモノをあの世界のモノの周波数に調律することであの世に送る力

それはある意味『死神』の力、それが暁の新しい力……。

その力で『あやめ』をチューニングする、妖力で汚染された肉体を調律し
チューニング

その魂を解放する……。

薄暗い、聖魔城に聖なる光が満ちる……古き肉体から解放された、
純白の羽根を広げた美しい天使が降臨する……。

「光……あれ……御立ちなさい……」

「?!」

「……………」

「あやめ……さん?」

さくらが復活したあやめさんを驚きながら名前を言うも、その天使はそれを否定する
「私は……天使長……大天使ミカエル、限りなき罪科の道に落ちたサタンと共に歩
み

そして導くもの……サタンが蘇るとき私も蘇る……しかし私の肉体は、妖魔の力
で

わたしの魂が固く封じられていた……しかしその少年の調律の力で古き肉の檻を
消し去り私を解き放ったのです……」

「……………」

「……気に病むことは有りません……この世界を救うのに必要な事だったのです」
 「どうゆう事？ 暁君」

「暁……まさか……」

「ミカエルを解き放つために……あやめさんの肉体を……」

「……彼を責めないでください私が彼に頼んだこと……さあ、立ちなさい

世界を救いたいのならあなた自身の足で！」

ミカエルの優しい言葉を大神に言うが大神は、これまで仲間を暁の戦友を犠牲にしてきたことが心に大きく残る。

「正義を貫くのはとても大変な事、ときには多くの屍を乗り越え進まなくてはなりません」

「……しかし、挫けぬ勇気が……そしてなにより……」

人々の愛する結びつきが最後に勝利するのです……どんな困難の中でも

希望の光は、人間の心の中にあるのです……」

その瞬間

保護していたすみれとアイリスの体が光り輝く、それと同時に聖魔城各地で力尽きた花組メンバーも同じように光り輝く……。

「さあ……行きなさい、そして正義を示すのです……アナタたちに大いなる父の

祝福がありますように……」

その言葉に共にその場にいなかった、カンナ、マリア、紅蘭、そして力なく倒れていた、

アイリスとすみれも壊れた機体が嘘のように修復されずさまじい力を秘めた機体に搭乗していた、

大神は、みんなの復活に絶句しつつも感極まりながら皆に声を掛ける自身の機体も霊力も

回復していた……。

「み……みんな!!」

「なんだよ、そのぼけえーとしたツラアはよおー!」

「ウチもいくで!!」

「隊長……それにアカツキご無事ですか?」

「ホッーホホホ!!今世紀最大のヒロインにして暁さんの嫁!!」

神崎すみれ華麗にふっかつですわ!!」

「……すみれ!!」

「アカツキ……一緒に行くよ!!!」

「みんな……本当に良かった……もう二度と会えないと思っていた……」

俺は……花組の隊長としてこれほどうれい事はない!!

「……皆……色々迷惑かけて……御免」

「暁今はそれよりサタンを！」

「そうよ……お説教は全部終わった後でねえ……皆さん？」

「そうだな……覚悟しろよ暁！」

「せやで……暁はん」

「……今回ばかりは私も色々いたことが多いから覚悟するように」

「暁さん……わたくしいっぱい心配したんですのよ……これはもう……」

「ネースミレ……式場ドウコニシヨウカー」

「……」

「アハハ……さて……みんな最後の戦いだ、

俺は皆みたいない熱き心を持った仲間たちと戦えることを誇りに思う!!

俺たちに残された選択はただ一つ……帝国華撃団・花組、出撃せよ!!」

『了解!!』

号令と共に五色の光の柱が天に昇り、さくらが「行きましよう最後の戦いに！」

おおがまに伝え大神、さくらも天に昇る……そして最後に

「……」

あやめの乗っていた神威を横目にみて……大神たちを追うように天に昇る

「オオオオオオオオオオ……」

サタンは『地球』を見下ろすように異空間に自身の領域を展開し自分の野望を阻まんとする

愚か者どもを待ち受けていた。

そこに8色の光が移籍のような大地に現れ中かは、大神たち『帝国華撃団・花組』が現れた。

『帝国華撃団参上!!!』

サタンは花組たちをみてその表情を一変させる……かれらから迸る『聖なる力』驚愕していた、

「……………この力は……まさか!!?」

「そうです……サタン」

「……………ミカエルか!」

「貴方の闇に対抗でき唯一の力……信頼と……愛!!

人間の心の光……大いなる父の力です」

「下らぬ戯言を……」

「還りましょう……サタン、大いなる父の御許へ」

「黙れ!!そんな紛い物で我に勝てるとても?」

サタンの角が光り輝くとさくら、マリア、紅蘭の機体からナニカが抜き取られる感覚が襲う

「きゃあ!!」

「ヤバイで……大神はんあの角皆のの体力を吸い取りよつたで!」

次にサタンの額の宝玉から攻撃が花組を襲う、それを防ぐためにミカエルがサタンの角や

宝玉をこうげきするもビクともしない……

「……いまの私の力では……壊せないようです……」

「お……おう……」

「角の攻撃さえ無くせれば……宝玉えの足場を作れるのですが……」

「それなら……俺の出番だ!!」

暁は通信をどかかにつなげアルモノの輸送を要請する

『了解……でも特殊な空間に居るみたいだねでもリイが何とかするって……イテテ』
「どうしたの？」

『いやー久々に腹部を撃たれて……』

「はあ??」

『詳しい事はまた後で……』『オタコンちゃんと寝てなさい!!』

「……とりあえずいいか……皆ちよつとした武器を要請したからその間はなんとか時間を稼いでくれ……そうすれば角と宝玉はなんかできる!!」

「わかったなら俺たちは……」

「花組の皆さん……あそこがサタンの核……天使体ですここを破壊できれば」

「ならみんなはそこを!!俺が囷になる!!」

「しかし……」

「阿頼耶識の機動力を舐めるなよ!!」

暁は遺跡の浮島の甲な足場を巧みに進み機関砲をサタンの顔面ち叩き込み標的を此方に絞り込ませる、

「……羽虫があああ!!」

サタンの怒涛の攻撃が暁を襲うがその機動力で難なく回避していく。

「花組の皆さん・・・後はお任せします・・・アナタたちに大いなる父の祝福が有らんとを」

こうして花組たちはサタンへと最後の攻撃を開始する・・・

花組の面々は狭い足場に四苦八苦しつつサタンの天使体に集中攻撃を仕掛けるもその強固な耐久力

に苦戦を強いられ、暁は絶え間ない範囲攻撃wお搔い潜り遠距離武器で宝玉やミカエルの

精製した足場を使い角を攻撃するが効き目が薄い・・・

「コイツ固い!!!あと地味に範囲攻撃がうぜえええ!!」

「アハハハハ!!逃げろ!逃げろ!!!無様に逃げまどえ!!」

「は?デカイ凶体してて一発も攻撃当てれないデクが粹がるな!

弱く見えるぞ?サタン(笑)が!!」

「貴様ああああ!!!」

「うわ〜暁良い感じに煽って・・・大丈夫か?」

「でもそのおかげで私たちへの攻撃は最小限に抑えられている・・・」

「けれど・・・この天使体でしたか?・・・もの凄く固い!」

「アタイの拳でも割れねえなんて……」

「あくらカンナさんさっそく弱音ですの？」

「あんだとお……っていまはそんな暇もねえや……あとで覚えてろよ！」

「ええ……後で帝劇でいくらでも!!」

そんな花組のやり取りの最中突然暁から通信が入る。

「皆！あと数分で秘密兵器が届く……受け取ってくれ!!」

『秘密兵器?』

すると空間が裂けそこから8つのコンテナが飛来する。

「コンテナに各機体番号が書かれているから各々装備してくれ……」

ウチからのささやかな贈り物だ!!」

「おう……ありがたく使わせてもらうぜ……ってなんじゃこりやあ!!」

いち早くカンナが自分のコンテナを開けると一対の拳が入っていた

『ウエポンユニット27 インパクトナックル』

「ウチのは……ハハハ流石暁はんのトコや……」

紅蘭のコンテナには……巨大なミサイル発射装置が

『エクステンドアームズ07〈誘導弾 改良ホーク〉』

「……開けるのが少し怖いわね……はあ……」

マリアが開けたコンテナには、合体機構のついた二丁のハンドガンが収納されていた

『ウエポンユニット07 ツインリンクマグナム』

「暁さんからの愛のプレゼントそれがたとえ武器でもいまはとてもうれしく思いますわ!!」

すみれが意気揚々とコンテナを開けると中には大型の薙刀は折りたたまれていた

『へヴィウエポンユニット31 轟槍鬼十字』

「大神さん!!」

「解った!! 暁遠慮なく借りるぞぞ!!」

大神とさくらが同時にコンテナを開けるとそこ似た一振りの刀と

一対の刀が収納されていた

『ウエポンユニット06 サムライマスターソード』と

『ウエポンユニット32 日本刀ツインブレード仕様』

「暁……アイリス……頑張るから!! 皆と一緒に帰ろうね!」

アイリスがコンテナを開くと神々しい魔法の杖が収納されていた。

『へヴィウエポンユニット24 アルナイイルロッド』

そして最後に……

「よう待たせたな……サタンこいつでも喰らつとけ!!」

コンテナを蹴飛ばすと勢いよく一基の巨砲が姿を現す

『ヘヴィウエポンユニット17 リボルビングバスターキャノン』

その火砲がサタンの顔面に直撃しその巨大な体を揺らす、6つの轟音と共に

砲撃が額の宝玉を捉えそして……砕ける、

その瞬間、暁や花組達に襲い掛かっていた範囲攻撃が停止する……

「ぐ……良くも……貴様!!」

「おつとよそ見してる場合かよ!!」

「カンナさん征きますわよ!!!」

「おらああああああ!!!」

「はあああああ!!!」

インパクトナツクルと轟槍鬼十字が天使体を二人の息の合った攻撃が同時に捉える
するとビキと異音を放ち天使体に罅が入る……

「おのれ……調子に乗るな!!」

「おつとそうは問屋が何とやらや!!」

紅蘭の装備していた誘導弾 改良ホークがサタンの角を捉え爆破、

ものの見事にその立派な角が吹き飛ぶ、その瞬間サタンの膨大な妖力が
 みるみる低下して今では聖魔城での又丹より若干多い程度になっていた。

「殺す殺す殺す殺す殺すうううう!!!この俺に歯向かうものは

皆殺しだああああああ!!!

サタンは手当たり次第に妖力弾を発射し無差別爆撃を開始するしかし・・・

「無闇矢鱈にばら撒いたところぞ!!!」

マリアが装備した二丁のハンドガンで敵弾幕をすべて叩き落とし、機体を回転させながら

ハンドガンAとBをドッキングしツイインリンクマグナムのライフルモードにし天使
 体に

弾丸を罅に正確に打ち込むそれにより、罅はさらに深く入りそれに連れてサタンは、
 苦悶の表情を浮かべマリアを払いのける。

「危ない、マリア!!」

アイリスがその手に持つアルナイロッドを掲げると

マリアの周囲に霊力があつまり強固な障壁をつくり守る、

「アイリス助かったわ!」

「うん・・・それにしても、アンタなんかはやくドツカキエチャエエエエエー!!!」

サタンの頭上々に幾重もの魔法陣が展開されそこには冷食が収束し一塊の球体が現れ

更にアイリス正面には小型の魔法陣からいくつもの魔力で出来たナイフが浮かぶ、

「キ……貴様!!なんだそのバカげた力は!!」

「これがアイリスの『愛』よ!!」

「な……何故そこで愛!!?」

「お前なんかどっか行っちゃえええええ!!!!」

金色の数えるのも馬鹿らしいほどの収束砲撃と魔力刃がサタンに殺到!!!

一瞬この場が世紀末な光景が広がる……

「……悪魔たん」

「?なにかいったカンナ?」

「いえ……ナニモ」

そんなやり取りをしていると爆心地からかなり焦げたサタンが殺さんばかりに此方を

睨みつけていた……結構びんびんしている。

「さくら君!!行くぞ」

「ハイ!!大神さん!!!」

さくらが先行しサムライマスターソードで天使体を切り払いソードの刃が深々く食い込み

ソードが抜けなくなるその一瞬の隙をサタンは見逃さずその巨大な手でさくらを叩き潰そうと

するもサムライマスターソードの外装刃が展開し中のブレードが抜けサクラは叩き潰しを回避、

逆にその手を内部ブレードで切り捨てる、

「グオオオオオオオ!!!」

「終わりだサタン!!!」

日本刀ツインブレードを抜きさくらのマスターソードの外装刃を楔の要領に二連撃を叩き込み

ついに天使体を砕く……

「グオオオオオオ……」

「今だみんな!!」

帝都にうち等がおる限り!!

この世に悪の栄えたためし無し!!

乾坤一擲！力の限り！！！！

豪華絢爛、花吹雪！！

例えこの身が燃え尽きようとも！！

世界の明日は我らが守る！！！！

「うおおおおお！！！！これで最後だ！！！！」

狼虎滅却、天下無双！！！！

「今のお前ならリスクは少なくて済む！！

消えろそして帰れ！！！！チューニング調律！！！！」

花組の最後の連続攻撃と大神の天下無双……そしてダメ押しチューニングの暁の調律により

天使体は完全に消滅……その瞬間周りは真っ白の光に包まれ……

悪魔の様ないでたちのサタンが一瞬、ミカエルの様な天使の姿に浄化されたように見え
えそして

白い光の中に断末魔を残し消え去り光の柱が天を穿ち宇宙へと昇る……

????
side

「つく．．．．．あ．．．．．」

サタンは体におそう苦痛により目を覚ます．．．周囲は真っ白い空間

自分以外存在しない世界．．．そこに二つの金色の光が差す

その中の一つからはミカエルが．．．そしてもう一つの中から

セレリーナ・リリイ・トールラスが現れる。

「貴様は．．．．．ミカエルそれに何故ここに貴様がいるトールラス!!」

「ふーむ余程あの者たちにコテンパンに挿せたようだな．．．儂の存在にも気が付かんとは」

リリイはそう言い本来の姿に戻る．．．その容姿をみたサタンは絶句し、ミカエルもまた

片膝を付き深々と平服する．．．

「良い．．．ミカエル本来の私は貴様らの世界とか関わりになる存在じゃない

貴様らの父に多大なる借りを作ってしまった手前、基本的な立場はそなたらの方が上だ」

「何故．．．神である．．．異界の魂の管理者たる神がここに．．．どうして我の邪魔を！」

「なーに神の気まぐれだ．．．残念だったなサタン．．．いやルシファーよ」

「．．．その名は疾うに捨てた．．．我は悪魔王サタン!!」

「人間に負けた魔王か．．．っふ」

「それは貴様が肩入れしたからだろうだ．．．」

「確かに肩入れした．．．しかしここまでの結果を勝ち取ったのは彼らの愛や絆の力

愛や絆のない力などノミ同然よ．．．」

「サタン．．．もう．．．いいでしょう？誰もあなたを責めたりしない

あの頃のように．．．二人で静かに生きていきましよう．．．」

「この私を．．．許すというのかミカエル」

「許すも何も．．．私は最初っからあなたを恨んではいなかった

私はずっとあなたの事をみまもっていたでしよう？」

「黙れ！そんな戯言．．．信じぬ、俺は父に背きお前までも．．．」

「サタン．．．」

「だが．．．俺は断じて後悔なのせん．．．父に背いたことも、地獄に堕ちたことも！

お前を裏切った．．．ことも!!所詮神の国の愛など欺瞞!!直ぐに裏切られる．．．

ならばいつその事……!!」

「お前はどこぞの聖帝か!!」

「……なにか?」

「イエ……」

「ゴホン……殺戮を繰り返し、恨みを繰り返し、命の大地を破壊し……今日^{いま}だけを考え生きていけばよい……そこに愛など生まれぬ

愛など必要ない……愛など……認めぬ……天の栄光など何処にもない

ただ剣に生き……剣に死せればいい!!」

そこでサタンは短刀を取り出し自害しようとする……しかしその凶刃は

リリイによって止められる。

「サタン……何を恐れる?」

「な……!!」

「確かに貴様らの神の時は無限……また愛もまた無限……しかしお前はその

変わらぬ愛が怖いのだろうか?……変化のないただそのまま愛が変化のない物は

死と変わらん……貴様は愛が生きたまま死ぬのが怖いだろうか?」

「我が……愛が死ぬのが怖い?」

「なら儂のところに二人で来ぬか?二人で遍く無限の世界を歩き二人の愛を確かめぬか?」

「迷える魂を導き、聡し育んでみぬか？人として、また聖人として・・・」

「・・・貴様は！なんとも思わぬのかこの俺を!!この俺がしたことを!!」

「思うところは有る！儂はミカエル程寛容ではない・・・しかし儂個人としては貴様に憤りはあるも恨みはない・・・貴様に恨みがあるものは既に下界で貴様を屠つて終わっている

だが『セレリーナ・リリイ・トラス』と言う人間といして貴様には後で聞きたいことがある

位だ・・・」

「・・・」

「どうするミカエル・・・貴様の意見は？」

「私は・・・サタンが良いのであれば文句は有りません」

「そうか・・・サタンお前が決める偉大なる父のもとに還るか

地獄で貴様を思っている一人の天使を道ずれるか・・・わしの元で変化ある愛を見て回るか・・・」

「我は・・・」

サタンは己の心に答えを出し・・・三人は光の中に溶けていった

???
s i d e o u t

俺たちは瓦礫の中で目を覚ます・・・

ミカエルとサタン・・・そしてリリーの会話を

俯瞰してみているような夢をみて

大神はそこでミカエルと会話をしたようだったが内容は覚えておらず

ただ二度と『藤枝あやめ』に合うことはないだろうと・・・

各々俺も夢の中で・・・あやめを調律したことで殺したことが

心のしこりとして残っていた・・・彼女は『気にしないで、仕方がなかった事』

だというのが・・・恐らく一生俺の心に残るだろう・・・

潮風が優しく頬を撫でる・・・

外は抜けるような雲一つない青空・・・

あれだけ居た降魔は何処にも存在せず、聖魔城は廃墟の様に静かであった
そこでようやく俺たちは……

「終わったん……だな」

「ああ……勝ったんだ……」

「元気ねーな大神……疲れたか？」

「そりゃあ……ね」

「お前は恨まねーのか？」

「何が……」

「俺が……あやめさんを」

「……馬鹿だなお前は……恨むわけないだろ……」

仕方がなかった……事だったんだ」

「……そか」

「……さて皆をおこして帰ろう」

「だな……腹減ったし」

「さてどうやって帰るか……」

周りは瓦礫と大破した神武と震電、気絶からめを覚ました花組の面々そして

「お……い!!お前らああああ!!」

武蔵さんに横抱お姫様抱っしきされた米田のおっさんが降ってきた。

「米田司令!!」

「それに武蔵さん・・・無事だったんだ」

「肯定・・・私がいましたので米田司令は無事です以上」

「しかしなんであんな格好で？」

「あれが一番安定してましたので以上」

「米田のおやつさん・・・抱かれ心地はどうだった？」

「うるせーよ!!このオタンチンが!!!テメエには山ほど

説教があるの忘れてねーだろうなあ!!

「うげえ・・・」

「まあ・・・なんだそれよりも宴会だ!!約束どうりの大宴会だああ!!!」

こうして長きにわたる、黒之巢会との闘いに始まり降魔の侵攻、悪魔王サタンとの闘いは、

一人のとても優しくそしてとても強い女性の愛によって終結したのだった・・・

第46話　　〜後日談そして①〜

トントンカンカン……

「……痛てえ……」

暁は、先日のサタンとの最終決戦の折り、全治二か月の重傷をおい、此処フェイスが所有する

医療施設に即入院となった。

昨日までは花組の面々も入院していたが怪我も暁程ひどくなく無事に退院していき、この場には、フェイスのシノ、昭宏、五十土がベットの世話になっていた。

「……よう……暁、生きてるか〜」

「生きてるよシノはどう?」

「あ〜なんとかな……まさか運よく奈落に墮ち切る寸前で岩肌につかかってラッキーだったぜ……おい、昭宏オメーはどうよ?」

シノの横でその大きな体を起こし拳を握り開きして調子を確かめる。

「問題ねえ……おれは軽症だったからな、だけど当分絶対安静だよ」

因みにシノは肋骨3本の骨折、頭部の裂傷、左腕骨折打撲、打ち身数か所。

昭宏は右足の亀裂骨折、2度の火傷、裂傷、擦り傷、打ち身、打撲。

「ふにや〜あ！皆さんおはようございます」

「お！五十土も起きたか!!」

「おう・・・お前も無事の様だな五十土」

「はいなのです・・・私も軽傷でしたからソレに・・・」

五十土の横の机には一本の注射器が置かれていた。

「あ〜〜うん・・・そうだ皆」

「?なんだ、暁」

「どうした?」

「暁さん?」

三人が暁にめを向けると

【動かなくなつた左腕】を付きベツトの上で土下座をする。

「皆・・・本当に迷惑をかけた・・・ごめん、俺のせいで皆がこんな怪我して・・・」

スコ〜ン×3

「イッテエエエエエ!!!」

暁が皆に謝罪をした瞬間三人の方から缶ジュースが三本投げ付けられそれがクリンヒットする。

「謝んな気色わり〜」

「そうだ・・・家族を守る普通の事だ」

「ハイなのデス・・・それに」

両腕右足の骨折、肋骨4本、火傷、切り傷、裂傷、【左足の触覚の喪失】【左腕の重度の麻痺】

今回の戦闘で暁が負った怪我の内容である・・・その内の【左足の触覚の喪失】

【左腕の重度の麻痺】は、骨崙との接続を強制的に斬った後遺症とされている、

本当は最後の特典『調律』の反動でもある。

「左腕・・・ダメか？」

「・・・うん気合入れれば肩までは上がるけど握力はもうないかな」

「では・・・フェイスは・・・」

「いや？やめないよう、腕も足も阿頼耶識に接続すれば治るし右で銃も握れるから」

「そうか・・・まあまた鍛えれば動くようになるようになるだろう？」

「でた・・・昭宏の脳筋発言でもそうだな・・・早くここから出て白愛のねーちゃんの

店

行きてえええ!!」

「白愛の店なら無くなったわよ?」

シノの発言と同時にリリイがお見舞いをもって現れる。

「ハア??無くなった?なんで!!」

リリイのある意味死刑判決めいたセリフにシノが食って掛かる……がリリイの地獄突きが

容赦なくシノに襲い掛かり撃沈した。

「今回の帝都復興に合わせて、浅草十二階下にあつた私娼窟や違法な風俗店に、

当局の手が入って軒並み解体、まあ時間が経てばあの周辺に似た店は出来るかもだけ
ど、

これを期に友好的人型妖魔『白の白愛』を確保し私たちが監視管理することになった
わ」

「監視……管理だつて?」

「ええ……彼女は人間に友好ではあるけどれっきとした妖魔……魔の存在
そんな存在を野放しには出来ない……それは分かっているわよね」

「……」

「調査した結果あの店には異界の魔物も多数確認されている……誰かが監視した
最悪の場合の……処分、当然の事よね」

白愛は確かに人間に友好的だがその力は、人を簡単に殺めることができる、現に彼女は
何人もの人を

殺し、喰らっている……しかし……処分、

その言葉に重い何かが心にのしかかる。

「だから彼女には銀座の一等地で喫茶店をしてもらう事にしたから！」へドヤ

「「……」」

何言ってるんだ？このおっぱいロリは……

「おーいい顔……フフフフ驚いてる驚いてる最初は、確かに処分する声が大きかったけど、

賢人機関曰く『帝都は各所に開かれた水路によって繁栄と拡大した都市で幾ら監視しても必ず

魔が入ることは必定ならばそれはひっくるめて寛容に管理せざるを得ない』

それに今回の魔の大侵攻を食い止めることが出来たのも彼女のお陰もあるので、

私たち、フェイスと帝国華撃団花組司令『米田一基』中将の監視の元、人間社会に

溶け込む一環として非合法店をたたみ、喫茶店を経営して人間社会を学んでもらう事になったわ

後は、有事の際にはフェイスと非常勤戦力として協力してもらおう形になるわ」

「……つまり？」

「シノ……オメーの投げ所ねーから!!」へ爆笑

「チクシヨオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

「アホなのデス」

「……だな」

よかった……彼女が無事で……今回の戦いで俺たちは大事なモノを多く失った、鉄華団のメンバーや街の住人……それに、あやめ姉さんは……

「暁……今は休みなさい……それにあれば、仕方がなかった事よ」

「さて……私はまだ事後処理とか色々やることがあるからもう行くわね……

昭宏大人しく寝てなさいよ？今度来た時に勝手に筋トレしてたら、関節全部外すからね？」

「ウツス……」

素晴らしいリリイは病室を後にする。

???
s i d e

「陸軍の上層部は何と?」

「はいヒューイ・エメリツヒ・イエーガーなるアメリカ人は

我が帝国陸軍には存在せずまた、今回の魔の大侵攻にて彼が関与していた証拠は確認できないと以上」

「無論、聖魔城で発見押収した研究資料は提出してそれでもその解答だったと?」

「ハイ……その資料の真偽は定かではなく我々の偽装工作の疑いがあると以上」

「何か……隠しいやがりますね連中」

「我々の調査でも陸軍省にてヒューイ・エメリツヒ・イエーガーの存在を確認しています

しかし彼のそばには、陸軍大臣『京極 慶吾』の影があります以上」

「どんなやつなんですか?その……京極ってのは?」

オルガは机にあった資料と写真を見つつ、武蔵に『京極』に関して確認する

「かつては『戦神』と呼ばれた戦略家で、味方の犠牲は多いながらも

絶大な戦果を挙げており、前線を退いた後は、若くして驚異的な出世を果たしています」

「コイツがヒューイを匿っている?」

「はい……目的は軍備の強化と自身の私兵の強化でしょう京極の信奉者は多く

一部将校には過激な思想なモノもいます以上」

「今は今回の侵攻で国内外が大きく揺れているわ恐らくすぐにはことを起こさないと
思うわ

ですのでこの期間の間情報収集に専念……

暁に悪いけど別任務で国外で活動してもらおう事になるわ」

そういう机に彼のパスポートといくつかの外貨をと取り出す

「国外？何のために？それに今の暁は……」

「無論、怪我の治療が終わってからになります……そうですね季節で言うと桜が満開な
頃ですね」

「暁さんには、仏蘭西は巴里、亜米利加は紐育と向かってもらいます目的としては、日本
での

次なる侵攻の防衛の保険と……八神マキの探索です」

その言葉にオルガは目を開き驚く、

「暁の妹さんの行き先が解ったのか？」

しかしリリイは残念そうに首を横に降る、

「いいえ、手掛かりになるようなものは……しかし今回入手した研究資料に

「『神力を扱う女性』の研究サンプルについての項目と一部仏蘭西語だったわ」

「なので現地の工作人員とその統括にコンタクト取りその後、紐育ここでは、

帝劇のとある人と合同で花組の人員確保の為に動いてもらいます以上」

「人員補充？つまり暁の代わりですか？」

「そうなつてくれると良いんだけど、裏にコジマ技術が伝播している恐れがあつて

そのスペシャリストたる私たちがアドバイザーとなる可能性があり、花組と面識のある

彼を外すとは、思えないのよね」

ため息を付きながらリリイはとある少女達の資料を見せる、

「……星組？こいつらも華撃団なんですか……ん？既に解体つてこれは？」

「帝国華撃団 星組、花組の前身組織で花組がチームワーク主体で戦闘を行う組織に対して、

星組は、個々の能力を重視した組織、一人ひとりの能力は高いけどチームとしては余りにも

脆過ぎたため計画は頓挫、解体され抹消された、そのメンバーの内2人に接触し

その内1人をスカウト、暁にはもう一人のメンバーと会ってヒューイ・エメリツヒ・イ
エーガー

の情報の取得とスカウトしている二人の情報を独自確保、恐らくスカウト人からは、情報の共有

はないと思われませ以上」

「……なんでだ？ 帝劇とはそれなりに友好的だったとおもうんだが？ 米田中将の指示か？」

「いえ……スカウト人の名前は『藤枝かえで』先の侵攻で命を落とした

『藤枝あやめ』の双子の妹よ、彼女は以前から私たちに猜疑心があり特に暁を敵視している、

彼の生き方が彼女には受け入れがたいようね……彼女からしたら私たちは、

『秘密機関ブルーメンブラット』と同じに見えるようね」

「いえ……彼女は『ソレ』以上に見えてるようですよ」

「……どこもかしこも一枚岩じゃないですからね」

「……兎に角、暁には一年ほど海外に行ってもらおう事になるわね」

「寂しくなりますね……花組には？」

「米田司令には既に話してるけど花組メンバーにはまだね、

「自分先だし騒ぐ子が何人もいるからね」

リリイはキチロリと某お嬢様を思い浮かべ苦笑するのだった。

帝国劇場 side

帝劇では先の侵攻でミカサを起動した影響と戦闘で帝劇は一部崩壊し

その修繕作業に追われていた、

各私室の被害はそれほどでもなかったが、劇場内、地下格納庫、地下司令部の被害は甚大で

現在は、帝劇整備班と応援にフェイス整備班、比較的軽症だった紅蘭が率先として修復作業に

務めていた。

「いや〜〜これは中々ひどい状況ですな親方」

「ミカサ本体は切り離して聖魔城に投棄劇場部だけここに移設して

修復だこりゃあ数か月かかるな」

「靈子甲冑の修理は当分後回しやな〜」

「それは仕方がないっスよ優先順位としてはまずこっちですから」

「分担としては帝劇組が劇場や基地司令部を僕たちが格納庫やライフライン系統だね」

アヤメに撃たれた腹をさすりながら、オタコンが各人員に指示を出す、了子は

聖魔城で回収した骨嵬朱天の解析のため本部に帰還していた。

「後でカンナはん、大神はんがてっだいにきてくれはりますわ」

「そりゃあ助かりますわ何せひとでは多い方がいいですからね」

瓦礫の撤去、資材の搬入、組み立て、移動、要るもの、要らないものの仕分け

清掃、動作確認とやることは多いのだ、いつまた新たな敵が来るかわからない中

早く最低限の機能を取り戻さないとならないのだから、

「じゃあみんな事故無しご安全に作業を開始してください！」

『応!!』

かくして作業員全員が分担作業を開始した、その眼には希望の光を灯して

〜劇場上部区画〜

花組施設では各々先の戦闘で壊れたしまった、物品の処分や修理などして片付けに専念していた。

「ふうふう漸くひと段落ね」

さくらははぐちやぐちやになっていた私室の片付けがひと段落し一息ついているところだった、

そこでふと床に一枚の写真が落ちていることに気が付き拾い上げる、そこには

最終決戦後、みんなでとった記念写真であった、この約一年色んなことがあった。

自分が初めて帝劇に来てそして大神さんと出会い、少ししてから行方不明になっていた。

一番仲が良かった幼馴染の八神暁君との再会・・・それからまるで激流の如き色々な事があった。

マリアさんの過去の事、紅蘭の葛藤、アイリスの成長、すみれさんとカンナさんの大喧嘩、

黒之巢会との闘い、サタン一派との闘い・・・そして大神さんとの出会い、本当に色々あった。

「これからも・・・そしてずっとみんなと一緒に居たいな・・・」

そう思いながらさくらは晴天に見舞われ吸い込まれそうな青空を眺めるのだった、もう少して春の

足音が聞こえてくる・・・出会いの春、そして別れの春が・・・

第最終話 〱後日談そして②〱

あれから月日は流れ4月、さくらも満開を迎え街には以前以上の活気が戻ってきていた。

帝劇は再興後、帝都復興特別公演を実施、連日大盛況、満員御礼で

毎日、劇場には長蛇の列が、売店や事務その人の多さ忙しさとで椿たちがてんてこ舞いらしい、

あれ以降めだった事件もなく華撃団は開店休業状態だ

天下泰平、事もなし……

しかしフェイスの皆は何やら忙しそうだ一月前に出向していたフェイスの皆さんは本部に帰還

い。そのご国内外を飛び回っているようだ、其のことが唯一の米田支配人の悩みの種らしい。

そうそう……先の大侵攻での戦友、八神暁が二日前に無事退院？したとのことで、

花組総出でお祝いをした、みんな少ない時間でよくやってくれたと思う。ただどアイリスとすみれ君はどことなく複雑そうな表情が印象的だった。恐らく彼の左腕と左足の後遺症の事だ……。結局後遺症は完治せず、左腕の麻痺を幾分改善されたが、左足の感覚の消失はどうにもならなかったようだ、彼の苦笑顔が頭から離れない自分がここに居る……。彼が言う『大丈夫』『平気』がどうもやせ我慢に聞こえてしまうのが原因かもしれない俺は春の空をぼーと眺めながらそんなことを考えていた……。

く帝劇夜く

本日の公演が終了し、サロンには花組メンバーが集まり各々お茶をしたり雑談をしている時に、

米田支配人がやってきた。

「……………ま、そうゆう訳だからお前さんらにもちよつと休暇でもと思つてな」
「……………まあ、気を使っていただかなくてもよろしいですね」

「素直に喜べないのかよ？顔とせりふが一致してねーじゃねーか」

「ふふふ……いいじゃないの、特別講演もひと段落付いたのだから皆も疲れたでしょう？」

「ま……俺からのプレゼントだと思って受け取ってくれよ」

「ハイ！ありがたくいただきます」

「ホナ、うちは作りたかった発明品を完成させてしまおっかな！」

「アイリス！アカツキ一緒にパパとママに会いに行くくくく!!」

「な！アイリス!! 晁さんとは私が一緒に休暇を楽しみますのよ!!」

「ハハハハハ、よしよし……それじゃあもう一つ俺からプレゼントがあるんだ

大神、ちよつと前に出ろ」

「はい？……なんですか？」

「帝国海軍 大神一郎！貴殿に南米演習の教官任務を言い渡す！」

「いいっ！お、おれが教官ですか!？」

「ああ！おれが推薦しておいた、おまえはそれだけの事をやってのけたんだ

花組を一つにまとめ上げ、帝都の平和を守った、なかなかできるもんじゃねーよ」

「いや……その……」

滅多に褒めない支配人の言葉にすこし照れながら返事をする、そこでさくら達が大神を

祝福する言葉をかけてくれる。

「大神さん……おめでとうございます!! 大神さんの働きが認めてもらえたんですね
わたし凄くうれしいです!!」

「さくらくん……」

「ほれ、大神お前から何か言う事あるだろう?」

「あ……ハイ、おれがここまで頑張れたのはみんなのお陰だ、皆本当にありがとう」

「もう……少尉ったら面と向かって言われると恥ずかしいではありませんか……」

「ま、いいじゃねーかこう真つすぐなトコが隊長の良いとこなんだからさ」

「せやせや、こうゆうお人だからウチらは皆大神はんが好きなんやもんな」

「おにーちゃん達が一生懸命だったからアイリスたちも頑張れたんだもんね」

「ええ……そうね私たちは隊長の思いに応えたかっただけですものね」

「大神さんのお力ですよ、私たちがここまで強くなれたのは……」

だから海軍に戻っても頑張ってくださいね、私たちがずっと応援していますから」

「それじゃあ俺の話はここまでだ、休みは明日からだゆっくり楽しんできな」

「はい!!、解りました」

「それでは皆きようはもう解散よ、今日はもう遅いわもう部屋に戻りましょう」

「はーいお休みなさい」

アイリスはここでふと考えた・・・復興後忙しく古巣に戻った暁とは会えていない、タマの休憩に近くに来た白愛の喫茶店に顔を出すも居らず、白愛も見ておらずどうやら

別の任務で動き回っているとのことだ・・・腕の後遺症も気にせずただ我武者羅に

アイリスはこのまま会えないんじゃないかと不安になる、そこでふとすみれの横顔を見た時、

先ほどまでの明るさはなりを潜めきつと私と同じことを考えているんだろうと表情で解った、

て 明日フェイスの学校に行ってみようそうすればキット会えるはずだと・・・そう信じて

く 次の日 く

暁は国外に出る前に一日程の休暇を帝都ぶらぶら散策していた・・・今日の夜には日本を発つ

仏蘭西、そして亜米利加と出発する、昨日までの任務で仙台付近にいたので久しぶりに

実家のあつた所に足を向けた．．．そこはもう何もなく本家に続く通り道はフェンスで仕切ら

立ち入り禁止に、許可書をみせ本家跡地に向かい見たものは昔と変わらない．．．廃墟だった

自分の部屋も妹の部屋も母と父の部屋も真つ黒に焦げナニモのこつてはいなかった、
「．．．．．」

暁は無言のままその場を去り、真宮寺家を訪問する。

一馬さんの奥様、若菜さんは変わらず奇麗で俺をみた瞬間涙を流し抱きしめてくれたお婆様もお元気でその眼光は衰えてはいなかった、ゴン爺も元気でここだけは昔と変わらなかつた、

お二人にいままでの経緯と帝都での事を報告し土産物を渡し真宮寺家を後にする、その時、若菜さんが

「いつでも帰っていらしゃい．．．ここは貴方の家でもあるのですから」つと．．．

俺は一言．．．「ありがとうございます」と告げその場を離れ、帝都に戻つて来たのであつた、

「さて・・・なにすつか・・・」

近くには白愛の喫茶店『ホワイトテイル』最近花組メンバーもよく利用していると口コミで大繁盛、

若い婦女子に人気でしかもそのマスターが美人と来たもんで男性の客も多い、最もその大半の男性客は、浅草十二階下時代の馴染み客だったりする。

とりあえず暁は、店で珈琲とクッキーを摘みつつ午後の予定を決めることにする、

「ちわくくとりあえずブラックとベリークッキー」

「あらいらっしやい暁、久しぶりね」

「おう・・・昨日まで仙台にいたから明日からは国外」

「ゑ・・・国外？いつ戻るの!？」

「予定としては来年の春かな・・・約一年ほど巴里と紐育かな」

「ちよつとあのダメ神殺してくる!!!」

「落ち着け白愛・・・」

ドサ!!

そこで何か落とす音がして振り向くと今にも泣きそうなアイリスと信じられないと
いったすみれの

表情があつた……アイリスから霊力が漏れてきてるヤバイ!!!

「!!!d!m+A／／br7|i4d!!!」

ウエイトレス姿のガングロ少女（シヨゴス）が涙目になりながらアイリスを落ち着かせようとする

が

無駄な努力だったようだ。

店が大爆発したのはこの10秒後だった。

くく帝劇内サロンくく

「二年も海外ですって!!!どうゆう事ですの曉さん!!」

「どうもこうも……仕事だよ、ウチは組織上こういった仕事は多いんだよ今回の大侵攻も

収束したけど不明なことが多いからその解決とか色々ね」

「海外つてどこに行くの?」

「明日から此方で用意した専用機で仏蘭西は巴里そこで半月ほど仕事して今度は亜米利加は紐育」

紐育では帝撃のスタッフと合同つて感じかな」

「なら私たちも!」「ダメつうか無理」な!!!」

「すみれパスポートあんの?それに色々教えちゃダメなことだつてあるし」

「ねえ・・・アカツキ、アイリスも明日、仏蘭西に還るんだけどそれまで一緒に居ちゃダメ?」

「アイリスも仏蘭西に?・・・ああ実家がシャンパーユ地方だつて・・・うくん」

「アイリスばかり狡いですわ!!」

「ふふくくん知らなくい」

「やつばダメだね・・・ごめんアイリス」

「えええええ!!なんで!!」

「向こうに付いたら即仕事だしアイリスに構つてあげれないし特別機も人には見せれないからね」

流石にこの世界に『アレ』を見せるのは早い・・・なにせ速度は翔鯨丸以上で大きさ

は、

ミカサ以下な『航空機』なのだから・・・

「何やら機密が関わっていますのね・・・解りました、アイリスこれ以上は無料ですわよ」

「すみれ・・・でも~~~~」

「たった一年ですわ・・・暁さん約束してくださいまし、必ず帰ってくるってここに、この帝都に・・・私たちの元に・・・必ず」

「うん・・・約束するよ必ず帰ってくる」

「アイリス・・・約束破ったら地の果てまで追いかけるからね!!!」

「そうですね・・・わたくしも絶対に逃しませんから!!」

そうすみれが宣言したのと同時にすみれの柔らかい唇が俺の口を塞ぐ、薄っすらと

唾液の橋がかかり次にアイリスからの熱い口付けを貰う・・・

「お・・・お前らこんなところで、//////」

「行つてらっしゃいのチューは基本だよ♪アカツキ!」

「ええ!!そうですとも夫が仕事に出る時の作法ですわ!」

「ハハハ・・・」

この二人には一生勝てないと、この時に凄く痛感した・・・。

くく帝劇ロビー正面出入口くく

暁がアイリスとすみれに別れの挨拶を済ませ、外に出ようとした瞬間あり得ない声と姿を見た

「……ほらアナタ見てください……この子がこんなに楽しそうに」

あの笑顔、あの声……間違える筈はない……でもなんで……

あの人は……俺が殺した……

「ほう……コイツは滅多に笑わないのに……余程機嫌がいいようだな」

この銀髪の軍服の男……も間違える筈がない……俺の……家族の仇の!!

「あや……サター！」

これ以上声が出ない……もしかしたら他人の空似……

いやでも……頭が混乱する……

「もしかしたら気難しいお前に似たのかもしれないぞ」

その男は優しく女性にその声を掛け、女性は少し顔を顰めつつも幸せそうに「まあ・・・アナタほどではありませんよフフフフ」

そこで聞きなれた声・・・大神のこえが聞こえた、

「待つてくださいあやめさん!!俺です大神です!!」

おれは振り向くと後ろに大神もまたあの夫婦がサタンとあやめにみえたのだ、

「・・・・・・・・・・」

「?どうした?」

「いえ・・・・誰かに呼ばれた気がしただけです」

女性は・・・大神の声を気のせいとして目の前の夫に優しく微笑む、

おれはこれ以上なにも言えなかった・・・あやめさんは確かに俺が・・・

でも目の前の女性は間違いない・・・あやめさんだ・・・と

おれは・・・心の何処かで救われたように感じた、きつとこれは自己満足でしかないが

それでも・・・

夫婦と母にだかれた小さな赤子は幸せそうに会話をしその場から少しづつ

離れていき次第に人ごみに溶けて消えてしまう・・・

大神と俺はそれを呆然と見ている事しか出来ずに・・・でもきつと

「何もしないのがベストだったんだよ……今のは」

俺はただ、あやめ似の母親とサタン似の父親、それに小さな命見守ることに……

どうかお幸せに……

くくフェイス所有秘密航空基地くく

『暁、如何だい乗り心地は？』

「最悪だ……」

『震電用長距離航空パッケージ「ブルーインパルス」コイツで

仏蘭西の此方の航空基地に移動だ』

「平均飛行時間、13時間37分、トイレ休憩なし、機内食無し……」

「ふざけてんのかおい!!」

『まあ・・・基本は武蔵の自動制御航行だから睡眠も食事も可能だよただ・・・』

「トイレ無しと来たもんだ!!」

『尿に関してはカテーテルを通しての排泄でろ過して機体の非常用飲料水につて』

「お前マジふざけんよ!!」

『射出一分前~~~~♪』

「あ! コラ了子テメエエエ楽しんでるだろう!!」

ゴウゴウと音を立てハッチが開きカタパルトが展開される、

震電の前後に巨大な飛行ユニットが取り付けられはたから見ると、大型の

ジェット戦闘機に見える。

「つたつく・・・」

コクピットの空きスペースに機体に持ち込んだ二枚の写真を張り付ける、

一枚は在りし日に帝劇の皆と一緒に取った集合写真、そして

若干、煤と焦げ汚れた俺が『八神暁』だった頃の家族の集合写真、親父が帝都に行く

前日にとった写真を・・・

『カウント5. 4. 3. 2. 1!』

『アカツキ・オーガス! 『震電』行きます!!!』

漆黒の空に飛び立つ一つの鉄の花が満点の星空に堕ちる・
・
・
・

完 サクラ大戦く鉄火絢爛編く

幕間

幕間① 紐育の怒れる刺客EX

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

現在暁は、目的地である仏蘭西は巴里に向けて誰もいない大海原の上空を高速で飛行している。

コックピットには絶えず現在の位置と航空情報が流れている。

周りには誰も居らず、定時報告まで無線も入らない・・・現在は自動航行の為特にすることも無い

夜の海の闇を切り裂きながら空を飛ぶ、そこでふと、とある思い出を思い出す・・・あの時も

こんな昏い夜であったと・・・。

くく六月くく

花組六月公演『シンデレラ』千秋楽の翌日の夕刻、恒例となった打ち上げパーティーがもてなされていた。

さんかメンバーは、花組の面々は勿論、大神や支配人の米田のおっさん、副支配人のあやめ姉さん、

帝劇三人娘などの帝劇スタッフや花小路伯爵などの各界の著名人などの

招待客が加わり、ちよつとした社交の場といった趣もあつた。

自分はまだ目立たない位置からそれを眺めつつラムネとかんたんな軽食をつまんでいたそこで、

司会進行役の大木役をしていた、霧島カンナが舞台できていた大木の衣装？姿で登場した。

(本人はその衣装というやハリボテを気に入っているようだ)

「えくく、そうゆう訳で『ガチャガチャピくく』」

カンナがてにしている妙な形状のマイクがカンナの声を雑音として変換してしまう、そこで紅蘭が

『カンナに普通の声で喋りいや』と注意する、どうやらあの妙なマイクは紅蘭の発明品の様だ、

ばくはつしないか若干の不安があるが、さらにそこからすみれがカンナを煽り安定の喧嘩が勃発

もはやマイクからは、『ガチャガチャピピ』と雑音しか聞こえない……。

「もう！せつかくのパーティーなんだから喧嘩はやめなよ!!」

「そうだよ二人とも、お招きした皆様もいるんだから」

アイリスと大神の仲裁によつて今回のバトルはドローで終了し、

検めてカンナが進行を開始する。

「え、そうゆう訳でアタイ達の芝居も昨日で無事に千秋楽を迎えて今日はそのお祝いだ

皆じゃんじゃん喰つて、派手に盛り上がるうぜイ!!」

「おお~~~~~!!!」

最初の『ガチャガチャピピ』ですつかりリラックスした参加客たちもノリノリで答えている。

「それじゃあ、乾杯の音頭は、主役を務めた、マリア・タチバナと新人スタア、真宮寺さくらの

お二人にやってもらいましょう！はりきってどうぞ!!」

グラスを手にしたマリアがシャンパングラスを手に呼びかける。

「そ、それではみ、皆様グラスをお持ちください」

続いてさくらが若干緊張しているのか、うわずった声で

「よろしいですね、それでは……」

そして二人は声をそろえて

『乾杯!!!』

かくして宴は始まった。

それからは各々会話に花を咲かせたり、料理に舌鼓をうち、酒によつて騒いでいる人もいる。

(酔っ払いの中にうちの上司がいるのは無視で)

それでもやはり主役は花組であり、気が付けば自然と彼女らの周りには、

人が集まり、華やいだ雰囲気になる、それから打ち上げ恒例のかくし芸大会となる、

参加自体は自由参加で腕に覚えのある人が参加を表明している、

トップバッターは、アイリスがジャンポールを使った腹話術、続いてすみれの華麗な

日舞を披露し、

三番目は、紅蘭の発明を使った中国奇術、そこから悪酔いした大神&米田コンビが乱

入

軍歌をかなり立てる瞬間俺とあやめさんが華麗に物理的に黙らせて（なぜか大いに盛り上がり）、

更にそこにさくらの見事な居合抜きを披露をみせ拍手喝采を浴びた。

何時もならそこでお開きの雰囲気になるのだが今夜は違った……。

「わ……私もやってみようかしら／＼／＼／＼／」

一瞬、会場の喧騒が止む

之までの打ち上げではマリアはかくし芸大会を静かに見守るのが常だったため、彼女が参加するという

初の事に一同が驚くのは無理はなかった。

「マリアさん……いまなんておっしゃいましたの？」

「え？」

すみれの問いに困り顔のマリア……かなり珍しい光景で更に一同が驚く中

「いいんじゃないかしら?」

あやめが微笑ながらマリアに、そして花組にいい自分も・・・

「俺もマリアのかくし芸見てみたいかな・・・どんなことするのか想像できないし」

多分おれもその時は微笑ながらマリヤや花組に声を掛ける。

それにマリアは微笑ながらうなずいた。

そこからマリアはかくし芸の準備を始める、やる芸は『*Ваше здоровье*』
日本語で『乾杯』の意味です」

マリアは射撃場から持ってきた二枚の的紙を、一枚は壁を背に立つ植木の幹に、もう一枚を

植木から真横に4 m程離れた場所に立たせた大木カナナの頭の上あたりに張り付ける、

マリアは銃を手に、中庭の中央に位置する。

二カ所の標的とは等距離、マリアを頂点として植木と大木カナナの三点で、

縦長の二等辺三角形が作られている。

「まず一発の銃弾を空に向けて発射し、続いて二発目を落下してくる一発目の弾丸を空中で

激突させ同時に二つの目標に当てる．．．それが私のおみせする芸です．．．」

俺はかなり驚く．．．確かに理論的には可能だが実際にやってみるといとうと

俺でもできるかどうかわからない絶技だ．．．流石銃の名手のマリアならではの『かくし芸』だ

一同からは怯えと驚きの声が聞こえるその中には花組からも声上がる中でも的にされている、

大木カンナの冷や汗は尋常じゃない、

「ま、まりあ〜〜」

「カンナ、心配しないで．．．」

「でもよお〜〜」

「大丈夫．．．．信じて」

愛エンフィールド・改銃を構え微笑むマリアを見てカンナも度胸を決める、

「わかったぜえい!!!」

そして……静寂が会場を包む。

体感として1分……2分……3分と続き、そこれ「いきます！」とマリアのこえが響いた瞬間

ダアアアアン!!!

一発目の弾丸が空に向けて放たれる……すかさず

ダアアアアン!!!

二発目が放たれる……。

しかし二発目の弾丸だけが壁に命中する……

一発目の弾丸は静かに地面に落下していた……

そこでさくら達が失敗を悟り言葉尾失う……しかしそこで

マリアは苦笑しながら

「冗談よ？本気にしたかしら？」

そこで海上の『ほぼ』全員が今までのことがマリアの冗談だとわかり

「なんでえ〜冗談かよ〜」

かんなの力のない声でドつと湧いて、元の喧騒が戻っていた。

だが、近くにいたさくら、俺、リリイは見逃さなかった、笑っているマリアの手が小さく震えている事を……

〜深夜、帝劇中庭〜

「なぜ……なぜわたしは失敗した……」

マリアは一人壁に空いた生々しい弾痕を見ながら、

あの時……かくし芸で失敗した瞬間から心からあふれる言葉を口にする

昔の自分なら考えられない失敗だった……昔の自分なら

マリアにとって過去は地獄だった。

マリアが初めて体験した戦場は彼女が14歳の時に勃発した『ロシア革命』だった。革命軍兵士として戦闘に参加したマリアは、類まれた銃の才能と神出鬼没の活動ぶりから

『クワツサリー』火喰い鳥の異名が付くほどだった、その存在は半ば伝説化していた。しかしその伝説もモスクワ陥落戦で終焉を迎える、

この戦いにてマリアの一瞬の判断ミスにより兄のように慕っていた上官ユーリーを死なせてしまったのだ。

この時からマリアは、生きる意味を失い、心は虚無に捕らわただひたすら破滅を望むようになった。

其処から流浪の果てに紐育に流れ着き、そこで

愛エンフィールド改銃を手にギャングに雇われる用心棒稼業を始めたのも、

運命の神が自分に破滅という終焉を齎してくれるかもしれないという乾いた期待があった。

しかし運命の女神は破滅ではなくマリアに希望を与えたのだった、

結成前夜の花組の人員確保に旅立っていた藤枝あやめとの出会いがマリアの運命を変えた、

それ以降は、大神が加入するまでの間隊長を務め、大神加入後は副隊長として大神をサポート

していたが当時は、まだ過去を引きづっており『シンデレラ』公演期間中に起きた黒之巢会の

深川襲撃事件。この時黒之巢会はマリアへの個人攻撃と精神攻撃を仕掛け、一時は危ぶまれた

花組とマリアの絆は、いつそつ強くなり同時にマリア自身も過去の呪縛から立ち直り人間らしい感情を取り戻し今に至る。

しかし

月明かりの元で自問自答する

人間らしい感情を取り戻したせいで自分は弱くなったのでは？

兵士として墮落しそのせいで失敗したのは・・・

人の心を取り戻すという事は、己の弱さを認めることになる。と彼女はそう考えたのだ

「人の心を取り戻すなど・・・私には・・・」

そこでマリアは背後から近づいてくる気配に気が付き振り向く

「だれ!？」

其処にはカンテラを手にしたさくらと不機嫌そうな暁が立っていた。

急に怒鳴られたものだからさくらは「す、すみません」と謝り暁は更に眉間に皺を寄せる、

「どうしたの?・・・こんな遅くに」

「見回り・・・大神のアホ、酔っぱらってダウンしてるから代わりに見回り、さくらは途中でばったりあったからそのまま一緒に見回りしてるだけ」

「そうゆうマリアさんはここで一体?」

「私は少し・・・酔い覚ましに夜風に当たりに来たのよ・・・おやすみなさい」

「マリアはそういういいその場を後にしようとしたとき、「あ、あのマリアさん」とさくらに呼び止められる。

さくらは言い難くそうに

「失敗は誰にでもあります、ですから……そのあまり気にしないでください」

さくらの精一杯の励ましの言葉をマリアは……。「甘いわ」と一蹴する。

「戦場では失敗は許されないわ……そうでしょ？ 暁」

「……ん」

暁はマリアを見つめながら小さく頷く……しかし彼自身は理解できても『納得は』仕切れていなかった

「すみません……私言い過ぎました……」

マリアは、さくらのこんな素直さを、かつての自分に重ねてみる自分にも

こんな真つすぐな自分がいた気がした。

最後にマリアは二人に『あなた達は運命というものをどう考えて？』と質問する、

さくらはその問いに一瞬の間を置いてきつぱりと

「運命は自分で切り開くものだと思います」と

あかつきは少し思索し『運命なんてものは所詮は後付けだよ自分の行動の結果の後付

けだ」と

暁もまた『運命』翻弄された人間の一人であるが自分は「暁は」そう考える自分の行動の果ての結果

が運命という後付けに過ぎないと

マリアは二人の言葉を噛みしめだまって去るさくらと暁はその背中を黙って見送る。

くく数日後くく

現在は七月公演の演目『愛はダイヤモンド』・尾崎紅葉未完の長編『金色夜叉』の戯曲化作品である

その準備に大道具所属の暁はせつせと作業をしてを動かす、しかしその心の隅にはマリアの事がこびり付いている。

あれ以降、表面上は明るくしているが何処か影を感じる、付き合いの長いカンナも薄々は

感ずいているも、いまはそつとしておいているようだ。

その日の休憩時にアイリスが台本を片手にトコトコと歩いてくる、

「アカツキお仕事お疲れ様〜」

「ああ．．．アイリスも稽古お疲れさま、どう新しい劇は？」

「う〜んいまは台本読みがメインなんだけど．．．ねえ暁に効きたいことがあるんだけど？」

「?おれで答えれることなら．．．なに？」

「うんとね、女の人の嫉妬より、

男の人の嫉妬のほうが深いってホント？」

「ふー」

え?は?行き成りなに??．．．どう事?

俺が混乱しているとアイリスの説明によるとどうやら今度の舞台のカンナの役が

愛が深いせいで想い人を深く憎んでしまった人物をやるようでそこですみれが件の
発言を

アイリスは身近に居た男性・・・大神に質問したが答えを得れず
そのお鉢がこつちにきたという訳だ、

野郎の嫉妬か・・・確かにある意味深いとは思う・・・

モテない男のしつとのパワーはほかには出来ない

ある意味、下手なテロリストよりたちが悪かったりする・・・でも

おれの周りの女性陣の嫉妬心の方が万倍怖い・・・特に目の前のキチロリとか

「あくそうゆう場合もあるか、かな？嫉妬にも色々有るし一概にそうだっては言えない
かな？」

「そつかゝゝ所できつきナニカヨウケイナコトカンガエナカッタ？」

「いえ・・・全然」

「そつかゝゝじやあ私はもう行くねゝゝ」

そういつて満面の笑顔でアイリスはこの場を去る、背後からは親方たちのなんか同情
となんか可哀想なモノ

をみるようね視線が突き刺さる・・・。

??????

マリアは一人暗闇を歩いている・・・

何処からともなくねつとりと不快な笑い声が響く

その声はどこか聞き覚えのある・・・声だった

思い出したくない・・・声だ

「誰!!」

マリアは暗闇にむかって叫ぶ・・・次の瞬間

「愛してるよ・・・マリア!!」

マリアは、錯乱し絶叫する・・・

あの爬虫類めいた冷たい瞳、シルバーグレイの髪と髭、全身から放たれる気だるい霧

困気

した男……マリアが一生会いたくない男がそこにいた……

「どうしてあの男の夢なんか……」

夢に出てきた男の名は『バレンチーノフ・ウラジミール・サンドロビッチ』

彼はロシア時代の上官でロシア革命後、紐育でロシアンマフィアに加わり、そこでマリアと再会する、バレンチーノフはマリアを愛していたがその愛は、

無償の愛とは程遠く、ひどく薄汚れたものだ。つた。

彼は自身の地位向上の為、所属する組織と敵対関係にあつた組織に身を置くマリアを利用してしようとしたのだ、無論マリアに対して、どす黒い欲望を満たそうとする想いも見え隠れしていた。

しかも当時、接触していたあやめからの情報で上官のユーリー氏の死の真相が明らかに、彼の死の元凶はバレンチーノフの裏切りによるものだったのだ、

真実を知ったマリアはユーリー氏を殺害した敵兵よりも、バレンチーノフを

もつとも憎む相手だと思つた、マリアはバレンチーノフに銃を向け引き金を引いたその時の銃声と『翠の光』は忘れることはできない……

〳〳7月某日東京港〳〳

暁は現在、リリーの妖精で東京港に来ている地元住人から『化け物』見たという通報が相次ぎ

は、黒之巢会の進行と思われたが妖力反応が無く魔がらみではないと結論付けられ現在は、

鉄華団の面々と入国管理部の調査員とで不審物がないかのチェックをしていた。

現在の時刻は15時半を過ぎたころ、丁度七月公演『愛はダイヤ』の中休憩頃である舞台は好調の滑り出しで連日満員御礼となっている、暁も舞台が気になるも今は

目先の仕事を片付けねば……

「アカツキさん!!すんませんこっち来てください!!」

幼年組のリーダー格の「雷銅」が慌てながら暁に声を掛けてきた、急いで雷銅の元へ行くと既に他のメンバーや入管の職員が集まっていた。

「何かあった?」

「ああ……つちとやばいもんが出たぞ」

そこには大型のコンテナがありなかに大量の武器弾薬と『戦闘用人型蒸気用』の弾薬が保管されていた。

「……こいつの荷受け元は？」

「亜米利加、紐育です……依頼う主は……ここです！」

入管職員から受け取った情報を本部で照会してもらい数分で結果が出た。相手は紐育のロシアンマフィアの

ペーパーカンパニーであった。

「暁、人型蒸気の詳しい情報解ったぜ!!」

「ホント?」

「ああ……特殊な弾頭を使う機種だったからすぐわかったぜ」

『スター・改』欧州大戦で米国が量産していた戦闘車両だこんなもん街中で暴れたら……」

「直ぐに軍に情報回して、後警察組織にも!!!」

「暁さん!本部から緊急連絡です!?!」

雷銅の相棒の高樹から通信機を受け取る通信を繋ぐあいてはオタクコンからだった。

「オタクン何があつた？」

「大変だ暁……帝劇に爆発物が仕掛けられた!!」

オタクンからあり得ない内容をきき盛大に声を上げる、

「ハア?!」

「どうやら午前中に来た業者に紛れて爆弾を設置したみたいなんだ、設置場所は帝劇ホールの出入り口

の四か所、一度扉が閉められた後に扉を開ると……起爆する仕掛けの様だそれに……
丁寧に

リモコンでも起爆できるようだ……」

「起爆した際の被害範囲は？」

「帝劇の地下施設は被害は出ないけど客席の半分は吹っ飛ぶ威力だ、解体作業は

紅蘭と僕とで作業している……」

「リモコンのジャミングは出来そうか？」

「そこは了子ちゃんが作業しているけど難航しているみたい……え?はい代わります」

オタクンと情報をやり取りしている間にも急いで帝劇へとバイクを進めるとオタクンから

米田に代わる。

「晝俺だ!!今どこにいる」

「おやつさん?今は東京港から帝都に戻る所だよ?」

「ならちようどいい……マリアの奴先走りやがって犯人の元に一人で行きやがった!!」

「はあ??アイツ前回の事まるで反省してないのかよ!!」

「……それは本当か?……つたくすまねえさくらもマリアを

追っかけちまったみたいだ……二人を頼む!!」

「了解……所で……劇の方は?すでに終了時間過ぎてるよね?客は??」

「それなら大丈夫だ!!!」

そこで米田は通話機をホールの方に抜けるとカンナ&すみれの即興コントが聞こえてきている。

之なら数時間は粘れそうだ……

そう考えマリアとさくらがいる築地の埋め立て地に向かう

〳〳築地埋め立て地〳〳

そこにはマリアと幽鬼のような雰囲気の男が対峙していた

「久しぶりだね．．．．クワツサリー」

「バレンチーノフ．．．」

マリアは憎しみを込め、バレンチーノフは微笑を浮かべて互いの視線をぶつける、先にせいじやくを破つたのはマリアだった

「要求道理に來たぞ．．．さあ起爆装置を渡せ！」

「そう急くなよ．．．感動の再会だろう、積もる話は沢山あるだろう」

「私は話しているだけでも不愉快だ！」

マリアは吐き捨てるように言った。

雪の舞う紐育の夜この男の裏切りをしたあの夜、彼と対面し真偽を問いただした、バレンチーノフの答えは．．．マリアに向けた銃口がすべてを物語っていた、だが先に引き金を引いたのは．．．マリアだった

彼の弾丸はかれの右肩を打ち抜き、男の悲痛な声が響く、再度マリアはかれに銃口を向け：：トドメを刺そうとし．．．

だが刺せなかった、彼の事は殺したいほど憎いがここで彼を殺したら薄汚いコイツと変わらない同類に墮ちると考えその場を去ろうとし

かれが隠し武器で攻撃しようとした瞬間彼の腕を『翠の光』が抉り意識を奪ったの

だった

「あの時確実にトドメを刺しておけば……」

マリアは断腸の思いで呟く

「まったくだな」

どこからか蒸気重機のタービン音と大地を微弱な振動を発する

「(蒸気重機にしては……重い?)。。。まさか!」

バレンチーノフの背後に巨大な不気味な影が現れるその正体は、

戦闘用の人型蒸気米国製量産機『スター・改』であった

そう……。東京港で発見されたコンテナの中身である

「君に潰された腕の代わりはこのスター・改が努めよう」

右手の黒革手袋を外すと蒸気機関で動く義手が露わになり、内蔵されている

蒸気演算機のスイッチを入れるとスター・改のモノアイに光が灯る。

「マリア、見るがいい」

彼がスター・改の頭部を指さすと折り畳み式の機器とアンテナが付いていた

「まさか……。起爆装置か!」

「その通りだ!」

そこで更にバレンチーノフが操作すると起爆装置が起動する。

「後15分で帝劇とやらは木っ端みじんだそれまでにコイツを破壊することだ」

「卑怯者……堂々と戦え!!」

「ではそうしよう!!」

スター・改の左肩に装備されていた無線式ロケットランチャーが

マリアが身を隠していたコンテに命中しマリアはとつさに退避するも

その熱波と衝撃に吹き飛ばされる、バレンチーノフはその隙を見逃さず銃座がマリアを狙い、

自動小銃のマズルフラッシュが光る、マリアは一瞬死を覚悟するも……何者かによつてすべての銃弾を切り払われマリアは無傷で済んだ。

闇に桜色の色彩が彩る、霊剣荒鷹を携えた……さくらだった!

スター・改から再度銃弾が吐き出されるがそれをすべて切り払いマリアを守る刀を振るたびに空中に火花が散る、

「やぐら!!」

マリアは何故ここにさくらがいるのか混乱するもさくらは深く頷き、

「真宮寺さくら……助太刀いたします!」

見知らぬ少女の登場にバレンチーノフは声を張り上げる

「おのれ!!」

其処からはさくらとマリアの攻防にバレンチーノフは翻弄されるものの、その起爆装置を守り切っている、

残り時間も刻々と過ぎてく

「さくら時間がない一気に決めるわよ!!!」

「ハイー!」

二人は身を隠していた遮蔽物から勢いよく飛び出し、さくらがスター・改に突撃する、銃弾を切り払いながら突撃をし注意を引き、大地を蹴り宙を舞うスター・改はそれ吊られ

上空に居るさくらに全武装の照準をむけるがその隙を突きマリアが懐に潜り込む、

「しまった!!」

その瞬間、スター・改の胸部装甲にゼロ距離で銃弾をぶち込み、装甲を貫きダメージを与え、

更にさくらの着地ざまの刺突がスター・改を貫き・・・

スター・改は全身火花を散らし機能を停止させる

「さくら今のうちに起爆装置を!!」

「これで!!」

バアアアン~~~~!!!

さくらの斬撃が起爆装置を破壊しようとした瞬間一発の弾丸が荒鷹を弾き飛ばす
バレンチーノフのはなった銃弾が荒鷹を弾き飛ばしたのだ・・・

「そこまでだ・・・さあ二人とも離れてもらおうか？」

さくらはスター・改飛び降り、マリアの隣に移動する、バレンチーノフはマリアに
銃を捨てるように促し、マリアは悔しそうに銃を地面に置く、

「いやゝ一時はどうなるかと思つたが今夜はいい夜だ、帰つたらウオツカで乾杯といき
たいね」

その言葉にさくらは、ハッと思い出し小声でマリアに「私たちも乾杯しましょう」と
そこでマリアは、さくらがいている乾杯とは『ваше здорovie』のこと
だと解つた

バレンチーノフに銃を撃たせそれに合わせて発砲しバレンチーノフと起爆装置を同
時に処理する

現状を打破するゆいいつの方法であるしかし・・・

「(いまの私に・・・できるのか?)」

不安げにさくらを見るがさくらは静かにうなづく・・・

それにマリアも頷く、いまは信じるのみ、さくらをそして・・・自分自身を

「行きます!!」

さくらは丸腰のままバレンチーノフに突撃する、それに気が付いたバレンチーノフは「馬鹿め!!」と叫びさくらにむけて発砲する

見える

確かに見える

真鍮色の弾丸が空を切り裂きながらさくらに向かつて

火喰い鳥
マリアの目にはつきりと

マリアは地面にある愛銃を拾い上げ発砲する

乾いた発砲音と共にその銃弾はさくらの顔すぐ横を通り過ぎバレンチーノフの凶弾の機動

弾いて狂わせる、凶弾は起爆装置に、マリアの銃弾は吸い込まれるようにバレンチーノフの義手を破壊した

ここに『乾杯』なされた・・・

マリアは蹲るバレンチーノフに銃口を向ける、さくらはそれを止めようとすがマリアはそれを制する

マリアは愛中の薬莢をいちど全て排莢し一発の弾丸を込めシリンダーを適当に回す……

そうロシアンルーレットであんる……六分の一の大博打……

バレンチーノフは恐怖でふるえ辞めるように懇願するもマリアは一言

「生か死か運命に任せましょう……」

「やめろおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!!」

バレンチーノフは叫ぶ、さくらはマリアを止めようと走り出すが
彼女は躊躇なく引き金を引く……

カチン

マリアの銃から吐き出されなかった……
バレンチーノフは力なくうつ向き動かなくなる……

マリアは手の中から先ほど込めたとと思われる銃弾をポケットから取り出す、それを見
たさくらは

「弾……最初っから入ってなかったんですね……」

「運命は自分で切り開くんですよ？」

マリアは悪戯が成功して喜び様な少女の顔をする

その時バレンチーノフは左腕に隠し持っていた銃を抜こうと瞬間、

『翠の光』が彼に直撃し10mほど吹き飛ばす

「……………」

ふたりは行き成りの事で呆然としていると程なく鉄華団の面々と国際警察の局員が

バレンチーノフを拘束・・・右腕の義手の破壊と『左腕の重度の損傷により』切
断治療後

当局のよって紐育に送還され得たのはそれから二か月後の事だった・・・

「運命は自身の行動の結果の後付け、あいつの運命は自分の行動の『ツケ』で決まったの
ゃ」

少年は携帯用コジマスナイパーライフルを仕舞帝劇に帰還するのだった。

幕間② 暁の夢の夜 前編

夜の闇をブラスター炎の光が漆黒の海を照らしキラキラ光る。

現在位置は、アラビア海のイエメン沖1000Km地点で後数十分で一時休憩地点のフェイス所有の隠密航空母艦と到着するそこで給油と機体のチェックと

パイロットアの小休憩をとりその後、アデン湾を通り地中海に入り、目的地の仏蘭西カに到着する予定である。

そこでふと漆黒の海の地平線を見ると薄っすらと夜が白らむ、その光景が半ば夢の光景に思えた。

「そういえば……あの時もこんな空だったな……」

太正十二年……夏

「最近、大神の様子がおかしい……」

俺は……食堂で寛ぎながらそんなことを呟く、それに続いてすみれが

「そういえば」と続き、

「最近、少尉よくわたくしたちの舞台をご覧になってるようですが」

「そうなのだ元々大神は、舞台にはあまり興味が無いように思っていたがここ一週間
は、

ほぼ毎日、花組の舞台を見ている。

「お前、あまり舞台には興味なかったよな？ いったいどうゆう風の吹き回しだ？」

「え……いや、その、特に理由はないんだけどね」

そこで、ゴージャスな夕食を食べていたカンナもこの話題に参加、

しかしそこですみれが『話の腰を折るな』と苦言をいった事で、恒例の喧嘩が勃発、
しかしいつもなら此処で大神が止めに入るのだが、なにやら安堵した息をつく、

「……………」

どうやら今回の話はあまり触れられたくないのだろう……しかし……

ここで、食後のデザートそつちのけで紅蘭とアイリスが空かさず、大神にさつきの話
題を続ける。

「アイリスもホントいうと気になってたんだよ」

「えっ!? そ、そうなのかい・・・」

「ウチもや。大神はんえらく熱心に鑑賞してたつて由里はんがいつとたで?」

「由里君か・・・」

帝劇三人娘の一人『榊原 由里』は一言で言えば歩くスピーカー、

かなりの噂好きでミーハーな性格、好奇心が強くよくいろんなことに首を突っ込む人である

そんな人物に見られているということはほぼ間違いないこの話は劇場内に広まっている・・・

「隊長」

の どうするべきか悩んでいると、低いハスキーな声・・・マリアが食後のロシアンテイ

の カップを手にはじつと^{大神}こちらを見つめていた。

「もしかすると隊長は、お芝居に興味が出てきのではありませんか?」

グサツ!

マリアの言葉が的確に大神の弱点を打ち抜く・・・

「そ、それは—————」

大神が百面相しながらどうこたえようと迷っている、マリアの言葉が

切っ掛けで今まで大喧嘩していたカンナとすみれも休戦状態で大神に視線を送る、

もはや逃げられない状態なのだがそこに、夕飯を終えて姿を消していた、

救いの女神さきが掃除支度の恰好で食堂に現れた、

「どうやら大神は夕食後さくらに頼まれ小道具部屋の掃除の手伝いを約束していたよ
うだ、

さくらの登場で、場の空気が変わり、今まさに大神を尋問しようとしていた雰囲気は、
今のさくらの恰好があまりにもアレだったのでそれをネタにしたり、なんで休日に
掃除なんかを？という疑問に答えたりとなんやかんやとその場は解散となって今日
が終わった。

次の日

「すまない！暁、TRPGのシナリオ集みたいの貸してくれないか？」

「は？」

翌朝、仕事の準備をしている時に大神が自室にきて行き成りコレである・・・
「え・・・どうした？GMでもやるのか？」

多分、俺は今かなり混乱していたと思う・・・最近芝居に興味が出てきた大神が
次の日には『コレ』である・・・取り合えずどうしてこんな

『面白い』事になってるのか聞く事にした。

数十分程大神の話を聞いて、簡単に言う『自分も花組の皆の様に誰かに夢を与えて
みたい』

とのことだった。

花組のみんなが芝居を通して色々な人、それこそ老若男女問わず夢を与える姿が眩し
くて

自分もそれに参加したいと考えたが自分は軍人畑の人間、戦う事しか出来ない
人間が人に夢をなんてと・・・しかし日に日にその思いが強くなっていき

終ぞ昨晚の夜回りの時にさくらと会話の後・・・大神は自分が舞台を作る・・・

花組の舞台をこの手で作る・・・それが並大抵な事では無いことは、大神も

知っているはずだ・・・それでも彼はめげずに、立ち向かったのだ。

「・・・お前の気持ちは分かった・・・ならシナリオ集よりこっちがいいだろ」

そう

いいながらCOCのリプレイ集を数冊手渡す、TRPGのリプレイ集とは、文字道理想作者、もしくは作者の身内が実際にプレイした時の内容を台本形式にまとめた物でシナリオ集よりその時プレイした参加者のロールもセリフとして書き込まれているので

ちよつとした小説や台本の様な物だ

「どういった芝居をするのか知らないから王道のCOC、クライムアクションのサタス
ペ、

ファンタジーのソードワールド系・・・まあ初手はこんなもんか・・・参考になればいいが」

「こんなに・・・助かったよ、後この事はみんなには・・・」

「言わねーよ、嫌喜びになるかもだし・・・あと由里にいられたら全てパーだしな」

「あ、はははは・・・」

「あ、後！無理はするな・・・『俺たち』の役割に影響だすなよ」

「・・・解っているさ」

大神は、リプレイ集を抱え一階に降りていく、恐らく事務局で今までの芝居の台本と企画書を借りに行くのだろう……さてどうなる事やら……

く一日目く

大神はふらふらしながらも、いつも道理モギリの仕事をしたり、華撃団の仕事等もこなしているが

やはり寝不足なのだろう……か？いつもはしないミスをしていたので差し入れを渡しておく……

く二日目く

やはり大神はふらふらしている、昨日もあまり寝ていないようだ、差し入れのゴミを抱え現れ燃えないゴミに出している姿を発見（～ω～）……まあガンバレ

く三日目く

『シャキつとしやがれこの馬鹿野郎う!!』という米田のおっさんのカミナリが等々落ちたので

大神を一度風呂（熱湯）に叩きこみ気付けする、最初はよかったが入浴の余韻が出て

きたのか

ウトウトしだったので叩き起こす……だが戦闘ではそんなだらしな所は億尾にも出さず

確り指揮する当たり大神らしいと思う……

〈四日目〉

「よお坊主……モギリの兄ちゃんいつてえ如何したんだ？」

「なんか……何時もの元氣ねえじやあねーか？」

帝劇の常連のクマ公さんとハチさんが、大神の様子がおかしくて声を掛けてきた

「あーすみません、大神のやつ今『生みの苦しみ』をモロに受けてる最中でして」

「ほおーんあの兄ちゃん^{あん}がねー」

「しかしあの『いらつしやいませ』が聞けねえのは少々寂しいなあ」

この二人は、前に帝劇には『夢を観に来て』と語っていた事がある……

町職人の日当では、毎日の歌劇鑑賞は出来ない、

帝劇の三等座席料は3円（現在換算約1万2千円）二等席が5円（2万円）

一等席が8円（3万2千円）特等席ではなんと15円（約六万）

其処に土産代、交通費、食事代が入れば十1円は、かかる

一様帝劇には立見席が40銭（現在換算約432円）だが、二人は『夢を觀に来てい
る』

のにそんなみみつきいことはしたくねえ！と豪語、さすが江戸っ子という奴だ。

そうゆう理由ある為、大神の元氣な『いらつしやいませ』を聞くと

『ああ・・・俺たちは劇場にまたこれたんだなあ』と思えるんだと照れながら話していた、
大神は気が付いていないようだが、大神もまた既に『人に夢を与える』事に一役かっ
ている、

無論、売店や事務で忙しく動いてる帝劇三姉妹や大道具スタッフ陣・・・細かく言
えば

キリが無いが、帝劇にいる全ての人間が『人に夢を与える』事に一役かっている・・・
「それに・・・何時きがつくか・・・」

おれはボソツと呟きクマさんとハチさんと別れ、覇氣の無い大神の尻に蹴りを見舞
う

く五日目・六日目く

進展なし、台本出来る前に目元にクマをこさえるだけだった

く七日目の朝く

『駄目だああ！俺には書けないいいいい!!!』

等々そんな事を叫びながら発狂した・・・。

それに見かねて、普通にしていれば頼りになる帝劇のお姉ちゃん『藤枝 あやめ』が動いた

俺は、ため息を付きながら風呂の設定温度を上げに行く・・・

くその日の夜く

夕食後のひと時をサロンで寛いでいる花組の面々と残業終りの帝劇三人娘も合流している中

ボロボロふらふらの死人^{大神}が原稿紙の束を抱え現れる。

花組の面々はその姿に驚愕しているなか、「さ、さくらくん・・・出来たよ」と最後の言葉を

残し力尽きる。

『きゅ……救急車あああ!!!』

椿、由里が絶叫し、かすみが蒸気電話で医者に連絡をしようとして一階に降りる

(この時慌てて病院ではなく警察に連絡したのは内緒である)

マリアはそつと大神を観察しているまる、殺人事件に行くわした探偵か何かのような

雰囲気を出しながら……。

「……心配いらないわ、ただの過労よ」

ズッコケ!

ノリのいい面子がマリアのボケに見えないボケにズッコケる

「この頃、元気なかつたもんね〜」

「ああ……メシも碌に食ってなかつたしな」

カンナとアイリスが今までの大神を思いだしながら心配そうにしていると、

紅蘭が床にぶちまけられた、原稿用紙を拾い上げながら「なんやこれ?」と言ひ

すみれも落ちてる原稿用紙をみて驚きながら、

「これは、お芝居の台本ですわ!!」

確かにこれは、台本の一部だ何度も書き直した跡やインク擦れ見える……まさに入

魂の作品

「そうなんです！」

ここでさくらが今までの経緯を話す、大神が芝居を作ろうと思いついた切っ掛けや心内を

それに伴って、台本や企画書を執筆していた事を……

「そうだったの……」

そうつぶやくマリアの横でカンナとすみれが、

「そういえば前に少尉が、よくお芝居をよくご覧になっていましたわねえ」

「なるほどなあ、そうゆうことだったのか」

それに続きアイリス、紅蘭もしみじみと……

「お兄ちゃん頑張ったんだね……」

「しかし大神はんも『誰かに夢を与えてみたい』なんてけっこうロマンチストなんやね」

そこで精魂尽き果てた大神の高いびぎが聞こえてくる。

この様子なら心配いらぬようだ……とりあえず全然上がってこないかすみを

止めに行こうとした所、さくらが原稿用紙の中からナニカを探している。

「どうしたのさくら？」

「いえ……大神さんの考えたお芝居のタイトルが気になって」

その言葉で他のメンバーも気になっていたのか、皆で探し始めついに見つける。

『真夏の夢の夜』

これが大神の夢の形・・・

その夢を形にした本人大神は、疲れ果ててただひたすら眠り続けている・・・

幕間② 暁の夢の夜 後編

「見せてみなあ」

「はあ？」

台本と企画書を書き上げたその日、支配人である『米田一基』の許可を取るべく昼時に大神が訪ねて来て『野暮だなあ』と苦笑しつつ何時もの様にお猪口で一杯しながら、食堂から取り寄せていた蕎麦に酒を振り掛け蕎麦の蘊蓄を一つ話ながら……上記のセリフを言う。

「『はあ？』じゃねえよ、こちとら全てお見通しだつて言つてるだろお？」

その茶封筒を渡せつてんだよ」

蘊蓄の際に『酔っている支配人の言っている事がアテにならないだろうな』思っていたところ、それを見破られ『お前は直ぐに顔に出るからなあ！』小言をいわれたばかりであつた。

大神は大判の茶封筒を隠すように持つていた。

「そいつの中身は、お前さんが考えた企画書と台本だろお？」

凶星であつた、大神は封筒を米田に渡し……米田は、内容を

さつと流し読みし一言「結果は明日伝える、まあ楽しみにまってるやあ」

その日一日大神は、他の事が手に付かず・・・またしても眠れぬ夜を迎える事に・・・

く次の日く

朝一に大神は米田に呼び出され開口一番に・・・

「まあ頑張りなあ・・・」

朝からほろ酔いの米田がニヤリと笑いながら『決定』印の押された台本を返す。

「あ、ありがとうございます！」

この後、日程や注意事項など必要事項が伝えられこの場は終了する

大神は支配人室をでた瞬間、力をこめたガッツポーズをキめる！

今までヤキモキしていたので喜びは一入であろう・・・こうして

『真夏の夢の夜』は動き出す、さつそくサロンにいる皆に採用されたことを

伝える、さくら達も大喜びし紅蘭は、もしもの時の為に『励まし君一号』なんて

ものを準備していたりしたが・・・無駄になってしまった。

しかしここでマリアが

「浮かれている暇はなさそうですよ？」

「どうしたんですか？ マリアさん」

「時間が無さ過ぎる……」

マリアは計画書をみながら日程を指さす、

『真夏の夢の夜』一日のみの公演、その日までは、たった三週間しかない、

しかもその間に本公演が重なっている。

「そうだった、急がなきゃ！」へカチツ

「アカン!!」

「へ？」

大神は焦りから近くにあつた椅子とおもわれた物に手を置いてしまったがそれは、

『励まし君一号』の頭部でしかも——

「そのボタンは自爆装置や!!」

「なんでそんなものg」

ちゅどく〜ん!!

その光景と大神のあり様を見てさくらがボソリと……

「なんだか、わる〜い予感がします……」

台本は直ちに印刷され、大道具、小道具、音響、照明といった各パートに配布されこれで一息つくと思つた大神は・・・大甘だ！

更にそこから各パートからの質問の波状攻撃が開始される、

大きい物だと『この作品のテーマは？』や小さい物だと「稽古場の椅子は何脚必要か？」

いった内容で様々飛んでくる、無論、大道具（アカツキ）からも攻撃を開始したのはゆうまでもない・・・。

それから舞台の練習では・・・

「それではダメ出しをお願いします」

マリアは大神にそう伝えるも大神の頭に？が浮かぶ、そこでカンナと紅蘭が『ダメ出し』について

解説する、要は芝居のブラッシュアップ作業である、作品のテーマと役者の演技が合っていない所を修正し合わせる作業だ、これを疎かにすると作品のテーマがズレたりと

作品が成り立たなくなるのだが舞台の素人の大神にはどこが悪いのか解らずそれに、素人の自分がプロの彼女たちに指摘することが躊躇われる感じを覚え指摘できずに、とうとうアイリスがキレ「もうこんなお芝居したくない!!!」と言い放つ

大神はそれに困惑しながら理由を聞こうとしても『知らない!!!』とアイリスは言い放ち

その場を後にしてしまい初日の練習はそれで終わることになってしまった。

次の日大神は、すみれ&マリアから呼び出され、開口一番すみれがズビシツ!

と大神を指さし・・・

「ダメ出しをしない少尉にわたくしが『ダメ出し』をしますわ!!!」

その言葉にうんうんとマリアも頷き

「隊長は私たちに遠慮しすぎです・・・私たちは自分の演技を自分で

みることは出来ません、第三者から見てもらわないと自分の演技がどうなのか確認ができないのですから・・・しっかり教えてもらわないと困ります」

「それに、わたくしの様な美貌と才能に恵まれた者は兎も角、大抵の役者は人前で演技をすることに不安を抱えていますわ!」

「演出の仕事は『見る事』『考える事』そして『伝える事』この三つが全て

だと私は思っていますわ」

すみれの言葉を聞いても大神にはやらり不安を感じていたが、マリアが「確かに意見の衝突はあるでしょうが」と前置きし

「しかし恐れる事はありません、舞台は戦場です演出は言わば指揮官なのですから」「まあダメ出しされた芝居がベストなモノだったら私は断固として戦いますわ」

二人の言う通りだ、皆の導くために・・・まず自分の弱さを克服しなくてはと
思いこの日から心を入れ替え立ち稽古に臨む、要所要所で演技の注文や修正点、意見
を

述べ、マリアやすみれに指摘する時は「清水の舞台から飛び降りる」覚悟で発言した、
この日を境に演者はイキイキとした動きを見せた・・・。

公演日まで残り2週間に差し掛かったところで新たな問題が起きる

連日の激務や本公演のあいまを縫っての特別公演の準備、半ば休日出勤

サービス残業状態だった兎に角時間が無い・・・本公演の合間を縫っての
準備当然プライベートタイムを削るほかない・・・日に日にスタツフや

花組の士気が下がる一方で、自分の思い付きでみんなが苦しんでいると感じ

如何にかしないと知恵を絞りながらブツブツ考えていると近くにいたカンナが

「じゃあメシだな!!」

力いっぱい発言し大神は盛大にコケる……だがカンナは真剣な表情で

「まあ待てよ」と前置きし真剣な面持ちで

「飯は元気の源だ……だけど気を付けなきゃならねえことがある!」

そっくり二本指をたてる。

「まず暖かい飯に限る!冷たいものだど余計に体力持つてかれるだけだからな後

用意するなら『全員』分を必ず用意する事……なにせ飯の恨みは怖いからな!」

大神は半信半疑だったが藁をも使う思いで食堂スタッフと相談し夜食タイムを設けることに

メニューは夜ということもあり消化に良い釜揚げうどんと数種類のトッピングをバイキング形式を

採用する、後お望みとあらば五目御飯も付けることが出来る、これは力仕事が多いスタッフにも

好評でチャツカリ、カンナも五目御飯にありついている最もこのメニューは、力仕事が多いスタッフとカンナからの強いリクエストがあったからでもある。

さて置きこの夜食タイムは好評で、思い思いの場所に腰を降ろし用意された夜食

にひと時の安らぎを得て自然に会話が弾む。

「アイリスなんだかピクニックみたいでなんか楽しいな」

「同じ釜の飯やないけど、こうしてみんなと同じモンを食べると、なんや皆仲間やなあーって気がするで」

「本当ですよね」

さくらと紅蘭の言葉にマリアも微笑む中唯一小言を言っているすみれは、

「なんやかんやで、おかわりをも貰いにいつている当たり前言葉とは裏腹に満足しているようだ。」

「カンナのアドバイス本当に助かったよ……ありがとう」

「アハハ……実は夜食がくいたくてテキトーいつてただけだから気にすんなよ隊長」

珍しく照れながらカンナがソクササとその場を離れる、その発言は、本心なのか照れ隠し

「なのかは敢えて考えないことにし、皆の士気が戻ったことに今は喜ぼうとその光景を見つめている」

公演日まで残り一週間に差し掛かったところで夜食タイムが思わぬ結果を招く。

通し稽古の演出プランを考えている大神に紅蘭とさくらがある提案をしてきた、

提案とは、裏方スタッフと音響、照明スタッフの手伝いをしたいとの事、

「どうやら食堂メンバーの苦労話を聞いたらしくさくらは居ても立っても居られなり手伝いを買って出たのである、紅蘭も同様に音響や照明には詳しいので手伝いという内容で」

これに苦言を示すマリアとすみれ

「時間の無い中でより良い物にするために稽古に集中すべきだと」

「組織において役割分担は大切です。それぞれのパートは独立して

制作に携わるのがベストである」と意見を言う。

その場は、手伝い組がサクラ、紅蘭、アイリス、カンナといった状態で稽古の合間に各々別パートを手伝っている

(アイリスは道具部屋にこもる暁の手伝いを自分の能力で手伝っている)

そして数日後には、苦言を言っていたマリア、すみれも何だかんだと別パートを手伝ってくれていた、どうやら他のメンバーの助っ人姿に思う事があったのだろうすみれは事務の手伝いを、マリアは食堂スタッフの手伝いをしていていた。

かくして帝劇一同は一丸となって特別公演に向けて突き進む

く公演日前日く

本公演が終了し、その翌日に『真夏の夢の夜』に向けて舞台ではセットの建て込みが行われる美術スタッフのデザインによるセットが大道具の手によつて舞台上に作られていく

「おーい！コレ片しておいてくれ」

大道具の中嶋の親方が若い衆に指示を飛ばし、

「ハイ親方！」

サングラスをかけたガタイの良い若いスタッフが駆ける

そうして舞台設置は完了し同時期に音響、照明の準備も完了する。

直ちに最終リハーサルが開始される。

これは、全て本番と同じ状態で行われる稽古である。

演出である大神は客席中央に設けられた机につき、最終調整を行う場所が広い
ため全体に指示を飛ばせるように蒸気マイクが準備されていた。

「それでは、諸々よければ開始します」

その言葉を合図に最終リハの幕が開く・・・

冒頭はレビュー・・・照明に彩られた舞台には、大階段を真ん中に花組全員勢揃いする

それから二時間、花組の之までの芝居の名場面・幕間に盛り込まれた軽演劇が続き、そして終幕・・・

大神の近くにいたスタッフが大神に意見を求める、大神は一考し一言

「これで完成したと思います。自分としては満足のいく仕上がりになりました。本当に今日まで・・・ありがとうございました」

その言葉にだれが最初だったか解らないが拍手が響いた、広い客席には、まばらに聞こえるが・・・大神に大歓声にきこえた。」

「とうとう・・・明日か・・・凄いな大神は、やっぱ俺には真似できねーわ」

喜ぶ大神とその周りに集まる花組を舞台裏から見つめ劇場を後にする。

その深夜人気のない舞台に大神とさくらの姿があつたがここではなにがあつたかは語るべくもない

そして運命の本番・・・

くお台場蒸気砲台跡地く

其処には無数の魔操機兵・脇侍が蔓延っているそこに一基の靈子甲冑の姿

「こいつらまじで空気の読めないゴミクス共があ!!!」

靈子甲冑・・・暁が駆る『雷電』機関砲が勢いよく特殊弾を吐き出し脇侍たちをガラクタに変えていく。

時は一時間前、格納庫の子から緊急通信が入る・・・黒之巢会の出現を伝える、本来なら劇を中止し全員出動準備をするのが普通なのだが、今回の劇は、そうはいかない

この特別公演は無理クリにねじ込んだ舞台でこの日を逃せば次に開く時間は何時になる

かわからない、少なくとも今年いっぱいには空くことはないだろう、

それを危惧したアカツキは事前に了子と結託し本番当日に出動が入った場合は、花組に知らせることなく『アカツキ』ひとりで出撃できるよう手筈をしていた、

当然轟雷号や翔鯨丸は使えないので、TA専用のトランスポーターを準備していた。

今頃は、大神の夢の形が華々しく幕がaitた頃だろう・・・。

「さてこっちも幕を上げようか!!」

敵の数は前情報より多いが気にせず相手をゴミに帰る、

脇侍・火縄型が銃撃を一齐に発砲するが、それは巧みに避け切り払い致命傷を裂け相手の首を断ち斬り重砲型に対しては、内蔵グレネードを発砲爆破する、

その隙を突かれ脇侍が捨て身の特攻を仕掛けてくる、狙いはコックピット脇侍はパイロットさえ殺害すればいいとわかつている・・・躊躇いなく

凶刃がアカツキに襲い掛かる瞬間・・・その脇侍は爆散する。

『アカツキ大丈夫か!!』

「大神?」

『加勢する早く脇侍たちを』

「ば、バカヤロオオオオ!!!」

『アカツキ?』

「なんで来ちまった!?!おまえには舞台があんだろうが!!」

『・・・それでも俺は『花組の隊長』だお前を危険な目に合わせたくわない』

大神は迫りくる敵を斬り伏せながら『それに』と言ひ

『一人より二人の方が早く片が付く!!』

そこから二人の進撃は続き敵の数が半数ほどに減る、しかし

もまだまだ数がある、此方は機体の所々破損し蒸気が漏れたり、内蔵兵装の弾薬は底が付いている。

「大神撤退しろ……殿はおれがする」

『アカツキ!!』

「花組の隊長を全うしろ……お前はここで死んでいい人間じゃない、

なくにおれも死ぬ気は無い……自爆装置はつどうさせてこいつらまとめて吹き飛ばしたら

撤退するさ」

アカツキは手際よく『ロツクコード』を打ち込む、そこで一体の脇侍が異変を感じたのか

此方に急接近してくる。

「クツが!!」

アカツキが悪態をついた瞬間、戦場に凜とした声が響く

「破邪剣征・桜花放神!!」

迫りくる脇侍は、桜色の光の奔流に消えていく

「さ、さくら君……それに!!」

今、まさに本番中のさくらがここに居ることに二人は驚愕し更にその夜空には

翔鯨丸が悠々と空を泳いでいる。

『帝国華撃団・花組、見参!!!』

「大神さん……私たち居てもたつてもいられなくて」

「二人だけで戦場におもむくなんて常軌をいしてます……がお気持ちは感謝します」
「でもね……アカツキにお兄ちゃん……結局お芝居は中止になっちゃつて」

「なんだつて!!」

「……」

「堪忍してえな……ウチ等が決めたことや」

「やはり……少尉が考えていただいた舞台に少尉がいなくては意味がありませんわ」
「お客にはアタイ等が謝っておいたぜ……でも悪い事をしちまつたぜ……」

花組が悪いわけではない……すべてはこの馬鹿共黒之集會のせいだ……

ここからはただの私怨で義憤だ、人々の娯楽を疚しいか如く破壊するこいつ等を生きてはカエサナイ!!

そこからの戦闘は戦闘は言えないタダの蹂躪戦だった……花組の怒りはそれ程の物だった

戦闘が終了し帝劇に帰還した頃には時刻は23時を過ぎた当たりで、そろそろ終電がなくなり人が家で眠りにつく時間である・・・

帰還した花組の面々の顔は優れない・・・それもそうだ、

舞台を楽しみにしてくださった人達を裏切ってしまったのだから

しかし暁は、ふと気が付く・・・整備スタッフの数が少なすぎると

そればかりかいつも控えてるオタコンや子の姿もない・・・

取り合えず着替え劇場上階に戻ると帝劇三姉妹がお茶の入ったやかんや

大量のおにぎりをのせたお盆をもって世話しなく動いてた、あやめさんも

同じくらい色々な所に指示をだしていたそこで・・・

「バカヤロオオオオ!!!」

その罵声は米田司令だった・・・何故か割烹着をきて状態で

「よ、どうしたんです？米田司令」

困惑しているマリアが声を掛けるも米田はましく建てる

「どうしたもこうしたもねえやい。お客たちに『事情があつて花組が

出かけなくちゃならなくなつたから、今日の公演は中止』だって言ったのに

全く帰ろうとしねえんだよ、お前らの帰りを待つてな」

その言葉に客席を覗くと未だに満員で楽団は静かに花組の楽曲を流し、

通路には帝劇三人娘だけではなくオタコンや了子なんかもお茶とおにぎりを配っている。

「皆・・・アタイらの事・・・」

「待つててくださってたのね」

「アイリス・・・感動しちゃった」

「ウチもや・・・」

何時もも喧嘩しているカンナとすみれも同意見でアイリスと紅蘭は感動している中「バカヤロウ!!お客が待つてるんださっさと準備しねえかべらんめえ!!!」

『ハイ!!』

花組メンバーは急いで劇の準備に入りその場には、割烹着姿の米田と

アカツキと大神が残る、そこで軍人の顔に戻る米田が射抜く視線で二人を見る。

「さて解っていると思うが貴様らとった行動は明らかな規則違反だそれは解っているな

特にアカツキおまえは部隊の機器の細工といった工作到底看過できん」

「覚悟はできています」

「同じく」

射抜く視線のまま米田は、まず大神に

「懲罰を与える。大神一郎、罰として開演まで切符のモギリを命じる」
「は？」

「黒之巢会の出現で警戒警報でたろそれで遅れてくるお客がいるかもしれないねえから
ギリギリまで受け付けしろって言ってんだよ！さっさといけえ!!」

「は、はい!!!」

大神は、そう言い劇場入口に走っていく。

「で・・・お前の懲罰だが」

「私が与えましょう!!!」

「ゲエ!!リリイ!?!なぜここに?」

米田の背後からリリイが現れ、どうやら今回の『特別公演』を見にやってきたところ
事の顛末聞き今までスタッフを手伝っていたようだ。

「さて・・・わたしがいる説明が出来たところで・・・施設の裏工作、及び
連絡の意図的隠蔽、単独行動の懲罰はコレを着て売店の手伝いをなさい」

つメイド服

メイド服

「着付け化粧は任せてください以上」へフランス!

武蔵さんが化粧道具一色をもって暁の頭部をガシリと拘束逃げられない様にする

「では逝きますよ以上」

こうして暁の女装が決定した・・・

「まにあったあああああ!!!」

メイド服姿で接客をしていると入口付近に常連のクマさんハチ公さんが居た

どうやら急遽、用事が入って今回の特別公演の観るのが危ぶまれた所、

翔鯨丸の出撃によって集まりはお流れ・・・終演間際に間に合うかと思っていたところ

ろ

まだ開演されておらず安堵の叫びだったようだ・・・椿ちゃん?

スカートつまんで覗こうとするな!!!

「しかし今から開演だと終電が・・・」

「なあに構いやしねーよ」

「そうそうそれに……『真夏の夢の夜』だからな夢は夜中に観るもんだぜそうだろ兄弟」

二人の言葉に笑顔になった大神はてなれた手つきでふたりの切符をモギる。

「いらっしやいませ、大帝国劇場へようこそ」

そして特別公演……夢が終わりその片付けがおわつたのは空が白んで朝を迎える頃だった

素晴らしい夢の世界から……覚め新しい朝を迎える……

暁は、休憩地点の空母から飛ぶ立つ準備を始める……あと数時間後に新天地『仏蘭

西』・・・

そして妹の手がかりがある可能性のある『巴里』そこにはいつたいどんな出会いがあるのか・・・そして・・・

今、夜は空ける・・・